
ザ・ライダー・プール

じょーもん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ザ・ライダー・プール

【Nコード】

N2444F

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

疲弊した地球の回復を待つべく、人類は『幸いなる少数』を残して、宇宙へと生活拠点を移している。この時代、大量輸送手段としては、コンテナを大砲のようなもので打ち上げる『マスドライバー・システム』が第一にあげられる。そして、安全な宇宙空間のみを行き来する通常輸送船とは別に、大気圏と衛星軌道上に存在する宇宙港都市の棧橋とを往復する、大気圏突入を日常業務として行う『バージ・シャトル・システム』があった。この物語は、地上と同じ人工重力で営まれる棧橋都市、通称『ライダー・プール』と呼ばれる

建造物に重大事故が発生したとき、たまたま居合わせてしまった人たちの話である。(ルビを多めIEの利用をおすすめします)

1. スカダー（前書き）

プール（pool）とは、蓄えることを一般に指す、英語由来の言葉である。

ライダー（rider）とは、もともとは「馬を駆る人」という程の意味で、その後、広く何かに乗ることを指すようになった。これも、英語がベースとなったGCL（Global Communication Language）コミュニケーションのための簡易言語）に収録されている単語、及び、使用方法である。

ザ（The）とは、日本語では正確に意味が捉えにくい定冠詞である。基本的に「一つに決まる」というイメージで考えると良い。つまり、その言葉でくれるたくさんの中、文脈によって限定されたり、もともと他にかげがえない最初から唯一のものである。説明を要しないものなど、『どれ』なのが明確な場合を使うのである。GCLでは、冠詞が一般的でない言語に配慮して、地球（Earth）や空（sky）などの前に「ザ」を落としても、許容とされる。

そして、この話は

1. スカダー

「飛竜ひりゅう。お前まで、そんなもん着るか？」
直接会うのは久し振りになる友人、霧島飛竜きりしまを見て、高柳優美たかやなぎゆうみの口から思わず呆れた声が出た。

飛竜が着ていたのは、銀色に輝くツナギのスペースジャケットで、筋肉までなぞれるほど体に密着させたデザインだ。宇宙植民時代を迎える以前に描かれた青少年向けSFの宇宙飛行士アストロノウツがよく着ていたような奴で、恐らくデザイナーがネタギレで自棄やけになったのか、はたまた受け狙いの懐古趣味か、あるいは冗談だの類で売りに出されたのだから、とんでもない事に世の中のお姉さまたちに非常に受けて（連中がイヤらしいって事だ。つまり）、筋肉をちゃんと鍛えてなきや商売にならないバージョナルライダー連中の中で、いま正まに流行はやりに流行っている。つまり、筋肉男であることをアピールできる程度に人間が多い場所で働いているということだ。羨ましいというか、ご苦労さまというか。

スペースジャケット生地というのは、簡易宇宙服にもなる素材だから伸縮性はあるが、通気性という奴はゼロだ。普通小型の空調ユニットが内蔵されているから、中にある程度空気層が無いとやっつけられない住環境になる。スペジャケつてのは、究極のところ中に生き物が住めるだけの最低限の空間を持つてなきや意味がないんだから、ぴったり体に張り付くなんてのは、正気の沙汰じゃない。

「制服だから……仕方ないだろ」

飛竜と呼ばれた男が妙にイヤらしい手つきで体をなぞるようにする。肩から胸、そして腰。掌紋認証でロックを解除しないと脱げないってのも、服としては随分不便だろう。手にぶら下げるようにして持っていた金魚鉢と通称される全方向認識型ヘルメットをテーブ

ルに置いてから、飛竜は、ようやくできた隙間から脱皮するように上半身を解放した。

「あーっさっぱりした。別に拘束感は無いんだが、妙に窮屈だからなあ、姉貴には勘弁してくれって言ってるんだけど……」

歯切れが悪く飛竜が姉貴と呼んだのは、中堅規模の星間運送会社、霧島運輸の現在の女社長、霧島松姫まつきの事だろう。比較的安全な宇宙空間輸送に携わる星間貨物宇宙船とは違い、バージシャトルライダーというのは大気圏突入という危険で難しい飛行フライトを日常的に繰り返している。肉体を酷使用する重労働が機械化されて久しく、職業にジエnderフリーが当たり前の昨今だが、荒くれ仕事に相応しい荒くれ男が吹き溜まっている今どき珍しい商売だ。この飛竜も一見穏やかな風貌をしているが、典型的なツツコミ気質で、泣かせた女は多数数えきれない……筈だ。それが、母親と三人のお姉さんには頭が上がないらしいから、意外というか、可愛いというか。

ここはライダープールと呼ばれる場所だ。ライダーの連中が地球に「つつこむ」直前や「できてきた」直後に一定時間を過ごす控え室みたいな所だから、むさ苦しいという形容が相応しい男たちばかりが偏って出入し屯たむろしている。飛竜が勤めている霧島運輸が使っている棧橋のほど近くにある『ライダー溜まり』に俺は居る。そこに居合わせた幾つかの顔は視線すら向けてこないが、一般の人間が出入りする喫茶店辺りだったら、諸肌を脱いだ飛竜は溜息混じりの称賛の的になるだろう。見事に引き締まった体に浮き上がる筋肉の境目を縁取る溝ミユは、皮一枚剥ぎ取らなくてもそのまま人体筋肉標本で活躍できそうだ。

霧島運輸は貨物専用だから、飛竜は大気圏を越えて人を運んだりしてはいない。が、これだけのいわゆる色男だ。同じシャトルライダーでも客船乗務みたいに女ツ気のある職場なら、とっくに女房の一人も捕まえて（捕まえられて？）落ち着いているだろう。でも、三十代に突入している今も良い年こいて独身だ。航空宇宙専門学校

の同期生の中では、そろそろ少数派になってきた売れ残り組に入っている。もつとも……。

人のことは言えねえよなあ。

「で、優美ちゃん^{ゆいび}は、なんでプールに？」

がっしりとした体躯の飛竜が親しげに抱擁なんかくれると、正直、暑苦しい。けれど、まあ、こちらも大人だ。ちゃつと軽く抱き返してから突っ放した。

「いつも言ってるだろ。名前で呼ぶな……」

女みたいな名前を嫌っていた事を承知で、飛竜はいつもそう呼んでくる。年を食って、たかが名前にジタバタするほどの若さとはもう縁がないが、それでもそう返すのは謂わばお約束ってヤツだ。

「で、タカ。何の用だ？ 純粹宇宙仕様のお前さんがプールに飛び込んでくるってのは、穏やかじゃないだろ。その年で転職するにしたらって、キャッチャーを随分長いことやってたろう？、いまさらライダーなんて出来っこねえし……。絶対に奇怪^{おか}しいぞ。第一、いきなりこんなところに来て、お前、大丈夫なのか？ ……ちゃんと生きてるか？」

ガキの頃のようにうんざりするほど「優美ちゃん」とは繰り返さずに、飛竜は高柳という俺の苗字から引っ張りだした呼び方でもう一度プールに出向いた理由を俺に聞いてきた。

地球環境で活発に活動して日々突然変異しているあらゆる病原菌を、コロニーに持ち込ませないための緩衝地としてあるのがライダープールだ。ウィルス・細菌環境として貧弱な持ち物しかない宇宙暮らしの人間がここに入っていくのは、時として命取りになるほど危険なのだ。やつらがコロニーの市街地に行こうと思ったら、168時間の検疫止まりを喰らう。つまり地球時間の7日間だ。外宇宙で仕事をしている俺たちがコロニーの街に出向くときにやられる4

8時間縛り（丸二日）の三倍以上だ。

地球が人類の共通財産という認識で、大切に扱われるようになって現在も、地球でしか生産できない資源を生産・管理したり、地球そのものの再生を助ける研究に従事していたり、単に不公平な特権を享受している為に地球に住んでいる人間はいる。そして、重力環境を異にしていることで、少しずつ別種の生き物になりつつあるのかも知れない地球人も、ときたま観光や仕事で宇宙植民地スペースコロニーにやってくる。警戒していても何かの拍子に多種多様で元気な地球産の細菌やウイルスが何度もコロニーに持ち込まれ、その度に恐ろしい猛威を振るってきた。インフルエンザが特に流行りやすい悪玉の筆頭だが、大量の死者をだすほどの流行がおこるたび、「検査止まり」の期間が増えていく。検査留めの期間が長期化していく程、地球への距離は実質として遠くなっていく。

ついでに宇宙人の俺がここに入ったら、地球に降りなかったとしても、潜在的保菌者扱いとなり、もう一度コロニーの一般街区に戻ろうにも、168時間の検査止まりの対象になる。余程の長期休暇でもなければ、検査止まりだけでかなりの時間を食ってしまったことになるから、気軽に顔を出せるところではない。実際、飛竜ともこのところネットを挟んでしか喋ったことはない。ライダープールに俺が出現した事自体に、飛竜が不審を抱いたとしても何の不思議も無い。久し振りに肉眼でみるナマモノの友人に、俺はちょっとだけ意地悪く微笑んでみせた。

飛竜がいったキャッチャーというのが俺の仕事だ。しかも「スカベンジャー」とキャッチャー仲間からも言われちゃうような隙間仕事だ。

活性酸素の防御機能のこともスカベンジャーなんて呼ぶらしいが、そっちの方じゃなく、そのまんまの腐肉漁りふにくあそびという程の意味だ。地球の自然映像でお馴染みのハイエナや、大型生物の糞をあつと言う

間に地中に運びさつて食つてくれるフンコロガシや、水槽の底で忙しなくハサミを動かしてるチビの海老なんかといえは分かりやすい。

地球や月、火星。その辺の大気圏から頑丈な巨大コンテナにいれた壊れにくい貨物を、大砲みたいなマスドライバーという巨大装置を使つて打ち上げる輸送システムがある。やり方の乱暴さに相応しく、主な積み荷は衝撃に強い鉱石。あるいは、米や麦といった宇宙空間で作るのになかなか無理があるので地球産が普通の穀物^{グレイン}などだ。散荷^{バルク}ヤードで充填されて打ち上げられるコンテナは、普通、制御機能も推進機能も搭載していないが、リーファ仕様といって、さすがに温度だけは管理されている。宇宙空間に無事出た以降は慣性の法則に従つて、打ち上げられた方向を維持して飛んで行ってしまふ。これを追跡^{チェイス}して捕獲^{キャッチ}するのが、簡単に言うと俺たちキャッチャーの仕事だ。

宇宙植民時代の初期には、厚くて重力も大きい地球でマスドライバーが稼働されるとは、エネルギーの問題、コンテナの強度の問題、また、衛星軌道に散らばつているさまざま建造物を直撃する恐れなどから誰も実用化されると思つていなかった。SFの中だけでとどまるか、大気を持たない月あたりでのんびり実用化される「かもしれない」というのが大方の見解だった。

それが、一定以上の質量の物体を感知すると、単純にそこから弾かれるという途轍もなく単純な回避方法を発案した馬鹿(サヤコ)という名前だけは覚えてる。なんたつてこのシステムの名前になつてるのだから)がいて、それを採用した大馬鹿がいて(何を隠そう、我等が極東アジア国軍だ)話は複雑になった。

マスドライバーの構想においては、慣性の法則に従つてただ真っ直ぐ飛んで行くのを捕まえる単純作業するのがキャッチャーの役割だとされていた。それが普通だと俺も思う。けれど、やつらときたら一定以上の質量を感知すると勝手に弾かれちゃうのだ。

貨物を満載したコンテナは基本的にロボット制御の無人マスキヤツチャーが捕まえる。悔しいことにコイツが『正捕手』だ。やつらの駆動性はかなり良いから、九割はここで捕まえられる。質量が一定以上で無いこともキヤツチャーの前提条件なので、スカスカの小型ユニットを三機か四機使って広げたカーボンナノチューブ製のそれも強度を更に高めるために二層にしてあるダブルウォールナノチューブ D W N T を用いたネットであるようにして捕まえるのだ。

悪条件が重なったりすると正捕手が捕まえ損ねる事がある。キヤツチ直前で弾かれて軌道が大きく変わってしまったり、コンテナが多すぎて正捕手の数が足りなくなったりとか、原因はさまざまだ。こいつを人力制御（もちろんモノの譬えって奴だ。コンピュータのお世話になつてない航宙システムなんか無いからな）で捕まえに行くのが有人キヤツチャーで、こいつの愛称が「プレデター」。狩獵動物というほどの意味だ。プレデターと言われる連中が稼働するよう定められている区域にいる間に全体貨物量の二割ほどのコンテナの内の、さらに約九十七パーセントがここで捕獲される。

そこから外れてしまったコンテナがロスト（またはロスコン）と呼ばれている。こいつらは一定以上の質量の物体から弾かれ続けるとどこまでもふらふら飛んで行く。宇宙のゴミにしては至極安全な代物だが、宇宙植民時代に地球産の穀物グレインは貴重品だ。そいつをしつこく追いかけて捕まえる非常に地味な商売が「チエイサー」、つまり追跡者というかつこいい俺たちの正式名称だ。

プレデターの連中はロストを発生させることが自分たちのタコ具合の証明だから、俺たちをチエイサーなんてカッコいい本来の名称では絶対に呼ばない。代わりに屍肉漁りの生き物と呼ぶ言葉「スカベンジャー」を使う。その心は、お掃除宜しく、という事だろう。キヤツチャーボートは小型だから基本的にバージシャトル乗りと一

緒でライダーと呼ばれることが多い。挙げ句の果てがスカベンジャーライダー略してスカダーと来たもんだ。勘弁してくれっであれだね。

「俺だつて一応ライダーだ。プールで泳いでも奇怪しくないだろ？」

冗談めかして俺が言う。

「スカダーの癖に何処がライダーだ。充分違和感あるよ」

飛竜の反応は呆れるほど素早い。

「差別だ……」

文句を言う俺に、飛竜はにっこり微笑んだ。そんな笑顔がこれまで厭味な程によく似合う。全く、コイツがいつまでも女に捕まらな
いんだから、俺なんか更に絶望的だ。

「いじけるなよ。冗談だつて。スカダーは大海を回遊する魚みたいなもんだ。俺たちは所詮は生簀いけすの金魚よ。マグロが生簀いけすにいちや、奇怪しいだろ？」

「誉められてる気がしねえんだが……。マグロ喰いてえ」

生け簀に金魚がいるかね、という突っ込みはおいといて、文句のついでに本音がちよろりと舌から滑り出た。

「いいね、喰いに行くか？ もちろん、プールの寿司屋しかいけねえけどな。どつちみち、タカもプールに入っちまったんだから、7日間は暇なんだろう？ シフトが今のところ一日おきだから、明日は俺もオフだ」

大気圏に突っ込むのを一日おきにやってるなんてのは、ハードシフトにも程がある。客船ライダーと違って、かなり体を酷使するだろう。

「お前……しんどくないか？ いい年して」

飛竜が破顔する。

「馬鹿言え。やっこさんが自転なんてのをしてなくて、ポートにあわせる必要がないなら、一日何回でも突っ込んでやるぜ。二日に一度なんて、生ぬるい」

地球を『やつこさん』ときたもんだ。まったく突っ込み野郎どもって連中は、信じられない感性をしている。

「んで、お前さん、なんでプールにいる？」

三度目の同じ質問は、少しマジが入っている。飛竜をはじめ、霧島一族の連中は皆、運送屋をやってるにしては何故か基本が美形だから、目を細めて睨んでくると迫力がある。

「地上勤務の辞令が出たんだ。当然、やつこさんに突っ込むんで……こつそり筋トレ中」

飛竜の顔色が変わった。

「お前、ルナGすらここんどこ無縁の宇宙人だったんだろ？ いくら軍人だって、酷くねえかそれ。第一コツソリってえのは何だよ」

ルナGというのは、月の重力のことで、地球の約六分の一の重力をさす言葉だ。宇宙植民地スペースコロニーで標準採用されているから、低重力といえばルナG環境のことをいう。無重力でも生殖そのものは可能だ。しかし、人間の体は無重力に暴露してしまうと筋繊維の萎縮だけでなく、運動ニューロンや感覚ニューロンの酸化系酵素活性能力にも著しいダメージを受けてしまい、胎内で子どもを育み、切開なしで自然分娩に至る能力が失われてしまう。人工子宮も実用化されているが、母子関係の構築に悪影響を及ぼすことが実証されているので、母親に決定的な問題がある場合を除いて、普通に自分の腹で子どもを育ててからの自然出産をしたいというニーズは高い。

コロニーでも地球並の重力を維持できればいいのだが、巨大建造物でのテラGの実装化は未だにSFだの実験領域での話にとどまっている。やる気になれば可能なのだとは思うが、できたとしてもコストパフォーマンスからいって維持が困難だろうし、なにより、既にルナGで生きている億単位の人間をテラG仕様に戻すことは現実問題として不可能ということも大きい。最初にルナGを採用した奴がちゃんと実験結果をふまえてそうしたのか、一番先に地球ではなまえならい星上で実現した植民地が現在のルナ自治区だから、単純に前倣え

で採用されたのかまでは俺は知らない。ただ、これだけは言える。ルナGは最低限の筋力を人間に残すためにシステムに組み込まれた数字なのだ。

「スベジャケの耐Gユニットの実験だとき。宮仕えは世知辛いねえ……」

飛竜が一瞬絶句した。耐Gユニットなるものは、各国や企業が開発競争をしているものの一つだ。密閉空間をつくれれば宇宙服にもなるスペースジャケットの環境構築ユニットに、重力コントロール機能を持たせることができれば、ルナGに一度定住してしまつたものでも、人類の故郷である地球へ、命懸けの巡礼としてではなく観光として気軽に赴ける。

逆に地球で生活している『幸いなる少数』の人間がルナGに滞在するときにも、毎日死ぬようなハードな重力室でのトレーニングをしなくても済むようになるということだ。

極東アジア国軍は既に一つ、輸送システムを独占している。地球の資源を宇宙に低コストで打ち上げるテラ・マストライバーシステム『サヤコ』がそれだ。その上に、さらなる巨大利益を産むことは間違いない、小型重力コントロールユニットが実験段階に入ったということと、軍人である俺が縛られているはずの守秘義務を足蹴にして、そのことを簡単に口にしたのが飛竜を絶句させた原因に違いない。

「お……おい」

飛竜は喉がカラカラに乾いているような、素っ頓狂なうめき声みたいなのを喉から吐き出しながら、どかっど椅子に腰を下ろした。俺の方に前かがみになって、声も辺りを憚るように響めて、聞き取れないほどの声で警告して寄越す。

「それを口に出していつて、お前無事に済むのか？」

突っ込み屋が商売の癖に、案外、キモの小せえ野郎だ。俺は軽く肩をすくめてみせた。

「さあてね……。まあ、命令だから、史上初のテラ・マスドライバのパッセンジャーになることは、名誉として受け止めるけどニア、筋トレしてリスク軽減くらいはしたいってのは人情だろ？ プールのトレーニング・ルーム……。休暇の間、使わせてくれ！っっ」

「テラ・マスの乗客？」
パッセンジャー

小声の体勢を無視したでかい声でいいながら、テラGで椅子に座ってることを考慮しないで大げさにのけぞった飛竜が、座ったばかりの椅子ごと派手に音を立ててひっくり返った。テラGでこけるのはさぞ痛かるう……。ほんと、大げさで楽しい奴……。

2・確信犯たち　バナナに化けて

「なんだ。結局、これだけか」

鼻の根元にシワを寄せて、一番小柄な少年が不満そう言い捨てた。

「しかも……お前らかよ。頭痛い」

偉そうに腕組みをする。男の子が普通に着せられているような半ズボンにTシャツなんかではなく、少年戦隊ものの登場人物のような、独特の艶をしたツナギのスペースジャケットを着ている。着方をよく分かっていないのか、単に圧迫感を嫌っているのか、それともカッコいいと勘違いしているのか。だらしなく大きくはだけた胸に、少年たちに大人気の『ミラーズ戦隊』の、ヒーロー『赤^{レッド}』が光線銃を構えているイラスト入りの下着が見える。

「何よ、私のどこが不満だったのよ」

くるくると『美容院で巻いています』というような見事な内巻きにカールをかけた髪を、両方の耳の上で大きなピンクのリボンでまとめている女の子が唇を尖らす。少年と同じようなスペースジャケットで、こちらはスキなく首までちゃんとロックしている。

「お前みたいな『ママ』、『ママ』お嬢が、一週間のピクニックなんて出来っこねえだろ。さっさと帰れよ」

「あのね。私を赤ちゃんにしたのはママの方なの。本当の赤ちゃんができたから、私はもう赤ちゃんごっこしてなくて良いの」

「はは……ん」

少年が納得顔になった。

「お前、焼き餅焼いてるだろ。ガキだな」

「ガキって何よ。焼き餅の当てつけなんかじゃないわよ。ミラーズ戦隊シャツのアンタの方が、余っ程ガキでしょ」

「ミラーズのどこがガキだよっ！」

少年がいきり立つ。

「美咲ちゃんも、崇くんも喧嘩しないでよ。ボクたち、これから一週間、同志なんだろう？」

もう一人の少年が、どこことなく間延びした口調で割り込んだ。

言い争っている二人の子どもたちは、女の子の方が多少上背があるが、殆どどっこいどっこいなのに、仲裁に入った少年の方は優に頭一つ分大きい。この少年はピチピチに体に張りつくデザインのパイダータイプ・スペースジャケットで、それには絶対に似合わない布製のリュックを背負っている。それでも、崇と呼ばれた少年と同じミラーズ戦隊の赤が決めポーズでVサインをしていた。

「同志って気持ち悪いこと言うなよ、黄色。言つとくけど、イエローなんか一緒に行かなくなつて、レッドは組織と戦えるんだぜ。あれは足手まといになって、話を盛り上げるために一緒にいくつてだけで、ホントは待つてるのが仕事だろう？」

美咲と呼ばれた女の子の方が、腕を腰に偉そうに添えて、鼻で笑つた。

「何よ。遊星くんを黄色扱いして……。まさか、崇。アンタが赤だつて、そこまでずーずーしいこと思つてる？」

「つたり前だろ。オレと遊星なら、どー考えてもオレが赤だろ」

「崇……アンタって本当に最低」

遊星と呼ばれた大柄な少年の方が、のほほんと笑つて答えた。

「良いよ。美咲ちゃん。ボクと崇くんなら、やっぱり崇くんがレッドだよ」

「それみる……。文句言うなよな。女」

美咲の平手が崇の右頬を直撃した。女の子は左利きらしい。

「美咲ちゃん……。暴力はよくない」

どこことなくぼーっとした口調の遊星がたしなめる。

「遊星くん。崇みたいな単純な考えなしがリーダーなんか出来ると

思う？ 私は遊星くんの方がリーダーに向いてると思うな。自信持ってよ」

遊星がにっこりと穏やかに微笑んだ。

「ありがと。でもさ、崇くんがピクニック計画立てたんだから、やっぱり今日の班長は崇くんになると思うな」

崇が我が意を得たりと、ニヤツと笑った。

「遊星、班長つてのは止めとこうぜ。校外学習行くみたいじゃないか。冒険なのにな」

「あ……、そだね。じゃ、リーダーって呼ぶ？」

崇は鼻の頭をちよいちよいと掻きながら少し思案顔になった。それから、いかにも照れ臭そうに小声で言った。

「……レッドじゃ……ダメ？」

遊星がにっこりと笑った。

「いいよ。ボク、ブルーも好きだから。ボク、ブルーね。美咲ちゃんもピンクでいい？」

美咲は大人びた仕種ししゅで肩をすくめて、首を左右に大きさに振った。「ホント、男の子たちってガキね。私、ピンクなんて嫌よ。あんなキヤーキヤー騒さわぐしかできない女が、そもそも戦隊ミライズに入ってるつてのが許せないわ」

「なんだよ、美咲。お前、ガキつて人のこと直ぐ馬鹿にする癖に、自分だつてミラーズ見てんじゃん」

「大人は付き合いを大切にするのよ。アンタたちと遊んでるんだから、ミラーズくらい見てないと話できないじゃん。楽しんでる訳じゃないよ。……えつとね、わたしカシスさまがいい！」

崇と遊星がこけた。起きながらこっそり顔を見合わせて、「趣味が悪い」と目配せしあう。カシスというのは悪の組織・ディアハートの女マッドサイエンティストの名前だ。いろんな動物のキメラを作つては、超能力を持たせて、いつもレッドたちにけしかけてくるイヤな奴だ。

「……了解」。美咲のコードネームはカシスで決定」

難しい顔で腕組みをした崇が決めつけて、美咲が小さくガッツポーズを作った。

* * *

自宅のファミリー向けコンパートメントのリビングにあるより五倍くらい大きなスクリーンに三人の女と二人の男が映っていた。真ん中で鬼のような形相をして、肩で息をしているのが崇少年の母親だった。彼女が激怒しているのはまず間違いない。

（一週間もあつたら、きつと少しは怒りも治まってる筈さ。うん、大丈夫、大丈夫）

崇は能天気考えた。彼女はいわゆるシングル・ママだから、崇は父親を知らない。それから、赤ちゃんを抱いて、男の人に肩を抱かっている小学生のガキがいるとは思えないほど若々しい美人が美咲のママ。彼女は泣きはらしたような目をしていて、一週間後に美咲が帰っても、ぶん殴るより抱きしめてくれるタイプだろう。

それから、怖い顔をしたおじさんが遊星のパパだ。「パパは凄く厳しい」のだといつも遊星はぼやいている。なるほど、この顔は一週間くらいは怒りを持續できるタイプだ。チームの中で帰ってから一番危険なのは遊星に違いない。

元気よく街区の公園を出発した崇たち、レッド、ブルー、カシスの三人組は、補給物資が入ったコンテナに倉庫で荷物とすり変わった。荷物も別に捨てた訳でない。ちゃんとそのまま隅に寄せておい

た。コンテナに閉じ込められている時間は最低に見積もっても三時間。計算では手持ちのスペースジャケット用の空調ユニット（市販の安物だけど）でもその位は楽に持つはずだった。コンテナがテラGが採用されているライダープールへ繋がるゲートに着く。今回の冒険の行き先が、そのライダープールだ。

ルナGが採用されている宇宙港都市サンガは、いわゆる島三号と呼ばれるシリンドラー型の建造物だが、その付帯施設であるライダープールはテラGを出すために、島二号型スタンフォード・トラスをしている。回転軸でサンガと繋がってはいるが両者は完全に独立し隔たっている。地球という人類の大切な財産、特権階級である「幸いなる少数」のみが住んでいるそこに、大気圏というやっかいな関所を越えて、行ったり来たりするシャトルライダーは、殆ど事故報告がない宇宙植民地間スペースコロニーを行ったり来たりする宇宙船乗りより、少年たちの憧憬の対象になっている。

ライダープールの回転軸の中は普通に無重力で、ドーナツ型の居住区は回転軸からのびたスポークで繋ぎ止められている。只の生活物資を積んだコンテナは、この回転軸の中央付近にあるハブまでシユートされ、そこで仕分けされ、スポークを通って居住区に運ばれる。ここで保管される荷物に入ってしまうと、発見されたときは既に死後数ヶ月という事態に陥りかねないから、保存と冷凍が効かないフレッシユフルーツ（しかも超絶痛みやすいバナナだ）にした。

崇のピクニック計画は、単純だった。目的地は「憧れのライダープール」。けれど、子どもが隠れてコソコソしても楽しくもないし、ご飯も食べられないし、トイレも困る。だから、直ぐに発見される手段をとる。ライダープールには168時間ルールというのがあった。地球からのイキがよい病原体をコロニーに持ち込まないよう、ライダープールから一般居住区に移動するには、総合ワクチンを接種してから、テラ時間の7日間を潜在保菌者として過ごす。何らかの病

に罹患して発病しないかどうかを待つのだ。さっさと見つかったワクチンを打たれる。それから一週間が楽しいピクニックだ。完全に親から離れられる。

憧れのテラGでエライ目に合わないように、高学年からしか使えない、中央総合児童館のテラGルームに日参した。テラGツアーは人気のプログラムだから、並んだ挙句に数分で入れ換えられる。この計画のために、訓練は欠かせなかった。この夏休みは全て訓練に費やしたといっても過言でない。毎日、児童館で遊び倒していたなんて、ママの誤解も良いところだ。

計画は完璧だった。チームはよくやった。ただ誤算があった。児童館のテラGルームは、本当のテラGとは似ても似つかない、ルナGに毛が生えた程度の低重力だったということだ。三人の子どもたちは計画通り、回転軸の荷受け場でなく、居住区でコンテナが開梱されて発見されたが、その時には、テラGショックで皆、息も絶え絶えだった。

「ですから、一応プールに入ってしまった訳ですから、168ルールは、はい、お子さんでも例外という訳にはいきません」

崇が知らないおじさん 多分ライダープールのお巡りさん？

の説明に、中央の女が声を荒らげた。

「小学生に一週間も学校を休めと仰るんですか？ そうでなくても、やっと夏休みが終わったところなのに……」

知らないおじさんは根気強かった。

「ですから、何度もご説明しています通り、コロナーに地球の病原菌をばら撒くと、パニックを誘発するところか、最悪、カタストロフィーを招きます。ご心配も分かりますが、少々の学業の遅れには目を瞑っていただかないと」

説明を受けていた女の目がつり上がった。

「それより、……あの、……娘はテラGで無事に？」

美咲のママが割り込んだ。

「発見当初は、正直、必ずしも無事とは言えない状況でしたが……、直ぐにルナGと殆ど一緒のGレベルの中段倉庫に運びましたから……はい。今は大丈夫かと……」

そうなのだ。彼らの計画通りでなかったことで一番大きかったのがコレだ。崇たちはカッコいいライダーさんたちが闊歩するプールで遊ぶ予定だった。けれど、そうでなくても柔らかい子ども体がテラGに耐えられる筈もなく、三人はスポークの補強も兼ねている物資保管倉庫に移された。そこは回転軸に近いことで重力も小さく保たれているのだ。外部との接触もない。お仕置きとして閉じ込める意味でも、大人たちには都合のいい場所だった。

三人はそこに移動させられてから意識を取り戻した。つまり憧れのライダープールはつまり見てもいない。通り抜けただけだ。

これから一週間、チームのメンバーは、帰還後に上層部（親）から受けるだろう数々の叱責をどう言い抜けるかシュミレーションしながら過ごさなければならぬ。しかも、総合端末の前に大人しく座って学校の遠隔授業を受けよとまで厳命された。放課後が無くなっただけでまるでピクニックにはならなかった。最低だ。

「全く、いつも友だちは女の子にしなさいと……いつているのに、崇くんたちと……。こんなバカなこと……しでかして。ねえ、美咲、聞こえてる？ ママ心配したのよ」

ため息をついた美咲が答える前に乱暴に崇の母が割り込んだ。

「越智さん……。お言葉ですが、美咲ちゃんももう高学年なんですから、自分で決めたことでしょう。何もかも人の所為にしていくと、ろくな大人になれませんよ」

美咲のママが爆発した。

「崇くんのママがいつもそうやって、自発的、自発的と野放しにな

さるから、崇くんが野放図になるんです。こんなことしでかしたんですよ。少しは反省なさったらどうなんです？ 独立心が旺盛なのと、規律に無頓着なのは違います」

「なんですって？」

崇の母親がいきり立とうとすると、ちょっと太った遊星のママが割り入った。

「まあまあ、越智さんも、塩屋さんも。子どもたちが無事だったんですから、良しとしないと。私たちも頭に血が上ってますもの、少し落ち着きましょうよ。叱るのは顔を見てからでいいじゃありませんか？」

（遊星のママを見ていると、あいつがのほほんとしている理由がよく分かるよ。ちょっと羨ましいかな。……仕事をしてないで、いつも家にいるのも……）

「良いよなア……。遊星のママ」

崇の口から思わずそんな言葉が零れ出た。

崇と美咲の母親はいつも事あるごとにぶつかっているのだ。仕事を持って一人で子育てをしている崇の母親は、子どもを人形のように飾りたててお稽古ごとに追い立てる美咲の母親を信じられないと言っし、美咲の母親は崇が乱暴なのは、片親で愛情が足りていないからだと無神経に断言する。二人が上手く行くはずがない。

子どもたちだって、自分たちの感じるところで友だちを選んでいくのだから、親は取り敢えず自分の好き嫌いは抑えましょうよといつも穏やかにとりなしてくるのが、遊星の母親だ。

崇の呟きに美咲が同意して頷くと、遊星が首を激しく振った。

「あんなふうには、落ち着いてる時が一番怖いんだ……ママ、マジで怒ってるよ……。帰るの……。やだな」

「最低の……。ピクニックになっちゃったよ……。ね。ブルー」

美咲は帰るまではチームモードを解除するつもりがないのか、遊

星をブルーと呼んだ。遊星もニコツと笑う。

「カシスのママも……相変わらず、けっこう言うよね。怖い……」
遊星が言い終わらない内に、憤慨している口調で崇が割り込んできた。

「オレの母ちゃんが一番凶悪に決まってるだろ！」

一瞬きよとんとしてから、呆れたように遊星が呟いた。

「崇くんは何でも一番がいいんだね……」

「そんな一番、嫌だあ……」

美咲が腹を抱えて笑い転げた。この音が向うに聞こえているとしたら、まずいと思いつつ、つられて崇と遊星も笑いだしてしまった。

崇は思う。最低で予定通りにいかないピクニックだったけど、バナナを放り出してコンテナにもぐり込んだのは楽しかった。遊星と崇がついでにバナナを食べはじめ、時間がないと怒った美咲だつて、ちゃんとバナナを齧ってた。いつ見つかるかとドキドキした。回転軸に打ち出されたときの加重も、遊園地のコースターより数倍すごい。

臆病風に吹かれて、「必ず行く」と児童館のテラグループで約束しておきながら、公園に現れなかった腰抜け連中なんか知るものか。美咲も遊星も信頼できる友だちだ。ちよつと五月蠅いのと、落ち着きすぎてるのが玉に傷だけだね。

3・エンジョイ・トレーニング

耳に大音量のビートがまだ詰まっている感じだった。いきなり運動を停止することで心臓にかかる過負担は百も承知で俺はフロアにのびた。

お疲れさまでしたっ。

ナイスファイトでしたっ。

また来てくださいねっ。

お待ちしていますうっ。

とつくに消化されている筈の昨晚のマグロが胃からせり上がってきそうなほどきつかった。なんだか激しく軽快なリズムにのって、キックだのパンチだの、ジャンプだのを、むさ苦しい大の男たちが、更に暑苦しい雄叫びをあげながら保育園児のお遊戯よろしく一緒になつて前に立っている女の子の真似をして繰り返す、狂気のような60分が過ぎ去った。隣で嬉々として元気一杯に飛び跳ねていた飛竜の無邪気をからかう元気も残っていない。「インストラクターの」と自己紹介していた小粒で、きりっとした目つきが印象的な女の子は、あの可愛らしい顔のどこからあんなドスが効いた声がでくるのだろうかというような雄叫びを積極的にあげながら、狭い重力室のフロアに詰まった男たちを煽り立てていた。全く、あの小柄な体の何処に、あれだけ激しい動きをテラGでやるエネルギーがあるのか不思議でならない。

重力トレーニング・ルームから出て行く男たち一人一人に歯切れよい声で小気味よく挨拶していくのが遠くに聞こえる。マズい、マジで失神しかけている……。

ライダープールというのは、一つの部屋や施設なんかではなく、

小規模なつくりではあるが、それだけで立派に宇宙植民地として独立してもやっていけるほどには、まとまっている住居区画だ。人間らしく生きていくために必要に最低限の施設は一応そろっていることになっている。宇宙空間にある建造物としては異例のテラGが採用されている。これは、地球という重力圏と往復せざるを得ない連中の身体能力が、ルナGで勝手に減退しないようにするための配慮だ。

娯楽施設の類は、環境大破壊というカタストロフィーを、地球から殆どの人間を宇宙植民地に移住させるという気が遠くなるような巨大プロジェクトが遂行される中で、地球から基本的に追い出された。コロニーにはなかなか構築しきれない自然のありのままを満喫するなら地球が唯一無二のプレイランドだが、人間的な楽しみはむしろ宇宙で花開いている。

昨日、俺は霧島飛竜とつれだつてプール内のミニチュア版歓楽街のような通りに出向き、夜中まで寿司バーで金に糸目をつけず贅沢に飲み食いした。普段は人間が棲息していない宙域でロスコン（ロス・コンテナ）を追いかけるといふ、途方もなくジミな仕事をしているのだから、遊ぶ場所などないのだ。一応、極東アジア軍の正規の給料をもらっているのだから、使う場面が無い（衣食住は全部支給品だ）ということとは、結構な小金持ちという位の貯金は溜まっていた。たまには吐き出させてやらないと、通帳の健康状態に宜しくない。流れる特性のものは、どんなもんでも流してやらないと腐るね。

破目を外して、景気よく呑み倒したかったが、飲酒の習慣がないものだから、酔いは直ぐ回って記憶が途切れた。それでも人間と一緒に仕事をしなくなつて何年にもなるから、久々に異種タンパクを入れたり出したりする必然を持つている生き物と飲み食いするのは大いに楽しかった。潰れたところで飛竜に迷惑をかけるのなんざ、ちつとも良心が痛まない。普段、金の使いようがないから、奢ると

いったら、あのウワバミが遠慮もせずにくじら化した。俺ときたら奴の半分も飲んでいないのに完全に酒に呑まれた。

飛竜は、奴の実家の一族で経営している会社が所有している独身者のコンパートメントに生活拠点を置いているらしい。目が覚めたのは奴の殺風景な部屋の床だった。久し振りに会って酔いつぶれた古くからの親友を床に転がして、自分はいつも通りにベッドに寝ているという極太の神経は許し難い。俺の財布で飲み食いした癖にズーザーしい。

すやすやと気持良さそうに眠っている飛竜の眠りを邪魔したくなつて、たたき起こしてやった。眠りを邪魔されて心外そうな目つきで睨んできた奴に、「約束通り、テラG下で運動しようぜ」と言ったのは、間違いなく俺だ。

だけど、今の俺はルナGの感覚すら漸く取り戻しかけたレベルの耐G能力しかないのだ。手始めにウォーキングマシンや筋トレマシンなんかを使って、二日酔いの頭を宥めつつ、ゆるゆるとテラGに馴染んでいくつもりだった。それを、飛竜の奴は眠りを邪魔された腹いせか、パンチャキックなどの格闘技の動きを取り入れて野郎向けにアレンジしたハードな有酸素運動エアロビクスする場所に俺を引きずり込んだ。

もっとも、マシンジムと違って、仮想ターゲットに攻撃の真似をするだけだから、ゼロGで鈍り切った筋肉には却って優しいかもしれない。そうはいつても、俺の心肺機能はとことん劣化してんだ。やっぱり嫌がらせとしか思えない。気持ち悪い……。

その時、後頭部に冷たいタオルがあてられた。タオル越しに寄せられた掌の重さが心地良い。沸騰しちまった血液がそこで冷やされるのか、めちやくちや気持ちがいい。思わず安堵の溜息が漏れる。この心遣いは有り難い。こんな優しさをみせてくれる時は、いくら俺だって、素直に飛竜に礼の一つもいつてやるに吝かでない。

俺が所属している極東アジア国軍の上層部からは、重力コントロール・ユニットの実験に参加せよとの命令書が来ている。筋力トレーニングや骨を頑丈にするサプリメント連続投与期間を設けることなく、人工衛星港湾都市サンガにある基地に可能な限り速やかに出頭せよとの厳命だ。

底辺で使い捨てられる消耗品とはいえ、俺は仮にも人間の看板をさげている。こちらに声がかかる前に、たくさんの動物さんたちが新しい装置を搭載したスペジャケ生地(多分)袋詰めになってテラ・マスドライバーで打ち上げられ、星になったり生還したりしているだろう。取り敢えず星になる動物さんが居なくなる程度の質には出来上がっている筈だ。

それでも、計算って奴は間違うものだし、計画は頓挫するものだし、人間はエラーをしてからやっとこさ学ぶように出来ている。実験が失敗したら、多分命はないか、有っても半死半生になりかねない。そんな乱暴な実験のモルモットに選ばれて、「はい、そう致します」と誰が答えるというのだろう。リスクを減らしたがるのは人情って奴だ。不服従と規律違反で免役になるなら、この際しめたものだ。当座暮らしていく資金には不自由していない。

そりゃあ俺みたいなアホでも、多少筋力を取り戻していようが、骨組織に繊維が増えようが、ダテに長期間を宇宙人として過ごしていないのだから、テラG環境に生身で適応するには一週間やそこらでは無理が有りすぎるのは分かっている。重力不適合症を起こして心肺機能と代謝機能に露骨なトラブルが多発してしまうのは避けられない。下手したら死ぬということだ。相棒にはまだ俺が宇宙で元気に働いていることにデータ自体を誤魔化してもらって(こつこつ)、(ニューマン)、せこくことが出来るのが、新人を相棒(ニューマン)にしている利点だね……、せこく

ルナGで二週間、体を馴染ませた。それから、もそつとやっかいなテラGにとつかかつてはみたものの、やはりルナGとは別格に手ごわい。長く宇宙人してた俺には、普通にしてるだけで、全方向から圧力がかかってくるようなものだ。息するために肺をふくらませるだけのことが、そもそも大仕事だ。

こんなヤワな生身をテラ・マスドライバーで打ち上げたら、見事にぺしゃんこに潰れちまうだろう。宇宙移開始時期にコロニー群建造の推進役として名を残している篠田清子^{しのだやまこ}だつて、悠長に訓練して民間人を宇宙空間に連れ出すより、テラ・マスで打ち上げてしまえという乱暴な構想は立てたが、人の生存を保証できる技術の開発が間に合わず諦めたつてシロモノだ。

低コストで大量輸送が可能になるマスドライバー・システムも、最初は「月」辺りで実現されるだろうというのが多くの見解だつたはずだ。地球の大気と重力はコストペイしないだろうと専門家は言っていたらしい。

でも大気と重力がやっかいな地球にこそ、有人のシャトルシステムよりマスドライバーだと大胆に決めつけたのが、篠田清子だ。彼女が方向を指さして、極東アジア国が見切り発車で建造に取っ掛かったときは、まだ解決すべき問題が山積していたそうだ。こいつで打ち上げたあとのコンテナをどうするかという単純な問題すら、建造着手当時は目途が立っていなかったらしいから驚く。それでよくこのような巨費がかかるプロジェクトに「進め」をかけられたものだ。

危急存亡のときには、驚くほど大胆にものごとを押し進める人間が必ず出てくるように、人類というのはできているらしい。

プールでちょっとトレーニングしたつて気休めにしかならないと、俺だつて分かつてる。だけど、俺のアホを笑つてる連中だつて、実際にそんなトンデモ実験に協力せよと白羽の矢が立てば、見苦しく

ジタバタするに決まってるさ。当然じゃないか？

俺の両親は旧式のコロニーで餓い殺されるだけの大衆だ。もちろん、スラム化した地域で、生まれるなり投げ捨てられる孤児みなしこに比べれば、それでも遙かにマシだけどな。両親と同じように社会に養われ、ただ生きていることでいろんな物を消費するだけの人生ヘレールは敷いてあつた。

そんな下らない人生なんてクソ喰らえと思つた。ちゃんと職業を持って働き、生産性のある労働力として、それなりに手応えがある生き方をしたかつた。

人間だから安直に殺せない、「ただ生きていろ」というようなコロニー暮らしから足を洗いたかつたら、選択肢は限られている。自分がそうしたように、志願して軍人になるか、目指す職技能を持つ人に弟子入りするか、その位しか考えられない。学問で身を立てる（そうしたいとも思わなかつたが）道もあるが、そちらへ進むには学ぶ環境が身近にあるかどうかにかかっていると俺は思う。時間を浪費するだけのコロニー暮らしは、頭を育てる環境として劣悪だつた。

一番門戸が広くて来る者を拒まないに軍に志願した。人殺しは嫌だつたとはいえ、一番一般的な戦闘員に配属されるだろうと思つていた。どっちにしる今の戦闘は殆どが遠隔攻撃主体の見事に卑怯なものだから、直接誰かの肉を切り裂く破目には陥らないという甘い予測も有つた。それが軍の公費から給料を支払われながら、航空宇宙専門学校に飛ばされたのが、まず、そもそも間違いの始まりだつた。

適性テストで振り分けられたのだとはいえ、自分の何処にパイロットの素質が眠っているというのだろうと訝つたものだ。それでもべつたりと軍の色を塗りたくられる事なく、専門学校で学べるというのは、誤算にしても嬉しいものだつた。いきなりテラG室に送り込まれて、重装備を担いで人殺しの訓練をするよりは余程有り難い。

軍のパイロット養成コースではなく、民間の専門学校送りになったところで、自分はちゃんと認識しておくべきだった。文句なく力ツコいい戦闘機のパイロットではなく、地味な物流部門の後方支援要員として振り分けられちゃったっていう、情け無い現実を。

挙げ句の果てが、宇宙人と皆から擲擧される、ルナGどころかゼロG環境で、捕食者が逃したコンテナを、ちまちま拾うスカダーに落ち着いた。男はガキを自分の中で育てなくて良いから、人生のパートナーを見つけるに当たって、筋力の滅消など大した障害にはならないが、生殖に問題がなくても、異性との出会いの面で完全に人間社会から遮断されているという社会的大問題がある。可哀相に、俺の恋人居ない歴の新記録更新は止まる気配もない。まったく、宇宙船操船技術専門学校時代は、本当に面白かった。アストロノウツ候補生は、文句なしにモテた。飛竜のように霧島運輸の御曹司で、すこぶるつきの美男などという箔がついていなくても、普通に遊ぶ女には不自由しなかった。

スカダーのチームメイトは二人の新人だ。^{ニューマン}新人は人間関係が微妙で過酷な状況では思考回路に異常をきたしやすいらしいが、単調な繰り返し労働には耐性がある。連中は生産性に乏しい、単純労働を「何故自分がしなければならぬのか」という、つい人間が抱きがちな悩みとは無縁らしい。ただ、維持にかかるコストが莫大なため、極東アジア国軍は表向き、数年前の戦争を契機に新人の使用を全廃したことになっている。が、人類可住域の完全な周辺で暢気に荷物を拾い続ける単調な職業では、トラブルの前例は一例もない。だから、俺が働いている現場では未だに現役だ。その俺の二人の相棒も気がよくて、どんなに代わり映えしない毎日が繰り返されても、淡々とルーティンワークを捌いていく。愚痴もなく、神経を病むことなく、安定していて信頼できて……、頼りになる奴らだ。

「ナイスファイト……でした。タカさん」

ひんやりと気持ちよいタオル越しに添えられた手が、ごつくてデカイ飛竜ではなく、繊細な女のものだと気付いたのは、その声が直ぐ後頭部から降ってきてからだ。慌てて寝返りを打って身を起こす。首から落下しそうになったタオルを上手くキャッチして声の主を探ると、あのドスが効いた声のねえちゃんインストラクターだった。普段の声は、こんな風に可愛らしいのだと思うと、意外の感が否めない。

「……ど、どうも。仕事でも……そこまで見え透いたお世辞は、言わんで良いですよ。俺は飛竜たちライダー連中と違って、ブヨブヨだし……」

情け無くたるんだ腹や手足を見る。太ってはいないが、締まりといるものが全くない、男としての魅力ゼロの体つきだ。ルナGに棲息する仕事もしないような連中と並べば、特に見劣りしないだろうけれど、先程まで一緒のトレーニング・プログラムをやっていた連中は肉体美の見本のような輩ばかりだ。

女はにっこりと微笑んで首を振った。

「タカさん、ゼロG上がりなんでしょ？ キリーからそう聞いていて、ラスまで絶対、保もたないと思って見てたので、ビックリしたわ」「キリー？」

俺が聞き返すと、女が面白そうに笑いながら言った。

「霧島さんのキリーでキリー。なんか、竜とか虎とか、任侠小説の登場人物みたいな名前、気に入らないんですって……」

そういえば、飛竜ひりゅうの弟の名前というのもまた凄かった。同じ航空宇宙専門学校の三学年下の奴の弟は、飛竜さえ霞むほどの好男子で、その名前が翔虎しょうこ。あの霧島兄弟の名前は、上の字をとって並べれば「飛翔」。で、下の字をとれば「竜虎」。まったく、もう一人息子ができたら、どんな名前をつけるつもりだったのか、あるいは、男

の子がもう一人生まれなかつたら何人まで子どもを作るつもりだったのか、一度でいいから直接オヤジさんに聞いてみたいと前々から思っている。

ついでに、飛竜の上の三人のお姉さんの名前は、霧島運輸の現社長である松姫まつきさんしかはつきりと知らないが、残りの二人には、竹と梅がついている筈だ。「酒の名前ですか」と、突っ込みたくなる。航空宇宙専門学校でも、見た目でも能力でも抜きんでて目立っていた二人は「竜虎兄弟」などと一括りに呼ばれることに、いつも強い不満を示していた。俺と同じに親からもらった大切な名前が気に入らないという罰当たりには理解を示さなくもないが、そうはいつでも勇壮な「竜」なんだからちつとは満足しろよと俺は思う。飛竜の分際で「キリー」とは何事だ。ふざけている。

「おーっ。生きてるじゃん。すごいすごい」

スポーツドリンクのボトルを手に重力室に戻ってきたキリーちゃんを見て、俺は意地悪く微笑んでみせた。

「キリーちゃん、それオレに？」

飛竜の顔が思いつきり不愉快そうに歪んだ。

「そんな呼び方して、いいのかな？ ゆうびちゃん」

インストの女が一瞬目を丸くして、それからコロコロと人形のような笑い声をたてた。

「タカさん、ゆうびさんって仰るの？ 素敵なお名前ですね。字はやっぱり優雅に美しいですか？」

俺が苦虫を噛みつぶす前に、キリーがにっこりと微笑んで割り込んできた。

「その通り。優雅に美しいで優美ゆびちゃん。キレイな名前だからそっちで呼んでやって」

俺は力一杯殴ってやった。テラG男に宇宙人がパンチを入れるのに、遠慮する必要は全くない。

「……痛いなあ……。なんて硬いんだ」

やっぱり俺の拳の方が負けた。クソ……腹の立つ。

飛竜がドリンクのボトルを、俺の耳の下に押しつけてきた。ヒヤツと気持ちいいが、インストの子のタオルに軍配をあげよう。ボトルを取りあげて捻ってキャップをとろうとして、諦める。こんな固いのは、宇宙仕様にチューンダウンした力では太刀打ちできない。黙って飛竜の目の前に突き返したドリンクボトルを、間に入った手がかすめ取った。そして、指先だけ使って開封して俺の手に戻してくる。

「ゆつくり飲んだ方が良いですよ。一気に呷ると吐いちゃいますよ」「有難う。気をつけるよ。ところで、おねえちゃん」

「……なんですか？」

今どき、ライダープールに棲息する男どもでも、若い女の子をつかまえて「ねえちゃん」呼ばわりするご時世じゃないのだろう。微妙にあいた間は、不愉快の意思表示かもしれない。けど、こちら、生ナマの女の子と間近にいるのはめっちゃくちや久し振りだなのだ。小振りだが、若さではち切れそうな、しかも、テラG仕様でとびきり上物の筋肉の魅力は、俺の煩惱をタップリ刺激してくれる。もうすぐ死ぬかもしれない身なんだから、今生こじょうに悔恨を残しちゃアいけない。「俺、若い女の子と生ナマで話すの、五年ぶりくらいなの。60分頑張ったご褒美にほっぺにチューでもくれない？」

言い終わる前に背後から飛竜ひりゅうの掌が後頭部に降ってきて、俺はフロアに問答無用で沈められた。クソ……身動きできねえ。こいつに宇宙人に対する勞りつてのは無いのか？

「ごめん、ザキさん。アホダチで。こいつは普段人間と暮らしてねえから、礼儀ついていうか、常識つてのを完全にどっかに廃棄処分にしちまつてるみたいで……。あとでちゃんとシメとくから、許してやっつて」

飛竜の奴から「ザキさん」と呼ばれたインストラクターの女の子

は、またしてもコロコロという形容が似合う、楽しそうな声をたてて一頻り笑ったあと、乱暴な飛竜の手を俺の後頭部からどけてくれた。

「了解です。ナイスファイトでした」

驚いたことに、ザキさんは惜しげもなく柔らかい唇を俺の首筋に押しつけてきた。場所が場所だけにくすぐったいが、堪らなく気持ちいい。こいつは紛れもなく懐かしい、生モンナマの女の子だあ……。

それから、ザキさんはわざとらしく派手な接吻音を立てて、冗談の意思表示をしてから俺の後頭部を3回ほどタツピングした。手加減はしてくれている筈だが、かなり……衝撃がくる。もともとがアホの上にネジまで抜けそうだ。

「明日は90分プログラムなんですけど……。最後まで頑張ったら、リクエスト通り、ほっぺにしてあげても良いですよ」

「……いや。首筋でも充分気持ちよくて……。ナイス・キスでしたあ……。ご馳走様……」

またしても言い終わらない内に飛竜の手が俺の襟首をとつつかまえて、強引に引きずりだした。いいですよ。どうにでもしてください。俺は今ちよつと感動しているのだ。

飛竜に撤去されつつある俺をみて、ザキさんはまたしても可愛らしい顔を更に笑顔で上物にして、軽く手を振ってくれた。俺も人差し指と中指を立てて小さく振ってみせた。

「ザキさん……。まさか、こいつみたいなのが趣味だって言うんじゃないだろうな……」

扉を出るときに飛竜がぶつくさと言っているのが聞こえた。なんだ、こいつ、あの女の子に惚れてるのか？ ちつと拙ったかもしれない。いくらなんなんでも、親友の恋人にちよつかいかけるほど俺のデリカシーはすり減っちゃいない。念の為確認しておこう。

「キリーちゃん。ザキさんに惚れてる？」

「彼女、シャトルライダーの中じゃ、ちょっとしたアイドルなんだよ。今の他の連中に見られてたら、お前、半殺しにされるぞ……」

* * *

今日も耳を塞ぐような大音量。ザキさんの指示に合わせて、ハイキックだのローキックだのしている連中に、昨日と同じように発破をかけている。彼女が最初に「インストラクターのオザキです」と言ったので、ザキさんがザキさんと呼ばれている理由はよく判った。キリーといい、この連中はとことん単純に通称を決めるらしい。

ザキさんはジャンプさせておいて、低く回し蹴りを喰らわせたり（足を踏ん付けないように、無理にでも高く跳ばなきゃ成らない訳だ）、ダッキングさせておいてエルボーを喰らわせたり（ちゃんと低く沈まないと、ノックダウンまでは行かなくても痛いこと必至だね……）、元気一杯に走り回っている。

「まだまだあつっ」

コロコロと同じ器官から、どうしてあんな声がでるのか、何度聞いても不思議だ。

「声聞こえないよあつ。元気ーっ？」

と、ザキさんが叫ぶと、男たちの怒声みたいな掛け声も音量がさらに上がる。やっぱり異様な空間だ。はっきりいって、ザキさんのチューに下心がなければ、ここにはお近づきになりたくない。

「ちゃんと息はいてっ。タカさん！ 生きてるうっ？」

ザキさんが俺を名指しにすると、隣にいた野郎の目つきが危ないものになった。ザキさん、励ましてくれるのは有り難いですけど、

俺……命はまだ惜しいんです。俺は仕方なく卑屈な笑顔を作って、不愉快そうな野郎の顔に会釈した。飛竜がいれば庇ってもらえるかもしれないが、今日は仕事で地球に突っ込んでいる。気象条件がよければ、明日に地球側の港とサンガがミートする時間に出てくるはずだから、今日の護衛の用はなさない。

「あと4回、もつと跳ぶ。もつともつとお。高く、高く、高くだつてばあつ」

ザキさんの肌にも汗が玉になって浮いている。Tシャツを脱ぎずててタンクトップになる。鍛え抜かれた筋肉が、そういう格好にはエラく似合う。みとれていたが、俺は限界だった。……キツ……い。マジで死ぬ……。

1テラGの人工重力をどうやって発生させているか。これはもう、スペースコロニー建造時の科学力の限界で（今もそうは進歩していないが）、遠心力しか選択肢は無かった。1ルナG程度の回転は、はつきり言って人間の感覚器官をそれほど苛めない。高速で移動する乗り物が危険すぎて使えない程度の不便さしかない。ところが、ライダープール程度の質量の居住空間に遠心力で1テラGを作り出すとどうなるか。足と頭にかかる重力が厳密に言えば違つという特殊すぎる環境になる。

ライダープールというのは只でさえ宇宙酔いしやすい空間なのだ。そこでジャンプなんかした日にはどうなるか……。一応飛び跳ねた地点と落下地点は地球上での普通の運動で起こる誤差と同等程度の違いしかないが（ジャンプした地点に着地できるということ。めでたいでしょ？）、軌道がまるで違う。足が床から離れた瞬間に、円筒形のシリンダーの回転方向に対して正の方向に移動し、落下をはじめた途端に、それが負の方向に変化する。そして、ジャンプした高さの分だけ感じる重力（実質も）変化する。今日は昨日と違って二日酔いでは無かったが、飛び跳ね出した途端に酔っぱらってしまった。胸がムカムカする。気持ち悪い。

「まだまだあつ」

……ザキさん。元気すぎ。

ナイスファイトでしたっ。

お疲れさまでしたあつ。

次回もお待ちしていますっつ。

今日も遠くからザキさんが元気に野郎どもを見送る声が聞こえてきた。なんとかラスまで辿り着いたと……言えるだろうか？ 一応立っではいたが、最初から筋肉痛で千切れそうな体には、90分は最低に長かった。

突っ伏している俺に、今日も彼女は冷やしたタオルを乗せてくれた。ザキさん、優しい。

「キリーに頼まれたから、仕方ないけど……、本当は宇宙人さんにはこのプログラム凶悪過ぎますよ。適当に手を抜いて挫折すればいいのに、タカさんって、もしかして物凄く……意地っ張り？」

「馬にニンジン……。狐にお揚げさん……。河童にキュウリ」

俺がそう言うと、ザキさんはクスツと笑って、俺の頬に昨日みたいにふざけていないキスを軽く落としてくれた。

「それって……、つまり、こういうこと？」

ついでにこの人は……凄く、頭も切れる。

「ご名答」

短くしか答えられない俺に、ザキさんは顔をくしゃくしゃにする笑顔を寄越した。

「タカさんって本当に変。なんか面白いわ」

面白い。それは学生時代に付き合った女の子からよく言われたお

馴染みの言葉だ。いい人と面白い人は、遊び相手で、ホンキ相手の用はなさないというのが定番だ。遊び相手。充分でしょ。俺はザキさんの頭を引き寄せて彼女の唇を奪ってみた。相手はテラGで鍛えている女だ。筋力ヒエラルキーでいえば、あちらが貴族でこちらは奴隷。なあに、俺が嫌なら虫でも潰すように捻れるのだ。遠慮はない。

「……………タカさん。フザケすぎ」

ザキさんは今度は俺の腕を掴むと、床に向かって逆手に捻じあげた。……………痛い。

「宇宙人でなかったら、張り飛ばしてやるのに……………。いやね」

ゼロGの人間が、テラGの人間からホンキで殴られたら、かなりの割合で骨が砕けるだろう。そうすると、俺はザキさんの優しさに付け込んだ極道か？

「ごめん」

俺が素直に謝ると、ザキさんは肩をすくめて首を振った。

「謝るくらいなら……………しなきゃいいのに」

「だから、そこは……………それ、河童に……………」

ザキさんが、今日もコロコロと笑った。……………そうだ。鈴を振るよ うなっ て表現があつたな。まさしくアレだ。

4. お留守番

ロスト・コンテナを拾うには、プライオリティーがある。中に詰め込まれている積み荷の貴重度で振り分けて、それらが色別の点として追跡母船のメイン・コンピューターマザーチェイサーの中央立体モニターに映し出される。

追跡母船は刻々と変化するロスコン（ロスト・コンテナ）の貴重度と分布密度を計算し、一定時間の作業で回収できるコンテナの総額が一番高くなる宙域に、リトルジャンプで移動する。

広大なる宇宙空間を移動するのに、亜空間が利用されるようになって、まだそれ程の年月は経過していない。まず、通信波を亜空間に通す所から試験運用が開始され、それから程なくして、キャッチャー・ボートボートくらいくらいの小型船をロボット操作させる所までに科学者の楽観的予測よりは多くの時間が掛かった。それから有人での亜空間・ジャンプ航法がテストされるまでも、技術的なものでなく、世論的な合意が得られて実施されるまでにはもう少し時間を要した。それでも一度、亜空間移動が近・光速移動より（超光速はまだ実現されていない）人体に影響を及ぼさないことが証明されると（『世代をまたがるとどうよ』というややこしい問題は今のところ無視されている）、そこからは広く一般の人間にとっても、当たり前前の移動手段として認識されるようになるのは早かった。

亜空間からの出現ポイントに、他の何らかの物質が無いことが必要最低条件であるため、どんな物質も入り込まないように守られた充分な広さがある空間が確保された施設（ジャンプ・ステーションと呼ばれる）の建造が着手されたのも、実験成功からそれほど多くの時間を待たずにであった。これは、宇宙植民地建造スペースコロニーラッシュ以後、大量に発生する恐れがあった失業者の雇用確保のためであったといわれている。

追跡母船は、大型客船が使うような、そんな安全が保証されたジャンプ・ステーションとは無縁である。出現ポイントにロボットシッブを先行ジャンプさせ、そこで質量分布計測を行い、安全ポイントとして計器に入力された座標目掛けて安全確認などせずに飛んで行く。今のところは重大事故に至ったケースはないが、それは技術が安全を保証しているからでなく、絶対数が少ないからたまたまラッキーが続いているだけということも充分考えられる。

リアルな人間で、加悦かえのボスでもあるこのチームリーダーの高柳は、その点については深く考えずに居られる希有なタイプのように、こんな安全というものを足蹴にしている職務にもキレたりせず淡々とルーティンワークをこなしている。

彼に言わせると、『仕事がある』という状況が、まず、今どきの多数の人間としては幸運な部類に入るから、それに関して文句を言うつもりは無いということらしい。人間が生きにくい場所でやりたがらない仕事で、定型業務として成立しにくいもの、というのが『新人ニューマン』のニッチだから、経験蓄積型AIを搭載しているリアルタイプ・アンドロイドの自分や、相棒のジヨーがここでロスコン拾いを割り当てられるのは判る。母船マザーのメイン・コンピューターが今日のロスコン分布データを解析している間、いつもなら高柳がいる場所が空いているのが、どうにも目に慣れないと溜息をつきそうになる。溜息は人造物である新人には似合わない、加悦かえはもう一人の相棒ジヨーを探した。

人工知能には、いくつ種類がある。先ずは、解放型と呼ばれるもの。データを際限なく蓄積していきながらも高速で解析と抽出が可能で、しかも自己複製しながら何処までもデータを溜め込んでいく、巨大なホスト・コンピュータ。これは国家の維持・運営などを補佐している、いわゆるマザーコンピュータと呼ばれるものだ。もう少し規模が小さく市規模の自治体や、宇宙船隊の母船などの中枢にでんと存在したりしているやつも同じ種類のものだ。

それから、閉鎖型と呼ばれるもの。どんなに瞬時にものごとを判断しているように見えても、どれほど人間らしい振る舞いが出来たとしても、あくまでも決められたフローから、はみ出すことが決してできない、外部プログラム依存型のもの。これはロボットと呼ばれるタイプのAI。そして、経験蓄積型AI搭載のヒューマノイドが基本形であり、思考するとされている人工知能の中で、唯一、準人権が認められているものだ。

平均的成人男性サイズの筐体ボディの腹に（容積が一番確保できるのがそこだから）人工ニューロンを目一杯に詰め込み、トライ・アンド・エラー、自らの経験から失敗と成功を学んでいく（人間のニューロンより遙かに強度は高い）、本当に人に近い方法で思考の程度を上げていく彼らを、人は最初、技術の勝利として広く受け入れた。

それから、人間にどこまでも近い思考を育て、感情が豊かさを増していくこと、ボディなどハードのメンテナンスさえ怠らなければ寿命が存在しないことに警戒心を抱いた社会により、法定寿命が課されるといふ時代が次に来た。

それから、初期の情熱過多なくつかの個体と、それを支援する不思議な人間たちが積極的に行動したことで（人社会にテロ行為をはたらいたり、人間を殺したりするという愚か極まりない手段も含まれていた）、法定寿命を免除され、国連の憲法でも準・人権を保証される今に至っているという感じだ。

法定寿命が課せられていたころは、特殊な器具を使わなくても総合端末に普通に装備されているカメラで読み込める、メーカー名、型式名、シリアル番号から学習履歴まで全てが記録されたマークと呼ばれるクリスタル片を、丁度ビンティのように額に埋め込むことが義務づけられていた。（これだけが、人造人間と天然ものの人間を、測定機器に頼らず区別できる唯一の指標だった）今は準人（新人というややこしい方が、何故か正式な名称）が人権を充分に確保することができるように、マークの表示義務は無い。

だけどねえ……。

加悦^{カエ}は思う。新人^{ニューマン}でどこが不満だ？ 相棒ジヨはマークを取っ払って久しいが、機械であること、機械でしかないことに、どうしてそこまで鬱屈^{ウツクツ}する必要があるのか全く理解できない。

人間なら考えただけで尻込みするような（高柳のように想像力が欠如してる人間もいるが）絶対の無が基本である空間に、うすっぺらい壁一枚にだけ守られて投げ出されるような、生物にとって過酷な環境で仕事ができるのは、それこそ、人間の手が出ない領域で自由に羽ばたく人工生命の特権だと思っている。空気が無いことも、凶悪な放射線（宇宙線）も問題ないし、太陽フレアで抜き打ちの如く放出される大量X線だろうが、高エネルギー荷電粒子であろうが、そよ風程度の問題にしかない。

フレアが観測されたら、速攻^{マザーボート}で母船に逃げ込む不便さとは無縁なのだ。

（本当に、こんな所は私たちに任せてくれればいいものを）

軍が何を考えているのかよく分からない。加悦^{カエ}だって、現場に投入されるまでは普通に教育を受けた。その過程で、多くの生身の人間と触れ合ってきた。高柳は一見、普通の男性型の人間でしかないが、徹底して合理的な考えをし、また、徹底した現実主義で思い悩むことが今日のルーティーンをこなす上で役に立たないと判断すれば、全く忖度^{そんたく}しないという、希有な能力の持ち主だ。

普通の人間は、群れることが本能的に好きだ。だから、絶対無の空間の闇に一人放り出され、なんの支援もなく、加悦とジヨという紛い物の人間もどきだけをあてがわれて、無意味にすら感じられる仕事なんかをすることに、そもそも同意しないだろう。

この生物にとって過酷な職場に、これほど平常心で勤め続けられ

ることは異能と言っても言い過ぎではないと確信している。

どんな局面でも冷静で取り乱すことが無く、しかも徹底した楽天主義と、冷静な現状分析能力を併せ持つ人材は、おそらく軍という大きな塊の中にあっても優れた人材足り得ると思うのだ。

それが、こんな閑職でも勿体ないと、思わないのだろうか。宝の持ち腐れというのはこのことだ。

「加悦さん。着信です。また、さつさとタカさんに戻ってこいつて言う追い出しですよ……」

「それ以外に無いでしょ。『可及的速やかにサンガ基地に帰投せよ』って命令を二週間放置してるんだから……。タカさんなんだから、ジョー……出て」

「加悦さん……。着任順で貴方あなたの方が上官なんですから、たまには出てくださいよ。言い訳もネタがつかました」

「でも、タカさんはここに居ることになってるし、マトモな環境でGアップしたいって、ジョー、貴方に成り済ましてサンガに帰っちゃってるのよ。だから、ジョー。貴方がタカさんの振りして応対してよ。私は携帯端末のデータすり替えをマザーに確認するし……」

「ママ・スカベンジャーはタカさんの指令にはちゃんと従いますよ。加悦さんが監督してなくなつて……」

ママ・スカベンジャーというのは、この仕事を卑下してるのか韜晦しているのか、プレデター連中が揶揄する言葉を殊更に好んで使う、リーダー高柳が母船のマザーコンピュータにつけた愛称だ。普通の感性なら怒ってしかるべきだが、ママは感情というものは徹底的に隔たっているのです、面白がってそう呼ばれようが、尊敬を込めてそう呼ばれようが、貶められてそう呼ばれようが、まったく頓着しない。

このチームのリーダーであると登録されている高柳の声紋で『呼

びかけ』られれば、本部からの強制命令と三原則に反することを除いて、その命令を基本的にこなすことに、あれこれ思い煩ったりしない。

例えば、高柳が防御なしで在室しているとき、操船室キャビンの酸素濃度をゼロにしろというような、彼の生命維持に適しない命令を実行することは絶対にしないが、重力環境に定期的に触れていたいからと、高柳が『簡易重力室ごっこ』を命令しても、それを止めたりしない。

『簡易重力室ごっこ』とは、高柳考案のめちやくちや単純な仕掛けのことだ。一応、人工重力が遠心力で作りに出されることを参考にしたとは、高柳の言である。

その実体とは思いつき以外の何者でも無い。自由時間及び休養時間として許可されている二十四時間につき十二時間の内数時間を、母船のキャッチャーアームに高柳の愛機クロンをキャッチング・ネットの材質でもあるダブルウォール・カーボンナノチューブの縄で繋いで、文字通り振り回して加重するという乱暴なものだ。

彼が自己申告するところのその目的とは、一応有G環境に棲息している筈の未来の奥さんと、健全な生殖活動を営むための筋力維持というフザケたものだ。有職者となるために軍に身売りはしたが、生き物として存在する以上、基本的人権の一つである妻帯する権利は放棄してないと……呆れた物言いをする。基本的人権に『妻帯する権利』があつたとは、記憶の精度では人間にくらべるべくもない加悦をして初耳だ。

もっとも今回の高柳の三週間でテラGアップという無謀にしても、普段から『重力室ごっこ』をして耐G能力の維持を心がけ、ちゃんと骨を強化するカルシウム・サプリや赤血球増加剤を服用していることを知らなければ自殺行為だと加悦が止めただろう。

普通は宇宙人に任命された時点で、重力環境にいつでも戻れる状態を維持しようとは考えないだろう。学生時代の友人たちや、ネッ

トを經由したチャット・ゲームなどで隙間時間を埋めたり、映画をみたりするのが大好きな高柳を見れば、彼がいわゆる『人恋しい』タイプだと断じていい。その基本的性向と、どこまでも孤独な現実を、簡単に馴れ合わせる事ができるのだから、大したものだと本当に思う。

「加悦さくん」

ジョーが情け無い声を出す。コールは鳴り止まない。

「ほら、ちゃんと言いつい訳しないと、マザーに強制帰還プログラム転送されちゃうわよ。タカさんが『三週間くれ』って言ったんだから、なんとか頑張つて誤魔化しましょうよ」

帰投命令が出たとき、高柳の決断は速かった。ジョーに成り済ましてサンガに密入国して、多少でもマシな状態に体を持つていくと……即決だった。必要を直感したときの迷わなさも、加悦にとつては心地よい。高柳が三週間と言ったからには、恐らく必要にして最低限の期間なのだろう。

ゼロG仕様の人間でなくても、生身の人間がテラ・マスドライバで打ち上げられて、まあ、無事で済むのかどうかは分からない。けれど、準備を整えているのだから、タカさんは命令拒否はとりあえずするつもりがないのだろう。けれど、加悦が考えるに、大気圏突入の時に乗員に加わる一般的なマックスGは『7』しかも数秒だ。そのあと数分間の3G。ここいらが生物的な限界だと思う。これっぽっちのGに耐えるのにだって、特別頑健な人間でないと難しいのだ。

自分は、真面目なタカさんの無事を人間のことを愛する神様にでも祈るしかないが、生還へのパーセンテージを少しでも上げようとする姿勢は、簡単に絶望するひ弱い人間が多い現実に照らし合わせても瞠目に値すると思う。

長時間を稼ぐことが難しいと判るからこそ、少しでも期間を長く

とりたい筈なのに三週間で妥協した。こういう加減もなかなか難しいことだと思う。

高柳は、こういうことに直感が働くらしく、全然迷わないのだ。指令がきて三分ほど腕組みをして目を閉じて居た。あの時は加悦からみると、上下が逆転していたので、どちらかというところには見えなかったが、目まぐるしく考えを巡らせていたのだろう。珍しく三分も黙った挙げ句、目を開けた時は悪戯を思いついた子どものような目をして、ニタッと笑ったのだ。

ジョー。携帯端末交換してくれ。あと、悪い、俺のフリしててくれ。

ママ。俺の位置情報をジョーにターゲット。俺の身体特性をジョーの端末に転送。

加悦さん。三週間、なんとか時間ください。

女好きを誇らしげに自慢する高柳は、ネールタイプ男性型のジョーをアゴで使こき使うのに全く躊躇を感じないらしいが、フェイメールタイプ女性型の加悦には、丁寧で優しく振る舞うのが常だ。生殖というものは加悦にとっては意味がないし（行為の真似事ならできるが）、ホルモンバランスで脳の思考パターンに女性型が現出しているということも無いが、高柳に女として扱われるのは、嫌いでない。

タカさん。どうなさるんですか？

加悦はボスである高柳には敬語で話しかけることにしているので、そんな聞き方になった。高柳は飄然と答えた。

無申告で有給休暇の消化。生存率上昇のためのGアップトレーニング。あと……。

あと？

配偶者探し。ライダーだもん、たまには突っ込みたい。

加悦が高柳を（勿論軽くだが）殴ったことは、言うまでもない。

暴力反対。子孫繁栄への衝動はDNAからの強制命令だ。

高柳が訳の分からない雄叫びを上げていたことも、一応、補足しておく。

5・パンピー

シャワーを浴びる。テラGはいろんな意味で、俺には有り難くないけれど、この何処も漂わず体を打って足の方向に水滴が行儀よく落ちていくのは気持ちよい。ちゃんとバスタブに溜まるお湯ってやつもそうだが、風呂はテラGが断然快適だ。やはり、水ってのは、重力がきちんとある環境と相性が良いんだよなあ。

プールに棲息している野郎どもは、こんなものでまで体を痛めつけたいのか、普通の手加減で蛇口を捻ってしまっただけで出てくるお湯の勢いは、凶悪だった。昨日はうつかり考えなしに使おうとして死ぬかと思った。まさか水で骨までは折れないだろうが、青痣にはなりそうなのほどの衝撃だった。銃火器に狙われたり、撲殺されたりするなら絵になるというか、世間さまの同情も引けようが、『粗忽な宇宙人、シャワーに打たれ死亡』じゃあ、かつこ悪いにも程がある。そんなのがネットニュースのヘッドラインに流れたら、飛竜なら泣いてくれる前に爆笑しかねない。親友に笑顔で送られるってのは……悪くないのかもしれないけど、そんな俺は「御免蒙る」ね。

昨日に賢く学んだ俺は、今日は加減してちよろちよると水が滴り落ちる程度にしてから蓮口はすくちの下に身体からだを滑り込ませた。汗をお湯が流していくのは、極上の快感だ。これはゼロGでは味わえない感覚だ。

ロッカールームは、筋肉美が大好きな女なら涎よだれを垂らしそうな素晴らしい肉体の展示場だった。確かに絵になるしカッコいいと思う。クソ、ちつと羨ましい。俺の相棒たちは、重力環境にへつらうことも無い人工筋肉と、金属骨ボーンだから、いつまでも同じ体型を維持しているが、五年以上の無重力環境で、天然もの俺の土台は見事に崩れまくった。

あの体を見せびらかす作りになっているスペースジャケット生地

のツナギ服は、ライダースーツというそうだが、そいつを着込んでいるやつはコレから地球に突っ込む予定なのかもしれない。連中は何を着ても似合う。俺は流石にここで制服（有体に言えば軍服）を着る訳にはいかないから、少しでもテラGの負担を減らすべく、スパーで買ってきた体に密着していないノーマルタイプのスベジャケを着込んだ。惨めに弛んだ俺が市販のスベジャケを着ると、まさに、宇宙飛行士のコスプレをしている、イカれた中年男といった様になる。哀しい。

空調ユニットを稼働させる。民間に流通してるユニットは心持ちデカイ。こいつのお蔭で、汗をかかない温度と乾燥しない湿度が保たれる。だから普段の生活では俺は汗をかかないことになっている。いつもは毛穴に皮脂や剥落した角質が溜まる頃に、キャッチャー母船を無人浮遊棧橋フローテジビヤに着棧させて、その設備であるシャワーを使う。全方向から噴射される霧ミストに十数秒曝されるだけで、一応生物的な汚れは落ちていくそうだが、疑わしいもんだが、深く考えないようになっている。ロスコン拾いの現場は人口過疎地だから、水の補給は年に数回数えるのみだ。つまり、貴重品の水は、基本的には排泄物も含めて完全にサイクルを建前にしている。有り難く使っているキレイなはずの水の「真実を」追究するなんて、止めといた方が、精神衛生上、絶対良いと俺は思うね。

「ちょっと待てよ」

フィットネス・ジムを出た直後に、呼び止められた。ライダープールの人口の内、恐らく八割以上が宇宙船操船専門学校出だと思う。港湾都市コロニーである『サンガ』は、極東アジア国のものだ。国立の専門学校は三つしかない。だから俺たちが出た、就職率でトップを誇るネオシャンガン出がその中の半数を占めていると考えてもいいだろう。つまり先輩後輩を含めて、俺を知っている奴がいても

奇怪しくはない。が、俺ときたら、過去にこだわらないが行き過ぎて、学生時代なんぞキレイさっぱり記憶の彼方に霞んでいる。親しく付き合っていた顔しか覚えていない。

記憶をかき集めて思い出そうと試みる。そうだ。俺を呼び止めた奴は、ザキさんワールドで思考力が一時停止していたとき、睨み付けてきた男だった。上下も左右も、ガタイがいい飛竜よりも二周りほどでかい。つまり不必要に巨大ってことだ。

「お前……、オヤジ面下げて、新人ライダー^{ペーパー}って訳じゃねえだろう？」

声も野太いって種類のやつだった。俺は頷く。こちららライダーとしてなら年季が入ってる。テラGに突っ込んでないだけで、紙みたいにうすつぺらい質量の小型船^{ポート}に何年乗ってると思ってるのだ。ペーパーなんて呼ばれる筋合いはない。

「ここはライダープールだ。なんでライダーでもない奴がウロチョロしてる。目障りなんだよ」

ふざけてからかうか、真面目に答えるか。悩むところだ。交ぜつ返す方が俺スタイルなんだが、こいつらに冗談で殴られるには、宇宙人はハンディが有りすぎる。こいつにしても、軽く脅かしでジャブ喰らわせだけの俺が昇天しちまって、過失殺人罪に問われちゃ気の毒だ。うーん、スペジャケ買ったときに背中に『I'm 宇宙人』とでも印刷してもらえば良かったな。

「テラG慣らしさせてもらってるだけですが、何か？」

若造にデスマスで話してるだけでも、むず痒い……。

「テラG慣らしなら、サンガの一般宇宙港^{バンポ}でやれよ。おっさん」

「ばんぽー？」

聞き慣れない言葉に引つかかってしまった。男が舌打ちする。

「ったく、これだから一般^{バンビ}人は……」

「ばんぴー？」

言葉を出して繰り返すには全く間抜けた響きの言葉だ。それにし

ても全く意味が分からない。業界っていうのは短い内輪で通じる言葉を作り出しがちだが、「ぱんぱー」に「ぱんぴー」なんてのは、なんか、明るくていい。俺の趣味に妙に合う。

「とにかく、鬱陶しいんだよ。明日もここに顔出してみる。二度と来たくないって思いはさせてやるからな……」

ははあ。このお兄ちゃんも飛竜と一緒にザキさんファンね。ザキさんが俺を構うのが面白くないって訳か。……デカイナリして、小学生か？ こいつ。

「明日もラスまでザキさんに食らい付いて、ご褒美お願いしようと思ってるんだけどなあ」

「ご褒美って……」

「ほっぺにチュー」

……まずい。純情な青少年をからかってどうする……俺。パンピ―ときたら、マジで頭から湯気でも出てそうな雰囲気だ。

「……明日まで待つつもりが……無くなったぜ」

マッチョ・パンピーが両手の指を組み合わせて握り合わせる。ポキポキと小気味いい音が聞こえた。空間が振動して鼓膜に音が届くのは、この広い空間が可住大気成分で満たされているということだ。さすが、コロニー、贅沢にできている。空気の振動がある空間は、音が豊かだ……。ちよっと待って。パンピーちゃん。貴男が殴ったら、俺、死にますけど……。

奴の大きな手が俺の胸ぐらを掴みにのばされてくる。えっと、絶体絶命……かな。もしかして。

「タカさん。さっそくキリー以外にお友だちが出来たの？」

危機感たっぷりな俺の様子をみてから、その暢気な言葉を選んで欲しい。明るすぎて素っ頓狂な断言と共に登場したザキさんに安心

したというより、見事に力が抜けた。

「柏木^{かしわぎ}さん……今日もナイス・ファイトでしたあ……」

パンピーちゃんの本名はカシワギというらしい。柏の木と書くなら、俺の高柳と親戚みたいなもんだ。意味もなく親近感が湧いてくる。

「いや……ザキさんこそ。いつもパワフルで……俺……尊敬してます」

デカいし単純だけど、こいつ可愛い。パンピーの顔は心持ち赤い。パンピーからザキさんの声の方に視線を移す。太股の半分までの短パンと肩を紐で結んだだけの下着みたいなトップスで、足元はサンダル履き。この男の割合が極端に多い場所するには、若干サービス過剰な格好だった。まあ、若いだけに似合ってはいるが。

「こいつ、キリーさんの友だち？」

俺を指さす。飛竜のことは「さん」づけで呼ぶ関係なのね。

「なんで、一般人^{パンピー}がプールのジムにいるんです？ 地球詣^{もつ}でにテラG慣らしが要るなら一般宇宙港^{パンボ}で充分でしょ？ 霧島一族の息がかりでも目障りだと思いませんか？」

俺の回答では満足していなかったのか、そんな聞き方をザキさんにした。

「違うわよ。一般街区^{バンク}の生活圏はルナGでしょ。タカさんゼロGからいきなりテラGまでアップしようとしているから、重力室だけで普段ルナGだと間に合わないらしいわ。急激^{ジーカー}にG環境変えるのは、実際、危険なんだけど……」

「へ？……こいつ。宇宙人？」

パンピーの顔が蒼くなった。俺を殴っていたら、殺しかねなかった事に気付いたのだらう。殴らなくて良かったと心の底から思っているに違いない。

「うへ……。めっちゃ、迷惑な奴」

そついいながら、奴は俺を舐めるように観察してきた。どうせゼ口Gで弛たるんだ体は不細工でしょうよ。勝手に優越感に浸っててください……。

「すごいな。このオヤジ、宇宙人のクセに、ザキさんのプログラムに最後までついていけるんだ。信じられない」

意外なことに称賛の響きが入ってる気がする。宇宙飛行の専門プロ家だけあって、G環境をダウンする簡単さと、アップする困難さは、知識でなく経験として知っているのだろう。

「ルナG慣らしには、どの位期間とつたんです？」

いきなり敬語になって聞いてくる。本当に面白い奴だ。

「二週間かな……」

俺まで調子に乗ってぞんざいな口の利き方になった。まあ、年功序列つてのが有効な世界なら、俺が偉そうにして何も問題はないのだが。パンピーちゃんが大きく目を見開いて、肩をすくめる。

「で、テラG慣らしはどの位する予定なんですか？」

「一週間。それ以上は……余裕がない」

「げ……。死にますよ。突っ込むときのマックスG、いくつになるか知ってます？」

ザキさんもパンピーも、聞いてはならないことを聞いてしまったという顔つきになっている。飛竜の口の固さを、この知り合ったばかりの二人に安直に期待することはできないから、Gコントロールユニットについて言及することはできない。一応腐っても軍人だしな……。俺は照れ臭く苦笑いするしかない。

バージ（解）シャトルは、宇宙港サンガから離棧すると、まず、重力を遠心力で相殺してバランスがとれる（一見静止しているように見える）シャトル軌道に入る。写真なんかでは暢気に止まっているように見えるが、その時点での時速は二万キ口超だ。

第二段階として、分厚い大気という抵抗を利用して、普通に大気圏を滑空飛行できる時速千キ口程度まで一気に減速する。ここでの

加重されるGは……、宇宙人のオレは想像したくありません。

この大気圏突入時にシャトルがとる角度が浅いと弾かれてしまうし、深すぎると摩擦が強すぎて燃えてしまう。その辺の角度調整は勿論コンピュータに支援してもらってるだろうが、中に乗っている人間のG耐性を支援してくれる装置は今のところない。だからバージヤトルライダーの連中は、肉体を訓練するしかない訳だ。彼らがそろってマッチョな理由はこの辺にある。俺が協力することになっているGコントロール・ユニットが本当に眉唾でなければ、この連中の職場環境も大きく激変することになるのかもしれない。ライダープール自体が不必要になる可能性だってある。

俺は中年男の威信にかけて（それほど大げさな話じゃないが）、ザキさんとパンピーを食事に誘った。ザキさんがオーガニックの和食懐石がいいといい（遠慮のない……）、パンピーがステーキが良いといい（こつちも）、取り敢えず俺が食べたかった蕎麦屋に入った。テラGに馴染んでいる奴らは、テラGこそが汁付きの麺類が美味しく食べられる唯一の環境だつてことを、まるで有り難いと思つてないのかぶつくさ文句を言っていた。が、確かにペロリと一人前を平らげている割に露骨に足りなさそうだ。仕方ない。もう一軒は付き合つてやろう。優しい俺は思った。

「宇宙人やつてらしたなら、タカさん、パンピーじゃないっすよね」
蕎麦湯を音を立てて呑みながらパンピーが言う。

「そのパンピーっての何？ 凄く気になつてるんだけど」

「一般のパン。ピーは……多分peopleの……ピー」
ザキさんが言う。俺は納得した。じゃあ同じ解釈で、パンポーは一般宇宙港。パンクは一般街区か……。こいつらの用語は徹底して直線的で捻りというものが全くない。

俺が彼をパンピーと心の中で呼んでいるのが判つたら、この単純な大男は、またしても、激怒するのかもしれないな。でも、パンピーが一般人ということなら、軍人に対して、やつらは民間人。完全

に一般人だ。うん、パンピーのままでは呼称変更の必要なし。

「どんな仕事してらっしゃるんですか？」

パンピーはガタイと顔で、可哀相に損をしている。言葉遣いといい、朴訥さといい、今どき珍しいくらいマトモだ。オヤジ受けすること必至のお人柄だ。

「……うん。まあね」

ゼロGで働いているのは、地球を中心に多少いびつに膨張しつつある植民地開発の最先端でテラフォーミングに携わっている開拓者^{パイオニア}とか、宇宙植民地^{スペースコロニー}の建造者^{ビルダー}辺りが、パンピーの想像できるいいところだろう。多分、スカダーなんて、存在自体が認識されてない。ついでにスカダーが軍人だったのも……知らない筈だ。テラ・マスドライバー・システム『サヤコ』を極東アジア国軍が完全に独占していることは、意外と一般に認識されていない。

「追跡者^{チェイサー}つてのやつてる」

若者に見栄を張りたいたいおじさんは、スカベンジャー・ライダーという卑称を使わず、正式名称で答えた。我ながら……セコイ。

「チェイサー？　なんかカッコいい。その実体つて、警察かなにか？」

俺は蕎麦湯を噴きそうになった。犯罪者を追いかける仕事？　ザキさん、ドラマの見すぎだよ。俺は運送屋……。

「いや。追っかけるのは追っかけてるんだけど……、相手はロスト・コンテナだから、飛竜と同業者で単なる運送屋」

「ロスコン？」

パンピーがちよっと顔を顰めた。

「ちよっと待ってくださいよ。タカさん。それってもしかして、スカダー？」

「……げ。こいつ、知ってる。」

「じゃあ、タカさん、軍人じゃないっすか」

「えーっ？　タカさんって軍人さん？」

ザキさんが仰け反って大声を出す。蕎麦屋にいた他の連中の視線が痛い。極東アジア軍は（特に日本県においては）自衛隊の昔ツから、国民に敬遠される伝統がある。いまこそ俺は断言しよう。極東アジア国軍は、『サヤコ』を民間委託事業とし、従事者を軍籍から抜くことが必要である。

俺は居心地悪い苦笑いを顔に貼り付けるしか無かった。

「軍人がそれこそなんで、プールで密かにGアップ訓練してるんですか？ 必要なら専門の施設があるだろうし、普通はGアップ・トレーナーが付くでしょう？」

パンピーの射るような視線が痛い。

「……ここだけの話にしてくれる？」

俺は声を思いつきり抑えた。ザキさんもパンピーも調子を合わせて、ぐつと俺の顔に耳を近付けてくる。

「私、おしゃべりじゃありませんよ……」

こういう断言をする女の子が一番アテにならない。

「俺も信用してくれて良いっす」

パンピーは論外だ。

「軍の研究者がね、Gアップなしに宇宙人を大気圏突入させて、データとりたいらしいの。Gアップ・トレーニング禁止されちゃったから……ここで隠密トレーニングって訳。まだ死にたくないし……」

「えーっ。それって酷い。そんなの人権保証委員会に訴えるべきよ」

またしてもザキさんは通りが異常に良い大声を立てた。やっぱり、Gコン・ユニットについては喋らなくて正解。

「ゼロGからテラGに移行するときの生物の反応は既にデータが出

揃ってます。今更、そんな常識化してるデータなんか、必要はないでしょ？……軍が研究してる……Gコン。実用段階に入ったって噂あるんですけど、まさか……とは思ってたけど、もしかして、そっちじゃないですか？」

パンピーが訥々（とつとつ）と言った。

俺の華奢な心臓が止まりかけた。この、筋肉男。いったい何者だ？

6・周回待ち

綺麗に青が輝いている。

いつもなら白いんだらだが、刷毛ハケで撫でた様に在って、あちこちで視界を遮かきっているものだが、今日はやけにくつきりと見事に見える。

宇宙というスケールで測れば、地表に貼り付いているに等しいシヤトル・ロードに無事に乗り自動巡行モオートクルーズードに切り換えた。気象状況や離発着状況を見て地上管制官から突入指示ゴーサインが出るまでの僅かな待ち時間、こうやって眺める景色が、柏木恵心かしわぎけいしんは大好きだった。

うつすらと雲で霞んだ柔らかい色調のも、目玉で睨み付けてくるサイクロンの渦巻きも、何度見ても飽きる事がない。人類が住むことができる範囲の宇宙は、あまりにも静かだ。月も火星もどこか死んでいるイメージがつきまとう。けれど、この豊かな水の循環はどうだ。この息吹を視覚化したような雲の動きは。水。水。水。水。圧倒的な水。命の手応え。特殊にしてかけがえのない、人類の手中にあるただ一つの宝玉。

そして柏木がダントツに好きなのは、手を伸ばせば触れられそうなくらいに、くつきりと鮮やかなヤツだ。今、ちょうど眼前に広がっているような。この景色が見られただけで、今日は一日はツイていると思える。きっと今日も穏やかで何事もない、穏やかな日が過ぎせるだろう。ビールの缶を手に、夜の海を見に行ってもいい。木々のざわめきに耳を傾ける夕べも悪くない。

「ワカタカ……号……、ワ……タ……号……」
「号、応答……」
「ガイしま……」

きやがった！

ビシツと背中に一本緊張の筋が通る。緊張といっても、アガリ性の人間が結婚式のスピーチ前に感じるようなアレではない。地球の濃い大気では生きた水がいつも激しく循環している。風向き。強さ。そして湿度、温度。同じ気象条件がシャトルシップに提示されることは二度と無い。だから保証された安全などとは無縁。それが大気圏突入という仕事だ。突入前にいつも感じるこの緊張感、積み重ねられた訓練と現場での経験によって培われた自信に裏打ちされた、心地よい種類のものだ。

気を引き締めて、しっかりと集中して……。いきなりの横風。旋風。大きな翼が煽られるほどの突風。どんなサプライズ・プレゼントが来ても、過たず受け止めて、無事に大気圏内の航空高度で飛行できる時速千キロ程度までに減速する。これが第一段階。そして、今度は飛行機乗り転職して、着陸する目的地の宙港のコントローラーンまで移動する。

混雑状況によって、地上管制からの誘導方法は異なる。レーダースコープを2組用いた誘導システムGCAの場合もあるし、人手はかからないが、滑空距離が長くなる水平ビーム（ローカライザ）と垂直ビーム（グライドパス）を併用するILSが使われる場合もある。

柏木自身は一度も経験が無いが、ほぼ視界ゼロで計器着陸ということもあるらしい。一般空港と違って、スペースシャトルが発着する宙港は、気象統計学に基づいて気象条件がとびきりいい場所に作られているから、見難いという状況で着陸することも殆ど無い。目的地の管制空域に入れば殆ど仕事は終わったようなものだ。

シャトルライダーは『突っ込み屋』といわれるが、世間に思われているだけでなく殆どの場合、ライダー自身が自分たちの本分が突っ込む事なのだと思うている。柏木も実感する。あの青い輝き目掛

けて減速しながら落ちていく矛盾した瞬間が、たまらなく好きなのだ。だから、管制タワーから呼ばれる瞬間、自分は別の生き物になる。

「ワカ……二号……応答ネ……ます」

濃い大気を突き抜けてくる音声は、多くのノイズと若干のタイムラグとが混ざって、あらゆる箇所が虫食いになっている。カツカツと耳障りな雑音が刻まれるのもいつものことだ。愛機・若鷹ワカタカニコウ二号からの応答を促すいつものメッセージ。地上管制タワーからの呼びかけは定型文ばかりだから、受け取る方に何も問題はないが、ハイパーウェーブ通信や宇宙間通信のクリアで即時的な音声を聞き慣れている人間には、とんでもなく古くさく感じられるに違いない。

霧島運輸の持ち船に対するネーミングセンスの際どさは、創業者一族の悪趣味によるとしか考えられない。ちよつと正気では乗れないような類の名前を背負わされている船も多い。若鷹くらいならマシな方だ。『御曹司おんそうし』と陰では呼ばれている先輩ライダー、霧島飛竜シヤトル（彼自身の名前も相当イッチまってるけど……）が搭乗する船にも、その悪趣味は遺憾なく発揮されている。その名は……、

片鎌かたかまじゅうもんじ十文字号……。

いったい、どういう神経していたら、こういう名付けができるのか不思議だ。柏木はいつも思う。なんでも、槍の穂先の根元近くに鎌状の刃がついている鎌槍かまやり（これ自体の知名度だつてめちゃくちゃ低いと思う）の内、その鎌が一方にだけ大きく迫り出しているというマニアックなレトロ武器の名前だそうだが、時代劇にも滅多に出て来ないに違いない。柏木にしても、かつてその名前を初めて耳にしたとき、興味ついでに調べてみたから形状を想像できるようなもので、それをしなかったら一体何のことなのか見当もつかないままだったろう。あれは、誰の耳にも（特に日本語を解さない連中には）ちゃんとした塊で捉えることができないようだ。宙港ポートの管制官タワーの連

中はクソまじめに頑張つて『カタカーマ、ジユウモ……ジ』なんて発音するが、霧島運輸の通話交換手連中は、『御曹司のカマカマ』とか、『カタカナ十文字』とか好き放題に呼んでいる。

全方向視認型ヘルメット（通称、金魚鉢）を被り、つなぎ目を閉じ、掌で撫でる。掌紋ロックがかかり、ライダースーツと完全密着する。手袋のつなぎ目だけは掌でなぞれないから、グローブをはめた両手を突っ込んでカメラに網膜パターンを読み込んでもらって閉じるという、えらく汎用性に劣る装置に助けをもらう。

客船タイプのシャトルは機長に副が2名つくのが一般的だが、（運行本数も限られているし）貨物運送用のシャトルは、基本的に一名の運転手で運用されている。オートクルーズが一般的だし、基本的にはフルオートで離発着も可能な位のAIは搭載されているのだ。ただ、順番を待ったり、緊急順位が入れ替わったりと、慌ただしい現場では、いちいちプログラムで処理するより、管制チームの捌きを人間に伝えて微調整する（機械と人による二重チェック運用になる）方が安全だからだ。

言ってみれば、緊急事態さえ発生しなければ、人間が乗っている必要は特にないのだ。物理学に則った微調整など、あちらの操作の方が確実な位だ。ただ、突発する事象に対して即効性に劣るのが奴らの欠点だ。食い合っているというより協働しているということに人間としてはしておきたい。

柏木は機体認証IDを管制に送ってから口を開いた。金魚鉢をかぶっている時はマイクに口を近付ける必要はない。

「霧島運輸所属、若鷹二号。機長、柏木スピーキング」

ドバイ宙港管制です。当港管内、現在OC（Overcrowded Conditions）です。周回ウェイティング願います。どうぞ。

心地よい緊張感がどつと崩落する。全く、最近これが増えてきて困る。プランジ（突入）申請を闇雲に受ける宙港ポートの姿勢は、せつかな荷主の方にしか向いていない。ここで、無理に突っ込みたいと我が儘を言っても通るものではないので、柏木は軽く舌打ちしてから、過密スケジュールはタワーのせいではないと、強しいて自分に言い聞かせた。一つだけ深く息を吐き出す。

「了解です。周回用シャトルロード案内願います」

ロード4でお願いします。

『お願いする』というのは、あくまでも表現上の問題で、こちらの了承を確認すれば、問答無用で無線標識ピーコンによるルート誘導が始まる。管制からの誘導は基本的に民間機はUE（Unconditional Execution＝無条件実行）でプログラムが書かれているので、発狂したシャトル・ライダーがプランジ体勢維持を強行しようとしても、コンピュータ・プログラム・スキルでも無い限りできるものではない。

「了解。若鷹二号、周回ウェイティングに入ります。誘導願います」

ゲームでもするか。本でも読むか。見ようと思ってゲットしているだけの映画データでも再生するか……。

柏木はグローブを外し、金魚鉢ヘルメットを脱いだ。シャトル・ロードは機体にダメージを与える大きさのスペース・デブリ（宇宙ゴミ）を排除して、安全に地球周回軌道を回れるように整備されているルートのことで、その名の通りに道として存在するわけではない。ロードナンバーは地表からの距離によって割り振られているものだ。シャ

トルを周回させるには、地球へ全ての物体を落下させようとする引力を振り切れる速度が必要だが、それは高度によって異なる（地表から距離があるほど、速度は遅くなる）。ロード4だと次にこのポイント・ミーティング・ポイントに帰ってくるには約95分ほどかかる。昼寝ができるほどの長さではないが、ただぼーっとしているには勿体ない。

ヤング・イーグル・ザ・セカンド。ヤング・イーグル・ザ・セカンド。

突然スピーカーが音を立てる。わざわざ、若鷹二号をそんな風に長く呼ぶのは、からかっていることだろう。今週は運が悪いことに、全ての突入でウェイティングがかかったのだ。大当たりには違いない。

毎度、周回ウェイティングご苦労さま。

先程のタワー音声と違ってクリアな宇宙通信がスピーカーから流れてきた。会社の通信交換手として長く働いている、ミセス・キャロットの声だ。

「毎度お。最近、ウェイティング多いね。もう、厭になっちゃうよ。誰から？」

柏木はインカムをセットして答えた。このタイミングで通話をくれるなんて暇人の証拠だ。もしかしたら1時間ほどのおしゃべりに付き合ってくれるかもしれない。

御曹司の『カニカマ十皿食べたい』からよ。若鷹。

御曹司、霧島飛竜の愛機・片鎌十文字号の名前は、最早原型を留めていない。

「キリーさん、今日はラウンチ（打ち上げ）じゃなかったっけ？」

カニカマは地上で順番待ちよ。ウェイティング御曹司も暇なんじゃない？ 搭乗してウェイティング・レーンに入っちゃったら、他にすること無いもの。一緒に映画でも見てたら？

「キリーさんとじゃ燃えないよ」

『御曹司』という呼び方は、優秀なライダーである霧島飛竜を侮辱しているような気がして、柏木はいつも『キリー』という仲間うちの通称の方で彼を呼ぶ。

「オーケー。回線、カニカマに繋いでください」

柏木がそう許可する前から回線が繋がっていたのか（ウチの交換機はいい加減だ）、いきなり飛竜の声が耳元でした。

「俺とじゃ燃えないって、丸聞こえだよ。言ってくれるじゃないか。しつぱりとしたラブロマンスでも見るかあ？」

相変わらず、霧島飛竜は見惚れる位に爽やかな笑顔をしている。

同じ男の柏木からみても、霧島飛竜は魅力的だ。的確な技量をもつライダーとしての彼にも言うまでもなく一目置いている。だが彼は創業者直系で、現会長の長男なのだ。本社のデスクでそっくり返って数字を弄っているだけでも誰も文句を言わないだろう。突っ込むのが好きだからというだけの理由でよくもまあ危険が背中に張りついているような仕事につく必要はないのだ。

その証拠に、彼の直ぐ下の弟さんは、専門学校を出たあと直ぐ、星間不定期貨物船に配属されて、今では四本線（船長）だ。曙丸（あけぼのまる）これも今どき何処か違和感がある名称だ）はたしか今、ブルーリボン・ホルダー（恒星間ジャンプ航法での最速船に与えられる称号）

だ。霧島飛竜とよく似た青年船長の勇姿は社内報に何回も載っている。

「だから、なんでキリーさんとそんなもん見なきゃなんないんです？」

「だったら、さっさとザキさん誘えばいいだろ？ ウジウジしてないで。そのガタイが泣くぞ」

肉体的に負担が大きいライダーに必須のトレーニングを、『楽しく』継続できるようにというのが霧島運輸の方針で、その一環としてサンガのライダー・プールには様々な種類のトレーニング施設がある。それほど捻ったコンセプトの施設でも無いのにフィットネス・ジムの人気が高いのは、名物インストラクター・尾崎さんの存在によるところが大きい。『ザキさん』と呼ばれる尾崎さんは、小柄な体躯にも関わらず驚くほどタフにできている。そして、彼女のマジックにかかると、キツイトレーニング・プログラムが楽しいエンジン・タイムに激変する。

柏木が彼女に純情な片思いをしているのが、どうも霧島飛竜には面白いらしい。柏木が可能な限りザキさんのレッスンに参加して、自己負担も必要な『パーソナル・トレーニング』に申し込む位が一杯で、彼女のプライベートに切り込んでいくほどの度胸が無いことをいつもからかってくる。

霧島飛竜は文句無く女性にもてる。彼が未だに独身なのは、不思議でもなんでもなく、遊びすぎて女性陣からそういう意味で信用されていらないからに違いない。それでも飛竜と飲んでいる時のザキさんの笑顔を見れば、彼女が間違いなく彼に好意を寄せているとしか思えない。飛竜は自分などが絡んでいく隙間は無いと柏木は考えてしまう。自分が普通の女性の基準からいってもデカすぎることは承知しているし、ザキさんは小柄だから隣においておくのは、いいところ飛竜位までで限界だろう。

「昨日はザキさんと飲んでましたよ」
それでもついい栄を張る。

「おーっやったか？ どこまでイツた？」

飛竜じゃあるまいし、飲んだだけで、普通はその先になんか簡単に行けるものではない。第一、女性に対して純な柏木には、そもそも女性との付き合いを「遊ぶ」と表現する感覚が理解できない。

「どこまでって……。タカさんと一緒でしたし……」

「高柳と？ お前、まさか、俺がザキさんにあいつを頼んでツたの誤解して……。タカの野郎を絞めたんじゃないだろうな？ あいつ宇宙人だぞ。殺してないだろうな」

どうして、こう、鋭いのだろうか。柏木は肩を竦めた。

「なんとか……。殺してませんよ。ちよつと知るのが遅かったら、ヤバかったかもですけど」

クツクツと肩を震わせて飛竜が笑っている。心から面白がっている様子だ。無責任な。ただ、その直前に『殺してないだろうな』と言ったときの真剣な目から、彼がどれだけ高柳を大切に思っているかが察せられた。柏木は苦笑する。

「タカさん、スカダーなんですってね。宇宙人長くしてる人って、俺、初めて見ましたけど、思ってたより随分しゃんとしたガタイしてるんですね……」

「ああ、やつは一応、宇宙人長くても、ちゃんと耐G訓練もしてるらしいから。そうじゃなかったらジムなんか連れてけないよ」

「へ？ どうやって？」

宇宙の物質が希薄の宙域で地味にロスト・コンテナを拾う現場で、どうやったたら耐G訓練が行えるのだろう。柏木は真面目に考え込んでしまう。

「オフタイムに、カーボンナノチューブのキャッチネット使って母船のアームにボート繋いで、振り回してもらってるらしい……」
言い切ってから、飛竜が腹を抱えて笑い崩れた。

「上にバレたら罰金モノだな。下手したら懲戒かもなあ……あいつ……」

柏木は一瞬、その風景を考えて飛竜につれられて笑いそうになってしまってから、冷静な部分で舌を巻いた。遠心力に曝されるのが重力環境を擬似体験できる方法だと誰でも知ってるが、自らの筋力維持に供するための、そこまで単純な方法を誰が思いつくだろう。しかも、思いついたところで実行を普通はするだろうか。

職務命令で無重力に長期間曝される事になったら、誰もが有G環境に帰って来てから、ゆっくりとGアップトレーニングをするしかないと諦めてしまっだろう。どれだけきつくても、それしか方法が無いのだから。

三週間でゼロGからテラGにアップすると聞いて、正気じゃないとは思った。あのおっさんは考え無しの馬鹿だと思った。が、そういう前提があるなら、全く高柳への評価は変わってくる。行き当たりばったりで無謀に時間を設定しているのではなく、Gショックを充分に乗り越えられるだけの勝算が有って、尚、安全のために期間をとっていることになり、したたかな計算能力があることの証明である。

高柳はGコントロール・ユニットについては、徹底した柏木の追究をのりくらりといなししていたが、命令があつて無重力からテラGに移動しなければいけないことは白状した。そして、即刻という命令を無視する猶予期間を勝手に三週間に設定していることも。

それにしても、三週間という限られたGアップ期間の中で、ルナGを二週間とるというのは、案外なかなかできそうではないことだとも思う。普通は焦ってルナGを素通りしがちになるだろう。

「タカさん……って、もしかして、凄く頭良いですか？ キリーさんくらい？」

「俺くらいって……あのバカと俺を比べるなよ」

「タカさん……バカなんですか？」

「学校の成績は最低だったぞ。けどな……、あいつの思いつきっつーか、決断力っつーか、妙な発想力つてのは、みんな一目おいてたけどな。そうそう、あれあるだろ？ みんな、一度は死んだと思う、学校出てる奴でトラウマになってない奴がいなくて噂もあるあの、緊急事態回避訓練。俺、あいつとクルーの時、何回かやられたんだけど、もう、バカさで勝てない……全然悩まないんだぜ。奴もう気持ちいいくらい。『訓練でした、お疲れさまでした。チャンチャン』の段階では、リーダーはいつもあいつだった。成績は俺の方が全然よかったから、いつだってクルー・リーダーは俺だったのになあ……」

緊急事態回避訓練ってというのは、宇宙船の操船を覚えてくれる専門大学では必須の名物訓練のことだ。生徒には告知無しで実施される事が多く、最終的に『訓練終了』の合図がでるまで、本当の事故に巻き込まれているのか、件の訓練なのか区別がつかないことが多い。

シミュレーターや現場を使ってチーム操船の訓練をしているとき、いきなり事故が発生する。いかなるときもチーム操船の課題は『チームで宙港ポートに帰還せよ』というのが最低合格条件なので、生命の危険を乗り越えるために皆で一致団結して事に当たるのが当然のスジなのだ。が、宇宙船乗りになりたいなんてやつは、それはもうアクの塊みたいな連中ばかりで、誰がヘッドをとるかの時点で普通は分裂したりするものだ。柏木も初回はご多分に漏れずリーダーをとろうとしたが、派手に失敗した記憶がある。

シミュレーターを使った方では、まあ、事故が突発的に起こっても、脳味噌の何処かが『訓練だ』とたかをくくっているが、柏木自身、実際の空間でやった方では軽く五回は死んだという自覚がある。

「いつもポケーっとしてるくせに、緊急事態になると、どっかにスイッチが入るみたいでな、状況把握がやたらと速いの。んでもって、できないってのをあっつーまに纏めて、回避プランを立てるんだけど、それがめっちゃ速いの。しかも3つくらいプランを立てて、その全部のパターンで想定できる利点・欠点を並べて、『リーダー、GO宜しく』とくる。よくもまあ、自分の命がかかっているかもしれない場面ですて呆れてたよ」

それは凄い。柏木は素直に感動した。

「学校の成績は全部、あいつのところにはバツクされてるはずだからな、クルーメンバーだった奴らは皆、凄い階級を背負いこむだろうって言うってたんだけど、こっちも奴の見積もりの方があたりだったな。奴は軍用機じゃなくて民間船での操船訓練が指令された段階で、軍での出世は無いつてあっさり言ってた。全く、へボな奴らばかりだぜ。極東アジア国軍のヘッドってのは。ほんと、見る目がないぜ」

貶しているようで、飛竜の高柳に対する評価は絶対的に高く、ついでに高柳がおかれているポジションに対しての不満も相当なものがあるようだ。柏木は尊敬する飛竜の評価によって、修正した高柳への高評価が定まっていくのを感じていた。タカさんは凄い人で間違いないらしい。ザキさんへのセクハラは別として……。

柏木は明るいアクリル窓の向うで、高柳がザキさんにキスしていた風景を思い出していた。あのシーンを思い出すのはついさっきまではえらく腹立たしいことだったが、飛竜の評価が胸に染み込んでから思い起こすと、勝てないかもしれないという思いに打ちのめされそうになる。女性というのは、本能の部分で凄い男を嗅ぎ分ける

ことができるのかもしれない。

プールの繁華街で酔っぱらっていたとき、尻の形がいいとからかっただけの男の鼻に左ストレートをぶち込んだザキさんを柏木が覚えていてるだけに、あのあとの彼女の反応は宇宙人に対する遠慮からだけとは思えないものがある。

「でも、キリーさん。ああいう人が、まさかとは思いたいんですけど、ザキさんのタイプだとしたら、俺……絶望的ですよお」

「ん？ 何かあったのか？」

「俺見ちゃったんですけど、あの人、G訓練で潰れてたのを介抱してたザキさんに、どさくさに紛れて、マウスツーマウスの……」

画面の向うで頬杖というか顎杖をついていた飛竜が、自分の掌から顎を滑らせた。暫く突っ伏したまま動けないでいる。

「……あ、あの野郎……。つたく、相変わらず手の速い……」

あの飛竜に手が速いと評されるのは、やはりただ者ではない。

「全く、ザキさん、貴方もですか……参ったなあ……」

飛竜は暫く意味不明の言葉をブツブツ呟いてから、気を取り直したように言った。

「大丈夫、大丈夫。あいつのは魔法だから、気にしたら負けだ。ザキさんの好みじゃないことを信じよう」

柏木は心から厭そうな飛竜の表情を見てつい聞いてまう。

「何です？ その魔法ってーのは」

「世の中の女という女が、奴に対してだけガードが甘くなるっていう脅威の魔法だ。この俺が肩を触ってるのに『訴えるわよ』なんて速攻で払いのけるような女が、奴がヒツプタッチしても、『もう、タカさんたら、スケべなんだから』でお終いなんだぞ。不公平だろ？」

飛竜のオカマ言葉に倒れそうになりながら、柏木は思い当たるところが昨晚だけの付き合いで山ほどあるのが思い出された。

高柳はいつもつんけんしているジムの受付の女の子と談笑してた。それから外からの一見さんいちげんにはそっけない蕎麦屋の女将さんが、なにくれと気をつかってくれてたし、なによりあのザキさんが、いっなくなっても笑い転げて、楽しそうで、普段の数倍可愛かったのだ。飛竜といるときのクール・ビューティーのイメージが、良い意味で崩れたのも確かなのだ。

「魔法じゃ尚のこと、勝てないですよ……。！っっ」

シャトル・シップの窓の向うで何かが光った。僅かな、しかし揺らめきの様な違和感が柏木の目尻に捉えて何かを警告した。普通でない光り方だ。

「キリーさん、ちょっと御免」

飛竜との会話を中断させると、柏木は光の正体を見極めるために窓に顔を寄せた。

丁度、宇宙空港都市であるサンガの巨体が、通りすぎていくところだった。いつもの風景だ。

(何が光ったんだろう。)

いぶかしく思う柏木の目の前で、ゆっくりとサンガが後方に流れていく。このこのゆっくりとというのはあくまでも感覚的なものだ。地球の引力圏にありながら、それを振り切って回り続ける速度を双方ともが維持している同士なのだ。宇宙空港サンガは地表から見て静止しているようにみえる。ということは地球の自転スピードに追いつけるほどの高速ということなのだ。

何気ないいつもの風景。背後には地球の青く美しいカーブ。そして、少し白光しているようなサンガ。

そのサンガから、信じられないほどゆっくりとした動きで、島二

号、つまりドーナツ型をしたスタンフォードトラス型のライダー・プールが離れていく。

(……………離れていく?)

目の前の光景を疑いたくなくなった。間違いなく、サンガとライダー・プールは今分裂した。柏木の手が覚えず、震えてくる。掌を何度か握りしめ開く。震えが酷くなる。喉がカラカラになりそうだ。

どうした？ おい、柏木？ 何かあったか？

「……………プールが……………」

おい。ちゃんと喋れ。どうした？

「今、目の前で……………プールが……………サンガから……………千切れました……………」

何だって？ 柏木。おい、ちゃんと繰り返せ。何がどうした？

「サンガと、ライダー・プールが……………、離れていきます……………」

何だとお？

7・行動開始

今日もいつもの無重力。このふわふわが、まんざら悪くもない。

特に筋肉痛と二日目突入の二日酔いには、体にやさしいと思う。特にライダー・プールって所は、回転半径が一般の居住施設より小さい癖に、無理に1テラGを出しているから、ほんのちょっとした高度差（例えば人間サイズの足下と頭のテッペンくらいの距離）で体感重力が僅かだが違うという恐ろしくいびつな作りになっている。俺は久し振りに感じる、慣れて心地よい浮遊感に、しばし浸ろうとして、いきなり覚醒度がマックスまで跳ね上がった。

なんで、ゼロGなんだ？

何度も繰り返すが、ここらライダー・プールなのだ。そして、ここはたしか学生時代からの悪友である霧島飛竜のコンパートメントだ。無重力は自分にとっては馴染んだ世界だが、ここの連中にとつては違う。どうしてこうなったのかも気になるが、外がどういう状況になっっているのかもかなり気になる。酔っぱらって寝っかけていた自分は寝たままこの状態に突入したから問題なかったが、テラG仕様でできている街で、テラG環境で生活している人間たちが行動しているときに、ゼロGにいきなり放り込まれちまったなら、あつちこつちでパニックの十や二十は起こっていても不思議じゃない。遠心力を発生させるための回転系の動力トラブルかもしれないが、急停止ではなく、徐々に減速していったのだと思いたい。

目を開けると、あらゆるものが散乱して漂っていた。G環^{ジーカン}があるのが当然だと思っている連中は、家具をはじめモノを固定するといふ基本的習慣が無い（当たり前か）から、慣性に従って移動を開始

したものが、どのように動いていくかということに、なんにも恐怖を抱いていないのだろう。

さんざん飲んだせいで下腹部がトイレを呼んでいる。そうだ、無重力ではトイレが大問題だ。テラG仕様のトイレを使ったらエライ目に遭う。こいつはキッチンで食品なんかの保存袋を探して用足しするに限る。俺はキッチンを睨んで少し考える。テラG仕様のキッチンは、飛竜のような独身男の寂しい所帯であっても、危険物満載だろう。万が一ガラス製品でもあって、砕けて散っていた日には、下手に呼吸すらできない。破片を吸い込みでもしたら、あれは金属探知装置が引つかからないからやっかいなんだよなあ。

風邪をひいたときに使う普通のマスクが欲しい。でも、そんな上等なものは飛竜の部屋にはなさそうだ。あいつはそもそも風邪をひきそうに無いし。勝手の悪い金魚鉢ヘルメットの方がここの部屋に有りそうだ。

市販の安物ライダースーツも泳いでいる。普段から俺はスペジャケを脱いだら裸でカプセルインして眠る。他のものを着たりしないから、習慣で脱ぎすてたのだろう。あれを捕まえて着ても良いが、掌紋ロツクなんて機能はついてないだろう。もつとも、掌紋を登録した覚えがないので、機能があったとしても役に立たない。

本当にマスクの方がどれだけマシかしれない。金魚鉢があったとしても、密着できなければ気休めにしかならないが、1%でも効果が期待できるなら使った方が良いだろう。

俺は散乱した部屋に浮遊するさまざまなモノを眺めて、自分の靴を探す。極東アジア国軍の官服は、町中を歩くのに適当なシロモノではないが、多分それを着た方が安全が確保できる。自分の安全に不安があつては、動きが鈍くなる。この際、世間さまの冷たい目には覚悟して晒されよう。

そうそう、ライダー・プールに棲息している人間の内、ライダー連中は普通の民間人よりは無重力環境で動ける筈だ。連中はパニックが一文の得にもならないことを叩き込まれている筈だから、他の場所でこんな事故がおきるより遙かにマシだろう。うん、楽観視して良い材料を発見すると気持ちがいいね。

でも、事故だろうか？

ちよつとだけ不安が頭の隅を過る^{よぎ}。いいたくないが、宇宙は人間というか、生き物が生きていくのにそれほど適しているという場所じゃない。そこにあえて住もうつていうのだから、安全対策は何重にもなっている。何重にもなっているということは、どっか一カ所がぶつとんでも大丈夫ということだ。一応、重力が無いだけで呼吸に相応しいだけの酸素濃度は確保されているようだが、完全に重力が死んでいると、空気が対流しない。自分の周りだけ二酸化炭素濃度が濃くて窒息することも可能性としてはあり得るだろう。寝ていた自分が生きているのだから、やはり、急停止したのではなく、ある程度減速しながら停止に至ったのだろう。

あ…………。テロとかそんなんじゃないと、心の底から有り難いんだけどな

俺はつい思ってしまう。事故ならここが、最悪とはいわないまでも、それに近いポイントだ。これが人為的な悪意で引き起こされているなら、もちつと悪い段階が先に待っていて不思議でない。まあ、現状を把握してない今の段階で、そこまで不安がっても仕方ないか…………。

俺は上下左右を確認して目を閉じてから、目指す靴を発見した。ちよつと体を捻ってぐるつと目見当^{めけんとう}で斜めに回転させて、部屋のつ

くりり体の向きを修正する。一番軽そうな（反対側にぶちあたっても、モノを壊さない質量）の椅子を軽く蹴って、壁への移動を試みる。壁に到着、第一段階クリア。俺はちよつとだけため息をつく。とにかく、ここまであらゆる質量のものが浮遊している空間で、不必要に力をかけるべきではない。重さを感じないがモノには質量があつて、慣性の法則はここでも有効だということを忘れちゃいけない。鞆が欲しくてもそこに猪突猛進するのはいただけない。

鞆のロックを解除すると、中身がふわつと散乱した。先ずは鞆の中身を小分けして整理するのに使った袋を探す。あつた、俺のトイレ

下半身の呼び声にちゃんと応えて（用済みの袋はキッチリ閉じないと意味ねえし……）から、普段なら大事なあらゆるものをゴミの扱いで小袋から放り出して、その袋の方を丁寧に剥がして畳んでポケットに詰め込んだ。一応トイレは誰にとつても必需品だから、道で行き合つた誰かにトイレを訪ねられる可能性がある。そんなときの用心の意味でも袋は便利だろう。俺はこんな為に荷造りをしたんだ。はないが、思わぬところで役に立つもんだ。日頃から神経質なのは全く役に立つ。

それからおれは官服を着込んだ。念の為説明を付け加えると、俺に支給されている官服のスペジャケは、戦闘仕様になつてないので、軍服と呼びたくは無い。世間さまから見れば色といい形といい、軍服そのものなののご愛嬌だ。こいつは薄いキャッチャーボートの筐体が、浮遊物なんかに激突されて穴があいたりしても、手抜きをせずにはちゃんと密封して着込んでいれば、即死したりしない程度の生存環境は確保できるという優れモノだ。不便にも折り畳めない金魚鉢（ヘルメット）は携帯してこなかったが、三週間したらここからサンガの基地に

出頭しようと思っていたので、普段着の簡易版ではなく、正装に近い良い奴を持ってきていた。着込んだあとに遠くに浮かんでいる鏡がたまたま目に入ってがっかりする。軍人にしか見えない。最悪だ。

悲惨な事故や災害の現場で、消防士や医者、警察官、及び軍人に見られるのは（事実だけ）少し有り難くない事態になりがちだ。服は組織の象徴であって、個人の能力とは関係ないのだが、「なにかしてくれる」という期待を抱かせがちになる。例えば普段オフィスの窓口で来場者を呼び出す仕事しかしてなかったとしても、目の前で凶器を振り回しているバカが居る状況に警察官の服を着て運悪く居合わせてしまえば、それは自分の本来の職分ではありませんからという言い訳は通じなくなる。

ライダー・プールから重力が消滅するというのは、どう考えても異常事態だ。こんな所に軍服を着てのこの泳いで行ったら、極東アジア国軍とどっかの団体がここでドンパチでもやらかして、こういう事態に陥ったと勘繰られても言い訳できない。瓜田に杵クツを入れず、李下に冠カンムリを正さず。クワバラ、クワバラ。

浮遊物の中に金魚鉢を見つけた。いくら飛竜がライダーでも、コ居者住宅んなところにグローブ装着器があるとは思えないので、とりあえず手首を浮いていたシーツをちよん切って紐状にして（スペジャケにはハサミとナイフは当然、装着してます）苦労して縛って、靴はちゃんと密封して（足下は大事ね）、手近にあつた雑誌で進む方向をガイドしながら、壁を蹴った。壁は推進力発生装置としては加減しやすく助かります。色々な浮遊物を雑誌で打ち払いながら、金魚鉢ヘルメットに到着したが、それまでついでに払ってしまつて舌打ちが出た。二週間、有Gばかりで過ごして、感覚が大分鈍っている。

「やっぱりニュースかなあ……」

なんとか二度目の挑戦で入手した金魚鉢をとりあえず装着して、

目と呼吸器の安全を確保して少しだけ落ち着いた俺は、聞く者がいない独り言をいいながら、総合端末にとりついた。

「うーんと……電気……死んでる？ でも明るいしなあ……」

総合端末が反応しないのに、一瞬それを疑ってマジにヒヤツとしたが、ここでそこまで凶悪な事態が起こっていたら、暗闇に閉じ込められている勘定になる。光度が確保されている内は、そこまで悲惨ではない。

軍の回線なら生きてるかもしれないけど、此処には露骨な命令違反でやってきている。まあ、機密を漏らしたり、敵対行動をしている訳ではないから、最悪でも失職なだけで、裁判ものの違反では無いだらう。今は現状の即刻の把握が必要だ。

そこまで考えてから二重に舌打ちが出た。ID端末はジョーに預けてきた。自分が持っているのは、軍の回線に入っているIDではなくて、軍の持ち物である証明を第三者にするタイプの情報しか入ってない（それも新人の^{ニューマン}）。

「これで、ここからで加悦^{かえ}さん呼べる……かな？」

口に出して言うのは整理して考えるためだ。先ず、生きている総合端末を見つげる所からはじめなきゃならない。どつかの総合端末が生きていたら、相棒の加悦^{かえ}とジョーに連絡をとるより、ニュースヘッドラインを読む方が良いかもしれない。ただ、ID端末がないと身動きがとれないから、少なくともジョーに来てもらう必要がある。

そこまで考えてから、俺は総合端末でニュースが得られないもう一つのパターンを思いついた。ネットの大元がどつかで物理的に断絶している可能性だ。その場合、この総合端末は外と繋がる機能は失っているが、コンピュータとしての役割は電力が供給される限り期待できる。ニュースヘッドラインを見ようとしていた操作を止め

て、ジョーのID端末を押しつけてから、ローカルエリアだけで使うモードを指定して、端末をコンピュータとして再起動を指令した。これで立ち上がったら、上手くすればプールのマザーと繋がることができる。プールのマザ・コン（ホスト・コンピュータのこと）なら、外との無線通話もできるかもしれない。指をイライラと空で動かしながら、再起がかかるまでの僅かな時間をじりじりとして俺は待った。

妙な音楽が鳴って（飛竜の趣味が知れるということだ）、普段滅多に目にしない古くさい端末としての画面が立ち上がる。

「ラッキー」

珍しく期待した通りの効果が得られると、人間は嬉しくなるものだ。俺はジョーでは無いが、この端末には俺自身の網膜パターンや掌紋のデータをマムに入れてもらっている。マムにへまは無い。端末のデータと俺自身に齟齬がなければ、エンドユーザーとして弾かれることはないだろう。俺はプログラムの専門家じゃないからキーボード操作は苦手だ。喋ってくれないコンピュータから情報を引っ張りだすのは不可能に近い。こんなとき、さいとめゆび 斉藤歩がいてくれたら便利なのにと、溜息の一つもつきたくなる。斉藤というのは極東アジア国軍でも特殊な位置にいる統合幕僚会議情報本部の有名人、岸二佐の子飼いの扱いで同期の出世頭と呼ばれている男だ。

彼も俺と同じように民間の操船学校に飛ばされて軍歴をスタートしている。学生時代は軍からの出向組ということで、操船学校では飛竜と共に、親しく付き合っていたポン友の一人だ。斉藤は操船科ではなく、情報処理スペシャリストだったから、普段の学舎は違っていたが、飛竜がチームリーダーで操船ミッションをしているときに、何度か一緒にクルーになったことがある。

彼の指が滑るようにキーボードの上を躍ると、奇妙な暗号みたいな奴が黒い不細工な画面を埋めつくす。何をやっているのかさっぱり見当もつかなかったが、そこから弾き出されるデータの正確さに

は感動的なものがあつた。彼が出してくるデータを使うのは、良い材料を使えば余程のヘマをしないと当然の結果として旨い料理が出来上がるのと同じに、良い結果を産むプランを料理できた。

その斉藤は、ルナ暴動の元凶の洗い出しで活躍した数年の国連部隊での現場を経て、高等防衛専門学校にまで行き、今では情報処理のプロとして皆から一目をおかれている。

ロスコン拾いのスカダーの自分とはえらい違いだ。まあ、斉藤歩が評価されないような組織なんか、只のクソだから当たり前前だけだな。

「ちゃんと起きろよ。俺は歩^{あゆむ}じゃあ無いんだからな」

話が見えない筈の機械には絶対通じないはずだから、凄みが効いたということでも無いだろうが、ちゃんとパンピー用（実はこのフアンキーな感触がある表現がかなり気に入っている）のトークモードでコンピュータが起動したらしく、総合端末から妙に機械的な声がした。

「おはようございます。何か御用でしょうか」

御用もなにも、どうなっているのか教えてくれ、といたいところを我慢して、ジョーの権限を確認する。

「このIDでホストアクセスできますか？」

「残念ですが、無理です」

機械にここまで断言されると微妙に腹が立つ。まあ、イライラしても仕方ない。

「データの引き出しは可能ですか？」

「求められる種類によります。要求するデータは何ですか？」

「1テラG環境が基本のプールに何故重力がないのか。事故か、事件か。現在のライダー・プールの状況はどうなっているか。復旧には取り掛かっているか。現状把握したい。保安機密に抵触しない一般レベルのニュースヘッドラインでも良いから、現状把握できる情報が欲しい」

「了解しました。まず何故重力がないのか。回転が停止しているからです」

「そんなの分かるよ……。俺は倒れそうになった。機械つてのは、突然、最高級の天然ボケをかましてくるから油断ならない。」

「次の事故か事件かについては、まだ把握されていないので判別できていないというところが正確な答えです。どちらの可能性も有りますが、当然……」

「何重にも課せられた安全対策が空振りしているので、事件の可能性が濃厚……でしょ？」

「こういいうい方をしても人間と違ってヘソを曲げないのが、ホスト・コンピュータの良いところだ。」

「その通りです。次、現在のライダー・プールの状況ですが、全容を数値データとして提示して宜しいでしょうか？ 把握できますか？」

「全く、齒に絹を着せない野郎だ。」

「無理だから個別に気になっている点を。電気系統は健全？ 部分的に破壊？」

「サンガへの中央ジョイント部分で爆発が観測されていますので、メインは働いていません。5つの補助系統から、太陽光発電のエネルギーがバイパスされてきています」

「死者、怪我人の状況は？」

「こちらも通信回線が分断されていますので、全体像は把握できていません。私の可知域では現在の時点では死者はゼロです。但し、浮遊物との衝突で、早急な救助、及び治療が必要と思われるケースは数えきれません。死者の方は、爆発観測点の有人記録はありませんので、少なくとも爆発による死者は存在しないと思われれます」

「オーケー。次、酸素供給状況。空気対流の保持状況」

「画面が居住区のドーナツが、赤い線で輪切り　というより切り売りのバームクーヘンの形になるように　分断されている姿

になった。その区画によって青や緑と塗り潰されている色が違っている。

「これは現時点での観測分布を図示します。赤のラインが異常時に空気漏れによる人的被害を最低限に止めるために降りている緊急遮断壁です。この中で酸素濃度が安定している区域は青、酸素濃度が生存に充分であるものの対流が確保できずに偏っているものが緑、生命維持に危険な低レベルの場所が黄色、生存が不可能な区域が赤で表示されています。それぞれの区画の中での細かいデータも取り出せますが、このID許可レベルでは検索結果を提示できません」

全体はみせてもらえないが、自分がいる区画の詳しいデータはもたえるのが普通だと思う。この危機管理を設計した奴はタコに違いない。

「大丈夫、これだけ見られれば今のところ充分。照会何度もすることになると思うから、俺の携帯端末に送っておいて。あと、ダクトとか排水管とかもこのシャッターで切つてあるの？ あと、この一つだけ赤い区画はどこ？」

全体として黄色は無いのに、赤は一區画ある。もう少し壊滅的な状況を想定していたので、少しは安心できるのだが、この赤区画にいた人間のことがどうしても気になる。

「ダクトは遮断です。排水系統は通じてます。赤い区域は倉庫です」「この物資保管倉庫って、ここじゃなかったっけ？」

俺は回転軸から、居住区であるドーナツまでスポーク状にのびている構造部の中間にある、二周りほど外側のドーナツから小さい輪っかを指さした。

「そこは未使用の物資用の区画です。長期保管用と一時管理用の区画に分かれています。主な、一時管理物資は、生鮮食品ですので、ここだけ空調管理もされています。外側の輪の方の、ご指摘の赤い箇所の方は、有機廃棄物などの一時保管用で、ここに空気が有りますとバクテリアなどが発生し、腐敗しますので、もともと完全脱気

されています」

「了解。構造物に致命的なダメージは今のところないという了解でいいね」

有機廃棄物というの人間の糞尿とか食べ残しの残飯、ペットの遺骸などのことだろう。俺のスカベンジャーフィールドではそんなものを棄てるなんて、信じられない無駄だが、パンピー（しつこいよ）うだが、お気に入り）にキレイにしたから誰かのシヨンベン飲めと言っても、『わかりました』って答える奴は少ないに違いない。

赤いところが事故で空気漏れした場所でなければ、俺には関係ない。そこからドミノ倒しのクラッシュが広がっていく可能性は潰せた。俺は簡単に片づけた。

どっちにしる、何の権限も責任もない通りすがりの俺が、こんなところで何に対して頑張るのかも定かでないが、祭りに弱いというか、なんていうか。非常事態つてのになると、どうにも興奮しちゃう質^{タチ}なのか、なんとかできるかもしれないという妄想の虜になっちゃう困った癖がある。怪我をしない内に、危険を感知したら、突撃しないで逃げるって方になんとかシフトした方が良さと思うが、最近人間がいない平和なところですつと楽しく情眠を貪っていたからだろうか……。不謹慎だが露骨に興奮している。五年ぶりくらいで、久し振りに目がはつきり覚めた気がする。

「排水系統が分断してないってことは、上水道も？」

「水漏れは機械部分に与えるダメージが大きいです、こちらも普段から完全に構造部の外を通る体裁になっています。取排水口はもともと区画毎に外に通じていますので、遮断の必要はありません」

「了解。とても有意義な情報だ」

あとでプールの住民^{ユザイ}に、水源汚染の元凶として文句を言われるかもしれないが、遮断された区画を越えて移動する必要が出てきたとき、排水系統じゃなくて上水系統を使いたいというのは人情だろう。普段、テメエが生産した糞尿の再生空気だの水だのを使っているの

と、フレッシュな他人様の排泄物にまみれるのでは次元が違う。

「残りの質問について続けます。復旧に取り掛かっているか？ これは、現時点で私にLANモードでアクセスしているのが、ジョー、貴方一人です。WWモードでは通信が途切れると自動でネット回線に繋がろうとリトライを続けますので、私にアクセスする方法がわからないのだと思います。皆さん、モニターや操作盤を叩いてらっしゃいます」

テクノロジーが進化しても、機械が突然動かなくなると、なぜ人間は叩きたくなるのだろう。俺は、少々遠い目になった。

「通信が携帯端末による通話に限定されていますから、内部において組織的な復旧活動を開始しているチームは存在しないと考えられます。先程も申し上げましたが、外部の情報は皆無ですので私にも判断ができません。教えてほしいくらいです。ニュースヘッドラインについても同じです。無線通信に関しても、メインのアンテナが回転軸にありますので、爆発時に致命的なダメージを受けたものだと思います」

歯に絹を着せないというか、正直というか。全く、機械というのはこちらの心情を配慮して、情報を出し惜しみしてくれないのは困ることだ。聞いたのが俺だからまあ主義として細かいことを気にしないでおいてやるが、内部で状況把握を始めている奴が皆無で、外の状況も読めないなんてのは、考える気力をそがれること甚だしい。このホストの無神経ぶりと、加悦^{かえ}さんやジョーを比べるのは愚かすぎる。やはり、『^{ニューマン}新人に人権を』、という先だての戦争は無理も無かったのだと思う。

加悦さんなら、ライダー・プールにトラブルというニュースをゲツトしてくれば、俺の所在地を軍にバラしてくれるかもしれない。

ジョーにはチーム・リーダーである俺の命令と違うことを実行する
そんな度胸は無いけど、加悦さんは細かい状況の変化に対応できる。
別に加悦さんが上等でジョーが役立たずという訳ではない。単なる
年季の差だ。あの二人には知識レベルの差は殆ど無いはずなのだ
が、とれる行動は全く違う。

俺は加悦さんとジョーと母船のメインコンピュータのママ・スカ
ベンジャーに三週間、軍に居場所を隠匿するよう依頼して逃げてき
た。まだ軍からジョーのID端末に叱責が飛んでこないところをみ
ると、上手く誤魔化してくれているということだ。

けれど、このライダー・プールがテロか（可能性は0ではない）
事故で、中にいる俺の生存が疑わしければ、少なくとも加悦さんは
俺の死体を発見するまでは、ちゃんと探してくれる筈だ。女性型を
とるとホルモンに晒されなくても思考回路が女性化するのか、加悦
さんの情は濃い。ただ問題は、スカベンジャーフィールドで毎日の
仕事を俺抜きでしている加悦さんが、ニュースなんかを見るかどう
かってことだ。ジョーならオフタイムにテレビを見るに違いないが、
彼がみるのはニュースとは程遠い。

「中だけでの通話は可能？」

俺は加悦さんを思い出してから、まだ帰っていない飛竜と、あれ
だけ昨日飲んでおいて、今日は大気圏突入だフレンジとほざいていたパンピ
ー柏木を思い出した。二人は当然、ここにはいない筈だけれど、も
う一人知り合いがいることを忘れていた。もちろん、キュートでマ
ツチヨなザキさんのことだ。彼女の携帯端末番号はたしか聞いてい
た。

「もちろんです。中での通話数は、平日のおよそ45倍です。回線
ビジーで繋がらない通話がその内の八割です」

ここで暮らしている人間で、ここに知り合いが多い連中は、全体
を救うより身内や顔見知りの安全確認にまだ忙しい……って訳か。
人間だもん、しょうがない。ここに俺の未来の嫁さんが居たら、俺

だってそっちの安否確認を優先する。ここの管理の連中が能無しであつても人でなしでは無かつたことを、人類の平和の為に悦ぼう。

「一応繋いでみてくれる？」

俺は端末を操作して『ザキさん』を選んで、マザ・コンに聞いた。ザキさんが万が一、パンピー柏木の彼女だったり、飛竜の毒牙にかつたかわいそうな女の子だったりして、家族がサングに住んでいたりしたら、とりあえず内部に通話する相手がない場合だつてある。

通常、呼び出し音。ワンコール。

「タカさんっ。無事だつた？」

噛みつくようなザキさんの声。

「私、キリーさんに頼まれてたから、心配してたのに、携帯いくら呼んでも取ってくれなくて。凄い心配したんだからっ」

半分泣きそうな声になっている。俺は嬉しくなった。女の子に心配してもらつのは嫌いじゃない。ただ、大丈夫かという確認は心外だ。テラGならともかく、ここでは異常事態のゼロGは、間違いなく俺のフィールドだ。

「ザキさん。今日はプールが宇宙人仕様になつてること、忘れてもらつちゃ困るな。そつちこそ、怪我してない？ バカチカラで、デカイもんを突き飛ばすなよ。浮いてるからつて質量が無くなつた訳じゃないから。質量がデカイもんは動かしにくいけど、一度動いちまつたら止めにくいからな。慣性の法則はオープンスペースなら問題ないけど、壁があるとけつこうやつかいだ。重いものはむやみやたらと触るなよ」

「……うん。それは学習した」

しょんぼりした声。ベットでも投げつけて、壁でも壊したのかもしない。

「一人？ それとも彼とか家族とかプールの中に頼れる人いる？」
「家族はサンガの一般居住区よ。ついでに仕事仲間とか友だちも呼んでみたけど、回線ビジーばかり……。何があつたかなんて、タカさんに聞いても無駄よね……」

ちよつとむかつく。この非常事態の原因把握にですわ、プール内で行動開始しているのは俺だけなんですけどお。

そう思いつつ、俺は中年の意地で重々しい声を出した。

「重力がゼロになっているのは、プールの回転が止まっているからだ」

「そんなの、小学生にだって分かるわよ。ボケっ」

……。冷たい声。ザキさん、俺は同じセリフで笑ったんですけど……。

俺は理不尽なザキさんの怒声を、怖がっている女の子の不安定な精神状態がもたらした一時的な発作と解釈し、ボケ、カス発言にはこだわらないことにした。（カスまでは言われてないか）

「遮断壁で細かく分断されてるから、ちよつと特殊な方法とらないと他の区画と行き来はできないけど、プールの壁そのものが破壊されている箇所は今の所無し。電気系統もメインルートは壊れちゃってるけどバイパスが5本生きているから、空気対流と酸素供給は暫くは大丈夫な筈。総合端末を始めたネットワーク関連のインフラがダウンしているのは、RA (Rotation axis)、つまりプールの回転軸で爆発があつた為。爆発によってネットワークケーブルの大元が断線してるのと、無線のメインアンテナが破壊されたために、外との通話ができないけれど、プール内の通信網は落ちてはいない。繋がりにくいのは単に混んでるからね。あと、プール自体に地方放送局があれば良かったんだけど、テレビ・ラジオは基地がないから、オフィシャルな情報は流れる手段が無い。えつと、

状況はこんなもん。というわけで、プール内なら無線も有線もビジーだけど問題なく使えるよ。ってなことを、ビジーな通話じゃなく比較的通常レベルで使えるはずのメールで『正確な情報』として流してくれる？ 情報がないのが一番不安を煽るから」

電話の向うでザキさんが黙りこんでしまった。あれ？、俺何か悪いこと言った？

「それ……どうやって証明できる？ 正確な情報なら喜んでそうするけど、流言蜚語を流すモトにはなりたくない」

ザキさん、顔だけじゃなくて、中身もキョートじゃん。俺は少なからず見直した。

「総合端末を、ローカルエリアモードで再起動できる？」

「……タカさん。日本語で喋って」

「だから、総合端末をネット端末じゃなくて、コンピュータとして機能限定して再起できる？ そしたら、自分のID端末レベルに相応しいだけの検索が、プールのホストに対してかけられるから。このホストに対する、俺のセキュリティレベルで検索可能なデータが今言ったやつ。それから、パンツはビジーだから、LAN起動できたら、ホストを噛ませる通信方式にシフトしていつて。回線の負荷を減少できるはずだ」

ザキさんが口を挟んできた。

「パンツって何？」

「一般通信」

「……そんな言い方しないわよ」

一般はなんでもパンにするんじゃないのか。おし。少し賢くなつた。俺は続けた。

「情報の正確さを確認したければ個人でしてほしい。ここのママは少々の事じゃパンクしないと思うから。ああそう、セキュリティレ

ベル高い人がいて、もっと詳しい情報引つ張りだせたら、全体にフイード・バックして欲しいんだけど。ママにオープンチャットスペース作ってもらうから、発言宜しくって添えてくれればいい。以上をお友だちにメール送信頼める？」

「だから、日本語で喋って言って言ってるでしょ。同じ文メールで寄越して。皆に転送するから」

ザキさんの頭の中身は、どうやらコンピュータの用語になるとフリーズするウイルスで汚染されているらしい。俺は苦笑した。とにかく、パニックを起こさせないには、正確な情報にアクセスできるという安心感が一番だ。

俺はこのマザ・コンに今の内容を文章化してザキさんの端末に送るように命令してから、少し落ち着くために水分をとることにした。

危険な台所に突撃して、冷蔵庫から水のボトルを取ってくると、端末前にもどって、フイードバックを待つことにした。俺はマツチヨ・マンじゃない。走り回っても、できることはたかが知れている。さてと、一番最初の行動はとった。次は……、本当の現状把握だな。

一口、水を飲み……たかったが、フタがあかねーっ。という訳で自分の非力が情け無かった俺は、ちよっただけ涙が出そうになった。

8・リスト落ち

この部屋の総合端末は、もともとが大きいモニター画面が、入り口を入れて正面の奥に三つも並んでいる所為で、その存在感を圧倒的に示していた。ママが焼いたクッキーしかみたことがない子どもが、パティシエが腕を競うコンテストで作られた菓子を目の前に並べられたら、それを菓子と認識できるかどうか怪しいように、このちよつとした博覧会のパビリオンに展示してあるようなモニター画面を見て、総合端末のモニターだと咄嗟に理解できる人間は少ないに違いない。

総合端末というのは、人が集団で暮らす都市ごとのホスト・コンピュータに直結している端末の事である。各個人の情報を登録したパーソナルデータ携帯端末を持っていないと、家から出て公園に遊びに行くことすら困難だ。先ず、各世帯と共用廊下を通るとき、その携帯端末のデータと持ち主の身体特性が一致していないと、扉が開かない。

赤ちゃんや幼児の場合は、行動を共にする保護者の携帯端末に個人情報を入れるか、一番基本的な身体特性のみを刻み込んだクリスタルのような見掛けの記録装置を、首に掛けたりピアスのような位置で、耳たぶに留めたりしているのが普通だ。経験蓄積型のAIを搭載したヒューマノイドに、マーク表示義務が無くなってから、データ・クリスタルを額に貼るのも流行っているようだ。

極東アジア国の場合、学齢期に一齐に、学童用の携帯端末が支給される。この学童携帯のID許可レベルでは、青少年の健全な育成に不適切とされる映像やコンテンツに入っていくことはできない。普通は小学校で、この携帯端末の基本的な使いこなしを覚えるものだ。個人の好みによってチューンナップしていく楽しさに目覚めると、この不細工な学童携帯を、大人が持つような多機能なもの（色々なメーカーが新製品をガンガン出して、メディアで宣伝しまくっ

ている)に変えていきたくなるものだが、横並びが好きな国柄なので、普通の公立小学校では校内で普通の携帯を使うことを禁止している場合が多いようだ。

公共の施設の場合、犯罪歴の無い未成年なら、普通にドアを開けたり、門を通ったりするのに細かく個人情報提示を求められることは無い。幼児のように基本情報さえ総合に読みとってもらえば遊ぶのには充分なので、フライングして市販の端末をゲットした子どもは、逆に学童携帯を持たずにデータ・クリスタルだけ貼り付けて登校したりもするらしい。

自分が小学生の頃は、早く大人のような携帯端末を持ちたかったものだが(認証ボードにケイタイをかざして網膜パターンなどを読み込ませているのが格好よく見えたのだ)、今どきの子どもは、赤ちゃんのようにデータ・クリスタルをこれ見よがしに貼り付ける方がステイタスというのだから、時代は変われば変わるものだ。

携帯端末を一々操作するのは、慣れていても面倒なことだから、親に市販の端末を買ってもらってもいないのにケイタイ不携帯の連中も絶対にいるに違いない。

話が逸れた。この部屋の壁とほぼ同じ大きさのモニターを一般の人間が総合端末と認識できないだろうといったのは、その前に操作盤が無いからだ。操作盤がくつついてなければ、大きさといい、優れた解像度による美しい画面といい、高価なAV専用の映像装置にしか見えないだろう。その壁のモニターに向かうように、行儀よく机が並んでいる。それこそが、操作盤群なのだ。つまり、ここは部屋総合端末があるのではなく、この部屋自体が総合端末なのだ。それぞれの机に人が座れるようになっていて、収納式のモニターをせり出させれば、それぞれのブースが独立した総合端末として使えるが、そもそもが有事の時には、司令室として機能させるためにある部屋なのだ。

この部屋のチーフ・ディレクターである齊藤歩は、ここが稼働するかどうかという状態になるか知っている。情報解析のエキスパートが知恵を絞りあつて、ものすごい情報の洪水に立ち向かっていくのだ。波間に躍る小さい魚の鱗の煌きが、いつか目に光つて入ると信じて今は齊藤の部下というより後輩である青年が、モニターに主婦向けのトークショーを映しているの、しゃべり声が響いている。が、偉そうに聞こえる言葉を選んではいても、オリジナルな意見など一つもない。どこかで誰かが言ったような意見をまくしたてるに過ぎない声は、バックミュージックとしては最低の部類に入る。しかし、蝉の鳴き声ほどの騒がしさを、青年の思考は全く気にしていないようだ。ああいう音は気になり出すと集中力を削ぐのだが……。趣味が違うで片づけて良い問題か少しだけ悩む。

五月蠅くも閑散とした何かが漂っているこの部屋がこんな風に静まり返つてから、もう三年ほどは経っているだろうか。今は、メンテナンスと新機材導入の為、つまり、使つてやるために使つているだけだから、多分、部屋自体が生きていないのだろう。最新の技術も常に取り入れていくため、端末のブースに独立してあるコンピュータは、部屋は同じでも、あの頃より多くを一度に考えられるコンピュータが占めている。ということ、次にこの部屋が息を吹き返すとき、さらに多くの情報が溢れるのは間違いない、ということだ。この世代交代は、めまぐるしい市場のそれよりも更に速い。

前の時は、洪水をなんとか凌ぎきつて、トップの岸二佐を除いて皆が階級を押し上げた。岸を出世させて幕僚本部に入りたいという向きもあるようだが、人並み外れた情報センスと行動力を併せ持つ岸だ。しかし、その才能ゆえに独立独行の人となりがちで、便利に使われる一方で煙たがられてもいるのも事実だろう。相変わらず岸だけは、不動の万年二佐として、情報部を仕切っている。

情報管制室（ここを管制と呼ぶ岸のセンスが、上に嫌われる原因の一つだろう）の、古い三台分が、またしても新しいコンピュータに取って代わって一週間。古いといっても市場に出回っている機種の新世代は先を走っているコンピュータだ。情報のエキスパートをして怯ませるほどの、印刷したら恐ろしい分厚さになるだろう電子マニュアルと、一週間格闘している青年は堂本一馬どうもと かずま二尉。彼は天下の中央学府、ジ・アースの総合大学を卒業おしてから、防衛大学高等専門学校に進んだエリート中のエリートだ。

三年ほど前にここが情報管制室としてフル稼働していたのは、今は新人ニューマンと呼ばれているスーパーリアルタイプの擬似人間が、その権利を主張して人類に牙を剥いたことで始まった、戦争というか内乱というか、人類が初めて経験した『技術の結晶』との戦いにおいてだった。

人工知能と情報戦を行うというのは、どう考えてもあちらに利があるかと普通なら考えるだろう。かなりの無謀だと。しかし、連中には基本的に人間を傷つけることに対しての根強いタブーがあり（それを押して戦うことで、精神が破壊されて行ったのは彼らの方だった）、こちらは良くできたとはいえ自分たちの製作物を壊すことに人殺しの半分ほどの忌諱感すら抱いていなかった。ハンディは丁度埋まってしまったのだろう。

ドロ沼のような救いの見えてこない戦い。彼らが自分の権利だけの為に立ち上がったのなら、彼処まで長期化することなくものごとは収束していただろう。

新人たちニューマンが立ち上がったそもそものきっかけは、自分たちが虐げられている事にたいしてより、自分たち以上に蔑ろにされている、今の社会が救ってこなかった弱者の為であった。人間が、恵まれぬ弱者に自らの手をさしのべることを忌避した結果、便利な道具として使われた心のようなものがある新人たちニューマンが、道具が、虐げられた人間の為に怒り、その不公平を是正するべきだと立ち上がった。その過程で自分たちの魂にも気付いてしまった。その事が、彼らに夕

ブーを押しての戦いを続行させ、心と学識がある多くの人たちが、その行為を尊いと判じ、彼らに協力しはじめたことで戦局はドロ沼化した。

人対人造物の段階で終わらせることができていたら……。

ここを撤収するときの岸二佐の砂をかむような呟きが、斉藤の耳から離れない。早期に戦争を集結させることができなかつた事で、あの戦いは岸には敗北として記憶されているのだろう。

この暢気にトークショーをかけっぱなしにして、端末を弄っている同僚というか後輩の堂本にしても、学生時代に可愛がっていた後輩たちや、尊敬していただろう先生たちが、何人も新人にシンパシーを抱いて、魂のための戦いの側に立ち、その中で倒れて行った。あの頃、岸の手駒として一日を二十六時間体制くらいで働きながら、親しかった者の死に遭うたび、僅かな隙間しかない休憩時間に、ドリンクコーナーの片隅で嗚咽を噛み殺していた堂本を知らなければ、自分はその戦争をどう受け止めていただろう。斉藤はたまに考える。

弱く虐げられた人間たちにも尊厳があると信じる心豊かな人間が倒れ、不平等を不平等のままに放置することを選んでいる国のために、働くことの意味を自分も何処かで問うていた。情報戦を戦い抜いた統合幕僚会議情報本部付きの特殊情報班、通称「チーム岸」のメンバーとして、岸の階級章がそのままだったことを、一緒になつて憤慨したのだろうか。

「ライダー・プールがサンガから千切れたって言ってますよ。斉藤さん。なんか、ジョイント部分が壊れただけみたいで、今のところサンガにもプールにも被害はないみたいですけど、こんな事故で

起こるんでしょうかねえ？」

堂本の緊張感がないおしゃべりに、たけふみ齊藤歩は手を止めた。堂本の視線の先を見やると、トークショーはいつの間にか、特番のような様相を呈していた。

座っていたブースの隣の端末モニターを起こして、ニュースヘッドラインを呼び出す。

サンガで事故？ 連結部分で爆発観測。専門家、連結部の構造的欠陥を指摘。

ライダー・プール（1テラGの地球への玄関口）、サンガから離脱。

続報。プールは地球へ落下か？

「事故……みたいだね……」

サンガとライダー・プールは、違う設計の宇宙植民地スペースコロニーを無理やりつなげている造りだから、まあ、連結部が壊れることもあるかもしれない。連結部が壊れただけなら、なんとか修理もできるだろう。サンガに住んでいる人間には、ちよつと恐怖感をそそる、いいトークショーネタなのかもしれない。はつきり言って、どれほど規模が大きくても、事故というものの始末しじまつが軍の、それも情報の岸の直轄に回ってくることはないので、齊藤は基本的には興味本意に成り行きを見守っていて問題ない。

しかしサンガのライダー・プールとなると話が違う。岸に似てきたと堂本にからかわれる程にはポーカーフェイスを身につけただろう近ごろの齊藤でも、友人がごろごろ棲息しているライダー・プールでの事故というのを聞けば、穏やかではいられない。

斉藤の軍歴は、ネオシヤンガンの宇宙船操船専門学校へ、民間レベルでの機材を用いての艦隊管制技術を学ぶために出向させられた所からスタートしている。そこでの数年間の学寮暮らしで出きた友人の多くは、当然のように民間の宇宙船乗りになった。だから、少なからず知り合いがいる筈だ。

操船科のエースであり、いわゆる色男であり、実家が宇宙貨物輸送業という巨額な富がなければ始められないような家業の御曹司という、オ・色・財の三拍子が打ち揃った霧島飛竜という男がいた。最初に彼を知ったころはクソまじめで青臭くて、全くすれていないそのピュアに憧れた。

その青臭いボクちゃん、修羅場に置かれたとき、鮮やかに男になった。その事件を共に乗り切ったあと、彼とは卒業までずつとつるんでいたような気がする。専攻科が違うにもかかわらず、事件と一緒に乗り切ったもう一人、MT、ミツシヨン・スペシャリストの高柳は、マジシャンと呼ばれるようになった。その三人でよくつるんで遊び回った。

高柳は斉藤と同じような軍からの出向組だったが、最初はそれほど仲良くなるとは思って居なかった。成績は優秀でもなく劣悪でもなく（とにかく目立たない）、顔は甘めの童顔で、体つきは大きいものの、気の毒なぐらいペーパーテストが苦手、旧型の番付きコロニーの出身という、冴え無いを絵に描いたような男。その癖、やたらと女の子に受けが良いという妙な特技を持っていた。女好きの看板をさげて、どこか一本抜けていて、のほほんとした昼行灯ひるあんどん、それが普段の彼だった。それでいて何か極限を知っているような、全てを突き放したところが垣間見え、その色合いの濃淡に惹き付けられた。

しかし、危機管理意識を叩き込むために（普通の授業より手間暇かかっていた筈だ）いきなり降りかかってくる緊急事態回避訓練の時だけ、やつには何故か入る『スイッチ』があった。最初の時はま

ぐれだと思った。二回目はまさかと思った。三回目以降は、皆が納得するしかなかった。緊急事態にスイッチ・オンした高柳は、暴走しているように見えても方位磁石にして先ず間違いないと。それについて渾名がマジシャンだ。

あの平時は頼れる飛竜でさえ、迷うような微妙な局面で、迷わないのは異常だと思う。けれど、悩んでいる時間に制限があるのが緊急事態だ。物凄い速さで情報を捌きながら、高柳が選んでとった行動で、最低条件である『全員生存で港に帰る』が充たされなかったことは無い。

悠長にベストを探せない場合は、とりうる選択肢の中でベターを選んでいくしかねえだろ？

高柳の飄々とした顔でそういわれると、煙にまかれたような気分がしたものだ。そういえば、教授陣が記録に残っている自分たちの行動を評価する恐ろしい時間があるのだが、ここで酷評を喰らったことは一度も無かった。判断に手間取って、回避策を実行する時間をロスした班は、めちゃくちゃな言われ様をしていた。

情報が出揃った状態で、ここは『こうするべきだった』と言うのは簡単だが、自分がトラブルに巻き込まれている状態の時は、普通の人間は深く悩んでしまうものだ。悩んでベターと思われる選択肢を取った時にはもう状況は変化していて『機を逸している』なんてのは、ありがちなことだ。刹那のベターを積み重ねて、結果としてベストを導き出すのは凄い能力だと斉藤は実感している。

斉藤が新米の情報官として配属されたのは、情報部の花形部署、通称チーム岸の足下で、そこからいきなり国連部隊へ出向させられた。いつも火種のルナ自治区・国境線公正管理チームに配属されたのだ。大国同士の微妙な綱引きの中で、どの国の利害にも配慮しな

がらも、どの国寄りにも偏ってはいけないという縛りがついた動きにくい立場だった。

そこでの様々な問題に対処するには、暢気にベストを探しているくらいなら、今採れる選択肢の中からベターを選んでいく『マジシヤン高柳方式』を使っていくしかなかった。それが結果として、多く存在する情報官というドングリの中から岸が自分に目をつけた一つの理由だったろうと斉藤は思っている。

そんな高柳^{あいつ}は、今はテラ・マスドライバー『サヤコ』が打ち上げる貨物の最終フィールドでロスト・コンテナを拾い続けるという地味な仕事をさせられている。

情報官は職務上知り得た情報に関して徹底した守秘義務が課せられている。だから、本人に教えてやることはできないが、高柳は、極東アジア国軍の特殊能力者リスト『スキルズ』の候補生リストに載っているのだ。スキルズのメンバーというのは、例えば身近には情報の岸二佐がいる。幕僚本部がたかが二佐の階級でしかない岸に、様々な局面で応援を頼んでどこからも文句がでないのは、彼が情報収集・分析専門家^{スペシャリスト}リストの不動のトップランカーだからだ。

膨大なパーソナル・データベースの中から、特殊な分野における専門家^{スペシャリスト}の候補者をリストアップしていくのも、人事管理部門の情報官の大切な仕事の一つではある。それこそ勘所が必要で、情報官のセンスが出てきてしまう場所だ。

斉藤は人事管理部門では働いたことは無いが、連中が半年に一度は更新する『スキルズ候補生リスト』には、暇があれば目を通すようにしている。そこで目にする人間の名前を覚えておくと、何かの時に本当に役に立つからだ。高柳の名前を見つけたときは、はつきり言っただけに目をつけた名も知らぬ情報官に喝采をおくりたいくらいだった。

しかも、高柳がリストアップされているのは、事故発生時におけ

る対策本部を統轄するDFF (Disaster Fire Fighter)、つまり災害消防士というのだから、見る人間は見ているという格好の例だ。

これを発見したとき、斉藤は三日間ほどは、思い出しては笑っていたような気がする。それにしても、奴に立った白羽の矢についている、事故が絶えない開拓最前線フロンティアでの火消し役というタグは残酷だった。無重力下（正確には微小重力下）で巨大質量をどう扱ったらいいのかの訓練と、AIをクルーにする単独任務への適性診断と、長期間に亘る劣悪環境（風呂に入れないとか、トイレが不自由とか、自分の排泄物までリサイクルされる環境への精神的な適応力というか）への耐性診断を兼ねて、ロスト・コンテナ拾いの現場に、無帰還で五年という、凶悪なプログラムが課せられていた。それを見たときには、正直、高柳に心から同情した。気の毒に。高柳あいつにとつて女の子の居ない環境に、若い身空で五年も隔離されるとするのは、ほとんど拷問に等しいだろう。斉藤はスキルズ候補生リストになんか生涯、名を連ねたくないもんだと心底思った。

とにかく賑やかなお祭りが好きで、絵に描いたような女好きの高柳には、スカダーなんて商売は一年もやってられないだろうという斉藤の予測を覆くつがえして、『人殺しの現場じゃなくてラッキーだったよ』などと、ニコニコしているのだから、高柳という男は面白いのだ。斉藤は高柳に軍に志願した理由を聞いたことがある。番付きコロニー（宇宙移民初期に作られた旧式コロニーで老朽化とスラム化が激しく進んでいる）出身の高柳はこんなふうに言った。

番付きコロニーは、生活が保証されてるんじゃない。豊かな場所に生まれた人間は、あんなところに生まれ合わせちゃった人間についてなんか考えちゃいない。あそこは、家畜じゃないから屠殺もできないで、ただ人間を飼って殺しているだけの檻だよ。生まれて死ぬだけじゃ、つまらないじゃないか。

底抜けに明るい瞳の愛嬌たっぷりな男。緊急時のマジシャン。平時の昼行灯^{ひるあんどん}。ちょっとそこまで出掛けるかのように、軽く手を振るだけで五年任期のロスコン拾い現場に向かつて行った高柳の笑顔を、斉藤は鮮やかに覚えていた。

彼があそこに追いやられたのは、新人との戦争^{ニューマン}が激化している中でだった。人と人に似たものに銃を向けるより、閑職で労働しながら飼育される方がマシだと、奴は思ったのかもしれない。暇なきは『お寂し見舞い^{さびみま}』と洒落^{しゃれ}込んで高柳に電話^{コール}したりするのだが、そういえば最近はしていなかった。そろそろ任期の五年が終わった筈だ。どうなっているのだろうか。スキルズ・リストに新しいメンバーが乗れば、速報として流れてくる。高柳^{あいつ}の名前を最近見た覚えはない。斉藤は、何気なく、スキルズ候補生リストを目の前の個別モニターに呼び出した。見慣れた画面を暫く見つめていて、何度か見つめなおして、斉藤は思考が止まった。

居ない……。

そこには高柳の名前は無かった。

五年も頑張っておいて、リスト落ちかよ？　ったく、あの馬鹿、何かポカやらかしやがったか？

斉藤はカチャカチャと端末のキーボードを音がするくらい荒っぽく叩いて、高柳のパーソナル・データベースにアクセスした。情報部のID許可レベルは、階級で普通許可されるものより随分高いので、本来なら佐官級でなくては辿り着けない情報まで見ることができる。職務上の必要からでなく、個人の興味でパーソナル・データを照会するのは、簡単に言えば職権濫用だが、まあ、高柳のなら気にすることもない。

(えっと……、リスト落ちした日時は……)

斉藤が照会できるものは、本人が見られる個人情報より多い。

(……なんだ、先週じゃないか。で……、理由は)

『帰還命令拒否』

斉藤はキーボードが並んだコンソールパネルに頭突きしそうになった。理性がかるうじて、ぶつかると箇所を机の角に修正した。机の角に当たったからではないだろう頭痛がしてきた。スカベンジャーフィールドから帰ってくるのを、普通の人間が拒否するか？ やっぱり、高柳^{あいつ}は、訳が分からない。

とりあえず暇だったので、俺は思いつくままに無重力下での注意事項を、ライダー・プールのママ（マザ・コンピュータ）に頼んで、照会しやすい画面に置いてもらった。突っ込み野郎どもも、学生時代にゼロGで課題の作業をやらされているだろうけれど、関係ないことはキレイさっぱり忘れるように人間はできている。リマインダーとしてもあつた方がいいだろう。

質量がある物質がある限り、厳密な意味で無重力というのは存在しないのだが、気取って微細重力などと表現しても分かりにくいだけだ。正確というのは大切だけど、受け取り手のレベルを越えた場合、意味がない。まさかライダー・プールに小学生は居ないだろうが、こういう場合は専門用語を殺して、パンレベ（一般レベル……）も、こうは言わないのかな？）の表現にしておく方が良い。

質量差がものをいう世界なので、常に自分の質量とぶつかる相手の質量を忖度しなければならぬ。浮いているからといって軽くない。テラG環境の人間は、その感覚が分からない。浮いているものは軽く動かせると思いがちだ。ふわふわ浮いているもののもそもその動かし難さや、一度動いてしまったときの破壊力を想像するのは、実感としてとても難しい。

ふわふわと移動を始めてしまえば、大きな質量のものは、その大きさに相応しいだけの慣性の力を得てしまう。摩擦抵抗がない所で慣性の力がどれだけ威力があるかというところ、衛星軌道で周回している人工衛星やシャトルを思い出せば簡単に察しがつくはずだ。時速二万キロ超を維持するのに、推進力発生装置をつかっていないという事実が分かりやすいだろう。

衛星軌道というのは、実は、完全に地球の重力影響圏内だ。だから、常に引力　地球に向かって落ちようとする力が働いている。

人工衛星などは円から外に向けて飛び出していく方向に推進力をかける。速度が自然落下を振り切れるレベルに達すると、結果として常に落ち続けるが常に飛び去ろうとし続けるので、同じ高度を維持することができるといことになる。頭の体操いいですか？

この状態に上手くもっていけば、エンジンを切っても落ちることはない。実際、静止衛星なんかは、そもそもエンジンを搭載すらしていないのだ。恐るべし慣性力。

話を戻そう。質量が大きいものに慣性が働く。それがオープンスペースなら問題はない。その移動する物体に体を添わして自分もその慣性の影響下に入れてしまえばいいのだ。だけどプールの中は壁だらけだ。壁に向かって質量の大きいものが漂ってきたら、その間からどんな手段を用いても、即刻逃げ出さないといけない。逃げ後れたら、ペしゃんこ……だ。

いくらライダー・プールがテラGでも、宇宙空間にいることは変わらないのだから、精密機器が防水もされないまま剥き出しになっていることはないだろう。生活廃水（トイレも含めて）もキレイではないかもしれないが、基本的に表面張力で丸くなるから、水でできたボールに完全に取り込まれて溺れるというような、見事なボケをかまさないかぎり大きな問題ではない。

問題は細かい浮遊ゴミだ。目や呼吸器に入ってしまうと、ちょっと嬉しくないことになる。台所で小麦粉の類を使っていた奥さんたちには特に、マスクを使うか、金魚鉢ヘルメットをかぶるように指示しとかないといけないな。

プールのママ・コンピュータには、開設したばかりのオープンチャットスペースにアクセスがあった場合、先ず、無重力下での動作に慣れていない人間が、注意事項を照会できる画面に飛べるようにアイコンを作っておいてもらおう。

「ねえ、タカさん……。どこにいるのか、教えてくれない？」

ザキさんの声に呼ばれて、皆にオープンスペースチャットに切り換えるように言っておきながら、自分の端末は通信に負荷をかけっぱなしだったのに気付いた。余計なことまで考え込んでいてすっかり忘れてた。

「ねえ、ザキさん。料理する人？」

俺の質問は唐突すぎたかもしれない。人間は皆言葉を文脈の中で理解するのだということを忘れていた。

「タカさん、真面目になつてよ。今、私をリサーチしてどうするのよ」

怒られても咄嗟に反応できなかった。思ってもいなかった角度から突っ込みがくると人間、一瞬何を言われたのか分からないことがある。暫く考えて、漸く、嫁さん探しのナンパ男のセリフと理解されていたのだと気付き、苦笑する。ザキさんは、たしかに魅力的だけど、パンピー柏木とタイムン張る度胸と体力がないと、アプローチするのだって命懸けになる。第一、ちっとお元氣すぎる。もちっとか弱くないと、俺が腎虚になること間違いなしだ。

「ちやうちやう。ザキさんの手料理は食べてみたいけど、そうじゃなくて、小麦粉とか、パウダーシュガーとか普通に使う人だったら台所立入禁止ね。肺に吸い込んだら、かなりやっかいだから」
思い切りが良いいつものザキさんの即答がない。きつと勘違いを照れているな。

「大丈夫。今日は調理済みのものしかないから」

パンピーに、ザキさんゲットするなら、料理の腕を磨いておくよ、今度会ったらさりげなく教えておいてやろう。

「それはよかった。水は全部タマタマになつてるでしょ？ 下手に衝撃与えると、分裂して霧よりはデカイ水玉ができちゃう。そいつを吸い込むと、肺がむちゃくちゃ痛いし、後で肺炎になりかねないから、できるだけ水には触るなよ。安全の為に、持ってたらい

けどスベジヤケ着て金魚鉢かぶった方がいい。金魚鉢ヘルメット持ってなかつたらマスクか、タオルで口の周りをふさいで、強盗ファッションになつてね」

俺が思いつくままに喋ると、向うで例のコロコロ笑いが聞こえた。笑っていられる内は人間なんかなる。

「了解。さすが宇宙人。頼りになるわ。で、どこにいるの？ 一緒に居て良い？」

この場合の『一緒にいたい』を、異性に対する並々ならない野心と勘違いするほど、俺は間抜けではない。俺だって、女の子じゃなくても、誰かと（できれば頼りになる奴がいい）一緒の方が今よりはずつと心強い。特にマツチヨな人が一人居てくれると助かる。喉の渴きは本格的に耐えがなくなってきた。

「俺もザキさんに会いたかつたんだ。もしかして、飛竜の部屋に連れ込まれたことある？」

「場所は知ってるわ。柏木さんの所と一緒にでしょ？ 連れ込まれたことはないから、コンパートメント・ナンバーまでは知らないけど」
ザキさんが律儀にコロコロ笑ってから答える。なんだ、ザキさん。そこでパンピー 柏木の名前がでてくるじゃないの。パンピーちゃん、結構脈あるよ。君に足りないのは質量に相応しいだけの度胸とみたね。

「場所はどの辺？」

俺にはザキさんの検索権利がないから、さつき位置情報を得ようとして、ママに弾かれている。

「そんなに遠くはないけど……。ちょっと、部屋の外に出るの……。怖くて」

無理もないか。部屋の中の惨状が、どこまでもつづいている外なんて、普通感覚では見たくないだろう。ライダー・プールは時差を作るほど規模が大きい施設ではないから、地球時間の日本県の伝統的標準タイム、明石タイムを採用している。この事故（事件？）

が夜中から明け方に起こったのは、それでも僥倖と言えるのだろう。繁華街の中華料理屋で、炎がじゃんじゃん立っている時に、ゼロGで振り回されたら……。小料理屋の女将さんがてんぷらを揚げているときに、こんな事態になっていたら……。いやいや、妄想を暴走させるのは止めておこう。

一緒に居たいというニーズを現実に反映させるには、どちらかが移動しなければならぬという、基本的条件を無視することはできない。俺はマッスル階級として奴隷以下ではあるが、年齢と性差でリスクを多めにとるのは、俺の方で順当だろう。

「じゃあ、悪いけど、ザキさんの位置情報検索許可、俺にくれる？
なんとか移動してみるから」

「嬉しいけど……。タカさん、大丈夫？」

その大丈夫は、俺の体を心配しているというより、辿り着けるかどうかの能力の方を心配している感じだった。俺は大いに安請け合いをした。

「宇宙人を信じなさい。何度も言ったでしょ。ゼロGは俺のフィールドだよ」

軍服でのこのこ街を泳ぐ愚かを、このときの俺は忘れていた。

* * *

他人様の家を訪なう時は帽子を脱ぎましょう。俺は、几帳面に金魚鉢を脱いでから、インタフォンを鳴らした。途端、速攻で外開きの扉が開いた。訪問者の確認くらいしてから開けた方が良いと思いつつ、意表をつかれた俺は思いつきり弾き飛ばされそうになった。ドアノブに手を伸ばしてなんとか掴む。

良い子のザキさんは俺の言うことをちゃんと聞いて、スペース・

ジャケットを着込んでいた。肉体美を見せびらかすようなライダータイプのスベジヤケは目の保養になるというか、やり場に困るというか。まあ、サービスタだと思って堪能させてもらいます。

驚いたことにザキさんは、幽霊でも見定めるような目つきで俺をじつと見た後、いきなり抱きついてきた。余程不安だったのだろうか顔色が悪い。

「遅かった……。遅かったじゃない！ 心配したのよ。どっかで潰れちゃったのかと思って……」

こんな役得が待っているなら、スベジヤケを着とくように言うんじゃないかった。流石に金魚鉢は持っていないのか、見掛けより柔らかい髪の毛が頬をくすぐってきた。若い女の子の匂いは、本当にいいなあ……。

「柏木さんが、タカさんのこと、軍人さんだつて言ってたの、眉唾だと思ってたけど、本当に……。そうだったのね。いやだ……。似合わないわ」

ちよつと涙ぐんだ目を瞬きだけで誤魔化したザキさんが、俺に抱きついたことを失策だつたと思っているのか、俺の胸から腕を突っ張って体を引き剥がしてから言った。えらい言われ様だ。官服が似合わない男つてのは、どういう意味だろう。大体、かなりの不細工が着ても、男振りが二、三割り上がって見えるのが、軍服って奴の唯一の利点だつた筈だが……。

「……タカさん？ なんか、酷い顔色よ……。どこか怪我でもしたの？」

ザキさんに顔色を指摘されたせいで、俺はここに来るまでに目撃したこと、経験したこと、全てが一斉に脳裏に甦って押し寄せてきた。

* * *

体の半分が潰されたようになって苦しんでいた若い男が、震えている手を差し伸ばしてくる。彼を取り囲んでいる細かい赤い霧は、彼から失われた血であり、それを吸い込んだのか、苦しそうに顔を歪めて、かすれた声で呟いた。

楽に……してっくれ……よ……

「できない」

殺すのが……てめえらの商売……だろ？

「できないものは、できない」

じゃあ……助けて……くれる……のか？

この問いかけにも、俺は同じ答しか持っていない。『できないものは、できない』と。でも、それを俺は口に出して言えるのか？ この重傷を負った男に。助けることも、引導を渡すこともできないと。

泳ぐように、逃げ出した背中から聞こえてきた声。

税金……泥棒……

殺していけっ！

ザキさんのコンパートメントがある場所目指して、色々な取っかかりを蹴飛ばしながら移動する俺の足首をいきなり掴んできた男が居た。

なんとかかしていけよつ。軍人さんよお。あんたらなら、なんとかできるんだろ？

知らん顔して、通りすぎてくな。なんとかかしていけつ。

泳ぐ。取っかかりを探して（できれば構造物にしっかりと固定されている奴がいい）、質量が大きいものに運動エネルギーを与えないように気をつけて……。

このタコつ。この惨状見て、素通りできるのか。お前はっ！

遅しい大男。筋肉があつて、ちゃんと骨に中身が詰まっつていて、普段なら豪快に俺なんかを捻り潰せる男たち。なんで軍服を着ているだけで、こんなふうに頼られなきゃならないんだ。

男。男。男。どこまでいっても壮年の男たちばかり。全く。男ばかりで、色彩感に欠ける街だ。

それでも人間だから、自分や知り合いや、見知らぬ者であっても同じ人間が、潰され、苦しみ、為す術なすべもなく死ぬ行く場所で、自分が何もできないのはあまりに辛くて……。誰だつて、なんとかしたいのに、なんともできなくて。

奴らだつて、多分分かつてる。軍隊つていう集団だつたらとにかく、一匹ではぐれている税金泥棒虫は自分と同じように無力だと。

けれど、この服を着た人間が、何もせずに通りすぎていくのをみれば、行きどころのない怒りをぶつける格好の的になる^ま。

何度も、何人も、何度も、何人も……伸ばされる手。怒声。弱々しい命の炎が消えようとしている瞬間に直面した溜息。怒り。絶望。

ゼロGでの身のこなしに慣れていない奴らから逃げるのは、テラGで連中が俺をとっつかまえる程度にたやすいことだ。俺は落ち着いて壁を蹴る。怒声が追い掛けてきた。

どこまでも。いつまでも。そいつらは重なっていく。足されていく。大きくなっていく。何もできない俺を責める。

* * *

「……肩……、貸してくれ」

俺はザキさんの肩に手をかけ、彼女をとっかかりに体を移動させて、背後に回り込むと、その細い……と言いたいが、俺よりは数倍みっしりと鍛え上げられた逞しい肩に、顔を押しつけた。パンピーちゃん、悪い、ちょっとザキさん貸して……。

「三十秒……でいい」

何ができる？ 俺だってちゃんと一人前に無力だ。

三十秒以上は簡単に過ぎ去ったろう。けれど、俺はまだザキさん

の肩に顔を埋めていた。もちろん、俺だって胸の方が好きに決まってるけど、そこはそれ、ザキさんは俺のママでも女房でもない。一応、理性くらいは保っている。

女の子ってのは、誰かが弱っているときには、やさしく我慢強くいてくれる。だから、好きだ。野郎はこういうときに、三十秒過ぎたなどと平気でほざくのだ。

だからって、甘え続けるのは、男らしくないよね。高柳君。

俺は自分に言い聞かせた。できることを、できるだけやってみる。ベターをかき集めて重ねてベストにする。こいつは、学校のおちゃらけた訓練じゃあない。

「……インストラクターの……オザキ先生……」

「何？いきなり改まって」

「今……で、何秒……？」

「……85秒くらい……かしら？」

「御免、時間オーバーした」

俺は顔を上げる。30秒は人間やってる俺の権利。残りの55秒は只の無駄ロス。反省します。俺はザキさんの部屋に押し入って、灰色のままの総合端末に直行した。やっぱりザキさんはLANモードで再起動するという意味そのものが分かっていないようだ。ケイタイ握りしめて、メールを打ちまくっていたのだろう。

ホント。俺の馬鹿。随分時間が経ってしまった。いい加減そろそろ、ママのオープンチャットスペースに、新しい情報が入ってきている筈だ。俺はまだ一人だ。こいつをなんとか乗り切るには、やっぱりチームがいる。飛竜……。歩ちゃん。お前たちが湧いて出てくると……。めっちゃ、助かるんだけどなあ。あと、アゴで使える実動部隊も欲しいし……。できればゼロGで動き慣れた奴。加悦さんと

か、ジョーとか。まあ、手近にいそうなパンピー柏木ちゃんが、『ザキさんは人質にとった』の呪文で、湧いてくれてもいいよなあ。

俺は好き勝手な事を考えながら、さっさとコンソールパネルを弄った。そついや、まだ、ライダー・プールのマザ・コンの名前を聞いてない。繋がったら最初に聞かなきゃな。頼りになる、最初のチームメイトだ。

「キリーさんっ。ビーコン誘導切るのってどうやるの？」

地球の分厚い大気を挟んで向こう側にいる柏木が叫んだ。飛竜は頭痛がしてきそうだった。ザキさん命の柏木には、彼女がいるプールにとんでもない事故が起きたことでも立ってもいられないだろう。しかし、誘導を切って、どうやってプールに着棧できるだろうか。

「お前ね。管制から突入許可が出て、周回待ちしてる最中に、ビーコン誘導切って、何する気だよ」

飛竜は答は分かりきっているが、柏木をクールダウンさせるために敢えて聞いた。

「プールに帰るに決まってるじゃないですか！」

「帰れるの？ お前程度の腕で……」

自分で言ってみても、かなり厭味な物言いになったが、熱くなってる奴はこの位は冷たい水をぶっかけてやるに限る。飛竜の言葉に逆に柏木はいきりたった。

「帰ってみせます」

ここまで露骨な言い方をしても怯まないってのは、やっぱり柏木は一直線男だ。呆れた飛竜は、投げやりに言った。

「んじゃ、フライトプラン出して。俺、プールに送ってやるから。」

誰か旗でも振って誘導してくれるかもな……」

「キリーさん……」

ここまで言われないと落ち着かないとは、さすが熱い男、柏木だけのことはある。充分に柏木が萎れたのを確認してから、静かに飛竜は断じた。

「お前が手動でプールに突っ込んで、上手く棧橋ヒラにはまれば良いけどな、目測誤って壁に穴でも開けちまったら、お前が死ぬだけじゃ済まないぞ。それこそ大量殺人犯になっちまうぜ」

「でも……。あそこには……」

ここでザキさんがと言わないところが、まあ、柏木の可愛いところだ。飛竜は側で肩を叩けない距離に臍ほそを噛みながらも、努めて明るい声を出した。

「あそこには、タカがいる。大丈夫だ」

「タカさん？ スカダーなんてクソみたいな商売、真面目に何年もやってるようなオヤジに、何ができるって言うんですか？」

「まあ、噛みつくな。柏木。じゃあ聞くけどな、お前なら、たった一人で五年以上を過ごせるか？」

「……え？」

「精神に異状もきたさず、黙々と毎日の仕事を、ヒューマンライクなAIは手元にいるらしいが、完全にたった一人だ。お前なら続けられるか？ 休日はあるが、息抜きにいくところはない。給料が入っても使う場面がない。俺たちみたいに酒場でクダもまけない。一週間じゃない。一年でもない。五年だ。お前、耐えられるか？

太陽光フレアが観測されたら母船に逃げ込まなきゃならないほど極端に薄っぺらい構造しか持ってないライトフライヤー（軽飛行機）で物質の密度が極端に薄い宙域を飛べるか？ ジャンプステーションでもない空間目指してジャンプできるか？ そんなところで、有Gに帰ったら遊ぶぞって、母船の回収用アームを振り回させて耐G訓練するなんて馬鹿なこと、正気でつづけられるか？」

柏木は気押されたようにライダーシートの背もたれに背中を押しつけると、飛竜が立て板に水とまくしたてた一つ一つの言葉を呑み込んでいく。

できない。

「学校で、高柳は、マジシャンと呼ばれていた。とにかくいざという時にヤツくらい頼りになる人間は滅多にいない。緊急事態ってヤツは、高柳にスイッチを入れるんだ。どうせ今頃はもうスイッチが入っちまってるだろうよ。非常時に非常時だと嗅ぎつけるセンスだつてピカイチだ。あんなにいるどの専門家より早く、被害を最少に食い止める行動を始めているはずだ。奴は情報が悠長に出揃うまで動けない一般人とは、種類が違う人間だ。ザキさんのために喜べ。俺やお前があそこにいるより、彼女にとってはよっほど運がいいぞ」
「で……、でも、俺も何かしたい！」

子どもが自棄になったように言葉を吐き出す。飛竜は肩を大きく竦めてから、腕の重みでどさつと下ろして、鼻を鳴らした。

「俺もだ。でも、何ができる？ 動く前に考えるんだ。なあ、柏木俺たち、何かできるのか？」

カツ……カツと、音がする。管制回線が一般通話に強制的に割り込んできたのだろう。柏木は気持を切り換えた。回線の方は柏木がなんとかしなくても自動的に管制に繋がる。

若タ……号。……かた……ゴ……。応ト……願い……す。

「霧島運輸所属、若鷹二号、機長柏木です」

OC (Overcrowded Conditions) 未解消です。周回ウェイティング続行してください。

「了解。ロード変更の必要は？」

アリ……ン。

どうせ確認作業など、只の手続きだ。ルートを変えたくても、プールに飛んで行きたくても、このまま暫く回っているしかできないのだ。最後の『ン』だけ聞こえれば充分と、柏木はさつさと通話を切って、速攻で霧島運輸の交換セクションをコールした。

「ヤングイーグル柏木です。キリーさんのカニカメラ、回線あいてる

？」

交換手がでるなり、いきりなまくし立てた柏木に、ミセス・キャロットが答える。蛇足だがミセス・キャロットというのは名前ではない。人參色に髪の毛を染めているからそう呼ばれているだけだ。

「残念ね。若鷹。キリーさんはダメ元でやってみるって、プールのお友だちにコールしてるわ。繋がらないみたいだけど。御曹司の回線はビジー」

柏木は舌打ちをする。直後にミセス・キャロットが付け加えなければ、肘掛けを殴っていたかもしれない。

「御曹司から伝言。『プールに居る人間に電話してみる。繋がらなかったら直ぐかけ直すから、回線あけておけ』、だそうよ。ついでに『情報欲しいからニュースでも見ててくれ』ですって」

自分が見りやア良いじゃないかと思いつつ、ちゃんと指示通りに手が動いて、柏木はサブ端末にニュースヘッドラインを呼び出した。

サンガで事故？ 連結部分で爆発観測。 専門家、連結部の構造的欠陥を指摘。

ライダー・プール（1テラGの地球への玄関口）、サンガから離脱。

続報。プールは地球へ落下か？

「おいつ、ちよつと待てよ……。プールの高度が下がってるのか？」窓に張りついて目視で確認したくても、自分の愛機はぐるぐると地球を回っている。見掛けは静止しているサンガやプールがもう一度視界に入ってくるのは、多分70分後位だ。次に彼らが視界に入った時に、紅蓮くれんの炎を揺らめかして、深い角度で地球に向かって落ちていく……。なんて場面じゃないだろうな。ホント、勘弁してくれ。

柏木は続報のタイトルを選んで、詳細画面に飛んだ。ウェブの文

字ニュースが一番早いとは限らないので、画面を更に分割して、一方にテレビ画面を呼び出す。トークショーだったが、『事故？ 事件？ ライダー・プール、サンガから脱離』と画面右上に表示があつて、画面の下に字幕で速報がどんどん流れていたもので、そっちの方はニュース番組を探す手間を省いてそのまま放置した。

高度が僅かずつではあるが下がってきていることが観測されている。ライダー・プールには推進力発生装置は搭載されていない。このまま、修正されないと重力が遠心力を上回り、徐々に加速度を上げつつ落下に至る可能性もあるという。

柏木は頭を掻きむしりたくなつた。弾かれても良い。討ち死にしても良い。ザキさんに好きだという一言を告げられないまま、あの人が燃えていくのを見るなんて、勘弁してくれ。プールが落下したら、俺も一緒に落ちちまおうか……。とにかく、プールに残されている人たちにとって時間を少しでも稼げるのは、突入角度が大きくて燃え尽きるバージョンより、浅くして弾かれるバージョンだ。一度角度が付きだすと、慣性力が落下の方向に働き、ますます角度をつけて加速していく恐れもある。

そもそもプールには太陽の直射光の温度を耐える程度の耐熱対策しかとられていないはずだ。大気圏突入時の摩擦熱などには一筋の配慮もされていない。そんなものが重力に完全に囚われてしまつたら、燃えあがつて、大きすぎるために燃え残つて、灼熱の塊が地表に降りそそぐ事態になりかねない。海ならまだ良かったが、人が住んでいる地域にそんなものが降つたら、紛うことなき大惨事つてやつだ。

穏やかでない妄想に苛まされつつ、柏木は忙しなく、物凄い情報量溢れる、ネットの海で溺れていた。どこに、役に立つ情報なんてあるのだ。言いたくないが、情報処理の成績は赤点ストレスだった。

ペーパー問題は満遍なくできるのが当然のキリーさんが自分でやればいいのだ。

一体、どんな情報をどう集めたら、俺ができる何かが見つかるのだろうか。無責任な飛竜の出した宿題にそれでも柏木が取り組もうとしているのは、もちろん、何かをせずにはいられないからだ。ただ、飛竜からの呼び出しを待っているには、焦燥感が強すぎた。

* * *

誰を呼び出しても繋がらない。どの会社を使おうとしても弾かれる。霧島飛竜は深い溜息と共に操作盤から手を下ろした。プールの人口は確か一万人規模。その位の規模はある街なのに、外部とネットワークで繋がっている有線・無線の全てが一度に壊れるというのは想像を絶する。けれど、たしか構造的に通信ノイズを減らすために、回転速度がありすぎるプールには、一般電話の衛星無線のアンテナは無かったように覚えている。クリアな音声を宣伝文句にする民間の通信網では、無線としてはサンガの基地局に信号を受け取ってもらい、そのファイバー網に取り込まれてから、プール内に移動して無線通信網に再度乗るといっやこしい径路をしていると、聞いたことがある気がする。

民間会社の通信網は全滅か……。

民間がダメなら、どこのが使えるのだろうか。そう考えたとき、ふと、操船学校時代によくつるんでいた仲間で、高柳とは別のもう一人の顔を思い出した。

齊藤歩。彼も高柳と同じように、志願して極東アジア国軍に採用されたが、ヒラの戦士として訓練されるでもなく、防衛大学などに押し込められるでもなく、軍とはまったく色彩を異にしている航空宇宙専門学校に向向して来ていた。連中と俺たち普通の学生が決定的に違っていた点がある。俺たちは学費を納めて学んでいたのに、奴らは『安月給』と文句を言っただけはいたが、給料をもらいながら学んでいたのだ。

操船学校時代に進学したとき、企業経営を学ばせたいと思っただらしい飛竜の父親は不機嫌の塊みたいになった。それで断固として仕送りを拒まれた。学費は特待生になることで抑え、母親のポケットマネーでなんとか生活費をまかなっていたが、軍資金の面で学費は軍持ち、生活費は給料というあの二人の境遇は羨ましかった。

成績落下が即ち学費納入に直結しては、断固として折れない父親を見返すためにも、必至に食らい付いてトップクラスの成績を維持する必要が有った。なのに昼行灯ひるあんどんの高柳は全体的に赤点スレスレ。齊藤は情報処理と軌道計算は常にトップクラスで、それ以外は見事に赤点という偏りようでも、小遣いに不自由している様子はなかったのだ。

まあ、あの二人の財布がなければ、学生時代は灰色の勉強三昧で終わっていただろうから、文句を言うつもりはない。とにかく、飛竜としては、宇宙船乗りになりたいだけで進学したつもりはなかった。姉というよりおばさんみたいな年の長姉が、企業経営の専門学校を特Aで卒業して経営に加わっているのだから、そっちはあの人に任せておけばいい、下手に波風立てないで、と、そういうつもりもあったのだ。そんな飛竜の心遣い（のつもり）は、彼の父親には未だ理解してもらえていないようだ。

緊急事態回避訓練の時にだけ、異常に燃える高柳と、情報収集に關して偏執狂の齊藤。志願して軍人になろうなんて奴には、全く妙

なやつしか居ない。なのに、自分のような常識人が奴らと馬が合ったのだから、人間関係というのは本当に不思議なものだ。

猪突猛進、進み出したら止まらない、周りがまるで見えなくなる生きた傍迷惑。『突っ込み野郎』と飛竜を評している高柳と斉藤が聞いたら、絶対に同意しないような事を考えつつ、飛竜は斉藤ならもう少し詳しい状況を知っているのではないかと思いついた。

けれど軍の通信網と宙港管制管区との双方向通信は混線回避の目的から原則として禁止されている。有線電話できる位置になんとか移動したい。

「タワー。応答願います」

インカムに飛竜は喋っていた。少しだけ間が空いてから管制の声が聞こえてきた。

「宙港管制です。カタ……カー……ま、じゅうもん……じー号、どうぞ」

好き放題言っている会社の交換連中にも腹は立つが、頑張っタワて呼んでくれる管制の発音にも気が抜ける。片鎌十文字号はキレもいい文句のないシャトルだが、このめちゃくちゃマイナーな武器由来のネーミングは絶対にオヤジの嫌がらせだ。

「霧島運輸所属、片鎌十文字号、機長霧島です。当機、ディステイネーション仕向地のサング、バージ（艇）シャトル・ピア（栈橋）、使用不能についての問い合わせです。現実問題としてフライトは不可能ですよ。混雑回避の為、ウェイティング・レーンから抜けられますか？ どうぞ」

地球上の宙港は、赤道上で気象が安定していることが条件だから、仕向け地別に作るなんてことはできない。だから、仕向け地がどこであるかに関わらず、フライトプラン受理順に行儀よくなる。ここから大きなコンテナを抱えて離陸したバージ・シャトルは、シャトルロードで移動しながら目的地の宙港都市衛星の管制管区に入ってから、仕向け地のビーコン誘導でロードから離脱する。こんなにもここにシャトルが詰まっているのは、サンガ向けの数機が糞

詰まっているからに違いない。他の港向けの連中は煽りを食らって
気の毒なことだ。

自分たちが離陸組が掃^はけないと、柏木たちもシャトルロードをグ
ルグルと回り続ける破目になるだろう。シャトルロードでは慣性飛
行だから燃料などに問題はないが、いつまで待てば良いのか分から
ないというのは、結構、辛抱が要るものだ。もつとも今はザキさん
に一ミリでも近い場所に居たいだろうから、柏木はいま着陸許可が
出たら憤慨するに違いない。ウェイティング王と言われるくらい、
何故か誰よりも周回待ちに引っかけやすい不運の持ち主だが、今
日は周回待ちを喜んでるに違いない。

「デステイネーション・サンガのシャトルは、ウェイティング時間
が長いものから順に移動しています。もう少しお待ちいただけない
でしょうか」

「少して、どの位かかりますか？」

「そちらへのお答えも少々お待ちいただきませんか」

「……了解。通話終わります」

状況は何も変わらない。仕方なく柏木を呼び出す。どうせまた、
例の不愉快なカマカマだのカニカマだのと呼ばれるのだ。こっちも
ミセス・キャロットと呼んでやろうかと大人げなく思わないでもな
い位だ。

「柏木。待たせたな。こっちは収穫ゼロだ。そっちはなんか分かっ
たか？」

「……ます」

消え入るような力のない声。

「なんだ？ 聞こえない。ちゃんと喋ってくれ」

訝しく思ったが、飛竜は柏木に先を促した。

「皆……死んじゃいます……」

絶望に蝕まれたような力のない声だった。

「……なんで、そういう結論になるんだよ。柏木。サンガと千切れただけだろう？ 構造自体に問題はないはずだ」

「高度が……、プールの高度が落ちてきてるんです」

「……なんだって？ 引力に捕まっちゃったのか？ で、どの位速度が落ちてるんだ」

柏木は飛竜のその質問には答えずに、虚ろに響く声で呟いた。

「俺……ザキさんに……好きだって……言っただけ」

だめだ。柏木は役に立たない……。まったくもう、デカイ図体をして、情け無いやつだ。大体、人一倍鈍いやつがいけない。ザキさんだって、誰が見たって柏木に惚れてるのだ。さつさと押し倒せば、めでたしめでたしなものを、間抜けにもザキさんの気持ちに全く気付いてないのだ。こういうのは傍で見ている方がよく分かる。もっとも、見掛けによらない純情な柏木の、いじらしい間抜けさを面白がって、背中の一つも押しやらなかった俺も悪い。飛竜は少しだけ後ろめたく後悔した。明日が今日の続きでない。そんなことは誰にだって分かっているのに。

もう、ダメだ。一瞬だって我慢できない。

「タワーっ！ 応答願います。こちら霧島運輸所属のカニカメラ機長、霧島です。急病です。このまま居たら死にます。病院行ってきますので、移動の順番がきたら適当に動かしといてください」

管制からの応答を待たずに、飛竜は一方的にインカムに怒鳴りつけると、呼びとめられるのが厭さに金魚鉢ヘルメットを放り棄てた。少し考える。シャトルの値段を考えればオヤジの禿ハゲが赤く茹だるのが見えるようだ。飛竜は全ての電気系統を片っ端から切っ飛ばしていき、全ての電気が死んだところで、非常脱出コック操作ハンドルのプラスチックカバーを拳骨で殴って叩き壊した。水道の元栓のような大きさのハ

ンドルを両手で力一杯に回すと、搭乗口のハッチがゆっくりと跳ね上がる。それから、ぷしゅっと妙な音がして、避難用緩降具が膨らみ、巨大な滑り台の様なものができる。飛竜は摩擦に強いライダー・スーツを信頼して思い切りよく飛び乗る。勢い余ってアスファルトで少し擦れたが、細かいことは気にしない。

建物まで自力で走るには距離がありすぎる。周りを見回すと、何か丁度いい距離に、地上誘導官が移動に使うカートが転がっている。

こんなもん、どうせハンドルとアクセルとブレーキしかない。こけたって顔さえ打たなければライダー・スーツが守ってくれる。飛竜はカートに飛び乗ると、普通はアクセルになっている右についたペダルを思い切りよく踏み込み抜いた。電動カートはエンジン音もなくいきなり最高速度に加速した。

ヘルメット
金魚鉢をかぶってないので風が頬をなぶっていく。そんなことを考えるには不謹慎なタイミングなのだが、それでも飛竜は思った。

地球の風だ。めっちゃ、気持ちいいっ！

11・ママたちの前哨戦

美咲が居ないと、正直ものすごい楽だ。なんで赤ちゃんには手間がかかるということが分かってくれないのだろうか。美咲の弟、圭太がまだお腹に居たときから奇怪しかった。簡単なことができなくなった。なんでも自分でテキパキできた子なのに、お人形さんのように可愛らしいと、誰からも言ってもらえる娘だったのに。

十歳というのは、女の子の山場だと誰かが言っていた。美咲のようにほっそりとスレンダーな娘は、もう二、三年は女の体にならなくて済むだろうと思っていたけれど、もしかしたら早くに生理が始まってしまうのかもしれない。ホルモンバランスが激変するせいなのか、『生理が始まる前の一年くらいは、女の子って扱いにくいわよ』とは、美咲の時と幼稚園が一緒だった先輩ママの言である。

とにかく、何から何まで気に触る。目を離せばで赤ちゃんをつねる。血がにじむほどに爪をたてるのだ。美咲はこんなに恐ろしい子どもだったろうか。髪の毛の束を口に入れる。人形を縛って遊ぶ。『人攫いに攫われてるの』といって、椅子に縛りつけられている人形を見たときはぞっとした。私の天使はどこに行ってしまったのだろうか。

正直言って、この一週間は平和だった。あの馬鹿で下品な塩屋さん所のガキに乗せられて、近所や学校まで巻き込んで大騒ぎをして探させて、心配させて。先生や近所の奥様たちに頭をさげて。こんなに恥ずかしい思いをしたのは、本当に生まれて初めてだ。圭太はニコニコと穏やかに眠り、おっぱいをのんで、おくびをだす。可愛い。

美咲の時は何もかも初めてで、緊張していたのだろうか。息をし

ているのか、ちゃんと育てているのか、心配で心配で。こんなふう
に『可愛い』と思ったことがあったらどうか？ 帰ってくるなどは言
いたくないが、はつきり言っていて気が重い。どうやって迎えに行けば
いいのだろうか。叱ればいいのか。甘やかしすぎたのだから、お尻
くらいは叩いてやらなければ、はじめを教えないのと一緒かもしれない。
それとも、育児書にかいてあるように、赤ちゃんがきて寂し
いのだから、十分に甘えさせてやらなければならぬのだろうか。
あんな大きな子を赤ちゃんのように抱っこしてあげる、なんて、正
直ぞつとする。

それに、迎えに行くときは、あの塩屋のママと顔を合わせなければ
ならない。遊星君のママは悪くないけれど、あの人は、いくら遊
星君と崇が仲がよいからといって、塩屋さんを買いかぶりすぎる。
子どもを育てるのは家族がいても大変だ。結婚もしないで子供を産
むような女に、立派に子どもを育てることなんか無理に決まってい
る。私だつてできないのに。

ドロドロとしたものを抱えながら、お菓子を山盛りにした皿と大
きめのマグカップを小さいテーブルに置いて、越智美咲の母親はテ
レビ画面を呼び出した。美咲には、こんなジャンクなものは食べさ
せられない。母乳を出している間は、本当はこんなものを食べない
方がいいのは分かっているのだけれど、いつもいつも手料理に手作
りお菓子は疲れてしまう。体にいいもの。優しいもの。折角選んで
頑張つて作っているのに、おからのクッキーを残して出掛けて行っ
た日に、公園で崇のガキの袋菓子を食べていたことも有った。なん
であんな下品なことをするのだろうか。

「やだ。知らなかった。大きな事故みたいね。馬鹿みたい。皆でわ
いわい騒ぐだけで。コメンテーターって人種は、頭悪いつて皆知ら
ないのよね」

独り言を口に出して、美咲のママである越智涼子はミルクをタップリ入れたコーヒーを口にした。カフェインはダメなんだけど、これだけミルクを入れているから大丈夫。

……軍は、軌道計算上、大気圏で燃え尽きず、地表に激突することが確実な……を、最初は破壊するとしているとのことですが、人道的にみて、どうなんでしょうか。

「私たちの地球に、また人間の作ったものが害を与えるのか。厭なこと」

チョコレートをつまむ。美咲に見つかったら、食べちゃダメというのに苦労する。なんでこの年になって隠れ食いするのか、自分で可笑しくなる。

このような事態が何故発生したのか、専門家の……先生に、お話を伺ってみたいと思います。……先生、先生はネオシャングンの宇宙航空大学で十年前まで教鞭をとっておられ……

「日本語は『とっていらっしやいました』よね。普通。本当にいつも、この女の子の表現って変なのよね。こんなの使うなってクレーム行かないのかしら」

馬鹿馬鹿しいから、他の番組を見ようとしたが、どこもコメントーターだのゲストだの顔触れが違うだけで、同じ事件を扱っているようだ。一体、どここの何が、地球に落ちると大騒ぎしているのだろう。

原因はまだ分かっていますませんが、サンガから脱離した、この脱離という表現も珍しいですね。ジョイントが外れて離れてしまった

ということでしょうか。分かりやすく言うと。

「サンガ？　この話？　いやだ、どっかのコロニーの事故じゃないの？」

初めて美咲のママは画面を真面目に見つめた。左肩に文字がでて
いる。

『サンガのライダー・プール、地球に落下か？』

手が震える。目が文字を理解しようとは何度も何度も画面を滑る。

「み……、美咲。ど、どうしよう。美咲がいるのに。あそこに美咲
が……いるのに……」

自分でも可笑しくなるくらいに手が震えている。マグカップのミ
ルクコーヒーが冗談のように派手に零れて、お気に入りの白いスカ
ートに衣魚を作る。

「どうしよう。……どうしたらいいの？　美咲ちゃん。美咲ちゃん
……」

手が震えたまま携帯端末に無意識に伸びた。美咲の友だちだから、
仕方なく聞いた塩屋ママの番号を選ぶ。

「どうしよう……。美咲が死んじゃう。……どうしよう……。どう
しよう……」

営業職は厳しい仕事だ。ノルマ、達成度、次のノルマ。休む暇がない。成績を上げなければ査定に響くし、ノルマをちゃんと満たせば、次の四半期のノルマはさらに大きくなる。パイの大きさは決まっているのだ。保険の営業は、学歴や立場を問われない。とにかく契約をとってくれば勝ちだ。結婚を約束した男と子どもを作って、結婚前に逃げられた馬鹿な女には、大変だからといって仕事を選んでいる暇はなかった。赤ちゃんの時から保育所に預けて、学校に行ったら学童保育と公園で野放し。会議や付き合いで遅くなると、崇はいつも一人で食事を取るのだ。可哀相だなんて言ってられない。

崇もこれから大きくなるのだ。頭がとびきりいい子なら問題はないのだが、学期ごとにくる通知表にはいつも『落ち着きがありません』と書かれてしまう。成績表だってバカでもとれる真ん中より、下の数字がついている。男の子なら学校へ行かなくて良いとは言えないし、私学に進学させるならお金はいくらあっても無駄でない。

その時、携帯端末が激しく音を立てた。会議中の全員の視線が集中する。しまった。切っておくのを忘れた。ひとつ大きなポカだ。誰、こんな真つ昼間に携帯を鳴らすアホは。

画面を見て、塩屋さとみは天を仰いだ。あの、化粧オバケ、いつも白いスカートを着ている勘違い女、美咲ちゃんのママだ。美咲ちゃんはいつも崇と遊んでくれる。ちょっと落ち着きがない崇をちゃんと抑えてくれる、本当に賢い子だ。あのアホそのものの女から、どうしてあんないい子が生まれてくるのか不思議だ。

赤ちゃんが生まれて、男の子が可愛いのは自分だって同じだから分かるけど、あれだけ美咲ちゃんが全身で寂しいと訴えているのに、

全然気付いてやれないのだ。それでいて、バイオリンやピアノやバレエ。それから英語。お稽古三昧。たまにサボって崇と遊ぶのくらい多めに見てやればいいのに。

今日の夕方に崇をライダー・プールへのゲートに迎えに行くのに、一緒に行こうとは約束はしていたけれど、いくらなんでも早すぎる。

「もしもし。塩屋です。越智さん。申し訳ないんですけど会議中ですので、後ほどおかけ直しさせていただいて、宜しいでしょうか？」
今アプローチをかけているお宅の、ちょっと訳がわからない奥さんだと、後で主任に言い訳しておこう。

どうしよう。ねえ。どうしたらいいの？

訳がわからない女だとは思っていたけれど、どこまで壊れているのだろう。さっさと切らないと査定がさがる。

「すみませんが、後にしてくださいませんか？」

ねえ……。テレビみてない？ お願い……。どうしましょう。

テレビ？ いくらなんでも、正気じゃない。越智さんはいつも奇怪しいが、ここまで非常識じゃない。どちらかというと、常識人ぶって人の非常識をあざ笑うのを生き甲斐にしているみたいな人だ。

「越智さん？ どうしました？ あの、どこかお加減でも悪いんじゃないありませんか？」

……。どうしよう。あの子たちが死んじゃう……。美咲が……。いるのに。美咲が、いるのに。死んじゃう……。

「美咲ちゃんが死んじゃうって、どういう意味ですか？ 越智さん。ちよつと大丈夫ですか？」

営業会議中に私用電話なんて、そうでなくても心証わるすぎるのだが、どうにも落ち着かない。

ライダー・プールが、地球に落ちるんですって……。燃えちゃうんですって。美咲も、崇君も遊星君も……。燃えちゃうんですって……。どうしましょう。

ライダー・プールが地球に落ちる？ そんな馬鹿なことあるものですか。テレビ。テレビを見れば、やってるの？ 崇も遊星君も死ぬなんて、そんな馬鹿馬鹿しいことを。

「部長、すみません。ちよつと失礼します」
壁面の総合端末にテレビ番組を呼び出す。

「塩屋さん。テレビなんか家に帰ってから見ればいいだろう？ 会議中に、君のようなトップセールスがそんなじゃ、示しがつかない……」

地球に落下が確実となったテラG施設、通称ライダー・プールが今取っているのがこのコースなんです。先生。それで軍は民間のシャトル運航会社に応援を頼んで、このように下からぶつけてですね、大気圏に突入する角度を、大気圏に弾かれる角度にまで変えようという、そういう事なんです。このようなことをして、ライダー・プールに住まわれている皆さんは大丈夫なんでしょうか？

そうですね。外のこの居住区であるドーナツ部分にさえぶつけないければ、おそらく大丈夫なのではないでしょうか。担当官の説明

によると、この中央倉庫部分にぶつける予定だそうです。私は、シヤトルがライダー・プールにコンテナを当てることより、テラ・マストライバーで打ち上げられたコンテナを、シヤトル程度の機動力しかもたないもので、捕まえられるかどうかの方が難しいと考えています。

この中央の倉庫というのは、無人なのですか？

はい。大体の倉庫管理業務はロボット作業になっています。無人ですね。

「馬鹿言わないでッ。このドアホ。そこは祟がいるのよっ」

さとみの声は絶叫だった。叱責しかけた営業部長も画面に釘付けになった。セールスレディーの塩屋さんの所の息子が、冒険と称してコンテナに紛れ込んでライダー・プールに出掛けて、Gシヨックで死にかけたと聞いたのは先週のことだ。男の子はなんでこんなに落ち着きがないのかと、溜息をついていた。なんでも、サンガの居住区に地球産の病原菌を持ち込まない為に、総合ワクチンを打つてから一週間もライダー・プールからは出られないらしいが、回転軸に近いルナG並の低重力の倉庫に、缶詰にされているとあって、困ったといいながら豪快に話してくれていた。

シングルママになった経緯も彼女は隠さないし、ほんとうにあけつぷろげな性格は男前な女性だ。さとみは、越智涼子との通話を一方的に切ると、テレビ画面にかいてある『ご意見はこちら』の番号を回しだした。

あ。視聴者のどなたからか電話ですね。ちょっとお話してみましよう。

「このボケっ」

電話が繋がるなり、さとみは絶叫した。テレビからさとみの声が聞こえてくる。

「いい？ そこにはうちの子がいるの。いつも無人かもしれないけど、無人なんかじゃないの。あんたたち、うちの子を殺す気？」

え？ あの、お名前をどうぞ。あの、どういったご意見ですか？ あの、電話番号をお間違えになってませんよね？

進行役の女の子が露骨に困った顔をしている。ちゃんと相手を確認してからとらないと、えてしてこういう貧乏籤を引いてしまう。

どうぞ、番号をお確かめになって。

「番号は合ってるわよ。いい？ うちの馬鹿息子が友だちの女の子と男の子を誘って、ライダー・プールに冒険に行ったの。馬鹿でしょう？ 育て方間違ったの。それはいいの。ルナGの子がテラGにいきなり行って、無事に済む訳ないでしょ？ それで、168ルールに引っかけちゃって、そこに保護してもらってるの。ちよつと聞いている？」

先生。168ルールって……何でしょう？

地球との往復が頻繁な職種の人たちは、どうしても地球産の活発な病原菌の媒体者になりがちなのです。それで、ライダー・プールはGの違いだけでなく、サンガ本体とは隔離されている訳です。この施設からサンガへのゲートをくぐるには、ライダー・プールは潜在的に病原菌に汚染されているだろうという前提になっていまして、総合ワクチンを接種してから約一週間の間はサンガへ行くことはできないのです。それが168ルールと呼ばれるもので……。

どこかの教授がそこまで説明すると、ただの主婦が発した168ルールという言葉が俄然重みを持つてくる。一般に知られている習慣でなければ、そういう事実があるというのは眉唾ではない可能性が高くなる。これは、スクープかもしれない。鴨が葱背負ってくることも世の中にはあるのだ。

奥さん？ あのお名前をお願いできますか？

奥からディレクターのような男が出てきて呼びかけてきた。

「学校にでもなんでも問い合わせて。私は塩屋さとみと言います。そこにいるのは、第四学区の第三小学校の五年生。小柳遊星くんだけ11歳。うちの馬鹿息子、塩屋崇と、友だちの女の子、越智美咲ちゃんは10歳よ。ライダー・プールのゲートに問い合わせれば直ぐ分かるわ。今日夕方迎えに行くはずだったんだから」

「ごりゃあ、どえらいことだぞ。」

視聴者の皆さま。当放送局は事実確認を早急にし、子どもたちがいることが事実であれば、軍に即刻、作業を中止するように要請します。どうぞ、続報をお待ちください。チャンネルはそのまま。

* * *

遊星ママ、セシリア小柳はせっせとベランダのプランターの手入れをしていた。遊星は同じ年頃の子と比べて大きいせいかな、とにか

く良く食べる。朝御飯を食べながら、夕御飯と給食のメニューを気にするような食いしん坊だ。長男はもう専門大学生で寮暮らしをしている。この一週間、パパと二人で食べる夕食は、なんだか味気なく、いつもより少なめに炊いたご飯も残りがちだった。冷凍ご飯の塊が随分増殖してしまった。もつとも、遊星さえ帰ってくれば、おにぎりにでもしておけば、いつの間にか無くなっている筈だから、心配することはない。

パパが多分、たつぷり遊星の油を絞ってくれるはずだから、せめて夕御飯だけは好物を用意しておこうと朝から張り切りすぎて、思ったより早く、支度が済んでしまった。

食事以外は手間がかからない遊星だが、やはり、帰宅時間を気にしたり、塾への送り迎えなど、けっこう時間は細切れになっていた。遊星が赤ん坊の時はせつせとやっていた趣味の編み物を、ちよつと暇に任せて始めてみれば、やはりもともと好きだけあって面白く時間は飛ぶように過ぎてしまった。来年の修学旅行は、毎年そうだから月^{ルナ}だろう。学校でいくそれだって、たった二泊。（移動があるからもうちよつとかかるけど）おにいちゃんの方がやんちゃで手がかかった覚えがあるのだけれど、あの子が趣味にしていた家出だって半日が良いところだった。

まさかあのおとなしい遊星が、わざわざ夏休みが終わってから、一週間も計画的に学校をサボるなんて大胆なことをやらかすとは、これっぽっちも思っていなかった。男の子はまったく油断がならない。

越智さんのベランダや玄関先のポーチには、色とりどりの花が咲いているが、うちのベランダにあるのは、全部食べられるものばかり。ミニトマト。きゅうり。なす。お米の袋に穴をあけて大根。ちよつとおしゃれな花はハーブ類。ミント。ローズマリー。セージ。遊星がいつつまみ食いをするかしたものでないので、農薬なんか

は使えない。全く遊星と虫と競争で食べちゃうのだから、まともなものを収穫するのは大変だ。

こんな自然と隔絶したスペース・コロニーまでやってきて、いつの間にかびっしりとついているアブラムシの健気さには頭が下がけれど、息子の為に作っているベランダ菜園なのだ。ムシごときにやるエサではない。

セシリアは親指と人指し指の腹を合わせて、茎についたアブラムシをすりつぶした。バッグの中に入れっぱなしの携帯端末が鳴っているのには、全く気付かなかった。

それでも、呼び鈴がけたたましく連打されれば流石に気がつく。もうちょっと虫退治をしてしまいたかったが、そんな風に問答無用に呼ばれると、急いで出る気が無くなってしまふ。彼女は丁寧に手を洗ってからインタフォンに応答した。

「越智さんに……、塩屋さん？」

性格が違うといつてしまえばそれまでなのだが、この二人の反りその合わなさには、いつも呆れているセシリアだ。並んで玄関前にいるというだけで驚きだ。大体、子どもの用でこの人たちと一緒に所に出掛けざるを得なかったとき、自分はいつもサンドイッチの具になっっている。喋るのは私と越智さん。私と塩屋さん。この二人は滅多に喋らないのに。ああ、そうだ。遊星を迎えに行く時間になっていたのかもしれない。つい虫退治に熱中しすぎたのかも。でも、いくらなんでも……そんなにしてたかしら？

壁にかかった時計の針はまだ3時。集合時間はたしか5時で間違いなかつたはず。越智さんだけなら、いく前にお茶でもしましょう

と、手作りのお菓子をもって早めにくる事も無いとは言えないけど、塩屋さんは仕事中にはずだ。

ニュース。……ニュース見てないの？ テレビのトークショーでも……。

ニュース？ トークショー？

12・ゴールデンクルー再結成

たくさん書き込みをみると頭が痛くなる。情報に皆が飢えていたということだろう。虚虚実実。こんなとき、データマン斉藤がいてくれたら。何度目かで無い物ねだりをして、苦笑する。今ないものは、使えない。これ、基本。

協力を申し出てくれる人の中で、ID許可レベルが高くて、データ分析に勤が働きそうな人間をピックアップするのは、どちらかというと苦手だ。とにかく、文章を読み解くのが苦手なのだから、この文字の羅列をみると倒れたいくなる。

斉藤歩さいとうあゆむに言わせると、必要なデータは、浮いて見えるとか、向うから呼びかけてくれるとか、アブナイ事を言う。そこまでイッチャツてる人間は滅多に居ないだろう。あいつが扱う特殊言語は、なんでもホスト・コンピュータが作り出す擬似人格とトークするのではなく、直接、連中のデータベースを覗けるという凶悪なものらしい。斉藤さいとうの気分次第で、背景はピンクだったり（趣味が悪すぎる）ブルーだったりする単色の画面に、知っている筈の記号が、訳がわからない順番でならんでいるのを見ると、正直気持が悪くなる。

俺が途方に暮れなくなるのを叱咤して、最初の方の書き込み画面を見ようと手動でスクロールさせていると、ぷちっといった雰囲気画面が一瞬灰色になった。

電気系統が……イカれた？

時間を喰らいすぎたのだろうか。背中に冷や汗が伝う。

物凄い砂嵐のようなノイズが走ってから、カチッと画像のブレが

止まる。そこに浮かび出た顔を見て、俺は叫んでいた。
「あゆみちゃあんっ」

画面の向うの老けた親父顔も叫んでいた。
「優美ちゃん！」

「俺は『あゆむ』だ。このパータレが、いい加減に覚える」
向うがいい加減聞き飽きた毎度の突っ込みを入れるのと、俺が
「名前と呼ぶな！ このタコっ」

と、叫んだのとほぼ同時だった。打てば響くとはこの感覚。ああ、
若返る。

お約束のご挨拶を済ませた俺たちは、ニヤツと中年らしい（はつきり言つて、可愛げがない）笑顔になった。なんで、ママのモニターに歩が湧いて出たのかは不明だが、きつと俺の切なる願いを、どこぞの物好きな神様がかなえてくださったのだらう。ここから元気に生還したら、年に一度の秋祭りには、ちゃんと獅子舞でも奉納します。データマン斉藤と繋がれば、状況は俄然有利になる。

「丁度良かった。会えて、めちゃくちゃ嬉しいぜ。データマン」
「タカ。今そこにおいてくれるっただけで、俺から見たらマジックだ。さすが、マジシャン高柳。外さないな」

中年男が二人してベタベタと褒めあっているのは、かなり気持ち悪いが、本当に嬉しいんだから仕方ない。

「ここに、リーダーがいれば完璧なのになあ」
俺がさらなる贅沢を言うと、歩が自分の背後のモニターを親指で指した。モニターの向うに映っているモニターには、恐るべし、お祈りの力。飛竜が映っていた。

「キリーさん？」

背後から、ザキさんの声が聞こえる。信じられないものを見てい

る時にありがちで、彼女の声は喜び溢れているというより、むしろ
淡々としている。

「おいおい。本当にマジシャンだな。タカ。ザキさん。無事でよか
った。柏木がもう、落ち込んでて使い物にならないのよ。ザキさん
が元気なら、奴も生き返るよ」

「柏木さんが？」

ザキさんの声が一瞬で蘇る。やっぱり彼女はパンピー柏木ちゃん
が大好きなのだ。さっき胸を選ばなくて心から良かった。

「お前が作ってくれたオープンチャットスペースのログはもらった。
今、俺とこの若いのに分析させてる。そっちの状況を簡単に教え
てくれるか？」

教えます。教えます。俺は、知っている全てのことを　まあ、
3分もかからない程度の情報しかないが　簡潔に並べた。

目の前で歩が腕組みあひむをしている。その向うのモニターには、公衆
の有線で歩を呼びつけたのだろう、線が繋がった受話器を握りしめ
た飛竜が映っている。彼らとは隔たっているとついちゃあそれまで
だが、なあと、モニター越しの会話なんて、俺にとっては日常だ。
いつもより、ずっと近くにいるのが分かるだけに、こんなんだって
心強い。

「なるほどね。こっちが把握している状況を言うけど、その子大丈
夫？　そっちの状況、結構キツイよ」

歩がザキさんを心配している。女の子に優しくするっていう男の
基本を漸く覚えたらしい。同期の出世頭だし、これで一番最初に嫁
さんゲットできるだろう。多分ね。

「本人に聞くわ。ザキさん。あれは俺と飛竜のポン友。顔は俺たち
と違っていま一つだけど、データ分析のプロだ。奴がああいう言い
方をしている以上、こっちの状況はちょっと有り難くないって意味

「なんだけど、正気で聞ける？ 取り乱す自信があるなら、その辺で耳ふさいで欲しいんだけど」

「青い顔をしていたが、彼女は気丈にも頷いた。俺は軽く顎を引いて歩を促す。」

「プールの回転が止まってゼロGになっているのは、サンガとの接続部が千切れたからだ。プールに回転力を与えていたのはサンガの動力だから、そっちは自転できない。千切れたあとに回転軸とドーナッツの摩擦で減速しつつ停止した。擬似重力を無くしたのはもちろんそっちのインフラでは悲劇だけど、急停止でなかったのは、不幸中の幸いだ」

「へーっ。千切れたの？ そんなんあるんだ。劣化かな。心配してたテロよりや、マシだな。ここが最低ラインだ」

「現場検証してないんだ。爆発物でも観測されたらテロになるだろうな。まあ、今は関係ないから原因の原因は飛ばすぞ」

「邪魔して悪かった」

歩が頷く。

「次いくぞ。千切れたといっても、サンガの方はデカイ。軌道もそれほど変わらずに安定して見かけ上の静止を保っている。サンガに家族がいる人間は、そっちを心配しなくてもいい。この情報はもうオーブンチャットスペースに流した。ああ、プールが千切れて浮遊してるって方じゃなくて、サンガは問題ないって方だけね。念の為にザキさんがちょっとだけ安心したというようにため息をついた。」

吐息が気持ちいいっ。

「ライダー・プールはサンガから千切れた衝撃で、軌道が変わった時に、角度が地球に対して鋭角に若干ついちまったんだ。これから導き出される結論は……」

俺は少し考えてから、考えるのを止めて、歩の種明かしを待った。アホが考えても時間の無駄だ。

「重力を振り切るだけの遠心力を保ってられない……。つまり今、プールは地球に対しての高度をさげている。角度も慣性に従って深くなって、大気圏に達する頃には、弾かれる方ではなく、突入コースになりそうだ。するとだな……」

俺は納得した。

「分かった。最後まで言わなくていい。女の子には可哀相だ」

俺は歩を止めた。ザキさんは分からないのだろう。悪い想像をしている顔をしているが、多分、彼女が想定する最悪より、悲惨なはずだ。悩ませておけばいい。

「そこまでで最悪か？」

歩が首を振ったので、俺は全てを投げ出して泣き崩れる準備をした。

「軌道計算上、大気圏で消滅する可能性はゼロ。大量で高熱の塊が、フロリダ付近を直撃する。極東アジア国軍は……、大気圏突入前に」
歩はザキさんに気をつかって表現を丸めてくれている。指で鉄砲を付くってバンと撃ってみせた。軍が拳銃で俺を撃つってことじゃなくて、電子破壊砲辺りで、プールごと焼いちまうってことだろう。片や地球環境と数万の命。こっちは許容人口一千万だが、多分八千も住んでいない。天秤にかけるまでもない。軍というのは、そういう決断をするところだ。大儀のために少々の犠牲は止むを得ない；つてね。犠牲を押しつけられる方にしたら、冗談はどうぞ休み休みにと言っしかない。

「マジシャン高柳。お前なら………なんとかアイデア………だせるだろ？」

無茶を仰る、あゆみちゃん。俺は思い切りよく倒れてみせた。無重力万歳。ちつとも痛くねえ。

「ぶつけよ……」

俺は閃いた。閃いたつたら、誰がなんといつても閃いた。

「はあ？」

歩の声が間抜けて裏返る。

「ぶつける？ って、何を」

「シャトル。質量には質量。質量があるもんを弾く機能をオフしてから、マストドライバー用の大型コンテナ・フルカーゴにしてぶち上げる。あいつらは外部コントロールできないから、推進力のあるバージ・シャトルでトツ捕まえて、下からプールにブチあてる。お前たちも俺やザキさんがいるところを壊したくないだろ？ 的まは回転軸と中央倉庫の間。ここなら無人の筈だから、構造ぶっ壊しても大丈夫。シャトルもぶっ壊れると思うけど、直ぐにこっちに来れば良いから、ちゃんとした、宇宙船外作業服がなくなつて、スpegジャケヘルメットと金魚鉢でどーにかなるだろ？」

歩が向うで頭が痛いというように、額にしわを寄せている。

「そんな無茶な任務だれがやるんだ。第一シャトルでどうやってマスコンつかまえるんだ？ バージ・シャトルが運ぶコンテナとデカさが違うだろ？」

「DWN T ネットでくるんでおく」

歩が息をのんだのが分かった。

「ダブルウォールナノチューブ……ネット。お前の商売道具か……」
日本海溝より深く悩んでいるような顔になっている。

「でも……、やっぱり無茶だ。お前が普段乗ってるキャッチャーボートと違って、シャトルは小回りが利かなすぎる。反質量システム

を切ったマスコンがどっかのコロニーにぶち当たれば、二次災害じやなくて立派な犯罪だ」

因みに反質量システムというのは、SFでお馴染みの反重力とは違う。巨大質量をセンサーが感じると、そちらの方面についている推進力発生装置が軽く作動して、引力を関知しなくなるまで噴射しつづけるだけなのだ。役に立つシステムってのは、えてして単純な発想からできているものだ。

「反質量システムのスイッチに、タイマーでも仕掛けとけばいいだろ？ シャトルライダーが捕まえ損ねたら、プレデターのいつもの餌にくれてやれ」

俺は思い切りよく、石橋を叩きすぎてぶち壊す歩の慎重さに水をかけてから、例によって例の如く飛竜に丸投げした。

「どうよ？ リーダー。軍は数万と数千を秤にかけて、こつちを棄てた。突っ込み野郎どもってのは、自分の一つと、ここの数千……秤に乗っけられないほど、ケチなのか？」

飛竜がにっこりと笑った。

「いんやあ。多分、できるよ。歩。ウチのライダーでさ、そういうことやりたがってる奴、丁度その辺でグルグルしてたんだ。俺たちってラッキーだよな。なんか、ついてるんじゃない？」

ついてる何かってのは、多分、地獄に突き落としてから手をさしのべる類のにちがいない。

「あとねえ、丁度、そういう使い方で壊れちゃったほうが有り難いシャトルがあるの。俺も、そっち行くわ。歩、お前ん所の強権発動して、俺のカニカマの発射順位最優先にしてくれない？ ざっと計算して、マスコンとシャトル、セットで勘定して幾つくらいあれば、プールが大気圏の表層で弾かれる角度に持っていける？」

「お前たちねえっ。オレにそんな殺生な計算させる気かよ。お前たちの命かかってんだぞ」

「やれよ」

飛竜が凄んだ。こういうときの飛竜ちゃん、怖いんだよね。俺にはできない押し強さだ。思いつきの俺。利点と欠点を洗い出し、不安を少なくして、成功の可能性を引き上げる歩。そして、誰もがやりたがらないゴーサインをあつさりかけられる度胸の飛竜。やっぱり俺たちゴールデン・クルーだ。

「情報分析能力を除いたら、軌道計算しか取り柄ないだろ。あゆみちゃん」

「……俺はあゆむだ」

律儀な反応、お疲れさま。

「わーかったよ。分かった。死人がでたら、化けて出られるのは、お前たちで引き受けるよ。堂本、岸二佐呼んでくれ。今のプラン実行前に、試せる策がまだあったって伝えてくれ。あーっ、頼むからもうちょっと普通の発想してくれよ。マジシャン……」

俺がVサインをみせようとしたときには、もう歩の後ろのモニターは空っぽだった。さすが飛竜。思い立ったら、即行動だ。

13・人非人　ひとでなし

トークショーは、どこの局もその話題が沸騰しているらしい。

ライダー・プールは働き盛りの肉体派野郎ばかりが濃い密度で棲息する、飛竜のパラダイス。俺の悪夢。それで間違いないはずなのに……。子どもがいる。それも三人も。しかも、普通のコンテナの感覚で言えばデカすぎる、テラ・マスドライバー仕様のコンテナをぶつけるには丁度良いと思っていた中間倉庫にだ。頭が痛い。

まあ一般常識的にいって、マスドライバーが打ち上げたコンテナを、ずんぐりむっくりのバージ・シャトルを使って、大気圏外でトッ捕まえると聞けば、『できるのか?』という疑問が一番に沸くだろう。まあ、ダメでもともとやってみるという意見がそれでもあるのは、落下地点と計測されるフロリダに壊滅的被害を加えるのが分かっている、八千人規模の街を住民の救出も試みないで(時間的に無理があるからだ)『燃やしてしまえ』という軍が示した解決策を受け入れるのが、良心の呵責を覚えるからだろう。

まあ、いくつか対策を試みた後なら、ライダー・プールを『燃やしても』止むを得なかった』と言い訳できる利点もある。バージ・シャトル・ライダーが何人か余計に死んだって、そんなのは知り合いでなくてもなければ数字に過ぎない。

このママたちには気の毒だけど、この子どもたちが無事に生存している可能性は、ゼロから三割未満だな。

詳細を伝えるトークショーを見て、勘弁してくれと思っていた俺の耳に、歩の呟きが聞こえた。それもそうだ。コンテナを仮置きしている倉庫が無重力になると、どうなるか。多分、子どもを押しつ

ぶすには充分すぎる質量をもったコンテナが一斉に動きはじめる。轟き合い押し合う。ぶつかって反発しあう。反動でぶつかったコンテナとは反対に移動し、そちらでもぶつかり合う。

分かりやすく言えば、環境映像の『流氷の海』で砕氷船を苛む氷の塊みたいな動きを、大量のコンテナがするということだ。倉庫の中ではなく、コントロール室にでもいれば良いが、そうでなければ子どもたちが生存しているかどうかより、ママたちが抱きしめられる形が残っているかどうかの方を心配した方がいいくらいだ。

しかしだ。人間というのは子どもは基本的に生きていてもらいたいと思うらしい。ロング・バケーションと洒落こんで、『ピクニックにやってきた』なんて、今どきにしては、骨がある子どもたちが『居る』と分かっているところに、シャトルをぶつけることは、とんでもなく暴力的に聞こえるらしい。俺としては、まあ確実に生存してたとしても、三人の子どもと八千の大人を比べるなら、まあ、前者に泣いてもらうのも仕方ないかなと、冷たく考えてしまうのだが……。はい。良識とやらが軍に汚染されていると非難されればそれまでです。ごめんなさい。

歩の仕事は早い。周回軌道、シャトル・ロード4に既にいたパンピー柏木（彼は、この計画を俺が閃く前から、プールに突っ込むと騒いでいたらしい）に、先ずマストライバーをキャッチできるか試させて、成功したならば、とりあえず一発ぶつけてみて、計算上の効果と実際の効果を摺り合わせて、頑張っつていつもとは違う場所に突っ込む、不幸なシャトルライダーが何人必要か計算してみると言っていた。俺なんかはとりあえず、効果が出るまでぶつけ続けろつて言いたい方だが、まあ、それ方式だと上手くいかなかった場合の損失は巨大になっちゃう。いくら財布がデカイといつても、税金泥棒にも税金泥棒なりの損得勘定があるだろう。無駄になるなら勿体ないことをしたくないというのは、当然のことだ。まあ、何れにせ

よ、データマン齊藤はどうせいつも慎重だ。

パンピーのシャトルは、『若鷹二号』というらしいが、その位置にあわせてマストライバーで発射させるタイミングを決めるために、頑張って計算中だそうだ。

なんでも、プログラムを書くより、直接の考え方を、ホスト・コンピュータに叩き込んで計算させる方が速いらしい。プログラムを書くだけで二、三日かかる上に、悠長にバグ潰ししてる暇が無いという制約があつて、ついでに、歩だからこそできる力仕事だろう。

俺には別の方法も無い訳じゃないのだけれど、なにしろ、加悦さんとジョー、うちのママが居ないのだから試してみようが無い。彼らは、俺が時間稼ぎを頼んだあと4日間を、スカベンジャーワールドで粘っているに違いない。

暇だからというより、そこに映っているから、画面の隅に映っているトークショーを見ていた俺は、良く考えたら辻褄つじつまが合わない点があることに気付いた。軍用回線で無理やりホストを乗っ取つて、俺が直接照会している総合端末に割り込んできた歩。なんで、加悦さんたちが、うまいこと誤魔化してくれているなら。

なんで、歩がここを分かった？ 俺の端末は……ジョーのだ。

何も考えずに、俺は飛竜からの情報で俺を探り当てたのだと思ひ込んでいたが、ED端末の情報を一時的に書き換えるなんて冗談では済ませられない違法を、飛竜に大っぴらに打ち明けた覚えはない。直接やつの職場に押しかけて捕まえて、奴のコンパートメント使用許可は、エントランスについてから掌紋で直接登録した。ネット経由で俺に呼び出しをかけたら、間違いなくスカベンジャーフィール

ドにいるジョーに繋がる。第一、飛竜経由なら、ザキさんのコンパ
ートメントには繋がる訳がない。飛竜だって、俺の所にザキさんが
居るのを見て驚いていた。

やはり、常識的に考えて、歩は目指すIED端末を目標に、それが
現在直接使用している総合端末に割り込んで来たと考えるのが順当
だ。だとすると、なんで、歩がジョーの端末を……。

(ひよつとして……バレて……た?)

例の戦争の時、俺は命令があつたにもかかわらず、人の形をして、
人のように考えるモノを、処分することができなかった。どう考え
てもトリガーを引き絞れなかったのだから仕方がない。折角、軍人
であると宣伝してもかまわない筈の実戦部隊に配属されながら、結
局、役立たず以外の何者でもなかった。民間の専門学校で操船を学
んできたのに後方支援でない所に配属されたのは、騒乱時における
情報の混濁の賜物だろうとしても、できなかつたら無能の烙印を押
されても仕方ない。

単なる役立たずで終わっていれば良かったのだろうけれど、度々、
大量虐殺ミッション(としか思えなかつた)をこっそり妨害した覚
えもある。

五年の単独での労働命令。しかも無重力空間への放逐。どう考え
ても懲罰人事だ。まあ、心当たりがあるだけに、俺は逆らわなかつ
た。軍籍を抜かれて、家畜にもどつて、ただ飼い殺しにされるだけ
の人生にもどつてどうする? 女の子は好きだけど、食べて、寝
て、既に世の中に溢れている人間を増やして。それだけで、今さら
満足できるのか? 宇宙船乗りは、俺の天職だ。壁一つ隔てた向う
にある、永遠に研ぎ澄まされた沈黙から遠ざかつて、俺は生きてい
けるのか? まあ、格好をつけていうならば、そういうことだ。

今回のID書き換えと、自主有給休暇がバレたとなると、スカベンジャーフィールドでの任期はひよっとして無期限になる恐れもある。俺はたしかに宇宙が好きだ。だけど、可愛い女房子どもを持つ、普通の中年オヤジになる夢はまだ棄ててない。五十歳くらいまで、そう、あと十五年前後なら、ちゃんと現役で可愛い相棒を使用できる自信もある。(多分そのくらいは……なんとか……)

金魚鉢ヘルメットを脱いでヘッドセットタイプのインカムに変えていた俺は、マイクを口元まで下ろした。

「あゆみちゃん……」

俺は力なく歩を呼ぶ。明るい家族計画が頓挫したのであれば、覚悟をさつさと決めておこう。少しだけ間を置いて、ぶっきらぼうな歩の声が聞こえた。仕事中に話しかけるといつもヤツは不機嫌になる。(当たり前か)

あゆむ。

「それは、もう良いから……」

俺は続けた。

「お前、どうやって俺の場所が分かった？」

ああ。お前のID端末を呼び出しただけだ。大した技術は使っていない。軍ウチとの非常用回線の受送信アンテナは、死んでないから。基本的にサンガのライダー・プールは、維持・管理、運営にウチは関与できない協定にはなってるけど、緊急避難対策で警察と消防とウチには、メインとは別に非常回線が確保してある。

まあ、それはそうだろう。この危機管理がタコだとしても、それくらいの備えはしているだろう。でも、俺が聞きたいのはそこじゃない。

「俺のID端末で……、ここについたのか？」

お前ねえ……。
呆れたような歩の声。

確信犯の癖に確認するなよ。飛竜にプールに居るって情報もらつて、速攻でお前にコールしたさ。でも、呼んだら、繋がったのが何処かくらい、分かるだろ？ ID端末の情報操作、偽造、改変はたしか5年の懲役か、罰金はいくらだったか忘れたけど過料を負担するかしか無いからな。ちゃんと覚悟しておけよ。まあ、お前なら貯金全部はたけば、懲役は逃げられるだろ……。大丈夫。大丈夫。最悪でも軍籍抜かれな限り、ローンが組める。

絶望的だ。えっと、あと五年、懲役かスカベンジャー続けて、なんとか無事にパンピーの棲息地に帰れたところで、未来の配偶者さんは、とつくと別の誰かと『めでたしめでたし』になってるだろう。有り金をはたくという方式もあるが、筋肉弱者の中年なんて、財布が重くなかったらどんな酔狂な女の子が嫁さんに来てくれるっていうんだ。ああ、俺は飛竜みたいに、キレイで、優しくてなんて贅沢言っていないのに……。

俺はガツクリと肩を落とした。……その時。

チリン。

呼び鈴が可愛い音を立てた。

「タカさん。インタフォンなってる。えっと……誰だと思う？」

「ザキさんの部屋なんだから、ザキさんが出てよ」

俺はちよつと暫く立ち直れそうもありません。ザキさんが総合端末より近いからだろう、無重力での体の扱いに苦労しながらも、ドアフォンの方に移動していくのが分かった。

「はい。あ……、はい。ええ。いらっしやるけど……どちらさま？」

カエ……さん？　そういえば、タカさんは分かる……？」

オレは撥ね起きた。カエさんというのが俺の加悦さんなら、ジョーとママと俺の船ボートが使えるということだ。俺たちがパンピー柏木をサポートできれば、勝率を限りなくアップできる。俺は総合端末のコンソールパネルの下を軽く蹴って、エントランスドアに泳いだ。

ドアを開ける。

「加悦さ〜ん。ジョーっ。俺ってホントについてる」

相棒たちを右手と左手で抱え込んで、俺は、俺の人生にだけ冷たい神様に感謝した。この配慮をですね、明るい家族計画の方にも回していただけたら、もう、毎日の雨乞いダンスを欠かしません。

加悦さんとジョーが浮いている。ジョーは、あの、防御服を着込んでいる。この二人の新人ニューマンのボディは特殊仕様になっている。普通は、自己増殖する生体細胞を使った人工皮膚で、限りなく触り心地が人間に近くなるようにしているものだが、彼らは大気圏という生物にとつての保護膜がない宇宙で、船外活動をする。つまり、脆弱な生体仕様は邪魔になる。だから、そういう生命活動に依存するものは一切使っていない。

人工ニューロンの材質もシリコンオンリーだから、酸素が要らない。外の圧力に合わせて、内圧をコントロールするユニットを皮膚下に組み込んであって、いきなり無重力に晒されても、皮膚が破裂して中身が飛び出したり、水分が噴きだしてしまうようなことはない（もともと水分も少ないし）。生物由来の構成部品がないから、呼吸しているフリだって、人間的外観を維持するためにだけとつてつけた仕様で、たまに忘れていてもある。やっぱり、ここまで宇宙活動用に特化してしまうと、スーパーリアルタイプの連中より

は、人間臭くない。とはいっても、柔らかいし、温かいし、触り倒さない分には区別は難しいだろう。

「良く来てくれた。ホントにお前さんたちの力が欲しかったんだ。それ着てるってことは、分かってる？」

俺が調子に乗って、ちよつと顔を見上げる角度に調整して、ジョーの首筋にキスすると、加悦さんが肩をすくめて微笑んだ。

「うふふ。タカさんの考えてることくらい分かるわ。斉藤一尉からミッションの概要説明はもらいました。私がシャトルライダーさんの突入地点にビーコン立てられるから、それを使ってシャトルの突入角度を調整誘導すればいいって言ったら、信じられないって顔してたわ」

「さすが……加悦さん」

俺は加悦さんの耳の後ろにもキスをした。うん、ジョーよりは柔らかい。

「いつものビーコン？」

「まさか。ここのを使った方が、バージシャトルとの相性が良いわ。出力大きいから。もってきたのは、秘密兵器だけ」

「オーケー。んじゃ、早速、アンテナ立ててきてくれる？ ああ、ところで^{ヒュア}棧橋の場所分かる？ そこまでは、遮断壁が何枚も降りてるから、外、通ってね」

「了解。立ててくる場所は最初の間倉庫でいいよね？ その所為で変えるとしても……どこ？ できるだけ構造の中央寄りの方が良いとは思っただけど」

加悦さんの指先はトークショーだ。女の人たちが映っている。マイクが山ほどつきつけられて、可哀相なくらいだ。青い顔。気丈な顔。俺は視線をそらした。

若鷹二号、柏木です。タカさん、聞こえます？

煩わしいことに、通信は全部、歩に筒抜けだ。

「高柳です。感度良好。若鷹どうぞ」

誘導いただけるということですが、方法を教えてください。

「ビーコン発信用の普通のアンテナを立てます。周波数を確認後知らせますので、数値をそちらでも調整して合わせてください。一度目の発射時間の到達予測時間はわかりますか？」

パンピー柏木が機長モードで喋っているので、俺も合わせてみた。

もう。タカさん。ふざけないで。俺、子どもが居るところに突っ込むの、絶対に厭ですよ。どうやって、どこにビーコン立てるのかは、できるって豪語する人に任せますけど、ターゲット場所を変えてください。頼みます。

パンピー柏木の言うことももっともだ。オレだって、子どもたちが死んでたとしても、遺体を完全に破砕する実行犯にはなりたくない。

「了解。子どもが居なければ……いいな？」

いない所ならどこでもいいです。あ、ザキさんのところも厭だ。

「確認。マスコン確保まで、どの位かかりそうだ？」

テラ・マスドライバー上空まで、20分くらいだと思えます。向うの発射が遅れたら、次の周回まで待つのか、ロードから抜けて逆噴射で静止軌道速度に落として待つのかまでは、まだ、指示がきていません。

「了解。まあ、時間が勿体ない。今はお前の若鷹をぶつけて反応を計測することが急務だから、『待ち』で間違いないだろうな。その

心づもりで。えっと……ホントにどこでもいいか？」

警沢は言いません。

中央回転軸付近ではなくなるが、俺にはもう一つ、完全に無人が保証された区画に心当たりがある。正気なら絶対に突っ込みたくない場所だけだな。

「歩。どうせ聞いてるだろ？ 中央じゃなくて、外のドーナツにぶつけても、計算可能か？」

可能だが……。あんまり極端に、角度が変わると……ありがとうくないな。

「まあ、特攻隊の青少年の精神の健康のためには、仕方ないだろう。えっと、柏木くん。角度の調節は俺の相棒にサポートさせるから、俺が指示するポイントには、シャツルで突っ込んで、マスコンはわかより中央の空間にめり込ませる形で突っ込めるか？」

それなら、重さがあるコンテナは中央回転軸に近くなる。中央倉庫にぶつけるとしたらコンテナでシャツルは構造物の間にめり込んでもらう予定だったが……。

案の定、流石に即答はない。構造物にコンテナをぶつけると、自分が乗っているシャツルでぶつかるのでは、そりゃあ、必要な覚悟の種類が違う。悩んでていいけど、猶予時間は18秒くらいにしようか。

了解しました。誘導宜しくお願いします。

通信が切れる。俺は溜息をついた。男だ。パンピー柏木。悩んだのは12秒フラット。

俺は加悦さんを促して、総合端末のモニター前にもどった。ライダー・プールの『酸素濃度』で色分けした全体図を表示させて、指で赤く塗られた区画を抑えた。

「加悦さん。最初に発信アンテナたてるのは、ここ。若鷹が無事につつこまったら、初期目標の中央倉庫に移動させて。第二陣以降は、中央倉庫に目標を戻す。ジョー、お前は飛んでくれ。ロボットアームを使って、若鷹がマスコンを捕まえるのを補助。できるか？ ついでに、マス・コンの慣性に若鷹の方が引きずられる恐れがあるから、ネットを若鷹のフックにかけたら、そのまま最大出力でサポートしてやってくれ」

「了解。ボス」

ジョーが軽く請け合うと、加悦さんが胸を反らした。

「できるか……ですって？ 当たり前でしょう。宇宙空間は、私たちのニッチよ」

当然というように頷いて、ジョーが親指を立てる。俺はその大胆で頼もしい物言いに、半ば呆れて微笑んだ。

「随分、デカイニッチ（隙間）だなあ」

加悦さんが、ヘッドセットを頭から外して、^{ヘルメット}金魚鉢に手をのばした俺に聞いてくる。

「で、ボス。貴方は何をやる気？」

当然の質問だろう。

「ちよつくら子どもたちを迎えに行ってくる。生きてても……ダメでも、子どもはママの所に帰らないとな……。残念ながら手は二本しかもってないから、若鷹を突っ込ませてから中央倉庫にビーコンアンテナ移動させて、そのあとで手伝いに来て……」

「そっちも私がついでにやるわ。ボスは人間なんだから、くれぐれも自重して」

俺はチツチツとばかりに人指し指を振ってやった。

「任せたいのは山々だけど、お前の手も二本。子どもは三人。だめ

だったら一人でなんとかできるけど、無事だったら手が足りない」
加悦さんが、大きいため息をついた。

「……それもそうね。でも、タカさん、絶対に無茶はしないでよ」
「当たり前でしょ。俺、自分勝手だもん。任せて……」

加悦さんがこれ見よがしに鼻を鳴らした。

「やっぱり、信用できない……」

絶対に聞こえるように言ってるよ。

それから、俺はヘッドセットのマイクだけ掴んで口元に寄せて、
歩を呼んだ。

「聞いてたろ？俺たちは、ちよっくら現場で補助業務にあたって
みるから、管制は、お前んとこでやってくれ。手はあるんだろ？」

まあな。止めたって、どーせ行くだろ？ あっこにお子ちゃま
たちが居たら、普通の神経してたら、誰も突っ込めないからな……。
お前は、パーセンテージあげるためなら、何だっしてする奴だ……。

「あーっ、あゆみちゃん。俺がそんなに冷たい男だと思ってるの？
失礼だねえ。迷子になって困ってる子どもが居たら、迎えに行く
のは大人の役目だろ？パーセンテージで動いているなんて、失礼
な野郎だな」

歩だ。まあ……、今回はそういうことにしといてやるよ。

それから俺は、歩には言わなくても分かることを付け足した。一
応、いざって時に、奴がGOを躊躇^{ためら}い無く出せるようにしといてや
るよ。親友だしね。

「帰ってくるのが遅いと思ったら……、迷わずぶつける」

一瞬だけ、歩の顔が苦汁を舐めたようになった。でも、奴はデー
タマンだ。情にほだされて数字を読み間違える愚は犯さない。八千
と、3+1。比べられない馬鹿じゃねえ。奴はいつもの冷静な口調

でいいやがった。

分かった。そうさせてもらおう……。でも、葬式はしてやらねえからな。

上等だ。

「えっと……準備しよ……。ザキさん」

俺は、ヘッドセットをそのまま捨てて、振り返った。このタイミングで呼ばれるとは思っていなかったようで、ザキさんが不思議そうな視線をくれる。

「何か手伝えること、あるのかしら？」

「えっと、貸してもらいたいものいくつかあるんだけど」

「あるものなら……。というか、見つかるものなら」

この部屋の惨状からみると、正確な答え方だ。体使ってる商売の女の子にしては、頭がいい。俺は感謝を込めて頭を軽くさげた。

「大きめのリュック。ある？」

「リュックは持つてるけど、大きさ……。大丈夫かしら……」

「使えるかどうかは俺が判断するから、探してみて。あとは……裁縫道具が本当はいいけど、針と糸は使えねえから、荷造りヒモ」

「荷造りヒモって、雑誌をゴミに出すときまとめるアレでいい？」

「それで充分。それから、シート3枚。えっと、足りなければリュックに入れば良いから、タオルケットとかでも良いけど」

ザキさんが怪訝な顔をしている。

「上の倉庫に子どもたちを迎えに行くって……。言ってたのに。何に使うの？」

正直に答えるかどうか、迷う。

「俺のポリシーなんだけど……」

一応説明を試みる。ザキさんが目線で先を促してくる。

「俺って、臆病だから、可能な限り、最悪を想定して行動するよう

に……いつもしてるんだ。これは、使わなくて済んだら……それに越したことはない」

彼女はきよんととして、まだ分からないという顔をしている。

「遺体収納袋よ……。ボス、時間がないわ。ちやつちやと金魚鉢つけて。手袋装着、手伝ってから行くわ……」

加悦さんが時間が惜しいとばかりに切って捨てた。ザキさんがひゅつと音を立てて息を飲むのが分かった。化物を見るような目で、俺と加悦さんを交互に見てくる。効率優先は、俺たちの内輪ではないつものことだが、冷たく聞こえるだろう。そりゃ、俺だって生きる方に賭けたいさ。でも、すりつぶされてた場合だって、持って帰って来なけりゃ、心優しいライダー連中は絶対に突っ込めないだろう。ママたちだって、カタチがなければ泣きにくい。生きてても、ダメでもつれかえる。道具が必要。それだけだ。

ただ、加悦さんには……歯に絹を着せるという、美しい心の動きを今度レクチャーしとかなあかな。

俺はとりあえず金魚鉢ヘルメットを服に装着すると、手袋グローブをつけて、加悦さんを見た。彼女の人工眼球カメラアイが、俺の目をじっと覗き込んでくる。俺の網膜情報を読み込んで、そのまま情報を自分の掌に転送して、手袋と服を封印させてくれるのだ。スペジャケを船外活動に使うとき、手袋の密着は一人ではできないのが常識。これって便利でしょ。

俺の耳を吐き捨てるようなザキさんの咳えくきが抉えくった。

「人非人……」

加悦さんが、30度ほど体を捻って左の眉を吊り上げ、ザキさんに冷やかな一瞥いちへつをやった。

「役立たずより……マシでしょ」
全く、女って奴は……。

14・チーム・スカダー発進GO！

ザキさんの個室^{コンパートメント}を出て、比較的浮遊物が少ない通路を、俺と加悦さんは、いつものように素早く移動していた。無重力空間では、速く移動したかったら、筋肉を使つてはいけない。むしろ力を抜く。踏み出す足と反対の普通なら踏ん張る足で、二歩目の取っかかりになりそうな壁などへ到達できる角度と方向を微調整しながら、距離に合わせた力でゆっくりと蹴り込む。二歩目をとるときに、進行方向がブレないように体勢を修正するが、両手を使つてバランスをとる。もちろんこんな風に移動できるのは閉鎖空間だからだ。純然たる宇宙空間は、とっかかりがないし、蹴る壁も無いし、止めてくれる遮蔽物もない。推進力を持っていない人間には難しいというより、制御不可能だ。

「どこから出入りしてる？」

俺はそのまま喋った。スーパーリアルタイプの新人^{ニューマン}ボデイは、人間らしく見えるように気をつかいすぎて、実用的で便利な機能をあまりたくさん盛り込めていない。まあ、異常に重くて力持ちである以外は、人間と変わりない無能加減を持っている。(人間程度の有能さももっているけど)

だけど、加悦さんとジョーはちよつと違う。もちろん、準人権が認められるそもそもの大前提である、経験を蓄積して現実に行動したときのフィードバックを溜め込んでいくことで、思考に幅とバリエーションを持たせることができる、新人^{ニューマン}と呼ばれるに相応しいAIはもっている。

けれど宇宙で活動することの便利をとつて、人間らしさのある程度思いきつて捨てている。俺は金魚鉢^{ヘルメット}を被ったり、ヘッドセットを利用したり、携帯端末だの総合端末だのに張りつかないと、無線通

信もインターネットプロトコルを使った通話もできないが、彼らはボディの中に受発信の機能も埋め込んでしまっている。通話の時は雑音を少なくするために、通信時は拍動『ごっこ』や呼吸『ごっこ』をしない。

スーパーリアルタイプのボディは、皮膚の細胞などに生物としか呼べないものを増殖させて使っている。新陳代謝での必要から、水や酸素を循環させて自分の構成要素をフレッシュに保っている。彼らの呼吸や拍動は自律で行うようにチューニングされるものだ。そう。けれど、加悦さんたちは、普段、自然な人間っぽさを装うために形だけ真似^{マネ}しているのだ。まさに『ごっこ』だ。ごっこ機能を捨てている加悦さんは、微妙に人形臭い。

「プールの構造外に走っている上下水道の、定期点検用出入り口です。もちろん、エアロック構造になってます。エアロックいいですよ。私たちも圧力管理をのんびりできるので、楽チンです」

「できるけれど体内圧を瞬時に変えるのは、やはり気持ち悪いといつも言っている加悦さんを知っているから、俺は『楽チン』という言葉の方に微笑んだ。

「ザキさん……悪気と言ったんじゃないと……思う。彼女は見掛けはあんなだけど、多分繊細なんだ」

「私はどうせ見掛けと違って繊細じゃありません」
俺は可笑しくなる。まるで女の子そのものの科白^{セリフ}だ。加悦さんは人工物の特権というか、まあ、ありがちなパターンというか、妖精のような、人形のような……つまるところ、端麗な外見をしている。軍の調達部の連中がどういった基準で選んだのか疑いたくなるような、妖しく少女めいた雰囲気をしている。もしかしたら、長期任務の俺に気を利かせたつもりかもしれない。(だったらリクエストくらい聞いてくれ！)

とにかく、皮膚をスーパーリアルタイプ仕様にしてから道を歩けば、十人男が通ったら、十人が振り返るような美少女なのだ。

「そこで笑わないでくださいよ。なんでもかんでも、茶化してしま
うの、タカさんの悪い癖だわ」

加悦さんたちは俺のことを普段は『タカ』、仕事中は『ボス』と
呼ぶ。ボスというのは、どうにも俺の個性には似合わない呼称だけ
れど、彼らが緊張しているのかりラックスしているのか分かって便
利だ。第一、呼ばれ方なんてやつは、呼ばれる方には、せいぜい好
みの種類をリクエストすることくらいしかできない。

「何言ってるんだか。加悦さんは、タカさんが眉間に縦皺たてじわ寄せてる
ところなんか見たら、絶対に病気だ何だって余計な心配しちゃって、
騒ぎ立てると思うな。加悦さん、タカさんに甘いから」

ジヨーは加悦さんが居ないときはよく喋るのだが、彼女が居ると
なかなか発言するチャンスが回ってこない。寡黙かまくではないのだけ
ど、どうやら『同意見です』という意思表示は無駄だと思っ
ているフシがある。だから、結果として黙っていることが多い。こ
うやって加悦さんと意見が違うときは、元氣よく会話に割り込んでくる。

「だって、あの女。絶対にタカさんもひっくるめて、あんな言い方
したのよ。どこの人間が、死んでるかもしれない赤の他人の子ども
命懸けで迎えに行くっていうのよ。タカさんは私たちと違うのよ。

宇宙空間で防護服が破けただけで死んじゃうのよ。酷い侮辱だわ」

「加悦さんが怒ることじゃないよ。タカさん、分かっているんだから」
ジヨーも分かってくれているじゃないか。俺は心底有り難かった。
操船学校の時にゴールデン・クルー（あれも相当恥ずかしかった）
とひっくるめて呼ばれていた飛竜に歩。それから、若干種族は違
うけど、今、チーム（チーム・スカダー）つーセンスの悪さはどう
にかしてくれっ）を組んでいる加悦さんとジヨー。俺は仲間にはい
つも恵まれている。

「ありがとう。ジョー。それにしても……。あれが、マトモな正義に役立つ日がくるとは、まあ、いろんな事が起こるよなあ。お前が飛んでるのみたら、みんな卒倒するぞ」

俺は話題を変えることにした。落ち込んでいたって、難しい仕事の難易度がさがるわけでもない。それにいろんなことを茶化し倒して、笑ってる方が楽しい。楽しくやるってことは不真面目ってことじゃない。

「それも、あの、ロボットアーム、背負って」

加悦さんが機嫌を取り直したのか、ちよつと破顔した。やっぱり彼女は笑ってる方が断然、可愛い。

「あれ、可笑しいのよね。正面からみたら頭にロボットの手が生えてるんだもの」

「普通で感覚で言ったら、防護服なしで、船外活動してる加悦さんの方が、心臓に悪いと思いますよ」

「スカート履いてくれば良かったかな」

「やめときなさいっ」

俺は間髪入れずに止めておいた。宇宙の基本的な闇。地球の青光り。射る太陽光。落下しつつあるライダー・プールの外壁をスカートの裾を翻して散歩する加悦さん。そんなもんが船外に居るのを見た日には、冷静沈着が基本形の宇宙船外活動士だって、幽霊かオバケだと肝を冷やすだろう。なまじっかりアルにできてるから、始末におえない。間違いなくホラーだ。

ジョーも均整とれた、素晴らしい肉体をしている。まあ、こいつらは作った連中の美学が単に反映されているだけだから、外見を褒めたところで意味がない。飛竜やパンピー柏木みたいに、大気圏突入をルーティンワークにしているがために、自分で鍛えてコレに近い体を作り上げているライダー連中は、素直に凄いと思う。

ジョーが着ているのは、一昔前の宇宙飛行士が使っていたような、

ダブダブのスペース・ジャケット（俺たちはレトロに防護服と呼んでいる）だ。表面にびっしりと耐熱タイルが貼ってある。これが、ジヨアの特別仕様ってヤツなのだ。

それはジヨアだって、構造物に近い場所で動くなら、加悦さんと一緒に別にスベジャケなんぞを着る必要はない。が、パンピー柏木のシャトルがマスコンを捕まえやすいように、直接出向いていって手伝おうという、それは親切な魂胆なのだ。

なんで、そんなことができるのか。種明かしをしておこう。俺たちの健全なる『遊び心』の賜たまものの秘密兵器により、ジヨアは単体で軽快飛行機イトフライヤーになれるのだ。（どうだ、驚け！）

俺たちは日頃、退屈極まりないスカベンジャーフィールドで、楽しくロスコン・ハントできるように、色々なモノを思いついては作って、使って、遊んでいる。

俺の簡易加压室だって、微細重力空間でモノを振り回すと、振り回される方だけでなく振り回している方も振り回される（なんちゅう分かりにくい表現だ）をクリアするために、回転方向とは逆にロケット噴射するなど、開発には時間が掛かったものだ。

ロスコンを捕まえるネットを張るのに、最低三点（二点じゃ面にならないのは、宇宙空間でも常識として通じる）が必要だ。スカダアだけでなく、もちろんプレデータもチームは基本的に、三機の軽快飛行機であるキャッチャーボート乗りで構成される。乗り手は、人間だろうが擬人だろうが、単なるロボットだろうが、リモコン操縦の無人機だろうが構わない。ただ、三機の軽快飛行機とその操縦者が必要ということは、誰にも文句は言わせない。最初は俺たちだって、きちんと三機のキャッチャーボートを使っていた。

ある日、ネット放送でテレビ番組を見ていたジョーが言った。

「ねえ、タカさん。あれ……やってみたいなあ」

それは、男の子向けの戦隊モノという奴だった。いわゆる巨大な悪の組織が悪いことをするのを、無謀な突撃と、勝算のある攻撃の区別がついていないガチんちょがチームを組んで阻もうというコンセプトで毎回の話が成り立っている番組だ。一般社会常識的にいって、子どもの無謀は大人の狡猾と経験には勝てないものだが、『篤い友情』（熱いというのはアテ字だよなあ）と、『尊い自己犠牲』（別名、自己満足）とで何故か無謀に軍配が上がるといふ不条理極まりない展開で進む。

ジョーは見掛けは二十代後半位の立派すぎる大人だが、工場のラインを降りてからは十年経っていない。しつこく反復しなくても学習が定着するから知識のレベルはちよつとした科学者並だが、精神の動きは子どもでしかない。加悦さんのように人が集団で暮らす『街』環境に殆ど触れないまま、俺なんかのチームに飛ばされてしまつて、可哀相に、なかなか人間関係の中で普通に覚えていくことが定着しない。新人と付き合う難しさは、実はこの見掛けの年齢からでは、彼らの実年齢が把握できないことにあると俺は思っている。二十代後半は行ってそうな外見のジョーと、幼さが残る少女のような加悦さんを並べて、年季が入っている海千山千は加悦さんの方だと直感できる人間は居ないだろう。

付き合いだした頃は、ジョーがホンキで戦隊モノに熱くなってい

るのを見るのは、不思議な気がしたものだ。加悦さんとの関係も、職場での経験が違う同僚というより、どちらかというところ『親子』に近いものがある。

見掛けは大人、知識量は玄人^{くわんじん}、考え方は子ども^{こども}のジョーは、困ったことに、この手の番組が大好きなのだ。このテの番組で使われている科学技術は、一体何年時代を先取りしているのか、はたまた遅れまくっているのか、もしくは異世界のことなのか全くもって不明だ。現在大人気で、ジョーがお気に入りの番組は何といっても『宇宙戦隊ミラーズ』。受けなければさつさと過去のものになるこのテの番組では珍しく、もう五年以上はつづいてる長寿番組だ。(ジョーと出会った頃には、もうやっていただけの話だ。いつから始まったのかまでは、知らん)

件の^{くだん}呟きを、ジョーから引き出した回は、悪の組織ディアハートに連れ去られた紅一点のミラーズ・ピンクを、リーダー格のハヤト(通称ミラーズ・レッド)君が命を懸けて助けにいくという展開だった。

宇宙戦隊というからには、基本的に宇宙空間で戦っていることが多い連中だが、結構物理の法則を無視している。どうも、ゼロGとiiつつ、ルナGでものごとが進み、宇宙空間でありながら大気もあるような雰囲気なのだ。

悪の組織の連中とミラーズが対峙するとき、いつも頭がそろって画面の上になっているのは、宇宙人としては納得いかない。しかしまあ、かっこいいハヤトが斜めで凄んで、ディアディア(ディアハートのその他大勢の名称ね)の頭があっちこっち向いてるのは、絵にしたとき締めまりが無さ過ぎるのだろう。

ディアハートは巨大組織という割りに人材不足らしく、その他大

勢の兵隊さんたち以外で目立っているのは総裁様。あとは『司令』
という呼称ながら慌ただしく実動もこなす、マルチなキシユワード
閣下（ご苦労さまなことに、作戦も立てるし、突撃もする）。あと
は、悪の科学者カシスさま。彼女がやってることはどうも『異種間
遺伝子交配』なのだが、使う道具は顕微鏡じゃなくて並んだ試験管
で、その遺伝子配合の結果できあがる怪人は、交配元の動物がよく
分かるように『キメラ』になっているという理解に苦しむ設定だ。
医学博士級の知識を持ち、宇宙力学、物理学、運動学においては深
い理解をもっている筈のジョーが、空気がない筈の宇宙空間で、化
学式ロケットとしか思えない推進装置で動く（足の裏から噴きだし
ているその炎の形は、どうみても有酸素、有Gだよつ。第一、化学
式なら燃料タンクいるでしょ！）ミラーズ・レッドに喝采できると
いうのは、理解に苦しむ。まあ、このアンバランス加減が、ジョー
の可愛さなだけどね。

宇宙空間を、圧力管理がいかに難しくそうなライダータイプのス
ペジャケを着ただけの生身で（流石に金魚鉢^{ヘルメット}はつけてるけど）、燃
料タンクも身につけず、換気装置なし、一酸化炭素除去用空気清浄
機なし、酸素ボンベなしで、靴底から炎を噴きだして『飛んでいる』
ミラーズ・レッドと同じことをしてみたい。

全く、小学生のガキレベルのジョーの何気ない一言。仕事に使わ
れる時間は仕事をしているからいいが、人間が主体の職場と同じよ
うに自由時間ももらっても、その暇と、時間とを紛らわす楽しみが
無い環境でなければ、その思いつきは『バカ』の一言で片づけられ
たかもしれない。だけど、俺たちは基本形として退屈しているのだ。

「面白そうじゃん。やるやる」

俺は二つ返事で、ノった。

ではここで、マジック、宇宙飛ぶジョーの、モトネタがミラーズ・レッドとは思えない程に変化を遂げたに仕掛けについて説明しよう。(マニアック発明家、ミラーズ・グリーンが発明品を説明するときみたいに読んでください)

化学式の燃料タンクを背負うのは、事故が有ったときにしゃれに
ならないし、第一燃料の継続補給が難しい。私たちは先ず、キャット
チャーボートの推進力と同じ、ビームエネルギー推進方式を使おう
とした。

最初は普通にパルスレーザーエネルギービーム(PLEB)を母マザー・キ
船から発射して、光学的に後部の狭い一点(この場合は靴底)で受
け止めさせ、そこを超高熱にしてプラズマパルスに変換させる方式
を採用しようとしたが、問題は大きかった。キャットチャーボートの
推進装置にレーザーを当てるようには、動きすぎて小さすぎる焦
点を追い掛けられなかったのだ。

それからDIY(Do It Yourself)方式の日曜工
作では、大気圏突破時にはごく一般的なこの方式で必要となる材料
も調達できなかった。パルスレーザー方式において、水素を推進剤と
して800秒の比推力を作ろうとすると、燃料室内の温度が200
0度になってしまふのだ。市販品の中には推進力発生装置本体を構
成するに相応しい耐熱材料が見つからなかったのだ。耐熱タイルな
んぞでは対応しきれぬ温度でない。それからもう一点の問題が、た
とえ耐熱素材が入手できたとしても、いくら丈夫なジョーの構造で
も、その温度に晒されたらひとたまりもないということだった。お
手製防護服に耐熱タイルを貼ってもみたけど、素人工作でしかない。

剥がれたら……。そんな高温を抱えた装置を身につけることは、どう考えても危険としか思えなかった。

そこで私たちが試したのが、波長が10マイクロメートルの炭酸ガスレーザー光を、推進剤としてタンクに詰めた水を水蒸気にしてノズルに通す、熱交換型レーザー推進装置であった。この方式ではノズル内の水蒸気がレーザーパワーを吸収するので、材料の熱負荷が激減するのである。(あーっ、もう疲れた、説明終わり)

短く説明し直すと、水を推進剤にしてタンクに詰めて、ブーツの『ふくらはぎ側』に装着したノズルに低温の蒸気を満たし、そこに光学レーザーではなく肩に装着したレーザー発振器から出る炭酸ガスレーザーを当てて、推進力を作り出すのだ。

残念ながら、この物凄い発明には、相当にかっこ悪いオマケがつく。ヒント？ 単純に構造的な問題だ。『ふくらはぎに装着したノズルにレーザーを肩方向から当てる』ここがヒントです。正解者居ますか？

では、ちゃっちゃと答え合わせ。レーザー推進方式の場合、進む方向はレーザーがやってくる方向の反対になる。そう。ジョーのリュウエストにお答えして、スカダー・チーム総力をあげて手作りおもちゃは、足方向に思いっきり飛ぶのだ。ジョーはレッドのように頭の方に腕を伸ばして飛びたいらしいが、贅沢を言うな！ 大気圏内用飛行機と同型の、どう考えたって尖った方に進むとしか思えないシャツルだって、ケツから大気圏に突入するのだ。ノイプロブレム 問題無し。

加悦さんの案内で辿り着いたプールから外へ出るエアロツクの中で、俺は二人とも了解しているはずだと思いつつ、確認のために一応これからすべきことを整理した。

「ジョー。とりあえず、母船にもどってロボットアーム背負ったら、この辺で待機ね。若鷹二号の柏木機長と、地上管制、ドバイ宙港のと軍のと両方ともだよ、無線を聞いておくこと。地上からマスコンが発射が遅れても、若鷹二号は多分逆噴射をかけて、地表からの見かけ上の静止スピードで待機する筈だ。もう一周回ってくるのはナインセンスだからね。でもって、マスコンが飛んできたら、ロボットアームでネットを掴んで、若鷹二号のコンテナ固定フックに引っかける。できるよね」

「もちろんの了解」

ロボットアームというのは、まあ、マザー・キャッチーが俺たちが捕まえて連れてきたマスコン（マスドライバー用コンテナ）をその本体に係留するときを使う荷役用の腕のことだ。こいつが壊れたら仕事にならないので（捕まえたコンテナは持つて帰らないとね）、ロボットアームには予備がある。そいつを「壊れたら返すもん」とばかりに失敬して、レーザー発振器と邪魔し合わないように気をつけて肩の部分に装着したのだ。これは、キャッチャーボートに乗らないで、ネットを広げる仕事をしたいという我が儘なジョーの仕事用につけてやったものだ。いくら丈夫なジョーでも、質量がバカと大きいマスコンを捕まえたネットを手掴みにしたら、絶対に腕が干切れる。

そういう訳で、スカベンジャーフィールドで俺たちのチームが口スコンを捕まえる時、俺と加悦さんは普通にキャッチャーボートに乗るが、ジョーは光り輝く耐熱タイルがついたままの（剥がすのが単に面倒だったから）防護服に、自分より大きいロボットアームを担いで、足の方向に飛んで行くという、滅多にないほどケツタイな存在になる。

「加悦さんは、プールの慣性から振り落とされないように注意して、若鷹二号の誘導を助けるビーコンアンテナを取ってきて、このポイ

ントに立てる」

「……了解。一つだけ確認していい？ ボス」
「なんでも」

「ここは、何するところ？ 本当に人は絶対に居ないの？」

「……絶対に居ない。酸素ゼロだもん」

加悦さんが、ちょっと怪訝そうな顔になる。考えても思い当たらないのだろう。俺は時間が惜しかったので、気を持たせないで直ぐに教えてやった。

「腐敗を防ぐために脱気してる有機廃棄物貯蔵庫」

加悦さんが呆れたように目を剥いた。

「……そんなところに……、コンテナじゃなくて、シャトルで突っ込めって……。凄い極悪」

「だって、パンピー柏木くんたら、中央倉庫とザキさんとこと、人間が生きてそうなところには突っ込みたくないって、そう言うんだもん。しゃーないじゃん」

加悦さんが肩をすくめた。俺は話を先に進めた。

「次に、無事に若鷹二号が大破を免れてたら、柏木機長を救出してこのエアロックまで誘導。大破してたら場所が場所だけに悪いけど、中まで迎えに行つてやって。それから、もう一度アンテナを回収して、次は中央倉庫に立てる」

「了解、ボス」

「んでもって、俺は……中央倉庫にお迎え部隊だな。じゃ、それぞれのやるべきことを、まあ、それぞれのやり方で宜しく。俺は細かいことは気にしないから……」

ジョーが肩で笑っている。有機廃棄物貯蔵庫に、お迎えに行く加悦さんを想像しているに違いない。全く、ガキは排泄物系に話題が行くと、どうしてもああ喜ぶのか不思議だ。

「んじゃあ……、チーム・スカダー発進GO！」

もちろん、ジョーが大好きな宇宙戦隊ミラーズのレッド、ハヤト

の科白セリフ『戦隊ミラーズ、発進GO』の盗用バクリだ。どうせ俺たちはサバ
ンナのお掃除部隊フンコロガシと同じカテゴリ名称で呼ばれてい
る仲間だ。俺が『スカダー』と言ったのを可笑しがってか、加悦さ
んがケタケタ笑いながらエアロツクの外への扉を開いた。笑い声は
ザキさんのころころが絶対に上だな。

軍用品でクウオリティーはそこそこあるけど、丈夫さでは決して
船外活動向きではない簡易スペジャケの俺。まったくその辺を散歩
しているような普通のタウン・ウェアという『いでたち』の加悦さ
ん。それから、キラキラ輝くダブダブ防護服のジョー。俺たちは、
見掛けはバラバラだけど、間違いなくチームだ。

俺たちはそろって宇宙そらに零こぼれていった。

15・優しい男

一人にもどった部屋は、いつもの何倍も広く感じられた。尾崎未知香は耳の奥でまだ響いている声を感じていた。

役立たずより……マシ……。

涙が出てきそうになる。自分が何をどうして良いか全く分からず、どうにもできなかった時間。自由に動くことができない無重力。ありとあらゆる物が浮遊し、何気ない様々な物が脅威と化した自分の部屋。自分の持ち物でさえこれほどに凶悪なのだから、外に出ることが怖かった。逃げることなど考えもできずに、ただ頼りなく浮いていた。恐怖に満ちた時間。

どこにも通じないケイタイを握りしめて思っていたのは、シャトル・ライダーをしている柏木恵心のことだった。未知香が勤めているのはトレーニング・ジム。フィジカル・インストラクターとして筋力トレーニングに勤しむ彼らライダーを補助するのが仕事だ。

彼らはみんな、大きくて無骨で、どこか優しい。中でも目立って大きい柏木は、未知香のプログラムの常連さんだ。パーソナルフィットネス・プログラムも柏木は継続して受けてくれている。

まだ柏木が学校を出たての頃、遊び上手で奢り好きの霧島運輸の御曹司、キリーさんこと霧島飛竜が、ジムに伴ってくるようになって以降、ずっと仕事上で親しく付き合わせてもらっている。柏木が来ない日が寂しくなったのはいつからだったろう。予約者リストに柏木の名前を見つけると嬉しくなったのはいつからだったろう。

もちろん、同僚の女の子たちの間では恋人にしたい男ナンバーワンの座に輝いているのは霧島飛竜だ。霧島運輸の御曹司ではあるけ

れど、気取ったところがなく、後輩の面倒みもよい飛竜が、結婚したい男の上位にこないのは不思議な気もする。まあ、女は自分一人が女神様と思ってくれるような男にチャホヤされたいものだから、場数を踏みすぎているように見える男は、遊ぶのには良くても共に家庭を築く相手には不足があるということだろう。

その点、柏木は女つ気が無いことでは折り紙付きだ。なにせ、一番のときはいつもウチのジムにつっこまっているか、飛竜とつるんでいる。彼女がいるなら、少しはデートに割く時間も必要だとは思うから、フリーとみて間違いない。こんなチビの自分では、彼の横に立つのが似合うとは思えない。あと十センチ余分に背があつたら、自分からアプローチする自信も持てるのだろうか。それとも、そんなことは玉碎怖さに一步を踏み出せない自分に対する言い訳にすぎないのだろうか。

飛竜は未知香をよく食事に誘ってくれる。最初の時はデートにでも誘われたのかと思った。飛竜の恋人になりたいとは思ってもいなかったけど、自分の稼ぎでは滅多に行くことができない高級なオーガニック系の食事に行こうと誘惑されて、まあ、食事くらいならと墮落した。待ち合わせの場所で、飛竜が柏木と居たとき……。最大心拍数は、いつもやっているエアロビクス・プログラムの最高値より絶対に上だったという自信がある。

それからも頻繁に誘われて、『もしかしたら』の期待で二つ返事をする。飛竜は必ず柏木を連れてきてくれる。恥ずかしいけれど、多分、飛竜は未知香の密かな想いに気付いて、それで、柏木を連れてきてくれるのだ。柏木の方は、全くこちらの気持に気付いてないのだろう。遅くなったときは部屋の前まで送ってくれるのは柏木だけれど、それだって飛竜に毎度言われていることだ。

シャトル・ライダーというの中には、体が女だったら中身は関係ないと言わんばかりの連中もいるけれど、柏木が聞いてくるのは

いつもフィジカル・トレーニングのことばかり。飛竜の話題の豊富さは比べものにならない貧弱さだ。それでも、喋っている柏木の横顔を見るのはいつも楽しい。おかしなものだ。

役立たずより……マシ……

いつもの外の世界と繋がっているのは当たり前だった。部屋にいても買い物はできるし、引き籠もろうと思えば（資金さえ続けば）何年だって暮らしていける。映画でも音楽でも、『誰かと』一緒にいることにさえこだわらなければ、全部コンパートメントの総合端末で楽しめる。灰色の壁でしかなかった総合端末。繋がらないケイタイ。自分がどうすべきか全く予測がつかない時に、鮮やかに聞こえた呼び出し音。画面をみると昨晚登録したばかりの『タカさん』と表示されている。飛びついた。そういえば霧島飛竜に頼まれていた。速攻で通話状態にする。それからその時まですっかり存在自体を忘れていたことなどオクビにも出さずに叫んだ。

「タカさんっ。無事だった？」

未知香は思う。自分はいきなり無重力に放り出されてパニックになっってしまったって、何もできなかつた。高柳が心配してくれて、どんなことになっているのか教えてくれて、一人で居たくないと言ったら、側に来てくれた。

側に来てくれると豪語してから、実際に高柳が湧いて出るまで、思った以上に時間がかかった気がする。その間の心細さは、高柳と話す前の心細さとは種類が違っていた。依存心。甘え。なんとも呼べばいい。とにかく一人でいることの不安に押しつぶされそうだった。漸くインタフォンが鳴ったときは、本当に嬉しかった。

ドアの向うに居た高柳は、驚いたことに軍仕様のスペース・ジャケット姿だった。滑稽なくらいの一生懸命さでフィットネス・プログラムをこなしていた見慣れぬ男。好きなものを食べさせてやると

言いながら蕎麦屋なんかに連れてくような勝手者。ちょっと飲んだだけで潰れてしまつて、柏木に担がれていた頼りないオジさんが、まるで頼もしい男みたいだった。

ただ何故か、あの時の高柳は酷く青ざめて強張つた表情を貼りつかせていた。何があつたのか聞こうとした未知香を、高柳は『30秒だけ肩を貸してくれ』と言つて、背後に回り込んで抱きしめてきた。問答無用の強引さ。でも、耐えがたい独りの時間の後で感じた男の温もりは、陶酔を覚えるほどに気持が良かった。あのままずっと心地よさに溺れていても構わないと思つた。けれど、高柳は本当に僅かな時間だけそうすると、きびきびと行動を開始した。

まず、あの灰色の壁だつた総合端末を復活させて（自分が知っている形ではないけれど）外との窓を開いてくれた。重力と情報を奪われたこの街の人たちに、正確な情報を開示する道を示していこうと、どんどん手を打っていくのが分かる。何か状況が動くのも待っているのではなく、何かをすれば状況動くこと確信している迷いの無さ。

ホスト・コンピュータにアクセスできる方法（未知香には残念ながら意味不明の言語だつたけれど）を開示し、情報を受け取れる場所をつくり、どういう手段を使ったのか全く不明だが、ライダー・プールの外からの通話も復活させてくれた。画面の向うの向うに、霧島飛竜の顔を見つけたときは、信じられないという気持で一杯になった。迷わない。揺らがない。確固としている。まさに暗闇を照らす灯台。

画面に映っている軍装の男と、全く未知香の理解が及ばない話をしていたが、その言葉の端々まで全てが、非常時の専門家プロフェッショナルといった雰囲気だった。高柳さえ傍にいてくれれば、何も心配しなくて良いと、いつの間にか確信している自分がいた。無条件の信頼感。

普段の未知香は、どちらかという男というものの動物としての

本能を基本的に信じていない。普通に存在している多くの男というものは、女の個性だの人格だのより、『女』であることと、自分が『モノ』にできるかを基準で考えているとしか思えないフシがある。高柳の飄々とした雰囲気には、そういうものが微塵も感じられないのだ。甘え方も触れ方も単純明快。『女の子が好き』という単純なメッセージしか書かれていない。貪欲で鬱陶しい『欲しい』が感じられ無いのだ。柏木とすらしたことが無いキスだつてそう。ママが子どもにするのと同じような『可愛い貴方が好きだよ』と呼びかけられているような味がした。明るくて、優しく、頼りになる男。高柳。

女が訪ねてきた。額のマークがリアルタイプの擬人であることを謳っていないければ、気後れするほどに、妖しく美しい人形。彼女と一緒にいた、なにやら不細工なウェアを着た青年も、驚くほどに整った造作をしていた。こちらにはマークが無かったが、あの不自然なほどの美は、この女と同じく作り物の人形なのかもしれない。この二人の訪問者を迎えたときの高柳の嬉しそうな顔。満面の微笑み。親しげに抱き寄せるしぐさ。気心が知れきつた人たちだけが持つ、独特の雰囲気。嫉妬した。

おかしなことだ。自分が好きなのは柏木恵心。間違いない。高柳は頼りにできる優しい男だが、殆ど未知の通りすがりにも等しい存在。なのに、女の形をした人形に、自分は間違いない嫉妬した。高柳はあのキレイな人形を抱き寄せて、あの衣魚シミどころか、くもり一つない滑らかな首筋にキスをした。私も知っている、欲望も下心も全部取っ払った、あの、『大好きだよ』というメッセージしか書いてない、優しい接吻。

「若鷹二号、柏木です。タカさん、聞こえますか？」

総合端末のスピーカーから聞こえてきた、大好きな男の声。柏木の声まで呼んでいるのは高柳だ。私の部屋なのに。私はここにいるのに。ここでは私はいてもいなくても、どうでもいい存在。ただの役立たずだ。あの人形みたいに高柳に頼りにされることはない。高柳みたいに皆から頼りにされることもない。できることもない。

いつの間にか高柳は、湧いて出た二人の人形と何処かに出掛ける準備を始めていた。また、ここで独り取り残される？ そう思うと不安がみっしりと体に貼りついてくるような気がした。

高柳は、画面に映っているトークショーでやっている、プールの中間倉庫にいるらしい子どもを迎えに行くと、あの人形に言っているのに、大きなリュックが欲しいとか、シャツがどうとか、針と糸がどうとか。そんなものを何に使うのかさっぱり見当がつかない。説明を求めたけれど、さっぱり要領を得ない。そしたら、あの人形が言ったのだ。

ボディバッグよ。

一瞬、体に密着するタイプのバッグを想像した。それから、遺体収納袋をそう呼ぶことを思い出した。遺体収納袋。高柳は迎えに行くとっておきながら、子どもが死んでいるという前提で行動している。なんて冷たい男なのだろう。トークショーは下らない番組だとは未知香も思う。だけど、画面の中で取り乱しているママたちの子どもを案ずる気持ちは本物で、無事を祈る気持ちは子どもが居ない自分でも身につまされるほどに切実だ。それを、死んでいることも想定して行動するというのは、なんとという冷酷だろう。高柳を優しい男だと思っていたのは、側にいる男がそうという生き物であって欲しいという自分の望みがそう思わせていただけなのだろうか。

ビスクドールみたいな人形は、高柳を追い立てるように身支度を手伝っている。見つめ合って、人形の掌が高柳の手首を撫でるよう

に触っている。イヤらしい。高柳は人形とそういうことをする男なのだ。頼りにしていた自分が馬鹿みたいだ。

人でなし。

自分で口にしたくせに、自分で凍りつく程に冷たい響きを持つ言葉だった。言った未知香自身の心の方が、固く強張って、悲鳴を上げていた。

役立たずより……マシでしょ。

人形に、あんなふうに見下されるとは思わなかった。情け無い。一步も動けない。高柳は肩をすくめて、『御免』というように目配せをしただけで、未知香が酷い混乱状態の部屋で探し出したボディバッグの材料をバツクパツクに詰め込んでいった。支度を整えた高柳が、『じゃあ、行ってくるから、ちよつと留守番してて』と言ったのは聞こえたが、返事もできなかった。

今再び一人取り残されて、高柳という男への思いが、入り乱れて未知香を一杯にしている。特にいい男という言葉を添えなくなるような外見ではないのに、いつも底抜けに明るい顔をしている。ゼロGという過酷な現場ですつと仕事をしていると聞いているのに、パUNCHもキックももの凄いい格好悪いのに……、あのハードなプログラムにラスまで食らい付いてくる。頼りになる男。信頼できる男。優しい男。『大好き』のキス。抱きしめられた時の温もり。

……でも。人形相手に欲望を発散する淫猥な男。子どもが死んでいることを平気で想定できる酷い男。私ももう一度独りで放っていき、冷たい男。

何度も考える。私が好きなのは柏木さんだ。高柳という中年男なんて、そもそも存在を知ってまだ四日目だ。なのに、彼が居ない部屋この虚無感、この頼りなさは何だろう。こんなにも無条件で頼

りきるほど、自分はその男の何を知っていると云うのだろうか。こんなに視界から消えるのが寂しいなんて……いったい何の冗談だろう。

「おい、タカさん。聞こえてる？ ちょっと教えて欲しいんだけど……」

再び、柏木の声が聞こえた。モニターに映っているのは、例の『あゆみちゃん』と呼ばれると『あゆむ』と必ず律儀に訂正する男の人の頭だ。彼は多分軍の管制司令室みたいな部屋でなにやら忙しくデータを打ち込んでいる。この斉藤歩という男の人は、恰幅がいいと表現するのが合っているだろう。軍服が似合すぎて大人な男で、どこか風が吹き抜けているような高柳や、どこか浮世離れしている霧島飛竜と違って、地面に足が付いている雰囲気がある。あの三人の男たちは自分たちの間でだけ通じる言葉をもっているようだった。けなし合っているようでいて、喧嘩腰としか思えないようできて、絶対の信頼感で結ばれているのが分かる。

柏木の声は、高柳への思いで乱れている未知香の心を直撃してきた。

「こんにちは……。尾崎です」

未知香は遠慮がちに発言した。自分しか居ないのだ。自分の部屋の総合端末に話しかけるのに遠慮するというのはどこか釈然としないうが、高柳がコンピュータとしてこれを再起動させてからは、個人の回線というより、ライダー・プールという一つの街の命運を左右する中央司令塔の様相を呈している。だから、なんだか自分が出ていいという雰囲気では既がない。

「ザキさんっ？ キリーさんから聞いてました。本当に無事でよかったです。心配してたんですよ。怪我とかないですか？」

柏木の声は自分を心配している。優しい言葉がなんだか嬉しくて……そしたら、高柳の冷たさに腹が立った。

「タカさんは……いません」

「えっ？ 居ないの？ どうして？」

高柳の不在を告げたときの、柏木の声の不安そうなのに、未知香はなんだか腹が立った。柏木だって自分と同じくらいに高柳を知らない癖に、どこまでもすっきり皆で頼りきっている。どうして？ 柏木の方がずっと強そうではないか。なんで、柏木のような男までが、高柳がここに居ないというだけでそんなに不安そうな声をだすのだ。

画面に映っていた『あゆみちゃん』が、未知香が高柳の不在を告げる言葉を発したのに気付いて、顔をこちらにむけるのが分かった。

「中央倉庫に……子どもたちを迎えに行くって……」

『あゆみちゃん』が、一瞬顔をしかめてから、それから、ふっと微笑んで仕事にもどって行った。その一瞬の表情が、未知香を落ち着かなくさせた。声だけの柏木は、鬱陶しいほどの質問を山のように積み上げてきた。

「なんだって？ どうやって？ そっちの街区は緊急遮断壁が降りてて、分断されてるって聞いたよ。タカさん、どうやって中央倉庫へ行くつもりだって言ってた？」

そんなことを聞かれても分からない。

「ごめんなさい。聞いてないわ」

「どんな装備してた？ ダクトとか使って中で移動するつもりか、外を通るつもりか分かるから……」

外と中にどれほどの違いがあるのかは分からない。未知香は言った。

「軍用のスペース・ジャケットでした。特別な装備はしていないと思います」

「じゃあ、中を通るルートかな……。でも、なんでこのタイミングでそんな無駄なことするかな……」

未知香は『無駄なこと』と言った柏木に引つかかった。

「子どもさんたちを迎えに行くののどこが無駄なの？」

「可哀相だけど、倉庫にいたなら絶望的だから……。だよ。固定されてないコンテナが満載の部屋にいて、そこがいきなり無重力になったら、子どもでなくてもひとたまりもない。時間が経ってるし……すりつぶされて……。ミンチになってもおかしくない」

子どもたちがコンテナにすりつぶされてミンチ。その映像を想像して、未知香は胃がひっくり返るような気分になった。吐きそうだがそれに……。冷たい言い方で、ザキさんに嫌われたら……。俺、いやだけど、レスキューの現場では、多くの命を楽に助けられるなら、そちらを優先するのが常識なんだ。子ども三人と……。まだ時間に余裕がある一万近くの住人だったら、三人に構うのはナンセンスなんだ……。そんなこと学校でやったら容赦なく赤点だ」

「柏木さん……。まで、そんなこと……。いうの？」

「数が多い方を助けられるなら、少数の犠牲は、まあ、しょーがないいとも思わないと、シャツルでそこに突っ込むなんて、やってらんないよ。俺だって誰も助けられないなら、プールに突っ込むなんて遠慮させてもらうよ……。皆を助けられると信じてるから……。やるんだ。今はタカさんがこの現場の司令塔なんだからさ、ここには自分が必要だっていくらでも言い訳できるでしょ。だから、その子どもさんたちが生きてるって確信があっても、俺がタカさんなら迎えに行くのは躊躇すると思うよ。違うな。多分やってみようと思っ

もしないな」

司令塔。そんな言葉は思いつかなかったが、たしかに言われてみれば似合っている。

「でも……でも、どうして？」

「怖いから」

柏木の答は単純で明快だった。

「怖い？」

「無重力に慣れていない、パニックを起こしている子どもを三人つれて、移動するなんて、正気じゃできない。俺にはどう考えたって無理だ……」

「でも……、タカさん、シートとか荷造りヒモとか……用意してた。死んでると……思ってるのよ」

高柳が酷い男でないと……、『人でなし』と言った自分が救われない。

「タカさんって、ホントに。すんげー人だな。キリーさんが、あれだけ無条件に信頼するだけのこと、あるよ」

「凄い人？」

「時間がないのに、子どもさんたちが亡くなってた場合も、事実確認するだけじゃなくて、連れて帰って来るつもりでいるんだろ？」

俺たちね、学校で緊急事態回避訓練ってやつをうんざりするくらいやってきてるんだけど……、緊急避難時には、死んでる人間には絶対に配慮しないって約束事があるんだ。死んでいる人間の尊厳にまで配慮するのは、落ち着いて、日常を取り戻してからで充分だし、普通のおきだけでいい。自分が生きるか死ぬかの瀬戸際にいるときは、まず、自分が助かることを最優先させると教わる。レスキューもそう。助けに行く人間は生還する確信がない場合は行動しない方がいいんだ。そうだろ。周りにしてみても、死体は一つでも少ない

方が助かるんだからね」

柏木の言葉は未知香の心臓を掴むようだった。自分たちにも時間が残されていないということ、なぜ、自分は気付かなかったのだろう。

「プールは大気圏に落ちかけてる。そのまま時間を無駄にしたら、自分も含めて、プールに乗り合わせてる生き物は全部死ぬ。そんなときに、他人の子ども命懸けで助けに行っても、プールが落ちたら意味がないだろ？ あの人、俺たちがそこに突っ込むことで、プールの落下が防げるってこと、ちっとも疑って無いんだ……。人事を尽くして天命を引き寄せるタイプだよ」

「命懸け……で？」

未知香がひっかかったのは、その言葉だった。

「今のプールの状態で、中間倉庫まで行こうなんて、余程、無重力での作業に自信がなきゃ、そもそもやるうって気になれないほど、危険なことだよ」

子どもを迎えに行く。その高柳が使った穏やかな響きの言葉の裏に、未知香は危険という匂いを感じる事ができなかった。命を懸けるほどの危険……。

それに、そうだった。ライダー・プールが地球に向かって落ちかけているのだ。それを柏木や飛竜たちシャトル・ライダーが質量の大きいマストドライバー用のコンテナごと突っ込んできて角度を修正しようとしている。危険なのは突っ込んでくる柏木たち。自分は安全な所にいると誤解していた。なんで、そんな能天気でバカな見積もりが立てられたのだろう。

未知香の脳裏に、総合端末に向かってなにやらしている高柳の背中が鮮やかに蘇った。あの背中が見えているとき、自分は、絶望を

全く予測の中に入れることはできなかった。なぜなら、常に状況を少しでも良くする為に、目の前の問題を解決していこうとする彼の姿勢のどこにも、絶望なんか無かったからだ。できることを淡々とこなしていくだけの男の背中には、いつも未来は鮮やかに繋がっている。

自分も含めてここに居る皆が、死に直面していることを、未知香は気付かなかった。けれど、今、そうだと気付いて、高柳の繊細な優しさが胸に迫ってくる。

最後まで言わなくていい。女の子には可哀相だ。

斉藤とそう話していた高柳の声。優しい……。

自分の一つとこの数千。秤に乗つけられないほどケチなのか？

この数千の命を、柏木たちの命と秤にかけると冷酷に言い切る男。つまり、ライダー・プールに居合わせている数千の命を助けるために、命をよこせと飛竜たちに迫っているに等しい。当然数千の方に高柳も含まれる。もしも高柳が自分の生き残りを最優先に、さもしくそうすることを求めたならば、なんという身勝手な言葉に聞こえるだろうか。けれど、高柳には単純に多くが生き延びるための計算しかない。自分が助かるサイドにいるかどうかなど、これっぽちも考えていない。だからこそ、あれほどに自信をもって、非情にも聞こえる言葉を紡げるのだ。

生きてても……ダメでも、子どもはママの所に帰らないとな……。

あの高柳の言葉もそうだ。死んでいたら助ける必要がない子どもでも、ママたちが泣き崩れるためには、体が必要だと……そういう

ことなのだ。生きているママが、これからも生きていくために、子どもをママたちの所に返して上げる。彼はそういつていたので。

高柳はそれとも、鈍すぎて危険だと感知することかできなかったのだろうか。いいえ。違う。

迷わず、ぶつける。

あの人は、自分が失敗する可能性もちゃんと視野に入れて、あの言葉を口にしたのだ。ここで失敗するということは……生きて帰ってこないということだ。

(タカさんに謝らなきゃ……。タカさんに……。いますぐ会いたい)

未知香は涙が溢れるのを感じた。不思議だ。無重力で水分は、水玉のように浮くのかと思っていたけれど、涙は頬に貼りついたまま剥がれていかない。高柳への溢れるような思慕が、未知香の心から零れていかないのを真似しているようだった。

16・ママたちの正念場

「計画中止を……私はお願いできないわ」

セシリア小柳　遊星ママの言葉は、塩屋さとみには信じられない種類のものだった。

「遊星君が居るのよ。信じられないこと言わないで」

塩屋さとみ　崇ママの言葉は絶叫に近かった。

越智涼子と塩屋さとみが、小柳家のコンパートメントの呼び鈴を押ししていたとき、周りはマスコミのレポーターみたいなたちが、奔^{ひし}っているといった勢いで群がっていた。いつもオシャレには細やかに気づかっている美咲ママの白いスカートに、血が乾いたときのような茶色い衣魚が広がっている。スーツ姿がいつも颯爽としている塩屋さとみ　崇ママは、足下だけ、オフィス履きのサンダルだ。そして、セシリア自身はTシャツにエプロンをつけて、首には汗留めのタオルを巻いているという、カメラを向けられるには有り難くない格好だった。

セシリア小柳は可愛い下の息子、遊星がどういう状況におかれているのか、一番系統だって正確に現状把握ができた。なぜなら、それは問題解決に当たっているという軍の人から直接説明を受けたからだ。なぜこんな事になっているのか戸惑っていたセシリアと、どうにも要領を得ない越智涼子と、半分ヒステリー状態のような塩屋さとみを、軍用車が迎えに来てくれたからだ。通された応接室のようなところで、この件について、セシリアたちの担当をすることになったと自己紹介した青年に、なぜ、消防や警察でないのかと聞いたときの答えは恐ろしいものだった。

大気圏に突入してしまっても、燃え尽きることがない大きな施設が、人類の至宝である地球に甚大な被害をもたらすことだけは阻止

しなければならぬ。よって、ライダー・プールを大気圏突入までに攻撃して大破させる、というのが一番最初に国がとろうとした解決策だというのだ。その為、軍にお鉢が回されたのだと……。

背がやたらと高く、軍服がよく似合ういい男系の情報官さんの話しは、年若い割りに説明慣れしているという感じでセシリアにも分かりやすかった。救いが見えてこない話しが分かりやすいというのは、希望を抱きようがないものだ。腹の底が焼けてくるような気がする。

軍部では、ライダー・プールを攻撃・破壊するという国から命令へ準備を整えつつ、落ち行く船に閉じ込められている約八千三百の人命を尊重し、他に方法が無いか模索したこと。そして、時間稼ぎにしなければならないかもしれないが、とりあえずはライダー・プールの大気圏突入を防ぐために、質量のあるモノをぶつけて軌道を変えようとしているということ。普通の宇宙植民地などに比べれば小さい規模ではあるけれど、それでも一万人規模を収容できる巨大な施設の方向を変えるには、なるべく本体の中心に衝撃が当たるようにしたいため、ターゲットが中央倉庫に選ばれたこと。そして、マスドライバー・コンテナという耳慣れない名前の巨大コンテナを抱えてライダー・プールに突撃してくれるのは、民間のバージ・シャトルの運転手さんだということ。

軍の人は、いざというときに命を張れることを前提として、生活の一切を国がまかかっている人種だ。セシリアは、なんで軍人さんが突っ込まないのか聞いたけれど、マスドライバー・コンテナを扱うには特殊な荷役設備が必要で、軍がもっているそれを輸送してもってくるのを待っていたら、間違いなくライダー・プールは大気圏に突入してしまうという説明だった。

民間の企業さんが、緊急事態に対応して、引き受けてくれたこと。シャトルの運転手さんは、命の危険も考慮して強制ではなく、申し出てくれた人だけに限定しているということ。なにもかもが驚くべ

き話だった。

そして実行する直前になって、そこに子どもが居るということを、軍の特殊な情報源ではなく、他でもないテレビのトークショーで知ったこと。常日頃であれば、子どもの命を最優先にしたいが、ライダー・プールの落下が防げない状態になってしまったら、最初の国の決断通り、ライダー・プールへの攻撃は速やかになされること。その為に既に大型のミサイル巡洋艦が、ライダー・プールが射程に入っている場所で待機していること。

ライダー・プールへの通信手段が限られているため（全くの不通では無いらしい）^{ピア} 棧橋に大型の客船を横付けすることが難しいこと。いきなり無重力に曝された居住区内での混乱が予測できることから、八千という数字の人間を救出するための投入人員の規模を検討中であること。とにかく、ライダー・プールが落下するのが少しでも先のばしできれば、打開策が見つかるかもしれないこと。

明解な説明だが、聞いているだけで圧倒される。なんとという事故がおきたのだろう。なぜ、子どもたちが無謀なことをしてかした、このタイミングで起きてしまったのだろう。

混乱するセシリアにとっては止めに等しい最悪な情報もあった。有Gしか想定されていない、無人の物資運送コンテナの保管倉庫が無重力になってしまったとき、その中でコンテナがどう動くのかのシミュレーション画面だ。『砕氷船を苛む流水の塊』という表現を、あの背が高い情報官さんはしていた。そして、あの憎らしい男は、そのPC画面の中に、人形のオブジェを落とし込んだのだ。すりつぶされる。押しつぶされる。千切れる……。今は跡形もない。跡形もない。……跡形もない。

美咲ママはその画面を見て失神した。赤ちゃんにおっぱいをやってるのだ。当然、万年睡眠不足と貧血気味なのだろうから、無理も

ない。真っ青になって震えている崇ママは、まるで化物をみるような目つきで、計画続行に同意したセシリアを見ていた。

「人間じゃないわ。貴方たち、人間じゃない。生きてるかもしれないじゃない。こんなシュミレーション画面で諦めさせて、計画を続行させようって、そういう魂胆なのよ。乗せられてどうすのよ！」

セシリアはちょっと深くため息をついた。人間でない時まで言われるのは心外だ。

「あのね。塩屋さん。冷静になりませんか？ 遊星たちが生きていたとしても、計画を中座してらもうだけなら、事態は変わらないのよ。このまま落ちるしかないのだったら、攻撃されて……粉々になって、地球に燃えながら落ちてしまうのよ。髪の毛一筋、残っちゃくれないのよ。私は……。私はもう一度遊星を抱いてやりたい。燃やしたくない……」

死んでいる、生きているは、もう、運命に委ねるしかない。けれど、このまま子どもたちが居る場所が、目の前で攻撃されて、燃えながら失われていくのを見るのは、もつといやだ。ただの死ならまだいい。このままライダー・プールが燃えてしまえば、自分は、生きている遊星が助けを求めながら燃えていく場面しか、想像できないだろう。死んでただろうから、仕方がないなんて、絶対に思えるはずがない。

「遊星……ママ……」

塩屋さとみは、子どもを燃やしたくないというセシリアの言葉に、シャトルをぶつけなかった場合はどうなるのかという次を思い知らされたのか、そうセシリアを呼んだきり、絶句した。次の言葉がでてこない。

セシリアはぎゅうと力を込めてタオルハンカチを握りしめた。ふと気がつくと、そのハンカチはミラーズ・レッドが決めポーズをとったワンポイント刺繍が入っていた。

ミラーズ・レッド。

くしゃくしゃに握りつぶされたミラーズ・レッド。ちょっと大きすぎて、運動神経に劣る息子でも、なりたいものはレッドらしい。崇くんのごっこあそびで、いつもイエローやブルー、グリーンになるらしいけど、家ではいつも颯爽としたレッド。そのレッドが握りつぶされて……、くしゃくしゃで……。

握りつぶされて……、くしゃくしゃで……。

すりつぶされて、押しつぶされて、バラバラに千切れてしまったかもしれない、かけがえのない息子と重なった。大人しくて、優しく、お兄ちゃんと全然違って手間がからなくて。ご飯の心配だけしていれば良くて。可愛い。大事な遊星……。

「私は……遊星を……燃やしたくない……」

我慢していたつもりは無かった涙が、セシリアの双眸からどつと溢れた。

「お願い……します。髪の毛、一本で……いいです。指先一本でもいいです。プールを燃やさないでください。私の遊星を……連れて帰って……」

セシリアの言葉を、さとみが叫ぶように遮った。

「厭。私はそんな崇は厭。ちゃんと連れて帰ってください。頼みます。遊星君にはお兄ちゃんがいる。美咲ちゃんにも圭太くんがいる。私には……私には崇しか居ないのよ」

涙が溢れた目で、不思議そうにセシリアが呟いた。

「私にも……遊星は、遊星しか居ないわ……。お兄ちゃんはお兄ちゃん。遊星じゃないわ。他の誰もあの子の代わりはできない」

一瞬だけ奇妙な間を置いてから、さとみが泣き崩れた。

「ごめんなさい。私、どうかしている。なんて酷いこと……。ごめんなさい」

セシリアはミラーズ・レッドのハンカチで、涙を抑えた。

「遊星くんを誘ったのは、あの崇のバカなのに。本当はどんなにお詫びをしても仕切れないほど酷いことをしたのは……。うちのなに。ごめんなさい」

遊星はバカな崇くんが悪い遊びに誘われて、こんな目にあつたのではない。友だちと冒険の旅にでて、ちょっと大きな試練に遭っているだけだ。乗り越えるために試練はある。打ちのめされてしまったら、お話は終わってしまう。

遊星は私がつくってあげた、レッドのアップリケが入ったりユックをもっている。不死身のレッド。どんな困難に押しつぶされそうになっても、何度死んだと仲間にも思われるような局面に陥っても、必ず帰ってくるハヤト。ミラーズ・レッドの力を、遊星、あなたにも信じてあげたい。帰って来て欲しい。私のために。

それにミラーズ・レッドは友だちを絶対に見捨てない。熱い友情がレッドの力。そうだったわよね。だから、美咲ちゃんも、崇くんも必ず連れて帰って来て。

いつか、遊星が言っていたことが、セシリアにふと思ひ出された。

あのね。知ってる？ ミラーズにイエローがなんているか？

ミラーズ・イエロー、シヨウスケは、かっこいいミラーズ戦隊の中では浮いている。大きくて、鈍臭くて失敗ばかり。悪気は無いのだけれど、よかれと思って彼がしたことは、しょっちゅう裏目に出て、レッドのハヤトやブルーのミツルのお荷物になる。取り柄は力持ちというだけ。仕事柄も、前面で戦うレッドとブルー、知恵で作戦を指揮するグリーンと違って、特殊車両の『ミラーズ・スペシヤ

ル』を運転しているだけだ。同じ非力のキャラクターでも、グリーン
のシュウゾウは天才発明家だ。第一シュウゾウは、ちょっと美形
の男の子が演じている。

力持ちが一人いると、便利だからかしら……。

もう。分かってないな。ママは。

じゃあ、何かしら。

ヒントはママだよ。

大きくて、ちょっとズレていて、便利屋さんで。コミカルなキヤ
ラクターで。どこが私だというのだろう。セシリアには、遊星が何
を言いたいのか分からなかった。

ハンカチで顔を抑えていた崇ママに、セシリアは聞いてみた。

「いきなり……ヘンなこと聞いてもいいかしら」

「なんででしょう？」

「ミラーズ・イエローって、なんでミラーズにいるのかご存じです
か？」

「え？ いきなり……、何です？ イエローってあの『スペシャル』
を運転しているショウスケのことですよね」

戸惑いを隠せないさとみに、セシリアは頷いた。

「前に遊星から問題がだされてたんです。いま、何故か思い出して
しまつて」

「遊星君はどんな問題を？」

「ミラーズになんでイエローがいるか。『ヒントはママ』ですつて

……」

暫く考えていたさとみが微笑んだ。

「ああ、多分……そういうことだわ。間違ってるかもしれないけれ

ど……」

思いがけなくさとみが断言したので、セシリアは身を乗り出した。「安心して帰れる場所……」

そのさとみの答えに、セシリアは戸惑った。安心して帰れる場所？

疑問に囚われてしまったようなセシリアに、さとみが助け船をだした。

「あの、テーマソングの五番……ご存知？」

「テーマソングっていうと……」セシリアがちよっと節をつけて歌った。「レッド。お前はレッド。赤い血潮は熱く滾るたぎって……あれ？」

さとみが頷く。

「そうそう、それが一番でオープニングで流れる奴。それから二番ブルーっ。お前はブルー。青い炎 氷の刃っ」

さとみも軽く節をつける。「そこまでしか、知らないわ。五番っていうと……ミラーズみんなの分があるの？」

「ええ、もちろん。崇ったらお風呂嫌いだから、それをフルコーラス毎日歌い終わるまでお風呂に浸からないと、次の週のミラーズはみせないことになってるの」

そういつてから、もう一度さとみは味わうように歌った。

「イエローっ お前はイエロー 春のお日さま いつもそこに 帰れる場所お前がいるからっ 俺たちはそこに生きて帰る 俺たちの家 ミラーズ・スペシャル 俺たちの家 お前はイエローっ」

あ……。

セシリアは考えが止まった。いつも遊星をイエロー扱いする崇。我が子が一番の母親としては、大人げないとは思いながらも、ちよっただけ面白くなかった。越智涼子が断ずるように、崇が悪い子だ

とまでは思わないけれど、自分がレッドで遊星はイエローというのが、自分勝手だなと思えてならなかった。

あの質問を遊星がしたとき。何の話をしていたのか、思い出した。遊星をイエローと呼んでいた崇の言葉が耳について、厭で、崇が帰宅して行ってから言ったのだ。

ねえ、イエローなんて言われて、なんで怒らないの？

優しい遊星は好きだけれど、やはり男の子だ。強くて逞しく在ってほしい。なのに、面白くもない役どころを押しつけられて『イヤ』と言えない息子が、不甲斐ないと思えたのだ。だから、そう言った。

ねえ、ママ。あのね、知ってる？ ミラーズにイエローがなんでいるか？

あのあと、ヒントはママだといった後、遊星はこんな風に言ったのだ。

崇くんが本当になりたいのは、イエローなんだ。これって凄く秘密なんだよ。みんなにナイショなんだからね。誰にも言ったらダメなんだからね。特に美咲ちゃんには言っちゃダメだよ。笑うから。

崇くんがなんで？ あの子はいつもレッドとつちやうじゃない。

それは一番が好きだって病気だからだよ。もちろんレッドはみんな大好きだよ。でも崇くんがなりたいのは、イエローなんだ。嘘じゃないよ。僕だってレッドが大好きだけど、なりたいのがブルーっていうのと同じさ。夢はあんまり現実離れしちゃ、いけないからね……。なりたいものと、なれるものは別なんだ。

遊星の言葉はセシリアを仰け反らせた。クール・ビューティーのブルー。冷静な視点をもつ氷の刃^{やいば}。遊星がああいう大人になるのは、可愛いピンクになるのと同じくらいに困難を伴いそうだ。なのに……なれるものは別とは、よくまあ豪語したものだ。

「崇くんは……、本当はイエローになりたいんだよって、遊星が言ってたの……。ご存知？」

セシリアが言ってみると、

「まああの子ったら。誰にもナイショなんて言って、遊星くんには言っちゃってたのね……」

そう、さとみが微笑んだ。セシリアはその表情に少し戸惑う。

「大きくなったら、ママがいつでも安心して帰れる家に……なるかならねって。……いつか分からないけど、絶対になるからねって。今はまだ、ママが僕のイエローだけだって……。可笑しいでしょ？ あんな子でも、私には優しいの……」

そう微笑んだ顔のまま言ってから、思いが溢れ出てきてしまったのか、わっと泣き伏した。

「崇がいなくなったら……。生きて……。意味が……。無くなっちゃう……」

セシリアは、いつもはしっかりと背筋を伸ばしている、さとみの背中を撫でた。いつもは、きつちりとしたビジネススーツを着こなしている、働く強い女性の善のさとみが、周囲を憚^{はば}らず泣きじゃくっている。強い女性が、強くあるのは、頼ってくる優しい手があるから。そして、それなくして、強くあるのは意味が無いのかもしれない。

「塩屋さん。私たちも、崇くんみたいに、頑張ってイエローになりましょう」

「……………」

「安心して帰れる場所がなければ、強いレッドも、迷子になっちゃうでしょ?」

「……。でも、イエローって……役立たず……じゃない?」

「いいじゃない。……役割が無い有能より、ちゃんと役が割り振られた無能の方が。今は、ライダー・プールを救うために頑張ってるだけださっている皆さんを信じて、待つのが仕事って……、覚悟しましょう。できることがある人に……お任せして」

「ママって……厭な仕事だわ。私、自分でちゃっちやと動く方が性に合ってるのに」

「……ママ業のプロは……、待つことのプロじゃないと……ね。植物が育つのをじっと待つてる園芸家と一緒に。地球ジ・アースの回復を待っている今の人類と一緒に。ただ、待つのが、できる最大限の仕事って……そういうときも……あるのよ。きっと。……動ける人は、こんな辛さ……きっと分からない。……でも、これも仕事」

セシリアの掌の温もりぬくもを背中に感じながら、さとみは、首を力なく振った。

「私は……小柳さんの強さが……怖いわ……」

17・バナナ バナナ バナナ

バナナ バナナ バナナ……。

目の前には、バナナが一杯浮かんでいた。

俺はバナナが好きになった。

* * *

キャッチャーボート越しに感じるより、さらに強い拒絶の清冽を深く湛えた闇が、身近だった。宇宙は、いつも、ただ不思議なくらいに、厳然とある。不思議だ。こんなにも、命を拒絶している空間があること。そこに、命が溢れている惑星ほしが生まれたこと。育つたこと。ここに来るまでの英知を、何世代にも渡って延々と積み上げてきたこと。住むに耐えなくなった地球。容赦なく牙を人類に剥いた自然。

原初。コアセルベートの海は、生命のゆりかごになったと考えられている。でも、いつの間にか消えてしまったように。

カンブリア爆発。動物の多様性が増した時期。バージェス頁岩、澄江生物群、エディアカラ生物群。海を満たした奇妙な生き物たち。彼らが、いま、この世界のどこにも居ないように。

地表を満たした、古生代。デヴォン紀の羊歯^{シダ}。石炭紀の巨大昆虫たち。ペルム紀を代表する三葉虫。かれらも突然に消えてしまった。

新生代。鳥が姿を現したジュラ紀。巨魁の骨を残し、その存在を、絶滅を越えて後世に叫んだ恐竜たちが闊歩^{かつほ}した、白亜紀の繁栄も、兵ども^{つわもの}が夢の跡。K-T境界を越えることができた僅かな鳥類を除いて、消えてしまった。

人も……、あの恐ろしい自然の猛威に打ちひしがれて、無くなっ
ていくのが、正しい道程^{みちのり}だったのかもしれない。種として、盛衰を
繰り返していく、全ての生き物たちと、同じように……。

俺が完全に浸っていると、加悦さんが散歩で浮っついて遊びだした犬ツッコロにするように、安全帯^{フルハーネス}から伸びている命綱を引っ張って、
プールの外壁まで手^{たく}繰りよせてくれた。

プールは物凄い速度で動いている。この慣性から振り落とされる
と……俺は間違いなく、ジ・エンドだ。

「タカさん。ちょっと、真面目にやってよ」

お怒りごもつともです。俺は照れ笑いで誤魔化した。呆れたような加悦さんは、まるで宇宙空間だということを嘲るかのような、タウンウェアだ。これを見ていると、自分が金魚鉢かぶって、メットとブーツ、グローブのジョイントを密封して、この圧倒的な空間から隔てられていることが理不尽に思えてくる。いいよなあ。加悦さんたちは。

もちろん、彼女たちだって、ここの慣性から振り落とされてしまえば、宇宙のゴミになるしかない。推進装置をもってるジョーだって、防護服に装備された推進装置にトラブルがおきて動けなくなっ

てしまえば、それまでだ。宇宙は危険に満ちている。だけどな、人生なんてそんなもんだ。事故、病気。そんなものが、いつだって押しかけてきて、運が悪い人間を容赦なく、どこか向こう側の世界に押し流していく。俺がプールから振り落とされて死ぬのも、カウントは1回。病院で愛する人に手を握られて、老衰での穏やかな死だつて、そのもののカウントは1回。お年寄りの連中だつて、死んだことだけはないはずだ。この一点に限つて言えば、見事、生き物は全て平等だ。あ、違った。生まれてくるのも1回。この二点ね。もらうちまったものは、返す。ただそれだけだ。

俺としては、この一回きりの命を、自分から捨てるということだけは、したくないと思つていいる。どっかからやってくる方の死つて奴については、自力で避けようがないから考えない。ただ、それだけだ。

時間が来たのか、エアロックの扉が閉まつた。しゅつと音を立たよつた気がする。もちろん、空気がないから聞こえないけどね。どーでもいいけれど、メンテナン用のエアロックなどというものは、そこを使用する許可を持つていいる人をトツつかまえて掌紋と網膜パターンを読み込ませないと普通は使えないだろう。まあ、加悦さんは加悦さんだから、なにか裏技を使ったのだろう。

網膜の毛細血管パターンは複雑で、径年変化（年をとつたら、変わるつてことね）で本人だつて弾かれちゃうくらい厳しいものだから、こまめに更新登録を繰り返す必要があるかわりに、逆に、とつくに現役を退いた担当が悪気を起こしたとしても使えないという、そういう面で便利でもある。どうせ、ネットで登録技術者を検索して、そいつの所へお邪魔して、目玉を覗き込んできた、という辺りが正解に違いない。加悦さんに目玉を覗き込まれて、じつと見返さないで居られる男なんて、ゲイしか居ない。彼女のアイ・カメラは、違法レベルの解像度がある。

掌紋もそつだ。無言で加悦さんに、いきなり手を掴まれて、掌を

合わせられたら。普通の男は、振り払うより先に動けなくなるに決まっている。そうでない奴は……以下同文。もとはといえば、俺が手袋装着器なんかに手を突っ込むより、加悦さんにしてもらう方が良いからって、無駄に高いものに変えさせたのだ。念の為、断言しておく。ロリコンというわけではありませんっ。

まあ、テレビに毒されたジョーの場合、技術者さんが生きていたら本体ごと拐かどわかし、死んでいたら、目玉くり抜いて、手首切り落としてもって来かねない感性をしているから、加悦さんの方がマシなことは間違いない。(この前、例のカシスさまが、可哀相な市民の手首を使って、掌紋認識させていたのだ。エグーっ。子どもにそんなもの見せるな!)それにしても、とにかく、いろんな物が、いろんなところで役に立つ。こういうのをご都合主義というのかねえ。ああ、俺のムダ使い万歳。

いっちゃんいっちゃんのムダ使いである、ジョーの防護服が目の前に浮かんでいる。この辺で飛ばない程度の常識は弁えて、ちゃんと俺の命綱を握って、プールの慣性から振り落とされないようにしている。耳元で声がした。

「また、暗闇にみとれてたでしょ。タカさん。何にもないのになんで好きなのかな」

俺は否定した。

「馬鹿いえ。俺がみとれてたのは、地球さ」

「ぶっ」

噴きだすとは失礼な奴。常識はととなのに、そういう制御だけは、上手くなりやがって。俺は面白くない。

すると、ジョーが命綱から手を離れた。とたん、物凄い勢いで縮小する。小さく。小さく。小さくなる。手を振っているヤツは、豆粒になって、闇に融けた。

「行ってきまゝす」

姿が見えなくても、声は耳元に届く。感度良好。

「あいよ。デカイから気をつけて」
「うるさいなあ」

手袋グローブの中で、手は上手く使える物ではない。実感してみたければ、指先にスポンジをつめてぐにやぐにやにした、自分の掌より2サイズくらい上の作業手袋をはめて、ネジだの回してみたり、まめでもつまんでみるといい。できそうできないストレスの塊。宇宙ではみんな、不器用になる。解決策は一つしかない。細かいことはしないことだ。因みに宇宙船の運転免許と、宇宙空間作業士とは別の免許だ。ついでに、俺たちの母校、ネオシャングンの航空宇宙専門学校が、なぜ、航空と『空』をのこしているのかというと、大気圏内を滑空できる『大気圏内飛行機運転免許』取得に向けての訓練もできるからだ。もちろん、飛竜のようなバージシャトル・ライダーは、『航空』だけでなく、『航空』のライセンスも持っている。ちなみに俺は『航空スペース』免許は、大型・牽引までもっているけど、『航空ラ』は持っていない。そういえば、バージシャトル乗りは、小型の『宇宙』と『航空』でいける筈だ。ということとは、牽引の実技、学校でやったことくらい、あるのかな……柏木バンピーは。ただのコンテナだつて、シャトルの固定金具でセットして一体になつて使うのと、牽引とは難しさの種類が違う。牽引のキモである『アソビ』が凶器になつて、シャトルが距離をとれずに、ぶつかつて大破する恐れもある。

(まあ、今更気にしても仕方ないか……)

俺は、バンピーのことはジョーに任せることにした。あいつは、あの外見と、あのガキっぽさからは図れないほどの、知識と経験はもっているのだ。スカベンジャー・フィールドで五年。しかも、キヤッチャーポートなしでの牽引経験も、多分一年以上は……してるはず。俺のポートより余程操作性がいい。ジョーにフォローできる

いなら、誰にもできないってことで間違いない。大丈夫。ベターを積み上げる鉄則は、外していない。そして、今の俺のベターは、スクールバスのおっちゃんだ。

「ボス……送りましたか？」

加悦さんが言うてくる。ありがたいけれど、時間が読めない。マス・コンの打ち上げ時間にあわせて待機するのは、柏木の若鷹や、ジヨーならできるが、制御不能のライダー・プールには無理だ。マス・コンの打ち上げが直ぐにされないのも、多分、俺がビーコンを突入ポイントから出せると安請け合いましたのを信じて、歩が『待て』をかけているに違いない。

「ビーコンが先だ。管制をあんまり待たせるな」

俺が言うのと、加悦さんが頷いた。

「了解……。本当に、無茶しないでね。ボス」

泣きそうな顔をしている。可愛いっ！俺は一回だけ、きゅっと抱きしめてみた。スキンシップというには、ちっと遠いけど。

「行ってくるわ……」

加悦さんが、プールの外壁に垂直立ちして、すたすたと歩きだす。何気なく歩いているが、間違いなく一瞬の隙間も無く、計算されて制御されつくしている動きだ。芸術の域にまで達した、スペースウォーク（ムーン・ウォークの数倍かっこいいのだよ）。しつこく繰り返すが、ライダー・プールは時速二万キロを越える速度で移動している。慣性に取り残されないように、どこか必ず一点はプールの外壁にひつついたままで移動しているのだ。そして、ここは重力が地面にくくりつけてくれない宇宙空間。本当に、凄い技術だ。安全のために、上手なロープワークをして命綱を固定金具にセットしながら移動しているが、金具を手掴みにできるし、器用さも繊細さも生身のままだ。まったく、羨ましいというか、かっこいいというか。

「さてと……。小学生のガキンチョは、お家に帰る時間になります

た。スクールバス、発車しまゝす」

俺は口の中で呟いて、ゆるやかなカーブを睨んだ。中央倉庫へ
びる、中にエレベーターが通った、形としては居住区のドーナツ
を繋ぎ止めているスポーク部分を伝って、目指すのは中間倉庫。中
間倉庫は、無人作業が普通なので、空気漏れ事故がおきたときに、
被害を最小限に抑えるための遮断壁を下ろす必要がない。通常のシ
ヤッターで区切られているらしい。

本当は、この外側ドーナツは中を移動したい。軍服に伸ばされ
るたくさんの手や、軍服に浴びせられる様々な無策への誹りそしは、命
までは脅かさない。対して、ここは危険だらけだ。ただ、遮断壁を
時間をかけてどーにかしてる暇がないという、ネックがあるから、
通れないだけだ。それから、向うの中間倉庫に着いたらば、中には
できるだけ入りたくない。マス・コンなんかにくらべれば、コロニ
ー内の運送用コンテナなんか可愛いサイズだけれど、人間を押しつ
ぶしたりすりつぶしたりするだけの大きさは充分にある。俺は、い
ろんな死にざまのなかでも、ミンチは御免蒙りごめんこうむたいものの一つだ。

俺は注意深く、金具にカラビナをかけながら、移動しつつ、頑張
っているんな悲惨な風景を想像しておく。覚悟を決めておかないと、
現場での悲惨に直面した時に動きが鈍る。(頭が潰されてる)
で、現場って言うのは、大概たいがい、一番頑張ってる予測したよりも酷い状
況を見せてくれたりするものだ。(手足が千切れて)俺はなに目に
するのだろう。(キレイな玉になって浮かんでいる血でできた水玉)
見たくない。(涙)見えるわけないか。(排泄物)そんなもんを、
(三人分、仕分けして……)なんて、できるんだろうか？ (内臓
が……)

まずい、やりすぎたかも。マジで気持ち悪くなってきた。この辺
で止しておこう。えっと、今度は、一番いい風景も想像しておこう。
コンテナが空っぽの倉庫。子どもたちが浮かんで遊んでいる。……
ありえね。だめだ、想像できない。

スポーク（本当の名称は知らない）みたいな所の付け根まで辿り着いて、俺はメンテナンス時に命綱を仮止めする金具が、上下水道管沿い以外にないことを発見してしまった。このスポークみたいな奴の外側を手入れは、完全にロボット化されているのか、金具の代わりに、ロボットが走行するためのレールがついている。しばし、悩む俺。

閃いた！ 任せなさい。

俺はカラビナを外して命綱を体から外すと、苦勞してやっとこさレールの下に、命綱を通した。このロープも、きつと、カーボンナノチューブだ。ダブルウォールになってるかどうかは、まあ知らないけど、そういう風に思っていた方が安心できる。握力には自信がないから（自慢するなよ……俺）、ここは時間をかけてしっかりと結んで輪にする。急ぐのとあわてるのは別だ。落ち着けよ。俺。

輪っかにした命綱を腕でしっかりと保持してから、俺は外壁を軽く蹴った。取っかかりを力を抜いて蹴ることと、足首を上手く使って方向を制御するのがキモというのは、構造物内とあまり変わらない。ぶつける心配がないのはありがたいが、天井もないので、手が輪から離れたら、俺はキレイな星になる。

レールは始点と終点だけがスポークに繋がっているなんてことがあり得ないのを、俺は忘れていた。ガクンとひっかかって、俺は手を離しそうになって肝を冷やした。よくみると、レールに足がついて、スポークに打ち込まれている。チツと舌打ちがでる。しっかりと輪っかにしたのが、今度は裏目に出る。時間があれば、ゆっくり解いて、ゆっくり結んで。この足にひっかかる度にやればいいが、残念ながら、そんな余裕はない。俺は思い切って自分の腕を輪っかに

して、足の向こうのレールに抱きつく。深呼吸一つ。

いいか。無謀と大胆は違う。俺がこれからするのは、時間稼ぎの大胆さで、命知らずの無謀じゃねえ。誰がなんといつても、ベターはベターだ。

あそびがなければ、ひっかかってしまうだろう。万が一破けたら、俺は輝く星になる……から、簡易仕様のスぺジャケにさせるには、荒っぽい仕事すぎるけれど、やるしかない。軽く抱きすぎてすっぱ抜けてしまったりしたら……。そしたら、俺はきつと明るい星になる。

加減は慎重に。でも、力を抜いて。足が蹴る方向をちゃんと目測にして……行く。慎重と大胆。安全重視と、危険軽視を上手く使い分けながら、俺は中央倉庫を目指した。

ミンチ。肉。ミンチ。肉。

俺はお題目だいもくのように唱えて、覚悟を決めながら移動した。息があがってくる。簡易スぺジャケの換気装置は、機能が弱い。やっぱり、息が……続かない。緊張しすぎて過換気症候群かかんきしめこうぐんを起こしかけているのかもしれない。まあ、この際、死体が一個ふえるのは、仕方ないか……。俺はいいや最悪を思い浮かべる。

血。涙。血。涙。

ミンチ……。どろどろ……。ぐちゃぐちゃ……。あーっ、気持ち悪い……。

中央倉庫には、エアロックはぎつと目視したところないから、どこから入るか悩む。

「聞こえる？ 加悦さん」

「もちろん」

答えは瞬時。

「今どこ？ スポークみたいなのの中間辺り？」

この部分の名称は、加悦さんの辞書にも無いらしい。俺は安心した。

「着いた」

耳元に届くのは、加悦さんの安堵の溜息。

「どこから入る？ どうやら上下水道管設備は、ここには無いみたいだ。エアロックが見当たらない。もつとも、有ってもロック解除できないから、入れないけどさ。どーしよ」

「どーしよって、考えてなかったの？ タカさん、やっぱり馬鹿？」
そんなに断言しなくても。

「しゃーないじゃん。考えてなかったものは、考えてなかったんだから」

自慢してどうする。俺。いま聞こえた溜息は、呆れ果てたという意思表示。

「ベターなアイデアお願い。加悦さん！」

「自分で考えて。こつちも、デカイビーコン移動してる最中なんだから。そつだ。私、ビーコン入ってる部屋の壁、ちよつと爆発させ穴開けたけど……」

「乱暴だな。子ども助けに来たのに、壁壊してどーするんだよ。そんなことしたら、万が一生きてたって、即死じゃん。だいたい、中身全部出てっちゃうから、死んでても拾えないし」

「じゃあ……自分で考えて。頑張っつてね、ボス」

加悦さん……冷たい。俺は途方に暮れると、いろんなことを閃くはず。はず。はず。

くそつ、閃かない。

宇宙の暗闇に、絶望はよく似合う。

俺は、そうつぶいて、虚空を仰ぎ見る。ああ、瞬^{またた}かない星が…
…キレイだ。

「タカさん。銃火器類かレイザーナイフの類、携帯してる？」

天使の声。俺を見捨てない加悦さんは、神様よりもありがたい。

俺、生き延びて、無事、スカベンジャー・フィールドに戻ったら、毎日あなたに、地鎮祭ダンスを捧げます。

「軍用スベジャケの標準装備だけだよ。ナイフはあると思うけど」

「スポークに2種類あるの、目視でわかる？ 一つは人が使うエレベーターだから、丈夫にできてる。でも、もう一つの方は、ライトクラブト並のペナペナらしいわ。軍用のレイザーナイフなら、出力最大にすれば、穴が開くみたい。その中で、シュートされた小型の搬送用コンテナが行ったり来たりするらしくて、中はチューブ状になってるみたいよ。だから、中に入ったら、倉庫側のハッチに向かって。ハッチは一応二重扉になってるわ」

俺は倒れそうになる。決死のレール移動は、無駄だった。なあんだ、中を通れたのか。報われない俺……。犯さなくていい危険を犯した俺。でも待てよ。生きてる子どもでも、死んでる子どもでも、帰りはここを通れるじゃん。俺は、小さな幸せを見つけて嬉しくなった。

「ハッチに到着。開けるのはどうやるの？」

「そのママに、命令するわ。管制の斉藤一尉タウに電話つなげる？」

「いや……いい。加悦さんと、ジョーと繋がっておきたい。ここは現場だ。加悦さんが頼んで」

「了解。中は……コンテナが無節操にぶつかり合ってるはずだから、本当に気をつけて」

目の前で一枚の扉が開く。俺の位置を正確にこのマザーコンピ

ユータが把握しているということだ。

「もし、俺が死んだら」

俺が通ったとたん、背後で扉が閉まる。

「タカさん？」

目の前のもう一つの扉があく。ここからが、正念場だ。覚悟はいいか？ えっと、ミンチ、ミンチ、流血、臓物。めちゃくちゃ運がよかったら、元気なお子ちゃまたち。神様っ。繊細なボクに、子ども残骸を集めさせるようなことさえさせなかったら、お礼に毎日、五体倒地拝礼欠かしませんっ！ まあ、スカベンジャー・フィールドに地面があればの話だけど……。

流氷みたいなコンテナでボクがミンチで、お星さま。そんなことには、なりませんように。いや、建物の中で死んでも、お星さまには成れない。どうせなら、エンドロールは広い宇宙に映したいボク……。ああ、やっぱり、^{かかんき}過換気っばいなあ……俺。

「みんなで、宴会でもしてくれっ」

虚勢も、ハツタリも芸のうち。

「バカっ」

短くキツイ一言。その言葉は、優しく甘えるような声で言ってくれないと、傷つくよと、今度ちゃんと申告しておこう……。

（はあ？）

現実には、いつも単純な人間の想像力を簡単に足蹴にして、もっと意外な風景を、愚か者の眼前に^{がんぜん}投げて超越す。俺は、その瞬間、数

えきれないほどの、その黄色くて細長い物体が、轟くコンテナに押しつぶされながら泳いでいる風景に直面していた。

バナナ　バナナ　バナナ……。

目の前には、日頃見慣れたマス・コンから見れば、おもちゃみたいに可愛いサイズの荷運び用のコンテナが、複雑な動きで、ぶつかり合って、反発しあって、引っ切り無しに不快な音をたてている。でも、潰されてる奴もあるし、ちゃんと形も保っている奴もあるバナナが、一杯浮かんでいた。

ミンチでも無い。血でも無い。人間の残骸のうんちゃらかんちゃらでない。

キレイで、美味しそうな黄色いバナナ。手を伸ばして、目の前に浮かんだ一つを掴もうとするが、グローブの不器用はつかみ損ねた。つるんと逃げていくバナナ。

「だから言っただろ。絶対誰かが絶対に助けに来てくれるって」

「ここっ。ボクたち、ここに居るよ!」

「教えてッ。おトイレどーしたらいいっ?　もー、限界、助けてッ」

生きて……る?

どこだ?

目を凝らす。コンテナ以外は、どこもかしこもバナナだらけだ。

バナナ、バナナ、バナナ。

「だからあ、ここ。ここよっ。おじちゃんっ!　おしっこっ」

一つだけ、扉が開いているコンテナがあつて、そいつの両開きの扉は、とつくに千切れて無くなつてたけど……、扉があつたはずの四角、そこから、小さい顔が三つ並んでいるのが見えた。

バナナ バナナ バナナ。

独身、恋人無し、これから可愛い奥さんを張り切つてゲットするつていう、若い（つもり）男をつかまえて、おじさん扱いする無礼に対して、ちゃんと礼儀を教えるのは、ここから出てからの話しにしようよ。可愛い、お嬢さん。

嬉しい気持ちは、たくさん浮いてるバナナの色をしていた。だから、俺は、この瞬間に、たぶんバナナが大好きになった。

18・意気投合　あるいは、ジョーは冗談のジョ

(拙^{ヌス}ったか……?)

フロントウインドウ越しに、これから捕まえるソイツが目飛び込んできたとき、柏木恵心は、目測を誤ったかと、咄嗟に距離計に目をやった。距離は詰まり過ぎてはいない。充分に余裕をもってアプローチできるだけの空間はある。

ホツと溜め息をついてから、ジンワリと自分では認めたくない畏怖^{いふ}心^{しん}のようなものが臍^{へい}に染み出すのを感じてしまった。

(めっちゃ……デカいな……)

あの、どこか微妙にズレているというか、力がどこもかしこも素通りしているような高柳が、普段扱っているヤツだということ、甘く見ていた自分に腹が立つ。高柳の脱力しきつた見てくれと、敬愛する先輩ライダー、霧島飛竜が一目置くだけの器量とが、柏木の中でまだ噛み合っていない。うっかりしていると、類をみない男だということ^{のへんか}を失念してしまうほどに、長閑な雰^{ふん}囲^い気^きの男。

ついさっきも、ザキさんに、凄^{すご}い男だと受けあってしまったから、後悔していたと言うのに。幼児の十歳違いは決定的だけど、大人になつちまえば、十歳くらい年が離れているカップルなんて、腐るほど居る。恋敵の株をつりあげて、なにやってんだろ。俺。柏木は力なく思った。ここ数年越して、密かに想っている、あのザキさん、なれなれしく抱き寄せて、接吻……してた、厭^{いや}なオヤジ。なのに、ザキさんときたら、いつもの痛快なストレートを打ち込むどころか、微笑^{わら}っていた。

しかし、それにしても、凄^{すご}いおっさんだなあと、柏木は思う。今、

地上で打ち上げ待機している筈の、柏木の後に続いてプールに突っ込む仲間たちが思い切りやれるよう、中間倉庫に取り残された子どもたちを迎えに行っているという高柳のことだ。

それは、柏木だって航空宇宙大の出なのだから、もちろん、無重力空間での作業訓練はしたことがある。が、どうにも洗練された動きにならずに、散々だった覚えがある。宇宙空間作業士の検定試験はとりあえず在学中には数回挑戦したが、結局とれないまままで終わってしまった。

たしかに、俺だけでなく、飛竜さんだって、他に突っ込むことを承したヤツだって、曲がりなりにも小学生の子どもたちが「生きているかもしれない」ところに、死んでる確率がいくら高いと説明されたところで、巨大コンテナを抱いたシャトルで突っ込むのはいやだというだろう。数千の命と、たった3つの命。ザキさんにはあいつたものの、冷静に秤にかけられないからこそ、人間なんだと柏木は思う。

俺たちがやったところで、なにせデカイ質量を持つ建造物が相手だ。無駄に終わるかもしれない。だけど、それでも可能性があるならやってみたいと思うのも、また人間なのだ。大好きな人。見慣れた街並み。誰かにとって大切なたぐさんの誰か。数千という数字のうち、柏木自身が直接知っている人間は、ほんの僅か一握りに過ぎない。それでも、自分でできるならば、誰かを一人でも多く助けたい……。

いや、違うな。たぐさんの人が「ついでに」助かるならラッキーなだけで、自分が助けたいのは、好きな人。それから仲間たち。やっぱり顔がある誰かだ。

たしかに、子どもという存在は、普通の人間ならば助けたいかもしれないが、この局面で、自分は見たことも無い、話したことも無い他人の為に、自分の命を秤に乗せることができるだろうか。千切

れて悲惨な状況になっている子どもたちの残骸をかき集めて以て帰って来るのは、厭な仕事に違いない。

それから、万が一、彼らが生きていたとしたら、もっと事態は深刻だ。恐怖に駆られてパニックをおこしている子どもを、ゼロG環境で、どうやって引率して居住区に連れてくるといふのだろう。だいたい、その子たちは、簡易宇宙服をもっているのかどうかってことすら、分からないのだ。死んでたって、普通の毛布を縫いつけた程度のボディバッグで宇宙空間につれだしたら、間違いなくバッグ内の空気が膨張して破裂する。

子どもを三人も、連れ帰ってくる。一体、あの人は何をどうやって、そうするつもりなのだろう。

柏木は、余りにも一人で、物思いに深く沈み込んでいて、フロント・ウィンドウに張りついて、ノックの真似をしている、どこかヘンでポテポテした宇宙船外作業服を着ている存在に気付いていなかった。

若鷹二号、柏木機長くっ。

スピーカーから、いきなり聞き慣れない声がした。管制でもない会社のオペレーターでもない。自分の携帯端末ならまだしも、愛機のスピーカーから聞こえるには、若干カジジュアルすぎる軽い声。

若鷹二号。柏木機長。応答願います。

「……………誰だ？」

「ここです。そのフロント・ウィンドウのところなんですけど……。さっきっから、呼んでるのですが、気付いてくださらなくて。えっと、ボスから若鷹二号のヘルプにあたるように指示されていま

す。それで、一応、飛んできましたので、仕事をやるときの宜しくの「挨拶ということだ……」。

「ボスつて……誰だ？　ここつてどこだ？　ウィンドウの外つてのは、何の冗談だ」

自然と言葉が剣呑になる。一瞬、高柳の関係者かとも思ったのだが、軍に棲息している人種の言葉遣いなんていうのでは、あり得ない。それはまあ、最近知り合った約一名の軍人さんも、全然、それ臭くないけど。

どこつて。冗談じゃなくて、あ、私、ジョーといいます。そう呼んでくださると、慣れてますので、私の方も反応しやすいと思います。あ、そうだ。冗談のジョーつて……、いいですね。駄洒落になります？

普通は、フルネームで名乗るだろうと呆れつつ、一応目線を計器端末から上にむけて、柏木は腰をぬかすかと思うほど、驚いた。窓越しには、見たこともない不細工な外観の船外作業服をまとった人間がいる。最近では、空調ユニットも、生命維持ユニットも、全て小型化されて、宇宙船外作業服だつて、スペジャケよりはゴツイものの、少しは動きやすいようにスリム化されているものだ。それが、昔々の記録映像でみるようなダブダブのもの。そうでなくても目立つのに、胸の辺りには何かがキラキラと輝いている。まさか、スパンコールではないだろうけれど……。普通なら空気ポンペを背負っている場所に、なにやら筒状の怪しげな機械がついているのが目を引く。どうみてもボンベに相当する何かをつけていない。妖しすぎる。それと何よりも異彩を放つのが、そいつの身長よりもあるだろうロボットアームを、頭から生やしていることだ。あれは多分、柏木には見慣れている、ポートの棧橋ヤクによくある、コンテナ荷役用のロボットアームだ。

(……人間？ ロボット？)

で、も一つの質問のマイ・ボスつてのは、高柳三等宙曹のことです。

(高柳つて……)

柏木は思わず確認の言葉を口にした。

「タカさんが言つてた、サポートしてくれる、相棒つて……？」

相棒つて。やだな。気さくなのは彼の利点だけど、仕事の時はしっかり関係者には説明しないと。私は、相棒ではなくて、彼の道具にすぎません。もちろん、柏木さんにも、高柳三等宙曹の指示により、このミッションに関して、私への命令権があると思つてくださつて構いません。但し、同時に実行不可能な命令が重複した場合は、高柳三等宙曹からの命令を優先させていただきます。宜しくお願ひします。あ、そうそう。一応顔だけ見せときます。その、知らないよりは、親近感もつてもらえるでしょ。

自分で自分を道具などと、奇妙な自己紹介をしてから、そいつは、目の前で……あろうことか、金魚鉢に手をかけて、スポンツと……。
「なっ、何をするんだ。バツ馬鹿っ！」

奇妙なほど綺麗に整つた青年の顔が、そこにあつた。それは、しかし、目の前でみるみる歪んで……目玉が飛び出て……、なんてことは全くなく、にっこりと微笑みを湛えて平然としている。まるで地上で海辺の風に吹かれているみたいな穏やかさ。そしてVサイン……。どう見ても普通の作業用手袋^{グローブ}じゃなくて、ただの普通の手袋だ。普通のメカニックたちが作業に使うようなヤツで、器用に動かし易そうな五本指が、綺麗にクツキリ見える。こいつ、何者だろう。このどここまでも能天気な……こんな種類の笑顔は、どっかで見たこ

とがある。彼はもう一度金魚鉢を頭に戻す。戻しただけで、つなぎ目を封印^{シール}することもない。

すみません。鬱陶しいんですけど、自前の無線出力は弱くて、しかもシングル双方向回線なので、宇宙^{フィールド}では、これかぶってないと不便なんですよ。えっと、まだマス・コンまで距離があるんで、ここで待機してていいですか？ 目障りでしたら、翼の上辺りに移動しますけど。

もしかして、こいつは噂に聞く……。

「新人^{ニューマン}……？」

あ、ええ。そうです。というか、私の場合は、中身だけですけど。ボディは宇宙船外作業しやすい仕様になってますので、どうも機能重視^{マンライク}というか、人間仕様^{マンライク}には落ちるんですけど、AIの方は、ちゃんと、新人^{ニューマン}権利条約対象レベルをクリアしてます。

「極東アジア国軍は、新人は……全廃した……はずじゃ」

『戦闘及び治安維持活動局面では』です。後方支援では、一応新規配属は予算の都合上、凍結されてますけど、配備済みの我々まで、積極的に排除はしていません。

「ってことは、軍備品の新人さんで、タカさんがボスってことは、スカダー？」

そういうことになります。ただ、私は個人的な趣味で、キャッチャーボートを普段使いませんので、こういう局面では、おそらく他の人間^{マン}よりは、お役に立てると思います。一応、DWN T ネットでくるんだ状態で打ち上げてもらえますから、つまり、私たち高柳三等宙曹のチームが普段している、ネットでキャッチするというのが第一段階は省いた作業が可能だということでしょうね。もう少し距離が近付いたら、えっと、幅寄せしてもらいたいですけど、無人

棧橋に無誘導で寄せたことあります？ 私とこのアームの出力だけで、飛んでくるコンテナの軌道は変えられませんから、このアームでひっかけられる距離までは詰めてもらわないと。

「そいつは……、もちろん、学校の実技でやってきてるけど……」

（あんまり得意じゃあ、なかつたんだよなあ。）

些か、弱気な『けど』をしつかり聞き落として、明るくジョーが言った。

それなら良かったです。安心して任せられますね。えっと、あそこまで大きいものですから、キャッチするという感じより、無人棧橋に寄せるイメージでやられた方が間違いないと思います。これも普通に解パージを捕まえる位には伸ばせますから。

そう言つて、ジョーは頭の上にあるアームをちよつとだけグーパーしてみせた。

若鷹二号のフックに装着しましても、おそらく、コンテナと若鷹二号の間に隙間ができますので、牽引に近い動きになると思われます。マス・コンはハンパじゃなく大きいので、それと、若鷹二号が接触しましたら、ちよつと大きな問題になるかと思われます。ですから、私は、ネットをフックにかけましたら、反対にまわってネットを引つ張つて、マス・コンと若鷹二号がぶつかったり擦れたりするのを、少しでも防げるかどうか、とりあえずやってみます。

「やってみます……つて、飛べるわけじゃあるまいし。訳わかんないことを……」

柏木は頭が痛くなりそうだった。この冗談のジョーは、高柳の冗談だったのかもしれない。ギリギリの緊張感を、しょっちゅう強いられる宇宙飛行士連中というのは、普通の人間が笑っていられないタイミングで、強烈なボケを囃ましてくる人間の含有率が異常に高

い。だけど、今回かかってんのは、己一人の命じゃなくて、一つの街を抱く全てのものだ。こんなところで受けをとってどうする？ 柏木は強烈に毒づいた。

今は若鷹二号の慣性につけるジョーだが、体が機体から離れれば、一瞬で闇に投げ出され……る……？ えっと。でも、ここまでこいつ来てるし……どうやってだ？

最初の疑問に立ち返った柏木の前にあるスピーカーから、ジョーの声が聞こえた。

ですから、私は……スーツだけで、飛べますから。

(それって、「冗談でしょ……?」)

「おい。まさか、そのヘンテコな船外作業服スーツに、推進装置を搭載してるとでも言うつもりじゃア無いだろうね」

その通りですけど。この肩のところからですね……。こっやつて。

そういつた瞬間に、シャトルの狭い窓からジョーが消える。それから、少しの間を置いて、ジョーが視界に帰って来た。何故か足の裏から視界に湧いて出たジョーは、そのままもう一度Vサインで微笑んできた。

「推進装置は、なんだ？ 船外作業服スーツに装着できるサイズまで小型化されたってのは、聞いたことないぞ。それに、温度とか大丈夫なのか？」

「えっと、光学式じゃなくて、炭酸ガスレーザーを使っています。このシステムですと推進剤は水ですから、EPS（電力システム）で液体水素と液体酸素使っている限り、お金かかりませんし……」

(誰も維持費のことまで気にしてないよ……)

柏木は疲れた。

「でも、タカさんってば、タンクの中には再生水の方しか詰めちゃダメって……」

（長期滞在型宇宙ステーションの再生水って言うと、要員の廃棄物の水分を全て回収したものが混ざっているはずだ。つまり、タカさんの……有機廃棄物で、飛んでることになるのかな……）
柏木は考えるのをやめることにした。

軽快飛行機ライトフライヤーすらなしで、自由に宇宙空間を飛べる夢のような船外ス作業服イッ。いくら飛んでるのが頑丈な新人だとはいえ、小さい頃に宇宙船もののテレビシリーズを見てワクワクした、あの感覚が蘇ってくる気がしているのだ。推進剤の構成物なんかに幻滅しているのは勿体ない。

「いいなあ……それ。気持ちいい？」

あれは、ジヨールの専用スーツなのだろうか。スペジャケでも着込んでから装着したら、ちよっとだけでも使えないのだろうか。やってみたいという誘惑に抗しきれず、柏木はそう聞いてみた。

いや、それが……。ちよっと基本的な問題点がクリアされてないので……気持ちがいいという程では無いんですよねえ。

「危険なの？」

いや。そういう問題じゃなくて……『見てくれ』に関すること
で。

たしかに、不格好なことは認める。だけど、飛行機フライヤーに乗らないで、宇宙を飛ぶなんて夢そのものだ。柏木は、シャトルの窓が狭いと思つたことは今まで無かつた。でも、もつともつとすっかり、人間の形をしたものが、ただそれだけで宇宙を飛んでいる姿が見たかつた。

柏木は時間を計るために距離計を睨んだ。日頃見慣れた形のもので、大きさが違うというのは、遠近感をもろに混乱させる。目視でどれだけ離れてるのかまるで見当がつかない。タカさんがもう一点安請け合ひしてくれたビーコン誘導もまだ入ってこない。ビーコンの誘導があるのとないのでは、全く難易度が違うのだ。早くして

くれ。

手動で無人棧橋に横付けする訓練も、まあ、学生時代に何回かしたことがあるが、難しかった覚えがある。とにかく大気圏外は広すぎて感覚が鈍る。時速何キロかで移動しているものが止まっついでにさえ見えるのだ。見掛けの穏やかさと、接触した瞬間に、速度と質量に勝る方の慣性からめ捕られる瞬間の衝撃に近い違和感。そして、無音。これだけの質量のものがぶつかり合ったら、地上ならおそろしい音を立てるだろう。それが、静かに、どこまでも静かに破壊されていく現実。爆発や激突ですら、沈黙だけが支配する世界。バージシャトルで突っ込む時、地面に近付くにつれだんだんと音が存在する世界に戻る。それは、いつであっても劇的な体験だ。

計器が反応したのが、目の端に入った。来た。

レーマー・クビコン特有の、送信局の方位を表す輝線がくつきりとレーダー画面上に浮きでている。間違いなく、目標のライダー・プールから発信されている。すごい。高柳はどうやって、レーマー・クを起こしたのだろう。マジシャンとの異名は伊達でないということか。まさに魔法。送信局の方位を輝線で表すように、電波（マイク口波）を発射する装置を、本当にどうやって移動させたのだ。

*
*
*

「齋藤一尉、ビーコンでました。発信局は間違いなくプールです。信じられない……。一体、どうやってたら、そんなことができるんだ？」

心底驚いたといったような言葉は、齋藤の部署の若手である堂本一馬二尉だ。

「何があっても驚くなつて、ちゃんと言つたらう。あいつはマジシヤンで、ホラ吹きじゃあない。できるできないは別として、やってみることもできない場合は言わない。ヤツができると言つたことは、やってくれると信じていい」

「でも、奇跡だ」

齋藤歩は画面を覗きこんだ。綺麗なレーマクビーコンの輝線が見える。齋藤自身も、この状況でシャトルが狙っていくターゲットポイントからビーコン誘導を出せるという高柳の断言を信じていいの不安もあった。やってくる。流石さすがだ。タカ。

「拡大できるか？ 子供の安否確認に行つてる間、ヤツがテストのシャトルをどこに突っ込ませるつもりか知りたい」

（お前まさか、中間倉庫にするつもりと違つたらうな）

齋藤は胃がキリキリ絞られる様な思いで、画面が切り替わるのを待った。

（死ぬつもりでいやがってみろ、俺はお前の指示には従わねえからな……）

歩の目の前で、モニターが切り替わるのがわかった。ライダープールを透過視点にしたものだ。

「外のドーナツですね。居住区は隔壁で分断されてるから、ひとつくらい構造部分をぶっこわしても構わないって事でしょうか？ けっこう乱暴だな……」

「あいつは引き算と足し算だけは間違わない。人が居るところ一区画と子供三人なら、あいつは子供を見殺しにするさ。無人ないし、何か特別な用途の区画で人が居ないと確信があるんだらう。でもまあ念の為、一応該当区画が何に使われているところか調べてくれ」

「了解」

しばらく堂本が何やら端末に向かって操作していたが、突然、頓
狂な笑い声をたてた。

「間違いなく無人です」

「何の場所だ？」

「有機廃棄物保管倉庫です。完全脱気されてますから、人だけでな
く微生物濃度までかなり低めでしょうね」

タカ、お前、本当によくまあ、こんなところを見つけるよ。斎藤
は微笑みたいのを我慢して話を進めた。

「ビーコン情報をシャトル誘導プログラムに乗せ込んでくれ。でき
たら、若鷹二号のマザーに転送。とりあえず一発目、ぶつけてみる
ぞ」

「了解しました」

背が高い堂本が、ブースでキーボードをカチャカチャやっている
と、どうも熊が蜂蜜を舐めているような、なんとも表現しがたいち
ぐはぐな可愛さがある。能力の方は、天下の中央学府を出ているだ
けにお墨付きだ。この程度の作業なら、斎藤がわざわざ確認するま
でもない。

「誘導プログラムに数値投入完了しました」

それほど待たずに、堂本がそう答える。

「よし。若鷹の柏木機長を呼んで、こちらからのプログラムを受け
取ったら、手動で若鷹のメイン・コンピュータの航行プログラムを
切り換えてもらえ。確認でき次第、突っ込ませるぞ。時間が惜しい

……」

斎藤はそういつつ、臓腑が掴まれるような厭な気分を味わって
いた。成功するのか。はたまた、徒勞に終わるのか。たくさん命
に関わる指令をだすなんてのは、自分のガラではつくづく無い。飛
竜か、タカか。あの辺の連中くらい凶太くないと、神経を病んでし
まう。

* * *

若鷹二号。柏木機長。応答願います。

ビーコンのモニタ画面と、船体外に取り付けられたウィンドウ・カメラが拾ってくる映像を、窓から直接見ているように扱えるメイ・モニターを睨んでいた柏木は、体に緊張がじわじわと浸食してくるのを感じていた。認めたくはないが、多分、本能が感知している危険への純粋な恐怖だ。

「若鷹二号。柏木です。どうぞ」

今回の飛行指揮（FD）を担当する、国軍所属の斉藤です。貴殿の勇氣に尊敬し、心より感謝します。プールからのレーマーキューコンを、貴機でも確認できていますか？ どうぞ。

「はい。綺麗に映っています」

それは良かった。こちらでフライト・プログラムに、その信号を乗せこんだものを転送します。確認後、手動での切り替えを頼みます。そちらでメッセージを開封すれば、プログラムそのものは自動的に立ち上がりします。

「お願いします」

僅かな待ち時間だけで、操船盤についている小さい画面に、プログラム受診を知らせるサインが出た。

「今回のフライト・プランに対して、矛盾する2つのプログラムが検出されました。有効とする方を選択してください……か。はいはい」

柏木は、送られてきた方を指で押さえるというだけの、どうという
ことがない動きが、自分の人生を大きく変えることの不思議を、
どこか他人事のように驚いていた。前からのプログラムはいつもの
大気圏突入を経て地上の宙港に至るもの。もう一つは、下手をした
ら激突の衝撃で、またはその時点では無事だったとしても、まった
くプールの落下に歯止めがかけられなければ大気圏に至る前に破壊
されるという、死がとても身近なもの。

生と死と。明らかに標識を掲げている道を選ぶのに、自ら望んで
後者を選ぶ日が、自分のような人間にくるとは思ってもいなかった。
柏木は思う。上手いかなかったとしても、多分残念なだけで後悔
はないだろう。もう一つを選んだら、その後の人生を、多分ずっと
後悔と共に背中を丸めて生きていくことになるだろう。誰が知らな
くても、自分が知っている。好きだと思っていた人も、大切だと思
っていた人も、全て見捨てた卑怯な男だと。そんな生き方はしたく
なかった。

「ジョー。聞こえてる？」

もちろん。

「君から、プールの尾崎さん、分かるかな。タカさんと一緒に居た
人なんだけど。彼女と通信できる？ 君の声が直接聞こえる感覚で

……」

突入に入ったら（行き先はまったく違うけれど）自分のオフィシ
ヤルな通信は全部記録される。でも、この新人が仲介してくれるな
ら、我が儘な願いを言ってみたっていいじゃないか。最後になるかも
しれないのだから。

できます。少々お待ちくださいね……と。

柏木にとっては永遠に思える時間が通りすぎた。

柏木さん？ あの……お話って……。

心臓が躍る。どんなときでも、この声を聞くのは嬉しい。

「ザキさん。あの……ヘンなお願いしていいですか？」

ヘンなって……どんな？

「あれ……聞きたいんです……」

あれって？

「いつものザキさんの、『ファイティング・スピリット』の時間の……あれ。その、あれ聞くと元気が出るから……」。

物凄い長い沈黙に感じられた。柏木がやはり失言だったかもしれないと、その言葉を打ち消そうとしたとき、激しくビートを刻むいつものリズムと、聞き慣れた音楽がスピーカーから零れてきた。

こんにちはっ。今日も気合入ってる？ 覚悟はいい？

ああ。これだ。この声が俺を熱くする。柏木は条件反射でアドレナリン値が一気に急上昇するのを感じた。

「……ザキさん」

そのかすかな呼びかけは、見事に無視された。

みんな、元気ーっ?!

「みんなって掛け声は……ザキさん、サービス足りないよ」

柏木が文句を言う。

「ごめんなさいっ。でも、『みんな』じゃないと言いくくて……。今度、練習しておくわ……。もう一回いくね。ハイハイハイ。やる気がないなら、さっさと今のうちに帰りなさいよっ。全然、元気が足りないよっ。もう一度行くよっ。みんな、元気ーっ?!」

もう、『みんな』でいいや。この声は今俺が独占している。って、ジョーもいるか。柏木は吼ほえた。

「おーっ」

まだまだっ。元気ーっ？

「うおーっ」

もう自棄だ。柏木は絶叫した。なんだか、理由不明の爽快感が身を駆け抜けていく。

いいねえ。ナイスファイト。じゃあ、今日も元気よく行ってみよーかあっ！

「ありがと……ザキさん……。ジョー、そろそろ始めようぜ」

フロント・ウィンドウに張りついていたジョーが、もう一度Vサインを決めてから、飛んだ。あれ？……なんで、足の方に……なんだ？ 普通じゃない。

「ジョー。こんなときに何だけど、質問。なんで……足の方に」
スピーカーから、ジョーの声が聞こえた。

これが、先ほどご説明した、『見てくれ』に関する基本的な問題ですよ。肩に装着した炭酸ガスレーザーを足に装着した推進装置で受けると、レーザーがやってくる方向の反対にしか、進めませんですよ。

今どきの主流に真っ向から反対する作業服スーツのデザイン。頭から生えている巨大なロボットアーム。華麗に足方向に飛んで行くジョー。申し訳ないと思いつつ、柏木は思いつきり噴きだした。

笑わないでくださいよお。こっちも我慢してるんですから。

「悪い、悪い。ねえ、俺もスペジャケでも着込んでからだったら、それ、試せる？」

ええ。多分。温度もそれほど上昇しないですし。でも、気持ち悪いですよ。足に進むのって……。慣れないと。

「構わないさ。生身で宇宙ソラを飛べるなんて……。最高じゃないか」

ええ。最高ですよ。それだけは、保証します。じゃ、落ち着いて行きましようか。

「ああ。落ち着いてな。後で、会えるのを楽しみにしてるよ」
ちよっとだけ、柏木にとっては思いがけない間が空いた。

ありがとうございます。私も楽しみにしています。

ああ。そうか。人が彼らを要らないと宣言して久しい。多分、差別されないことに慣れていないのだろう。でも、話した感触が人間と変わらないのだ。柏木としては、直接顔を見せ合う前から拒否する必要はまるで感じない。

「サポート宜しくな。相棒」
頑張ります。

只の直感にすぎないけれど、なんとなくジョーとは気が合いそうな気がする柏木だった。

物理運動というものは、シンプルで美しい。一見、無秩序に見える不規則の中に混在する、これだけは確かなこの際、黄金のとも言つべき法則を、私は発見した。後は、無重力での洗練された身体さばきと、度胸だ。私は、自らに問う。お前には可能かと。私は答える。今此処にいるのは、私だけだ

と、格好でもつけなければ、誰がこんな犇はしいて激しくぶつかり合っているコンテナ満載の部屋に単身で突入なんかできるもんか。俺は、思い切り一つ深く深呼吸してから、そのコンテナたちが蠢うごく空間と、目指す四角い入り口との間合いを図った。ここで壁を蹴つたら、子供たちの前でミンチになるか、ちゃんと辿り着いて良い格好できるかの二つに一つだ。無謀と慎重を同居させるのは、やっかいな仕事だけれど、こんな中で挽き肉の回収作業することに比べたら、余程気楽な仕事だ。

声が良く響くように、一度、金魚鉢を脱ぐことにした。手袋は取れないから、脱いじまったら次につけるときは密着シールできないけど、それでも子供たちより上等な装備をしている。金魚鉢メットごしの会話では、コミュニケーションには支障があるだろう。俺は、あんまり悩まなかった。

「頼むから、移動中は話しかけないでくれよ。今、トイレ持って行ってやるからな」

女の子の目を見て言う。女の子の目が、真剣になる。僅かに頷く

その動きをみとめた刹那、道が開いた。コンテナの無秩序の動きの中で、これだけは確かな法則。上手く激しくぶつかったコンテナは、必ずお互いに弾かれあう。そして、彼らがそれぞれの移動先で別の何かに当たるまでの僅かな間は、そこには道がある。

道が見えたときは、迷わない。迷ったら……、遅れてしまう。この場合、その遅れは生死に直結する。そんなことを悠長に考えていたわけではない。道が見えたとき咄嗟に動くのは、俺の言ってみれば、悪い癖だ。自慢できた話ではない。

俺はもう一度、金魚鉢の中に頭を突っ込むと、壁を蹴った。

目をつけた方のコンテナの外壁にまず、取りつく。そして、四つん這いになって手足の全てで外壁を駆け上がる。疾走する狼のように……というのは、この全てにおいて、ゆっくりと動いていく微細緑化重力下では無理な話だけれど、気持ちだけは疾風のつもりで行く。下手な考えはこの際お休みしてもらって、目線は広く遠く。この部屋全てを見るつもりで。気持ちは一点に絞る。入り口となっている、四角だけに。

外壁に付いた手が、僅かな反発を感知した。こいつの反対側が、何か（どうせ違うコンテナだけれど）にぶつかったのだ。今、俺がいる空間はこれからゆっくりと狭くなっていくのだ。

こういうときに闇雲に壁を蹴っても仕方がない。俺はもう一度呼吸して、部屋全体と四角とをもう一度、鳥になった気分で見下ろす。右前方のヤツらがぶつかり合おうとしている。次に身を滑り込ませるのはあそこしかない。この壁と、あちらも再びこちらに迫ってきているコンテナとぶつかるまでは、もう少しある。前のヤツらがぶつかるまで、待ちだ。俺は慎重に、壁を蹴るタイミングを図った。……と、その時。

タカさん。今忙しい？

耳元にジョーの能天気な声が聞こえた。脱力しそうになるが、こ

ここで集中力を途切れさせたなら命とりだ。俺はぶっくらぼつに言い捨てた。

「無茶苦茶、忙しい……」

女の子には黙っていると云ったけど、此奴に言つとくの^{ジュー}を忘れた。さつき女の子に話したときに金魚鉢^{ヘルメット}を外したから、聞こえていなかったのだろう。子供たちが生きていたことを言うべきか、一瞬間に過る。いや、まだ、子供たちのところに辿り着いてさえいない。

ジューが俺のことをタカなんて呼ぶときは、どうせ緊迫した用件じゃない。

御免。ちょっと楽しい音入ってるんで、賑やかしに転送しようかと思つて。

しょーもない、用件で今呼ぶな。馬鹿。

「楽しい音？」

この微妙な局面でも、『楽しい』と聞いては、捨ておけない。聞き返してしまう自分が情け無い。

「くれ」
ザキおねえさんの、突っ込み一番手、柏木機長へのエール。

短く言つたとたん、耳元に聞こえてきたのは、明るいビート。激しいリズム。そして、ザキさんの声。

元気が足りないよっ。もう一度行くよっ。みんな、元気ーっ?!
おーっ。

パンピー 柏木の渋い声。俺も小さく唱和する。

「おー」

まだまだっ。元気ーっ?!

うおーっ！

「おー」

今度も小さく唱和。もう直ぐだ。あと、呼吸が一つと半分のタイミング……。

いいねえ。ナイスファイト。じゃあ、今日も元気よく行ってみよーかあっっ！

おーっ

パンピー 柏木とジョー。二人はどうやら合流できたのだろう。

チャレンジタイムうっ！ GO^ゴっ。

またしても、威勢がいいザキさんの発破に呼应して雄々しく叫ぶ、柏木くんの声が聞こえた。GOが出たってことは……、マス・コン捕まえに行くのかな。まあ、いい。頑張れパンピー。こっちは、こっちで頑張るし……。それにしてもGOは丁度聞きたかった言葉だ。柏木くんの自機で構造物に突っ込もうツてのに、しよげてない声も気持ちいい。元気がもらえる気がする。ジョーの機転に感謝しよう。俺も、元気に突っ込んでやるぜ。

目の前でミシツと音を立てるように合わさったコンテナたちが、一瞬の押し合いを演じている。こっちもチャレンジ・タイム、行くぜ。俺は、次なる空間目掛けてダイブした。

……到着。

ナイス。まだまだ、次があるからねっ。

ザキさん……。君もナイス・タイミングだ。ここまで丁度だと、見えてるのかどうか聞きたくなる。GOがかかってから、俺と同じくらいの間があるということは、捕まえられたのか？

「ジョー。マス・コン……捕まえたか？」

な……なんとか……、でき……そう……。えっと、忙しいので、ボスっ、細かい話は後あとでーっ

バージシャトルの柏木とジョー。マス・コンを捕まえる以上に、あのデカイガタイの慣性に振り回されるないように、体勢を整えるのが大変と見える。でも、あつちは、あの二人に任せるしかない。一応、柏木くんも腹が座つていそうだし、ジョーは子供だから基本的に怖いもの知らず。なんとか、してくれるだろう。

「それは丁度良かった。俺も忙しい……」

今度は掌に反発を感じるのが早い。さっきこれとぶつかったコンテナの方は、まだ方向を変えていない様子だけれど、さっきの空間より短い間しか時間がありそうもない。

フアイトおっ！

サンキュー。ザキさん。その言葉を受け止めつつ、俺は思い切つて通信をオフにした。圧倒的な沈黙が金魚鉢を支配する。俺は、もう一度方向を探った。この移動トイレに必要なのは、応援エールじゃなくて、集中力だ。

向うのガキんちよどもも、テラGピクニックを目論む位に骨がある輩だから、なかなか肝がすわつてみるとみえて、ありがたいことに、この期に及んで急かしたりしてこない。騒がれないと随分助かる。生きて戻つたら、ママたちに、「良い子育てしてます」と、忘れずに言っあげよう。まあ、どっちにしろトイレを我慢するのは体に悪いから、さっさと行ってやらないと……。

と、思った矢先。いきなり、衝撃が来て、全てのコンテナが一斉に同じ方向に揺れようとしているのが分かった。やばい。俺は、サンドイッチの具にはなりたくない。重いコンテナも軽いバナナも目

の前で、一斉に同じ方向へ流れる。俺は、なぜか一本鷲掴みにしてから、バナナが流れていくのと反対の方向にコンテナを蹴った。目標の四角から、一瞬遠ざかるのも止むを得ない。潰れないことが大切。女の子の顔が泣きそうに歪むのが分かった。男の子たちは、けなげにも、扉が干切れてしまったコンテナから皆がこぼれ落ちないように、必至で体勢を整えている。女の子を守るように。

ふん。なかなかどうして、先が楽しみながキどもだ。とにかく、なぜかバナナを掴んだまま、俺は、どんどん迫ってくるコンテナの隙間を強引にすり抜けるべく、果敢に体を動かし続けた。もう、死ぬ。

今の衝撃が、どうぞ、パンピー柏木の若鷹二号が、上手に有機廃棄物倉庫に激突した結果生じたものでありますように。マス・コン一個でこれだけ動けば、俺の無責任な思いつきにも、着地点が見えてくるってもんだ。

神様っ、ネタが切れたので、振り出しにもどりますっ。もしプールの墜落を防げたら、年に一度なんていわず、朝昼晩、獅子舞ダンス捧げますっ。

どっかの神様に、どこか押しつけがましい祈りを懸命に捧げつつ、俺はどーにかこうにか、コンテナの群をすり抜けて、ちよつとだけ広くなった空間に出た。あーっ、命が幾つあっても足りない気がするとは、このことだ。

俺は、連中が向うにぶつかりきって大挙してもどってくる前にと思ひ、すかさず、反対側の壁を蹴って流れていくコンテナの後を追った。気分は大空をかける鳥のつもりでいこう。

どこかの時点で、もう一度コンテナたちの向きが反対に変わるはずだ。遅くてもその瞬間までには、子供たちのところについていた。こっちからでは、同じように見えるコンテナばかりで、扉が千

切れたあとの四角い口が見えない。いそげ、慌てる。ただし、落ち着いて。俺は、多分あの辺というカンだけを頼りに、コンテナを追い掛けた。

いくつかのコンテナを追い越して、ちょっとだけ体を捻って振り返って、四角く扉が開いた奴を探そうとして、すぐ傍らにそれがあることを発見して、俺は慌てて体を滑り込ませる。第一段階……なんとか、終了。俺は深く溜息。それから、ちよんと操作して通信を復活させる。

ナイスファイトでしたっ。お疲れ様っっ！

威勢がいいザキさんの声が、タイミングよく響いた。なんだか、嬉しかった。子供たちが俺に抱きついてくる……のかと思ったら、一番ちっこい男の子が叫んだ。

「おっちゃんっ。早くトイレっ」

待ちかねてたのは、俺じゃなくて、トイレね……。俺はちよっと苦笑した。

* * *

「こんなんのどこがトイレだよ」

ポリ袋を片手に文句を言っているのは、一番ちっこい男の子だ。みんな小学校の高学年なはずだけど、予備知識が無かったら、二年生ぐらいかと思ったかもしれない。

「ゼロGだからしゃーないだろ。文句を言っな。それとも、バキユ

ーム式トイレ担いでこいって、そこまで無茶言つのか」

「そりゃあ、そこまでは言わないけど、ちよつといい加減だなあ」

「臨機応変と言ってくれ。終わったら、口をちゃんと縛っておけよ。いつとくけど、おっちゃんはここの手袋グローブしてるから、細かい作業はパスな」

飛竜の部屋を出てくるときに、まさにトイレ用として持ち出しておいた袋を見て、ちっこいのが思いつきり文句を垂れる。そりゃあ、移動トイレ宣言しましたけど、いくら俺でも、便器を担いでここのまでするのか。この袋が出てきたところで、驚いて涙を流して感謝してもらってもいいくらいなのに……まったく、ガキンちよときたら分かってない。この小さいのはシャツに、大きい方はリュックにミラーズ・レッドがついている。俺は子供の緊張感を揉みほぐすような会話を試みた。

「扉の外に零れないように注意してやれよ。ミラーズ諸君。えつと、ミラーズ・ピンクのお嬢さんは……ちよつとこれは無理だね」

女の子が眉をつりあげた。

「私……ピンク嫌い」

俺は疲れた。

「……希望も聞かずにいきなり役割り当てて、すまんかった。で、あいつらのどつちがレッドで、君は何色？」

「名前と呼んでほしいわ。おじさん。私は、越智美咲です」

「可愛くないっ。けれど、きちんと名乗られたら仕方がない。

「了解しました。おじさんは、高柳優美です」

つられてきちんとフルネームを名乗った俺の背後で、めっちゃくちゃ可愛くない声が出た。

「ユウビ……？って、思いつきりだっせーっ。それって女の名前じやん」

ミラーズ・レッド、小さい方君ほう。君は思いつきり、俺の神経を逆撫でしたんだよ。順番に助けなきゃならないことになっちまったら、君は問答無用でラスだ。

「リトル・ボーイ。俺のことは……タカと呼ぶように」
「リトルって何？」

女の子が冷たく言い捨てた。

「ちびってことよ」

「あーっ、このクソ野郎。人が一番気にしてることを」

……クソって。ちよつと君、俺の労働に対して、その呼称は不当に過ぎないか？ 腐りそうになった俺に、どこかおっとりした優しい声が言ってくれた。

「美咲ちゃんも、崇くんも、お礼が先だよ。おじさん、ごめんなさい。来てくれて……本当にありがとう……。凄く怖かった……」

この子、思いつきり……癒し系。いい感じ。

「だからね……感謝してくれてるなら、おじさんでも、ゆうびでもなく、タカと呼んでくれ」

俺が言うと、チビと女の子より頭一つ高いそいつは、はにかむように微笑んだ。

「タカ……さん？ ……大人の人を……そんな風と呼んでいいのかな……」

「お前……可愛いッ！」

俺はついつつかり抱きしめてしまった。相手が男でも、子供なら大丈夫。念の為ヘンタイ的欲望はありません。男の子がちよつとだけ躊躇ってから、ぎゅつと力を込めて抱き返してきて……、その思いがけない確かな力が、大人っていう生き物の本能をくすぐってきた。めっちゃ……頑張って来て、良かったあ……。

「名前教えて。呼びやすいし。ビッグ・レッドくん」

男の子が微笑んだ。

「僕は、小柳遊星っていいいます」

「おーっ。君も柳クンか。俺の高柳と親戚みたいなもんだね。ユウセイって、遊ぶ星？ それとも、優れた星？」

「遊ぶ方」

「いいね。レッドに相應しい素敵な名前だね」

「今回はボクは……一応ブルーですけど」

「クール・ビューティの方が。悪くないね。おじさんとこのガキは、捻りも何にもなく、レッド命んだけど、芸がないよなあ」

「戦隊ミラーズだって、共通の話題がないよりナンボかました。」

「おじさんとこの子供って幾つ？」

「……五歳位……だったかな」

「位ってなんだよ。しょーもないオヤジだなあ。子供にそのうち嫌われるぜ。でもさ、五歳……じゃあ、仕方ないよ。ストーリーの深いところまで追えないもん。見掛けならかつこいいレッドが一番だし。出番多いし」

「一々、可愛くないチビ・レッドの頭を抑えつけて、女の子が、割り込んできた。」

「今はミラーズなんかどーでもいいでしょ」

「どーでもいいとは、手厳しい。女の子は……、ある意味、難しい……な。」

それから、ミサキと名乗った女の子は、ちょっとだけ強引に遊星くんから俺を剥がして、俺の耳を引っ張ってきた。こいつは……、と思ったとき。

「お……トイレ……どうしょ……」

耳元でこっさりささやいてくる。あ、恥ずかしかったのね。やっぱり……女の子は、可愛い……。俺は簡単に前言を撤回した。さてと、野郎どもはポリ袋で済むけど、女の子は、どうしたもんだろ。やっぱり、あれしかないか……。

「……あのね、こんなやり方どうかな？」

「えーっ。やだあ。それって赤ちゃんのオムツじゃない」

俺が耳元でやり方を説明してやると、とっさに出たのがやつぱり否定の言葉だった。まあ、無理もない。だけど、ここは納得してもらわないと、次の行動に移れない。トイレを我慢しながらじゃあ、マトモに体は動かせないからなあ。

「……ミサキちゃん。宇宙船外作業士って知ってる？」

「え？ もちろん知ってるよ。宇宙船の外で働くプロフェッショナルだよ。かつこいいよね……」

「そうそう。だけど、連中、途中でトイレ行けないからさ、長時間ミッションの場合、船外作業服装着する前にオムツしとくのよ」

「やだつ。汚い……」

「まあね……。でもさ、トイレ我慢しながらじゃあ、きちんとした仕事できないし、やるべきことと比較して、ちゃんと割り切らないとね。それじゃあさ、ヨーロッパ中世の甲冑の騎士って知ってる？」

「アーサー王とか。……円卓の騎士とか……の、あれ？」

よし。なかなかちゃんと本読んでますね。お嬢さんは。

「あれの甲冑着込んでる騎士って、糞尿、ヨロイの中に垂れ流したっただけど、どっちが汚いと思う？」

女の子が思いつきり引くのが分かった。

「……それ……、後始末どうしたの？」

「騎士サマが自分で洗うわけ無いでしょ。見習いを兼ねた専用の従者がいたの。戦闘が終わると、水が無かったら砂で磨いて、オシマイ。トイレ使えない状況ってのは一緒だけど、オムツと垂れ流しと……ミサキちゃん、どっちが好き？ 今日のところは、好きな方選べるけど」

「……オムツ……」

「了解」

俺は要領をコツソリと耳打ちしてから、バックパックからシートを取り出した。オムツがわりに用足するようにと渡した一枚とは

別に、もう一つのシートを使って女の子を照る照る坊主みたいにした。重力がないと、幕を張るって訳には行かないから、仕方ない……でしょ？ シーツもボディバッグになるより、目隠しとオムツになる方が嬉しいに違いない。男の子たちは、こういふとき簡単で良いよなあ……。つくづく。

俺は、見ないでいてやるのが武士の情けと（武士じゃないけど）、ガキんちよ二人の方に向き直った。

「で、コンテナのバナナ追い出して、中に避難するっていう、むっちゃナイスなアイデアは誰がだしたの？」

「逃げ込んだんじゃないかって……最初から居たんだ。ピクニック最後の夜だから、バナナ・パーティーしてたんだ……。僕たち。だって、僕たちバナナに化けてコンテナにもぐり込んで、ライダー・プールに来たんだよ。だから、ピクニック最後の夜も……。バナナたくさん食べて……。コンテナの中に寝たんだ。怒られるとは思ってたけど……」

「もともと……。ここで、寝てたの？ バナナと一緒に？」

俺は確かめる。頷く二人。面白いこと考えるガキどもだ。

「でも、なんでバナナ……」

「だって、バナナは傷みやすいから、そんなに倉庫においとかないだろ？ さつさと見つけてもらわないと、命にかかわるし……」

……。こいつらのピクニックって、思いっきり密航じゃん。

「プールにピクニックって言うのは、そこそこナイスなアイデアだけどさ、Gアツプちゃんとしなくて来るから、倉庫に缶詰になって遊べなかつたんだろ？」

ちっこい男の子が叫んだ。

「それについては、オレは卑怯な大人を糾弾する。オレたち、ちゃんと夏休みの間、中央児童館のテラグループで訓練してきたんだ。」

「夏かけてだよ。なのに、テラGなんか、全然出てなかったんだ。あそこ。大人はズルいよ。子供騙して……」

「夏休みかけて……訓練して……新学期に決行したの？ 首尾よく発見されても、すぐ連れ返されちゃうじゃん」

「168ルール」

遊星くんの方も、いたずらっぽい目つきになっている。俺は呆れる。計画的、確信犯。見事な……ピクニック計画。なんてガキどもだ。

「お前たち……。やるなあ」

こつこつ無茶苦茶を思いつく奴は大好きだ。俺の言葉に大人の分別ではなく、同じガキの感嘆を感じ取ったつだろう。チビの瞳がちよつと自慢げに揺れる。ふふ。俺もジョーを実は笑えない。見掛けは中年オヤジ。でも、中身はあんまり成長してない自信がある。

「こいつ。珍しく、話せる大人じゃん」

「崇くん。コイツじゃなくて……ちゃんとタカさんって」

照れ臭そうにガキンちよの分際で、あつちから握手を求めてきた。「おれ、今回のピクニックではレッドやってる崇です。美咲はピク嫌いだから……コードネームはカシスさま……」

俺は倒れそうになった。カシス……さま。刺々しいお嬢さんには、似合いすぎっ！ 今後の行動を考えると、そうはいつても、カシスさまとも馴れ合っておくに越したことは無い。

用足しが済んだのか、シーツを取っ払って泳いできたミサキちゃんに、俺は果敢に挑んだ。

「えつと、カシスさまあ。頼み一つ聞いてくれる？」

「なに？」

「バナナむいて……」

カシスさまは、ちよつとだけ大人みたいに眉を吊り上げて、ぽつと冷たく言う。

「自分ですれば？」

不貞腐れている……。可愛いのに勿体ない。

「あのね……このグローブ。自分じゃとれないの。んでもって、こいつは細かい作業に凄く不向きなの。これ。ついでに、ここまで死ぬ思いでやってきて、君たちと会えて、ここで終わりなら良いんだけどね、外のドーナツまで君たちを連れていきたいと思ってるわけ。全てが上手くいくって保証はできないけど、君たちがちゃんとお家に帰れるように、できる限り頑張ってみるから、バナナ一本くらい食べさせてよ、いいじゃない」

「できないことなら、我慢すればいいじゃない……」

この子は普段……もしかして、凄く我慢しているのだろうか？

俺は敢えて言葉に言ってみた。

「俺は……、我慢するのは嫌いなんだ。第一、できないことを手伝ってもらうのって、恥ずかしいことじゃないと思ってるよ。誰か近くにしてくれる人がいるなら、頼って良いと思ってる。そのかわり……じゃないけど、俺ができることがあって、それができない人が傍にいたら……やってあげるの、普通のことだと思ってるよ」

「そんなの……嘘よ。みんな自分の都合が一番で、みんな、勝手に自分のことだけやってるよ」

寂しい……子なのかな……。このカシスさまは……。

「じゃあ……なんでおじさんが、ここに来たと思う？ 君たちがいるって聞いたから、迎えに来たんだよ。がんばれば、できそうだと思うたからね。ホントはこんな状況だと凄く難しいけどね。君たちを迎えに来るのは、おじさんの勝手な都合かい？」

カシスさまの顔が一瞬で真っ赤になる。なるほど。こういうもってまわった言い方をとっさに理解できるのは年の割りにませているってことだ。多分、とても感性がするどくて、賢い子で、いろんな意味で生きにくいんだろうなあ……。子供でしかないことと、大人の視点をもっていることは、両立しがたい。

「おじさんは、君たちを助けようと頑張ってみる。でも、一仕事の前になんかとお腹に何か入れたい。この手袋じゃ、バナナはむけな

い。君は、簡単にバナナくらい、むけるだろう？ そんなに、凄い難しくて厭な仕事かい？」

ミサキちゃんは首を振る。あともう一息。

「おじさんは、むいて……くれると、嬉しいな」

「おっちゃん。オレが……むいてやるうか？」

「ダメ。女の子の方が良い」

タカシ少年の申し入れを却下する。こっちは平坦すぎる感性の持ち主で少年含有率百パーセントだ。悪気は無いみただけど、俺の意図にまるで気付いてない。

死んでるガキどもは、紐で縛って引きずっていけば問題ないが、生きてるガキとここを抜け出すなら、チームでいることは必要最低限の保険だ。三人の子供たちが、僅かずつでも俺を信じてくれたなら……、そいつが今のベターだ。急いで行動を開始するより、このカシスさまの心を、ちよつとだけ妥協に導いてからの方がいい。

カシス・ミサキちゃんの手が、ひょいとその辺に漂っていたバナナを掴んで、おサル剥きを始めた。

「どござ」

半分くらいまで皮をはいだから、俺が食べやすい位置に、差し出してくれる。むいてくれるだけで十分だったけど、まあ、悪くない。俺は甘えて、ミサキちゃんが持ったままのバナナをかじりつつた。出荷日調整中のバナナはまだちよつと硬くて、甘さもちよつと控えめで、もう少し育った方が美味しいこと間違いないといったところ。まるで、ミサキちゃん、そのものみたいだ。（幼女相手のヘンタイ欲求はありません！ 念の為に繰り返しておく……）

「ありがとう。すごく美味しい……」

カシス・ミサキちゃんが微笑んだ。

「どういたしまして……。タカ……さん」

俺は、バナナを咀嚼そしゃくしながら金魚鉢を見た。ここはジョーと繋がっている。子供たちが生きていたと……無事だと言えば、あのママたちは、激しく喜ぶだろう。でも……居住区に帰り着けなかったり、シャトルライダーさんたちの健闘虚しく、プールが落ちたら。その喜びは絶望になって、あの人たちを打ちのめすだろう。今は……もう少し、黙っておこう。ママさんたち……ごめんなさい。俺はそつと通信機能をオフにした。子供たちもそうだ。今、ママたちの声を聞いたら、多分、緊張の糸が切れる。そしたら、俺では扱い切れない。

「タカさん……。何を考えてるの？」

ミサキちゃんが、なんとなく俺に擦り寄ってくる感触で聞いてきた。

「脱出ルートについて。……ところでさ……ミサキちゃん。あんなに可愛いのに、なんでピンク嫌いななの？」

ママは禁句だ。俺はちよつと誤魔化して、話題を変えた。

「だから、ミラーズなんか考えてる場合じゃないのに……。まったくもう。あのね、役立たずだからに決まってるでしょ。役に立たないだけならとにかく、完全に足引つ張ってるじゃない。なんで、あんなのがミラーズに入っているのか、信じられない。いつもキヤーキヤー騒いで、みつともない……」

女の子はね……。キヤーキヤー騒いで良いんだよ。でも、この子は、そんな直截ちよくちやくな表現で納得する子じゃなさそうだ。ちよつと、遠くから行こう。

「ミサキちゃん。君は、男って奴の馬鹿な習性を忘れてる」

「習性？」

「又の名を、馬鹿チカラ2倍の法則って言うんだけど。知ってる？」

「知らない……わ。なにそれ？ バカ……って」

「そこで切らないで。馬鹿チカラで一単語。あのね、男ってのは、

その大・小レッドも、俺みたいに擦り切れてんのも同じでね、好きな女の子の為なら、いざって言うときに自分の基本能力の最低でも2倍は力を出せるんだよ……」

「大・小レッドって、タカシと遊星くんのこと？」

「レッドとブルーでもいいや。あのね、今、この状況って非常時でしょ？」

「うん」

「遊星くんも、リトル・レッドくんも、ママと一緒にこういう状況に投げ込まれたら、こんなふうに着いて無かったと思うんだ。ママにだって、どーしてもないことなのに、泣いたり、怒ったり、我が儘言ったり……当然、してたと思うんだ」

「そんなこと、無いぜ」

「だまれ、リトル。今はカシス・ミサキサまと話している」

ミサキちゃんが、ちよつと笑う。

「君もだ。ママと一緒にいたら、きつと泣いて我が儘言ってたんじゃないかな。非常時には、誰だって1.5倍の力が出せるんだ。守ってくれる頼れるママがいない非常状態で、君たちはお互いに支えあって頑張ってきただろ？これが緊急事態、馬鹿チカラ1.5倍の法則という……」

「ボクは三倍くらい頑張ったかも……」

「おー。頼もしい。これから頑張る第二弾が待ってるから、楽しみにな。そんなね、もしもだ、計算してみて。ミラーズがみんなできる野郎どもばかりだったら、どうなるか。考えてみようか。連中の普段のチカラを1と考えると、ミラーズが活躍する事態ってのは、日常じゃあり得ないから、非常時になるね。一人1.5倍頑張るとして、合計のチカラは、数値に置き換えると幾つ？」

「1.5かける、5で7.5かな」

「大正解。ちゃんと勉強してるね。んじゃさ、ここのできる男キアラの1.5を引いて、ピンクを入れる。普段彼女は1のチカラを持つてるけど、非常事態はパニックをおこしてしまって、実動能力ゼ

口としようか。でも、こつちの残りの4がね、最低で2倍のチカラ
が出せるとすると……合計、いくつ？」

「最低でも……2かける4で8？」

「はい。正解。つまりね、男ってヤツは、大切に思ってる女の子が
一緒だと、馬鹿チカラがでるから、4人で8のチカラが出せる。つ
まり、ピンクはマイナス0.5までのポ力をやらかしても、十分に
ペイするんだ。ペイって分かる？」

「……なんとなく……」

「んでもって、2倍ってのは、最低ラインだからさ……ってことを
考えてから、もう一回聞くよ。さて、ミラーズにピンクは居た方が
良いでしょうか、いない方がよいでしょうか。カシス・ミサキさま
……考えて」

「なんか……騙されてる気がする……。最低2倍の根拠を教えてくださいよ」
手ごわい。俺はにっこり笑った。

「実感と主観と経験則から割り出した……割と信頼できる数値」
学生時代もそうだったけど、野郎だけのミッションより、女の子
がいるミッションの方が気合入ったもんだっし……。第一女の子
がいると、集団ではアホ度を競ってる仲間だつて、馬鹿をやらかす
割合が断然減って信頼度が増す。特に飛竜なんか顕著だったし。女
の子がいてくれるのは、野郎どもにとつて、馬鹿の根治薬にはなら
ないが、少なくとも緩和剤にはなっていた。

この馬鹿チカラ2倍の法則は、以前にジョーのピンク不要説を覆
すべく捻り出したものだ。色はピンクだろうが紫だろうが構わない
が、誰だって野郎ばかりのミラーズに毎週付き合うのは御免蒙りた
いだろ？ 婦女子諸賢には御否定のむきもあられるかもしれないが、
少なくとも、世の中の父兄諸氏のご賛同はいただけると信じている。

うん。思いつきのでっちあげの割りに、この理論はまったく真実
を衝いていると思うよ。俺なんか普段の生き方で手抜きしまくって

るから、女の子と一緒に災難に巻き込まれたら、多分5倍くらいは
頑張れちゃうと思うなあ。

「頼む、早く飛べるようにしてくれ。遅すぎだ……」

イライラと口にした飛竜に、メカニツクのオヤジが手を休めて肩を^{すく}竦めた。

「竜ちゃんが、ウェイティング・レーンで考えなしに緊急脱出装置なんか使うから、手間がかかってるんだろ。飛べる状態に全部きちつとしておいたのに、まったく手間増やしやがって。まったくいくら補償金の請求が来るか楽しみだな。おい。御曹司だからって、調子に乗ってるだろ。しかも、気象も読まずに飛び出したいなんて、我が儘すぎるぞ」

飛竜はにっこり笑った。

「ウチのお金を持ち出したり、使い倒したりしたことがないからね、ここらでちよつと、正当なる放蕩をしてくれ、息子をもった苦勞をオヤジに教えてやりたいと」

「馬鹿言つてらあ。真面目な翔ちゃんとはエライ違いだ。あつちは、おじさんが引退して四本線だろ？ 竜ちゃんが経営に興味をもつてくれれば、オヤジさんだつて安心するのに。経営に興味を示すのは、姫ちゃんだけで、息子は揃いもそろって現場志向じゃあ、気の毒だ」

先ほどから、せつつく飛竜に氣を取られることもなく、せつせと打ち上げ前検査を実施している一団を監督している老人が言う。霧島運輸のシャトルのメカニツクをずっと担当している整備会社の主である、背中に松か苔が生えてそうなのこの老人は、飛竜がオムツをつけているところからの知り合いだから、得意先の息子に対する遠慮などは露程も見せない。飛竜にしても、彼が監督したシャトルに乗ることに對する信頼感はずっと、小言も文句も聞き慣れている。

「竜ちゃん。なにも、お前さんが、突っ込むこたあないだろ……」

止めた添うな口ぶりの割りに、メカニツクたちを煽って早々と打ち上げ可能な状態にもっていけるよう頑張ってくれている。プール

に閉じ込められている何人ものライダーのシャツルを整備してきた男だけに、若い彼らがプールごと攻撃されて燃え尽きるのも見たくないだろうし、飛竜が命を張ることにも釈然としないものを感じているのだろう。

「ありがと。でもさ、俺、柏木煽っちゃったからさ、自分だけ高みの見物してるってのは、厭なんだ。ごめんな……」

「分かってるよ。言ってみただけだ。竜ちゃんが、行くの嫌だって骨がないこと言いやがったら、きつと殴ってるさ……。柏木君が一番手で突っ込むんだって？ まったく、誰だ、プールにシャツルぶつけるなんて、とんでもないこと言いだした奴は」

「まあ、普通は考えつかないよな。でも、奴はとんでもないことを考える奴だし」

「何だ。知り合いか。若気の至りってこともあるだろうが、軍人なんかとつるんでるから、ろくでもねエ事に巻き込まれるんだろ」

タカにしる、歩あゆにしる、軍人という規範からは相当ズレているが、まあ、ここで説明しても分かってもらえないだろう。

「本当だ。友達を選ばないと。これからは気をつけるよ」

飛竜は思ってもいないことをあっさりと言口にした。

「全く、お前の口は、どんなつくりになってんだらうな。縁を切るなんて、どうせ思ってもないくせに」

全て見透かしているんだから、口にしなけばいいのだ。全く、うるさい年寄りだ。

「ああ、そいつは、ぶった切っちまえ。押し込めるなんざ手間だ」

「だって、おやっさん、これ、緊急脱出用ですよ。これ整備してないと、打ち上げ許可ありません」

「大丈夫だ。竜ちゃんには軍のお偉いさんがついてるからな。管制タワーはお役とられちまって面白くないだろうよ。全くなあ。……片鎌十文字はいいシャツルだけどなあ、多分今日が整備納めだ。その脱出装置は有Gでしか役に立たねえだろ」

作業に忙しいそうにしていた、その青年が、驚いたように手を止める。

「整備納め……って……」

「プールに突っ込むんだ。船体がガタガタになる。宇宙でへなへな飛んでるだけの船なら整備して使えるだろうけど、再突入は無理だ。^{リブランジ}空中分解しちまうよ」

「キリーさん。……大丈夫なんですか？」

青年が心配そうに聞いてくる。飛竜はにっこりと笑って見せた。

「ダメ。俺の愛機、片鎌十文字はこれがラスト・フライトだ。ああ、さらば俺の片鎌十文字。誕生日も近いし、国からも見舞金か補償金ができるだろうし、この際、ぴちぴちのお嬢さんをオヤジに買って貰うさ……」

「……霧島のオヤジさん、また、とんでもない名前つけてきますよ。カニカメラが懐かしいって、来年あたりぼやいてるキリーさんが見えるようです……」

その時、飛竜の携帯端末がびよろんというような妙な音楽を鳴らした。画面を見ると、斉藤歩からの着信になっている。

「悪い、ちよつと失礼するよ……。どうした？ データマン」

タカと通信が切れた。

「……なんだって？ あいつは、プールで司令塔してるんだろ？」

プールが大気圏までもう落ちたとしてもいいのか？」

大気圏が通信に適した場所でないことは誰でも知っている。通信が途絶えるということは、よくあることだ。

それはまだ大丈夫だ。お前も、ガキどものニュース聞いているだろ？

「もちろん。それで、柏木の若鷹二号がターゲットポイント変更したっていうのは聞いた。なんでも、タカの野郎、ビーコン立てられるって豪語したんだろ？ 柏木がビーコン誘導でプールにダイブするか、マニュアルで突っ込むか、賭けの対象になってるぜ。オッズ

知りたい？ 一口のる？」

ライダー連中つてのは、全く……度し難いやつらだな。仲間が命かけてる時まで、そう来るかよ。残念だな。今から賭けに乗るのは八百長になっちまう。結果教えてやるよ。ウチのリーダーモニタに、くつきりレーザーマークビーコンの輝線が映ってる。マニュアルに賭けた奴が負けだ。

「なんだつて？ じゃあ、俺、負けじゃん」

タカに賭けなかったのか。らしくないな。

「奴の豪語だつて、たまにはスカるところ見たかったのさ。それにしても、レーザーマークかよ。やるなあ……。で、じゃあ、なんでタカと通信できないんだ？」

柏木機の後続シャトルが心置きなく、構造物の真ん中に突っ込めるように、奴は……ガキどもをお迎えにいつちまった。

「……なんだつて？」

あの野郎。管制は俺に丸投げしてつた。事故が故意かは分から
トランプル
ないが、奴の受信装置は今生きてないんだ。ただの通信装置の故障なら良いんだが。

あの馬鹿が……。飛竜は思った。

ゼロGにいきなり曝されると、人間は背骨の骨と骨の間が伸びて身長が伸び、腰痛になやまされたり、血液や体液の分散で上半身がむくんだりする。体液変化で酔っぱらった状態になってしまうのは、よくあることだ。コイツが有Gに帰るとき、血液が上半身から下半身に一気に流れてしまふ。Gショックとは、これが激しく起こって意識障害まで引き起こしてしまった状態だ。

そんなこんなで、テラGからゼロGに一気にもつていかれた直後は、誰だつて体も痛むし動きだつて鈍くなる。それはゼロGに慣れている高柳だつて、数日間のテラGにいた直後なのだから同じことだ。動かしにくいということは、つまり、船外活動なんかには向かない状態だつてことだ。プールの中間倉庫にいる子供たちを迎えに

行くというのは、ルートが確保されているなら、まだかもしれませんが……。
「プールは中を通れるのか？」

無理だ。中は緊急遮断壁がおりていて、細かく区画分けされている」

「あの馬鹿があつ。ゼロG移行直後の癖に、船外活動なんて、正気かよ。……まさか、あいつ。ビーコンも物理的に移動させたとか……いうんじゃないだろうな」

その可能性は大きいな。ただし、奴には新人の部下ニューマンがついてるから、そっちは彼らの仕事だと思っけどな。

「マジかよ。全く、奴は何を考えてるんだ？」

多分、お前さんたち、突っ込む側の気持ちに配慮したんだろ。ボディバッグも準備して行ったみたいだから……、生存してるかどうかではなくて、中間倉庫から子供たちをどかして、お前らが突っ込みやすいように……。

「んでもって、ヤツまで動けなくなっちゃったら、俺はガキどもだけじゃなくて、ガキどもとタカに突っ込む事になるじゃん……」

思いつきのタカだ。その辺は諦めるしかないだろ。

「勘弁してくれッ」

飛竜の叫びが、斉藤の耳を直撃した。斉藤は、目を閉じて苦痛に耐えた。飛竜たちのために動こうとしたタカの気持ちを、非難したくはない。だけど、タカがいる場所に突っ込まれることになっちゃったら、飛竜の苦痛は見たことも無い子供たちの体を破碎する以上のものになってしまう。斉藤は固く拳を握りしめて思った。

とにかく、時間は限られている。プールが本格的に加速し始めたら、修正は不可能だ。時間がきたら行くぞ……。覚悟しとけ。

（死んだのは通信だけだろう？ タカ。お前は生きて、そこから出て来るんだ）

「タカさんっ。返事して。なんで……なんで出てくれないのよっ」
高柳が入って言ったのは、コンテナが大挙して犇むしきあつて、ぶつかり合っている地獄だ。そこに入ったところまでは通信が生きていて、入って暫くして死んだ。まさかと思いたいが、高柳にはおつちよこちよいなところがある。バラバラの子供を拾おうとしていたら、その難易度はおそろしく高い。そうでなくても、下手にテラGアツプした直後だ。いつものゼロGの動きが自由にできる保証はない。
あの人は集中したいときには、通信を勝手に切る悪い癖がある。それだと……それだと信じたいけれど、これだけ繋がっていることが大切な局面で彼が長時間そうするとは思えない。コンテナに押しつぶされる高柳。千切れて、すりつぶされていく高柳。悪い方の想像ばかりが加悦を苛んだ。

「ジョーっ。さっさと突っ込んで。私、これかついで、タカさんのとこにいくんだからあっ」

ジョーの周波数に合わせて、加悦は大声で怒鳴った。

タカと連絡が取れないのか？

怒鳴った直後、斉藤一尉の声が割り込んできた。

「高柳三等宙曹は、集中したいとき通信を切る悪い癖があるので、今回の局面で長時間それをするとは考えられません。通信機器の故障だと信じたいですけど、確認しに行きたく思います。若鷹二号が目標地点に到着した後で、ビーコンを移動するように言われているので、今は動けないのですが」

加悦はゆっくりとしゃべっている。落ち着いている発語に見える

が、内容で十分に彼女が焦っていることが分かる。女性型新人にまニューズで受けるのか、あの男は。斉藤は苦笑する。本当に、夕方は女にもてる。問題は、あいつが女のことを一番に考えちまうせいで、自分みたいな極道と一緒にするのは可哀相だと、意識の深層で、無自覚の判断が働いているとしか思えないってことだ。

それに、女にしてみても、彼が自分だけが好きなのではなく、女であればとりあえず好きという無節操さを許容できるだけの度量がないと、やつと付き合い続けるのは困難だろう。岸二佐も今回の夕力を見ていれば、事が収まったらスキルズに本格的に奴を組み込もうとするだろうし、気の毒に、あいつの独身は暫く不動になったな。下らないことを考えつつも、斉藤は腕組みをしてしばしモニタ画面を睨み付けた。プールの軌道計算は終了して、今はプールの軌跡が実線で点灯し、予測軌跡が破線で点滅している。その横に大気圏に予測突入時間までの時計が、カウントダウン表示してある。

帰ってくるのが遅いと思ったら……、迷わずぶつける。

あの時、斉藤は答えた。そうさせてもらうと。しかし、それは、そういう事態を想定してそういうたのではない。あくまでも高柳に発破をかけるためだ。

(言えるのか？ 俺に、生きてるかもしれない夕カのところ、飛竜に突っ込めなんて)

「直接のラインには無いが、私が今回のミッションの管制となっている。よって高柳三等宙曹より上位と判断するがよろしいか？ キヤッチャーズクルー加悦」

斉藤の言葉に加悦は即答しなかった。しかし、斉藤は答えを待たずに指令を飛ばした。

「管制では、ビーコン位置で特定して航行プログラミングをした。

よって現時点で、そのポイントから、ある程度目視で修正をかけながら微調整してターゲットポイントに至ることは、若鷹二号には可能だと判断する。そちらの発信局は当初の目的地に即刻移動させること。移動後に信号発信。加悦。貴官の任務はそこまでとする。以上。確認を求めろ」

あ、ありがとうございます。斉藤一尉。感謝いたします。

(ふん。新人の感謝なんかいるもんか。奴との付き合いは俺の方が長いんだよ……)

「了解と認識した。即刻、行動を開始するように……」

斉藤はもう一度深く溜息をついた。タカ……。お前は何をしてるんだ？ 無事か？

斉藤はゆっくりと自分の携帯端末に手を伸ばした。指が飛竜を呼んだ。

どうした？ データマン。

「タカと通信が切れた……」

飛竜が息をのむのが分かった。

21・レッドの作戦 閣下の作戦

「ミラーズ諸君。さてと。この危機的局面で、残念ながら君たちと私たちの利害が一致しているということがわかるかね」

ミサキちゃんが手を摺り合わせて叫んだ。

「すごい。タカさんっ。キシユワード閣下そっくり！」

任せなさい。ダテに毎週、最低三回はミラーズを見ていません。

「バナナ・パーティーはこれにて中断して、エクササイズ・タイムに入りたいと思うが、如何かね……」

「賛成です。閣下」

落ち着いて見えて、遊星くんはノリがいい。やっぱり、ピクニックに参加するだけの素地はもっているということだ。

「エクササイズって……、ここから、自力で抜けるの？ 誰かが迎えに来てくれたんじゃ」

「危機的状况ってわかる？ ミニ・レッドくん」

「ミニっていうな。そのくらいわかるぞ。えっとね、閣下、危険な方向に普通でないってことだと思います」

タカシの発言は見事に的を衝いている。うん、高学年の小学生の語彙力の、不均等さは見事だ。さっきの発言は見事に俺の好みだ。

「危険な方向に普通でないっての、いい表現だ。以後採用させてもらう。それで、大人たちはめっちゃ忙しいんだ。手が空いてたのは暇なおじさんだけでねえ……」

「冴え無い閣下だなあ」

俺は釘を刺した。

「閣下の役どころは結局ミラーズの引き立てだから……。ある程度格好悪いのは、しょーがないだろ？」

ある程度の恐怖があった方が、こいつら絶対踏ん張れる。俺はあ

つさりと情報開示することにした。

「テラGピクニックに来て、ゼロGエクササイズができるんだから、まあ、非日常を楽しむむという方向では、まあ、そこまで悪くないと思わないとね。どんなときでも、有効なのは遊び心だ。ここに重力がないっての、どの程度の危険な方向だと思う？」

遊星くんが真っ先に手を挙げる。学校じゃあ無いんだから、拳手はどーでもいいんだけどなあ。

「はい、ミラーズ・ブルーくん」

でも、付き合ってもいい俺。

「すごく危険」

倒れそうになるほど見事な直球だ。タカシも手を挙げる。俺は指で指した。

「むちゃくちゃ……もう、めーっちゃくちゃな危険」

ミサキちゃんも負けずに挙手。俺は学校の先生かつ。俺は重々しく頷いて発言を促す。まあ、たたく、キシワード閣下に何をさせる。「ゼロGエクササイズって何をするんですか？」

これこれ。質問に質問で答えられないように。

サンガとライダー・プールの接続が、原因はまだ不明だが千切れたこと。サンガはそのままの軌道を維持している。宇宙空間とはいえ、軌道程度に地表が近いと粒子は存在しているから、長期間では減速してしまい、やがて地球に落ちていく事になるという予測。それからサンガは推進装置をもっているから、多少のブレには強いこと。だからママたちは無事だということ。

そこを説明すると、三人の顔が露骨にホツとしたものになった。自分たちの行く末ではなく、好きな人の安全を強調して励ます作戦、まずは成功だ。ここからが、問題。吉とでるか。凶と出るか。

「プールは、推進装置をもっていない。千切れたきに軌道からズレた。だから、このままでいくと、プールが地球に落ちちゃうんだ」「もしかして、ボクたち……地球にいけるの？」

「この能天気さは、いつそ見事だ。俺も見習わなければ……。」

「最悪の場合ね。みんな、テラGショック起こしたんだろ。ちょっと、訓練も、慣らしもなしで行くとこじゃないと、俺は思うけどなあ」

「……うん。最低だったね。あれ」

「大人の人たちは、プールが落ちないように、軌道修正をかけようと思って、いま頑張ってるんだ」

「どうやるの？」

遊星くんは凄く好奇心旺盛な子だ。

「単純なことだ。自分で推進装置が無いなら、プールに負けない位の質量のものをぶつけて押し上げようとしてるんだ。中間倉庫、このことだけど、ここにシャトルをぶつけないなあと思ってるわけんでもって、君たちがいちやあ、邪魔だったのよ」

「シャトル、ぶつけるの？ すんげーっ」

タカシは単純だ。

「いくつかで突っ込んで、エンジン吹かしちゃうんだね。かっこいい」

「ちょっとまって。リトル・レッド。今なんて言った？」

「ちょっと待て。今、なんて言った？ リトル君」

「おじさん。けんか売ってるの？」

「ゴメン。言いやすいもんで。で、なんて言った？」

「だから、シャトルのエンジン、推進装置にするんでしょ。かっこいいなあ」

「ああ、俺は馬鹿だ。なんでそんな簡単なこと、思いつかなかったんだ。」

「そのアイデアいただき」

マス・コンの反重力は、本当に反重力装置を使ってるわけじゃない。質量に反するように推進装置を吹かすだけだ。有効な方法なのは、得てして単純な考え方でできているんじゃないのか？

これは、いける。俺は金魚鉢メットを被った。

「加悦さん、聞こえる？ 歩あゆむにつなげてくれない？」

タカさん！ なんで、通信切ってたんです？ 何考えてるんですかあつ。みんなで死ぬほど心配したんですよ！

「ゴメン。いいから、歩あゆむに繋いで。再計算させる」
「どういうことです？」

「シャトルを均等にぶつけて……、三方向か、四方向に……。その推進装置を使って押し上げるぞ。シャトルぶつけまくるより確実だ。問題は、今度はパンピー柏木にしてもらったように、構造部にぶつけなきゃならないってことだ。ターゲットポイントをつくって、その住人をターゲット以外のポイントに移動させるぞ」

「どうやって？ 彼らがみんな船外作業服をもっているとしてもい
うんですか？」

「上水道を使うんだ。お好みなら下水でもいいけどね。説明は歩あゆむにするから、回線オープンして」

「いうが早いか、歩の声が耳から零れてきた。」

「聞こえてるよ。加悦はちゃんと仕事してる。タカ、心配させやがって。お前、後でガチガチにシめてやるからな。覚悟しとけよ。で、なんだって、もう一度言ってくれ。」

「ライダー飛竜も呼べる？ ヤツにも一緒に説明したい」

ヤツの携帯端末、直接呼び出すから、待つてる。

いきなり耳元で、飛竜のがなり声が聞こえた。

生きてたかつ。タカ。お前ん所に突っ込まなきゃならねえかと思っただじゃねえか。なんで通信切ってたんだ。

飛竜は余程心配してくれたようだ。そーいや、俺って愛されやすいタイプだった。俺を愛してくれるみんな、ゴメン。

「悪い。こつちの都合しか考えてなかったわ」

お前、殺されたいか。

飛竜の声がもう一段階つめたく冷えたような気がする。まあ、こは茶化してなかったことにしてしまおう。

「あゆみちゃんにならね」

あゆむだ。

俺と飛竜の痴話喧嘩（自分でいうか？）に、嫉妬深い歩が割り込んできた。

で、話を戻そう。何だって？ シャトルぶつけて、ついでに吹かすって？ 確かに軌道に乗せられるとは思っけど……、できるかな？ それと、その後、どうする気だ？

その後？ 人間助けられりゃあ、あとは焼いちまうなり、修繕するなり好きにしたらいいだろうが。俺は切れそうになった。短気はよくないのにねえ。

「時間が稼げりゃ、救助活動に入れるだろう？ 負傷者の数は、かなりの数になるはずだ。救出活動始める時間が遅くなれば、重傷者の生存率は落ちるぜ。さっさとやっちまおうぜ。プールだってそうだ。国は一度はここを破壊するつもりだったんだろ？ 約8千の働き盛りの人的資源を助けられるなら、シャトル二、三機の損失が加算されるくらいでガタガタ言わないっしょ」

タカ。お前のその果てしない楽観主義が羨ましいよ。

歩ちゃん。言っとくけど、こつちは負傷者がたくさんいる町中を、官服装て通り抜けたんだぜ。一人でその場で助けられるかもしれない人間の怨嗟を全部背負ってなあ。プールごと助けられるかもしれないっちゅう、果てしない楽天主義を押し通さないで、どーするっのよ。プールが落ちないことだけ保証してやれば、救助に動ける人間が、ちゃんと活動を開始できる。

「よく言われるよ……」

お前はもう。好きに言ってる。で、マジシャン。マジな話、三、四機のシャトルの推進力でどーにかなるのか？

今度は、飛竜が割り込んできた。全く、俺って人気者。

「歩。サンガの設計にあたってみてくれ。多分、プールが完全に引
力に絡め取られて加速が始まる前なら、なんとかなると思う」

俺もそう思う。……つまり、時間との勝負だな。

おいおい。斉藤一尉どの。災害救助が時間との戦いなのは、常識
でしょ。

「そういうこと。パンピーちゃんと、飛竜と、あと少なくとも一機
そっちでプールの図面引っ張って、ターゲツト決めて。一機は加悦
さんがビーコン飛ばす。もう一機は、ジョーに直接、誘導させる。
加悦さん、聞こえてるでしょ。大変だとは思うけど、ドーナツを右
回りに移動開始し始めて。待ってる時間がもつたない。ジョー。
暇だったら加悦さんのサポート！」

了解。

と短く答えるのが加悦さん。

ボスは、どうするんですか？

ジョーが話をふってくれたので、俺は心置きなく答えることがで
きた。

「俺は、ミラーズ諸君と、バナナ・パーティーの続きだな。そっち
のカタがついてから、お迎えたのむね。歩、ママたちに伝言頼む。
お尻叩く準備をして待っていてくれってね」

しばし、歩が絶句したのがわかった。無重力の固定されてないコ
ンテナの倉庫に閉じ込められた子供が、全員無事なのか？って事だ
ろうな。奴も、ミンチを想像してた俺と同じく、コイツらが生きて

る可能性はほぼゼロに近いと思っていたクチだろう。

生きて……？ 諸君って……つまり、全員無事なのか？

俺は見えるわけが無いと思いつつ、おもいつきり頷いた。よくぞそこを聞いてくれました。予断でうごいちゃあいけないのよ。可能性はゼロでない限り、いつだってあるのだ。どんなに少なく見えても、確かめる前にあきらめちゃあいけない。

「実はさあ、俺、無謀にもミラーズ諸君と決死の脱出作戦を決行するつもりでいたんだよ。この新しい作戦をリトル・レッド君が思いついてくれるまでね。で、生きてるって分かった直後に失敗したら、ママたちしばらく立ち直れないだろうし、ミラーズ諸君がママ・マモード入っちゃうのも、新米教師にはつらいしね。トークショーなんかでママたちの声が入ったら怖いんで、通信切つといたの。それにしても、必要最低限の道具も無いのに、先生になって、宇宙遊泳するのかと思ったら、怖いぜ。ホント、マジで年貢の納め時かと思っただくらいなんだ。本当に柔軟なリトル・レッドくんに感謝しよう」

タカ。お前のアイデアじゃなくて、子供の意見なのか？ それ。

歩の呆れ声。お前さんたちだったら、ガキのアイデアなんか取り合わない？ でもさ、単純ってのは、結構効果が高い保証でもあるのさ。誰が思いついても、使えるものは使う。これだって大事なことだ。大人のプライドなんかそんたくに忖度して、危険をとるなんてのは、断じてお洒落じゃあないね。

「うん。思いついて点で、子供には敵わないな。俺なんか、シャトルにエンジンあるってこと、すっかり忘れてたし……」

そうだな。俺もすっかり忘れてた。ぶつける所まで思いついたのになあ。タカ、お互いに、惜しかったな。

こういう歩の言い方は俺は好きだ。思いつきだけの俺は、これから何本かミサキちゃんにバナナを食べさせてもらって楽しむ。データマン斉藤は、最低限の三点確保のための場所選び。そんなもって、飛竜はシャトルに突っ込んで、吹かして、軌道までプールを動かす。完璧な役割分担だ。

タカ。子供たちは安全なのか？

「一応のところはな。コンテナから落ちなきゃ……大丈夫だろ」

コンテナの中に避難してたのか？　すごい事考えるな。そのガキども。

歩の声にも純粹な称賛の響きがある。俺にずっと寄り添っているミサキちゃんが、ちよつとあくびを噛み殺すのが見えた。

「ただなあ、そろそろ眠くなってきてるみたいだから、シートで糞虫ムシにでもして、ヒモで縛っておくか？」

そんなもん、もってるのか？

いくらマジシャンでも、無理無理。

それがねえ、お二人さん。俺、持ってるのよね。シートはオムツになった所為でちつと足りないんだけど。

「持ってるよ。俺ってさあ、なんか凄くない？　先見の明があるのかなあ」

お前……やっぱ、ただもんじゃなさ過ぎ。子供たちの安全確保できるなら、お前はそこ抜けて手伝いに来い。ターゲツト区画の人間を追い出すのには、人手がいるんだよ。一人で寛くわんごうごうたつて、そうはさせるか。

馬鹿を言うなという歩の声を期待したが、あっさりとした称賛とそれに続く指令が帰って来たのには驚いた。うへえ。斉藤一尉どの

は人使いが荒いですなあ

* * *

会話が聞こえていたのだろう。子供たちが不安そうな顔になる。

「行っちゃうの?」

ミサキちゃんの問いかけに俺は答えた。

「ここから落ちないように、このヒモで確保させてくれ。その、虐待なんて言うなよ」

小学生の少女を縛った中年男なんて、トークショーで糾弾されるのはゴメンだ。

「迎えに……来てくれる? その、他の大人の人じゃなくて、タカさんが」

「了解。約束するよ……」

「あのね……タカさん」

「何?」

ミサキちゃんの目が、真剣になっている。

「ママの上手な困らせ方……教えてくれる?」

「なんで?」

「ママね……圭太が生まれてから……私のこと、どーでもいいみたい」

人生相談に乗るのは後にしたいんだけど、まあ、仕方ない。

「ケイタってミサキちゃんの弟?」

「ふにゃふにゃで、泣いてばっかでウルサくて、ホントに面倒なんだよ。なのに、ママってば圭太ばかり……」

「仕方ないね。だってさ、哺乳動物ってのは手間かかるのよ。特に

人間はカンガルと一緒にで生理的早産だからね。生理的早産って分かる？ 一人で立って走れる状態でない未成熟で子供が生まれてくるって事だけだ」

ミサキちゃんの寂しさの原因の一つはこれか。なるほどね。

「立って走れる状態で生まれるのって変じゃない？」

「草食動物なんか殆ど生まれて直ぐ立てないと死んじゃうね。でもさ、人間なんか早く生まれすぎるから、ホントに手間かかるのよ。子育てってホントに大変だからさ、そうでない動物だってさ、次の子を育てるときには、先に生まれた子を追い出す場合が多いのね。だけど人間ってさ、成長して一人立ちするまでにも、めっちゃ時間がかかるわけ。成熟度が高い方を、突き放しがちになるのは、まあ、しゃーないね」

「しゃーないね……って……」

ミサキちゃんが俺の説明に絶句する。全く、そんな当たり前のことを、二、三歳児ならもかく、分別のある子供に教えないから、ものごとやっかいになるのだ。

「でもさ、手間がかかる方に手をかけるのはしゃーないとして、満遍なく愛してるって言わなくても分かってくれるはずだって思い込むのは、手抜きだったのも事実だね。それに気付いてないママにも困りもんだ。そりゃ、困らせてやるのは当然だね。だけど、困り果てるほど苛めたくないのね」

子供は絶対にママが好きなものだ。俺がそういうと、ミサキちゃんは思いつきりを上下にふってその通りと同意を示した。

「ミサキちゃんは本当に優しいね……」

俺は親指を突き立てた。グローブ越したとあんまりかつこよく見えないが。

「とっておきがあるよ」

「あるの？」

大・小レッドの反応もめっちゃ早かった。こいつらは、お仕置き

された後のことを、もう企んでやがるな。自分たちの無謀を棚上げして、いい根性だ。

「お手伝い大作戦。『今度のことでは心配かけてごめんなさい』って気持ちを含めて、日頃していないお手伝いをするって宣言するだろ？　それで、ママたちが忙しそうにしているとときに、お手伝いをしてあげちゃうの。特に料理作りとか、洗濯ものたたみとか有効だと思うね」

ミサキちゃんが怪訝な顔になる。

「…………お手伝いって…………役に立つちゃうんじゃない？」

俺は指を人指し指に変えて左右に降った。

「日頃してないお手伝いが上手にできるわけないだろ。少なくともママたちがやるより下手だし時間もかかる。だろ？　でも、子供がお手伝いするのは『いいこと』だから、否定も拒否もできない。せいぜいが『今日はママがやるわ』程度のはずね。そこを『やります』と宣言してですね、ホントに手伝っちゃうの…………。いいコツは投げたくなくても最後まで頑張っちゃうつてのと、くれぐれも毎日つてことを忘れんなよ。早く支度したいからママはこまるし、一生懸命手伝つてんだから怒れないし。一石二鳥」

遊星くんが、ちよつと小首をかしげる。

「上手くなっちゃうわない？　毎日してたら」

「とつておきの嫌がらせ第二弾。上手くなつて、ママから『お願い』つて言葉を引つ張りだせたら、テスト前だから『今日は無理』つてやるの。『今日は』つての忘れちゃダメよ。怒られちゃうから…………」

狐につままれたみたいなお子供たちをシートでくるんで、俺はコンテナののっぺりした内壁に苦勞して子供たちを固定した。ミサキちゃんが寂しいのはママが十分に自分を見てくれるという確信が揺らいでいるからだ。だったら悪戯や家出で注目をされるより、迷惑な押しかけお手伝いを続けて、ママと話す時間はふえればいいの

だ。手つとり早くは、コミュニケーションの機会を毎日に組み込めばいいのだ。

「コミュニケーションの機会が増えても、親子関係が改善されないことも、もちろんあり得る。人間同士、親子だって、反りの合う・合わないは、厳然と存在する。だけど、お手伝い大作戦なら、家事能力が上昇するのだから少なくともミサキちゃんの将来の財産になる。俺ってアタマ良い。これが本当の一石二鳥だ。」

「なかなか……よさそうね……」

「でしょ？ まあ、ダメもとで一度は試してみな……」

俺はミサキちゃんだけじゃあ、イヤらしい中年男の誹りそしを免れな
いだろうから、ちゃんと大・小レッドにもお休みのキスをしてから、
金魚鉢メットに手を伸ばした。子供は十分頑張った。大人はもう一仕事や
つつけてこよう。

「キシユワード閣下……」

そう呼んできたのはタカシくんだ。

「何だね、ミラーズ諸君？」

「気をつけて……ね」

「心配は無用である。今のワタシには、バナナ・パワーが満タンな
のだ」

俺は金魚鉢メットを両手でもつ。もう一度、流水コンテナの海に挑むべく、体の
方向を変えた。バナナ・パワーは本当だし。

「やっぱり、タカさんの閣下、うまいなあ」

今回のアイデア賞リトル・レッドに褒められて、俺はちょっと嬉
しかった。

「ミラーズ諸君。また、近い内に会おう」

これは、ミラーズにやり込められたときの閣下の常套句。それか
ら金魚鉢にアタマを押し込む。子供たちの笑い声に送られて、俺は
安全な場所から飛び出した。

次に来るときは、ジョーを連れてきて、コンテナを輸送用のスピーカーへ押し込ませて、地味に作業をしよう。ウチのミラーズ狂、五歳の男の子ジョーと、タカシくん、遊星くんあたりは、めっちゃ話しが合いそうだ。あのデカイロボットアームつけたままで、ここに入れるかどうかは、まあ、そんなときゆっくり考えよう。

俺は、慎重にして繊細な動きができるように、自分の体と動き回るコンテナに意識を合わせた。逆の手順で戻らなくても、今度は人が移動する用のエレベータを使えば良い。電気系統は生きているのだから、エレベータに辿り着きさえすればドーナツに帰るのは一瞬だ。ほんと、来るときに知っていたかったよ。

22・危険でない方向に普通なプールの押し方

真面目な俺は、中間倉庫から居住区にのびるエレベータに乗り込んだとたん、キシユワード閣下から、高柳三等宙曹に戻って、斉藤一尉どのを呼び出した。

「歩。ちゃんとシャトルを突っ込ませる地点ポイント決めたか？」

ああ。ただし、エンジン吹かしてバランス崩れないように、位置だけで決めたからな。中に動けない人間が多くて、なんともできなぞ。

俺は頷いた。

「馬鹿言ってる。なんとかしようとしなけりゃ、なるもんも、どーにもならんだろ。オーブンチャットスペースに、シャトル・プランジ・ポイントのデータ流して」

公開するの？

「ったりまえだ。動ける奴は、被災者でも使う。これ、定石。そうそう、生きてるメンテナンス作業員の情報持つてるだろ？ 加悦さん……」

なんで知ってるの？

加悦さんもほぼ即答だ。非常時はみんなレスポンスが良くて助かる。なるほど。こんなときに俺が通信切ったら、心配されるの当たり前だな。深く反省しよう。

「メンテナンス用エアロック操作してただろ。モトネタ仕入れてなきゃ、できないだろ。普通」

ボスには参るわ。パーソナル・データの無断使用は、軍籍剥奪の理由になるでしょうか？

「さあ。その辺は歩にでも『後で』相談しよう。歩、ウチの加悦から、プールの上下水メンテナンス作業員の情報送るんで、その人捕まえて、作業してもらって」

歩が怪訝そうに聞いてくる。

上下水道って……何に使うんだ？ 作業って？

「突入ポイントになった区画から、少なくとも隣に移動するルートに決まってるだろ。頼みたい作業は、上水道の水抜き。みんなが皆スベジャケに金魚鉢装備ができるなら良いけど、パンピー諸君には無理だろう？ 水は勿体ないけど、全部捨てちゃってもらって道として確保してもらって」

了解。

「作業員が一人ってこたあ無いだろうから、加悦にデータ悪用された気の毒な人を窓口にして、水抜き依頼と、水が抜けたら可及的速やかに、取水口のハッチを開放する作業を頼んでくれ。時間がないときゃ、人海戦術。これも定石ね」

エレベータが到着する。データが転送されてきたので、メットの中に仮想モニタを表示させてプールの図面を出す。

「なるほど。最低限の投資しかないのね。歩ちゃんは」
表示された突入ポイントは見事な三角形だ。

「一つは若鷹二号だろ？ もう一機は、飛竜の片鎌十文字号。もう一機は？」

オレんとこの大先輩、三雲さんって人の、春霞号だ。

春霞号。まったく、霧島のシャトルのネーミングは凄すぎる。俺が呆れているのに頓着せず、飛竜が続ける。

彼なんか、もうとっくに引退してていい年なんだけど、しつこくライダーしてるベテランなんだ。地面にいた方のウチの連中、殆ど突っ込むって騒いでただけど、急遽、数が減っただろう？ したら、取り合いさ。俺は御曹司だから我が儘利くだろ？ 柏木は既に突っ込んでるし。で、俺たちのこの世界ってさ、学校の上下関係いつまでも引きずってる体育会系だからさ、三雲さんが、俺がやるって言ったなら、オシマイなわけよ。誰も逆らえない。でもって、

なんかタカに『いつぺん、シャトルをなんかにぶつけてみたかったんだ。男の花道サンキュー』って伝言あるんだけど……。

まったく、やっぱりシャトル・ライダーって生き物は謎だ。俺は呆れた。構造物に突っ込むという無茶をやりたがる奴がほぼ全員で、しかも伝言が『サンキュー』。

「飛竜。三雲さんって人に伝えて。『見事に散ってください』って馬鹿言え。殺されるわ……」。

「ゴタクはいいから、さつさと出て来い。お前のカニカメラが直ぐ出て来れないなら、他の飛ばしてくれ。時間がない」

いけるさ。先に三雲みくもさんが飛ぶんで、誘導宜しく頼む。

「了解。加悦さん、ビーコン間に合う？」

まだ、もうちょっと。

「分かった。ジョーっ。そっちはもう加悦さんに任せて、飛んでくれ。霧島運輸の三雲機長の春霞はるがすみ号を、ナンバー3の突入ブリンジポイントに誘導してくれ。燃料足りてなかったら、水入れていきな。今日は上水で許す」

了解。ボス。ところで……吹かすんなら、柏木機長、若鷹二号に戻ってもらった方が良いですか？

「何？ パンピー柏木はどこにいるんだ？ 若鷹二号の操縦席じゃないのか？」

えっと。飛びたいというので、一緒に……。

「さつさと戻れっ」

俺は叫んだ。時間との戦いだ。

* * *

「ジョー。マス・コン……捕まえたか？」

高柳にそう聞かれたとき、ジョーと若鷹二号は、巨大なマスドライバー・コンテナを包んだカーボンナノチューブネットにコンテナの固定具を噛ませたとたん、物凄い勢いで移動する巨大質量が持つ慣性に、翻弄されていたところだった。

「な……なんとか……、でき……そう……。えっと、忙しいので、ボスっ、細かい話は後で……」

柏木は、物凄く冷静にシャトルを操作して、ジョーがフックをかけたというより、ジョーが持って広げたネットにフックを滑り込ませることで、マス・コンと合体した。若鷹二号の機体と、マス・コンが何度もぶつかりそうになり、その都度ジョーがネットを引つ張ることで距離をとったり、柏木が舵を切ることで距離を広げたりしていた。広がりすぎると、グンとひっぱりよせられる。

大きく眼前にプールが広がってきたとき、柏木の突入ポイントの特性を思い出したジョーは柏木に言った。

「ビーコン誘導に任せて、出ましよう。俺が拾いますから」

知らない奴が有機廃棄物に突っ込むのはどーでもいいけれど、柏木が突っ込んで可哀相だと思っくらの感性はある。

「いいのか？ 多分シャトルは歪む程度だぞ。ちゃんとコントロールした方が……」

ジョーはボソツと白状した。

「居住区の区画に突っ込むんですよ。人間いないって何でだと思いません？」

「分かん。」

「完全脱気された、有機廃棄物保管庫だからですよ」

「げっ。俺、つまり肥だめに突っ込むの……？ 直前で抜けるっ。ジョー拾ってくれ。」

柏木は、ギリギリまで耐えてから、脱出ボタンを操作して、運転席ごと、宇宙へ投げ出された。しばらく座ったままで、瞬かす、さまざまな色をした恒星たちの饗宴にしばし目を奪われる。

簡易宇宙服のヘルメットに装備されたスピーカーからジョーの声がかきこえる。

「ちゃんと当たりましたね。柏木機長。座席、捨ててください」
スペース・デブリ（宇宙のゴミ）は、ちゃんとロボットが拾ってくれるだろう。安全ベルトを外して、縛めいましから自由になった。

体を伸ばして漂う。柏木には奇妙な高揚感だけがあつて、不思議なほど恐怖は無かつた。薄っぺらいたつた一枚の簡易宇宙服は、圧力調節がいま一つ甘いのか、体が内側から押し広げられるような感触がある。このまま破裂しても……まあ、悪くない。こんな景色を見ることのできるなら。柏木は暫し、うっとり星たちの光の洪水に見入っていた。柏木のメットの前に、あの綺麗な顔をしたジョーの顔が逆さに映つた。

お疲れ様でした。柏木機長。ちょっと、飛びましようよ。気持ちいいですよ。

ジョーはそういうと、そのまま柏木の背後に回つて、ガツシリと腰の辺りを掴んだ。上下反対に。

「おい。飛ぶつて」

私も体験したことが無い、正統派の飛び方ですよ。

ジョーが推進装置を多分起動したのだろう。柏木には分からなかつたが、次の瞬間、飛んでいた。ジョーは相変わらず足方向に進んでいるのだが、反対向きに抱えられた柏木は、見事前進している。

「すごい。この装置考えたのつて……ジョー、君自身か？」

まさか。こんな妙なおもちゃ、冗談じゃなくて考えて作るうなんで、二、三本何かが飛んでる、タカさんだけですよ。図面を引いて工作してくれるのは、ウチのママ・スカベンジャー。テスト・パ

イロツトは私。トライ・アンド・エラーで修正点を見つけてくれるのが、加悦さんで……、問題を乗り切るため、更に妙なことを考えつくのもタカさん。

柏木はその爽快さに全てを委ねながら、飛翔を楽しんでいた。

「気持ち……いいなあ。最高。で、タカさんが考えた更に妙な改善点って何？」

ジョーが即答した。

「幅がありすぎて、足に炭酸ガスレーザー発生装置が装着できないなら、肩に背負えば良いじゃん。シャトルだって尻から大気圏に突っ込むし、ノープロブレムって、こうですよ。どう思います？」

少しの間だけ、柏木は考えた。そして出した結論。

タカさんらしいや……。

明るく、ジョーが笑い声を立てた。

* * *

さっさと戻れって、肥だめですよ……。

柏木の情け無い声が聞こえる。

「ザキさんと、子供と、人間がいなくていいところならどこでも良いって豪語したろつが。お前はつ。男なら、一度口にしたことを簡単に覆すな」

俺は乱暴を承知で言った。

そうだそうだ。柏木。ちゃんと突っ込め。

無責任に囃し立てるのは、飛竜の声だ。

危険じゃないし、人も殺さないし、良い話じゃあないか。柏木。聞き慣れない声が割り込んでくる。三雲みくもさんって人かな？ 俺は断言した。

「さっきまで、プールは危険な方向に普通でない状態だった。今は、危険でない方向に普通にプールを押し上げようってんだ。さっさと片づけちまうおうぜ。柏木君。プールの軌道さえ安定すれば、落ちて着いて救助作業にとっかかれんだ。肥だめがどーした」

言ってて我ながら無茶だと思う。あちらこちらから、一斉に笑い声があがる。多分、ヤマは越えたって皆わかってるのだ。物理的にプールを押し上げる。落ちてるものを押し上げる。変哲もない普通のやり方だ。

さっさと第一段階の仕事を済ませて……、救出活動始めないとな。

耳の奥にこびりついている非難の言葉。

殺すのが……てめえらの商売……だろ？

そりゃあそうだけど、俺にはできない。ゴメン。絶対に嫌だ。

じゃあ……助けて……くれる……のか？

ああ。絶対に助けてやる。ただ、ちよつとだけ待っててくれ。もうちよつとだ。

俺は胸を張った。官服着てたって、俺は一人じゃア無能だ。だけど、俺には仲間がいるんだ。信じてくれ。絶対助けようと頑張るからな……。

ザ・ライダー・プール

23・そして、いつもは毎日

ボス…… ネット張りすぎ。ちゃんと加減して張って。

俺は新人の加悦さんニコマンに言われて、軽く逆噴射させてキャッチャーボートの位置を微妙に修正した。大きく広がったネット。三点で張るネットは、いつもの俺たちのスタイル。

タカさくん、暇になってからで良いんですけどさ、改良しましょうよ。これ。やっぱり、頭の方に飛びたい。柏木さん、アタマ方向に進むのは無茶気持ちいいって言っていました。足方向に進むのは気持ち悪すぎるですって。

「おいっ。パンピー柏木は人間だぞ。まさか、あんな防護服貸したんじゃないだろうな」

ちゃんと軍用品の最高級スペジャケも下に着込んでもらいました。

「高級品のスペジャケってウチの備品にあるか？」

ありますよ。タカさんが、軍人臭くて嫌だっけ見向きもしなかっただけじゃない。何年前だった、あれ。

加悦さんはあっさり教えている。

「いい。官服がにあわないって、若い子に苛められたから」

いつものロスコン拾いのフィールドで、下らないおしゃべりに興じていると、ママから通信が入った。

高柳三等宙曹。出頭命令です。ご確認ください。

「あれま。来ちゃったか……。プールの一件じゃあ、頑張ったから、武士の情けで無かったことにしてくれろ、思ってたんだけどナア」俺はちよつとだけがつかりした。呼び出される要件として、ざっと思いつく材料は、一番最初の帰還命令拒否。それから、ID端末のデータ改竄。他人のパーソナル・データの不正使用。

まさか、シャトルをお釈迦にしたって、そこまで酷い言いがかり

はつけてこないだろう。プールは一応修繕できるみたいだし。いくら軍つてのが極悪な組織だったとしても。俺は、このスカベンジャ―・フィールドで、残り少くない一生を、ちまちまロスコン拾いで終えるのだ。ああ。神様。俺の獅子舞ダンス……見逃しましたね。

* * *

今日もフィットネス・ジムのスタジオにマッチョな柏木はやってきていた。ザキさんの声が響くここがやっぱり、物凄く楽しい。

「みんなあつ、今日もナイスファイトでしたっ。お疲れ様〜っ」
「うおーっ」

雄叫びを思う存分あげるのは気持ちいい。拍手する奴もいれば、両手を振り上げている奴もいる。柏木はただザキさんにみとれていて。と、その時。

「柏木さーん」

マイクを通して、ザキさんが柏木を呼んだ。

（へ？ オレ？）

というように、柏木が自分を指さして、ザキさんに目で確認する。

一呼吸吸い込んでから……、

「大好きっ」

未知香は思いつきりマイクに向かって、叫んだ。明日が今日の続きなんて幻想だし、いつおわるか分からないというのが事実なのだ。玉碎するならしてしまえ。好きという思いを抱えたままにいるなん

て、私らしくない。

その場に居合わせた全員が一瞬で凍りつく。皆が大好きな、皆のザキさんが、よりによってデカイだけの柏木に告白?! しかも、こんなところで。

柏木も凍りついた。彼の内側では心臓が早鐘を打ったようにビートを刻みまくっていた。隣で汗を拭いていた飛竜が、この野郎というように、柏木の脇腹を小突いた。

「全く、女から告白されて、お前、情けなさ過ぎ」

「……で、でも。オレ、デカイだけだし。ザキさんみたいに可愛い人には……」

この後に及んで、まだマイナス材料を拾うのか。こいつは。飛竜は、思いつきりの力で柏木の背中をどやしつけて、ザキさんの方を押しやるうとする。と、彼女はまたしてもマイクを通してのガンガン鳴り響く声で叫んだ。

「でもお、タカさんも好みなのおっ。二股かけていい〜?」

柏木と飛竜は重なるようにして倒れた。テラG、最低。思いつきり痛いんでやんの。

「イエーッイ! 欲しいものは、ゲットするわよっ」

未知香は雄叫びをあげてから、声を立てて笑った。その声は、柏木の耳には鈴が振られているように聞こえた。

* * *

「イエローっ」

学校からの帰り道のことだった。遊星が呼ぶと、崇が振り返った。「おお。グリーンか。今日は何する？」

「ちょっと怖かった。ピクニックから生還し、ママたちにお尻をぶたれたり、泣き落とされたり、長時間の説教を喰らったりと、三者三様の叱り方をママたちから受けた三人だったが、これくらいでめげるものかとはかりに相変わらずつるんでいる。」

「もちろん中央児童館行こうぜ」

遊星の答えには迷いが無い。

「またかよつ。また科学実験教室？」

「うんつ。ボク、タカさんみたいに、いろんなことを考えつく人になるんだ」

遊星の突飛な発想にはついていけない。どうして、あの一件だけで、将来をブルーからグリーンに乗り換えることができるんだらう。まあ、オレだつて、バナナ・イエローが一番だつて、ちゃんと言えるようになったんだからエライだろ？ 崇は一人ごちだ。

向うから、ショートカットになった美咲が走ってくる。美咲のお手伝い大作戦は、かなり効果を發揮しているようで、美咲ママはいつもウチのママに愚痴っている。

お尻をぶつたのが利きすぎたかしら？

つて、なんだか嬉しそうに。

崇の方は、『貴方が死んだら、生きていけないの』と、人前も憚らず泣き崩れていたママを見て、ちょっと頼りないことは重々承知で、イエロー宣言を出した。二度とママを泣かせないというのがその趣旨らしいが、無鉄砲を思いつくのは相変わらずだ。

「昨日のミラーズ見た？ ピンク可愛かった」

女の子っぱい見掛けを排除して、髪も切ったし、ジーンズばかり履く様になった美咲は、なんだか前より女っぽくて可愛い。崇と遊

星は、そういう評価で一致していた。

「美咲。もう、カシスさまはやらないの？」

「とんでもない。キシワード閣下にはカシスさまがついてなきや。でも、昨日のは断然ピンク。ホントに役に立たないことではピカいちだけど、ピンクが泣いてさ、ブルーが凄く燃えたじゃん。馬鹿チカラ5倍くらいだったかも」

どうも、あのタカさんの嫁さんになるってのが、美咲の目標らしい。これはママたちにはナイショ。俺たちは、美咲が大きくなるころには、おじちゃんはおじいちゃんになってるから、俺たちのどっちかで我慢させようとコツソリ話し合ってるが、今は燃えてる美咲にそんなことは切り出さないことで合意している。

もつとも、待つってのはイエローの本分だから、崇はこっそり遊星より有利だとおもっているし、逆に遊星は、タカのような男になれば、美咲がよろめくはずだと信じている。まあ、可愛いものだ。

「渋いヒーローは、イエローだけ。俺、バナナ・イエロー」

「ボクは緑がいいなあ。発明と発見と発想。男はこれでなくちゃ」

* * *

出頭した幕僚本部で、何故か正装させられ、高柳三等宙曹は広報でしか見たことが無いお偉方がズラリと並ぶ場所に引きずり出されていた。どうにも、尻がもぞもぞする。ろくなことになりそうな気がしない。

高柳の数倍は飄々とした印象がある小男。これが有名なスキルズ・リスト、不動のトップランカー、情報部の万年二佐……岸？ そう

思うと、高柳ははつきり言って、意外の感に打たれた。わきに控えている長身の青年や、若いくせに恰幅が良いという表現が似合う、この年齢層の中では十分青年で通じる、堂々とした押し出しの「あゆみちゃん」とくらべても充分に控えめな風貌。ふうぼう

しかし、ここは幕僚本部で、上座に並べられた椅子にどっかりと腰掛けている連中は、佐官より遙かに上の将官位の制服くんぷくをきて、ちやらんちゃらんと音がしそくない、勲章だのバッヂみたいなのだのをつけている。

正装の俺が、三十面下げて、どこか七五三になっているのは、エライ違いだ。やっぱり、将官の連中にくらべれば随分しよぼすような勲章をちゃんとつけた歩が、良く通る声でビシツと言った。

「高柳三等宙曹。起立せよ」

軍人長くやってると、友人の口からでた掛け声でも、とっさに体に芯が通るから不思議だ。高柳は直立不動になってから、心の中でだけ苦笑した。生涯、直接見ることも無いと思っていたお歴々が並んでいるのだ。そりゃ、ここでボケかませるほどの度胸はない。

ゆったりとした動作でおもむろに立ちあがった岸が、軽くお歴々に向かつて姿勢を正してから、高柳に向き直った。頭が自動的に15度うつむく。実けに習慣とはおそろしい。で、一体何が始まるんだ？

「辞令。高柳三等宙曹」

……辞令つて、俺、軍籍剥奪じゃあないのね。

「辞令を代読する。本日を以て、貴官は、特殊能力者リストに記載されることとなった」

へっ……？ 俺が、スキルズって冗談ですよ。

「技能区分は、微細重力下特殊作業。配備先は、居住地開発プロジェクトが着々と進行しつつある、開拓最前線のいずれかになる。詳しい配属地は、転属先の上官の指示に従うように。所属組織は、事

故発生時・対策統轄本部、DFF(Disaster Fire Fighting)になる。また、現在の貴官の旧配属部署に所属する新人^(ニューマン)二名は、貴官がその責務を遂行するために必要な要素であると判断し、引き続き貴官の下に配属を許可する。貴官の能力が必要とされる現場であることを、本官は確信して止まない」

岸の声は、特別大きくないのだが、よく通る。にっこりと微笑む岸二佐。俺の耳は今何を聞いたのでしょうか……。開拓最前線つーと……。

フロンテ……あーっっっ？

俺の明るい家族計画は、神様つどうなるんですか？

俺の可愛い未来のお嫁さんは……、神様っ、そんなところに、いるんですか？

俺の獅子舞ダンス見たくないなら、罰を下す前にそー言うてくださいっ！

あゆみちゃんっ。お前、スカした面しやがって、絶対、笑ってるだろ。

俺が気が弱い常識人でなければ、この場で歩につかみかかっていたらだろ。気弱い俺は、ここでそんなことをする度胸はない。体はぼーっと突っ立ったまま、頭の中でだけ、ジタバタしている俺に頓着せず、冷たく、岸二佐の声が告げた。

「以上である。高柳三等宙曹、退室を許可する」

ザ・ライダー・プール

23・そして、いつもは毎日（後書き）

そして……ライダー・プールのお話は、おしまい

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444f/>

ザ・ライダー・プール

2009年7月3日18時30分発行